

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第594集

や もり の う こ

矢盛遺跡第27次・野古A遺跡第30次 発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2012

盛岡市都市整備部盛岡南整備課
(公財) 岩手県文化振興事業団

矢盛遺跡第27次・野古A遺跡第30次 発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会资本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行ない、その調査の記録を保存とする措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して、平成22年度に実施した矢盛遺跡第27次調査と野古A遺跡第30次調査の成果をまとめたものであります。

今回の調査では、古代の竪穴住居跡・近世の掘立柱建物跡・绳文時代の陥し穴など各種の遺構が多数検出され、当地の過去の様相が明らかになるとともに、多くの土器・石器も出土いたしました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました盛岡市都市整備部盛岡南整備課、(独)都市再生機構岩手都市開発事務所、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成24年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田2地割19-2ほかに所在する矢盛遺跡第27次と盛岡市下鹿妻字北36-3ほか（平成25年以降盛岡市向中野三丁目に地番変更予定）に所在する野古A遺跡第30次の調査成果を収録したものである。
- 2 今回の発掘調査は、盛岡南新都市地区画整理事業に伴う緊急発掘調査であり、岩手県教育委員会生涯学習文化課と盛岡市都市整備部盛岡南整備課の協議を経て、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（当時。平成23年4月1日より公益財団法人）が実施した。
- 3 岩手県遺跡登録台帳番号と遺跡略号は、以下のとおりである。

矢盛遺跡第27次	遺跡番号…L E 26-0139 遺跡略号…I YM-10-27
野古A遺跡第30次	遺跡番号…L E 16-2155 遺跡略号…O NK-10-30
- 4 発掘調査期間・調査面積・調査担当者は、以下のとおりである。

矢盛遺跡第27次/平成22年8月10日～11月10日/9,845m ² /小山内透・金子佐知子・中村絵美	野古A遺跡第30次/平成22年4月8日～8月9日/9,005m ² /小山内透・中村絵美
・杉沢昭太郎・米田寛	
- 5 室内整理期間及び整理担当者は、以下のとおりである。

矢盛遺跡第27次/平成22年11月1日～12月28日/小山内透	野古A遺跡第30次/平成22年11月1日～平成23年3月31日/小山内透・中村絵美
---------------------------------	-------------------------------------------
- 6 報告書の執筆は、矢盛遺跡は小山内透、野古A遺跡は中村絵美が主となり、以下のとおり分担した。なお、編集と構成は担当者の協議によったが、最終的な編集は中村が行った。

IV-3（1）は金子佐知子、IVの残りとII・III及びV-3の一部を小山内透、その他は中村絵美が担当した。なお、Iについては委託者の過年度の原稿を元に小山内が作成した。

- 7 分析・鑑定・委託業務は、次の方々に依頼した。（順不同・敬称略）

火山灰分析 柴正敏（弘前大学）	炭化材同定 阿部利吉（岩手県木炭協会）	
石質鑑定 花崗岩研究会	鉄器保存処理 岩手県立博物館	航空写真撮影 東邦航空（株）
- 8 本書挿図中表記の土色注記は、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」2000年版を使用した。
- 9 発掘調査及び遺物整理にあたっては、下記の方々からご指導・ご助言を賜った。記（アイウエオ順、敬称・所属略）

磯村学・青原修・高橋学・能登谷宣康・谷地薫

- 10 各遺跡の発掘調査による成果は、現地説明会・「平成22年度発掘調査報告書」等で公表してきたが、本書を正式な報告とする。
- 11 今回の各遺跡の発掘調査による出土品及び記録資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

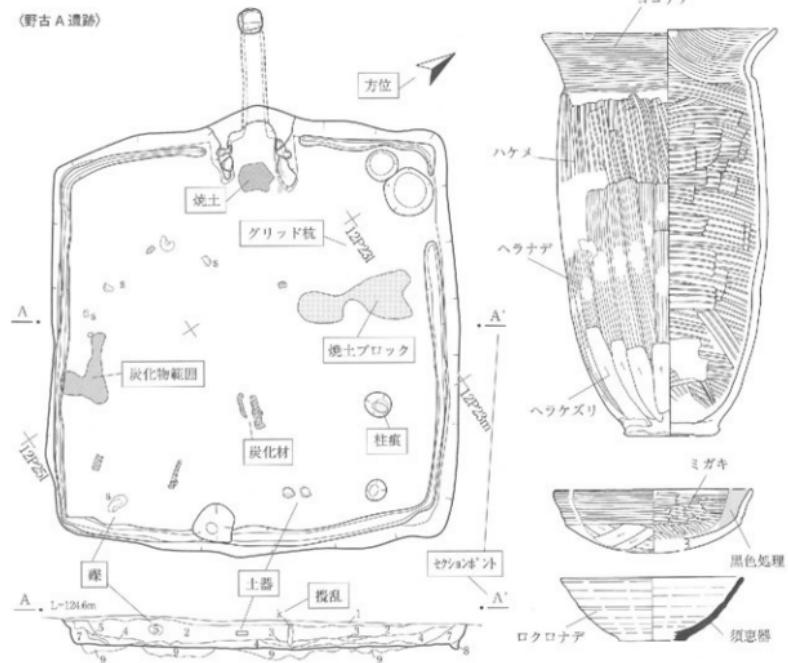
凡　例

- 1 本報告書収載の遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系（日本測地系）による座標北を示す。
- 2 土層注記は基本層位にローマ数字、遺構埋土にはアラビア数字を用い、kは擾乱を示す。
- 3 表中の法量の推定値は（ ）、残存値は（ ）で表示した。
- 4 遺構名は盛岡市教育委員会の命名に準拠した。略号は以下のとおりで、番号は各遺跡とも前次調査からの続きとなる三桁で示している。なお、過年度調査で命名済みの溝跡等は同じ番号としている。

R B ……掘立柱建物跡	R A ……竪穴住居跡	R E ……竪穴状遺構	R F ……炉跡
R D ……土坑・陥し穴	R G ……溝跡	R Z ……その他	P ……柱穴
p ……土器	s ……石		

- 5 插図中に使用したスクリーン・トーン、遺物実測図の表現方法は以下のとおりである。▽は断面位置を示す。

（野古A遺跡）



目 次

I 調査に至る経過	1
II 立地と環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	4
III 野外調査と室内整理の方法	5
1 調査方法	5
(1) グリッドの設定	5
(2) 粗掘と精査	5
(3) 遺構の記録	5
2 整理方法	6
(1) 遺構図面の整理	6
(2) 遺物の整理	6
IV 矢盛遺跡第27次調査	7
1 遺跡の概要と調査歴	7
2 調査の概要	7
(1) 調査経過	9
(2) グリッドの設定	9
(3) 基本層序	11
(4) 遺構名について	11
3 検出された遺構	12
(1) A区の遺構	16
a 据立柱建物跡	16
b 積穴状遺構	20
c 潟 跡	20
(2) B・C区の遺構	25
a 積穴状遺構	25
b 土 坑 類	27
c 潟 跡	36
4 出上遺物	50
5 まとめ	50

V 野古A遺跡第30次調査	53
1 遺跡の概要と調査歴	53
2 調査の概要	53
(1) 調査区の概要	53
(2) グリッドの設定	53
(3) 基本層序	54
(4) 遺構名について	54
3 検出された遺構と遺物	59
(1) 竪穴住居跡	59
(2) 掘立柱建物跡	115
(3) 土坑	118
(4) 竪穴状遺構	140
(5) 焚上遺構	142
(6) 溝跡	149
(7) 遺構外出土遺物	152
4 まとめ	192
(1) 検出遺構	192
(2) 出土遺物	199
VI 自然科学的分析	205
1 矢盛遺跡出土火山灰について	205
2 野古A遺跡出土火山灰について	207
報告書抄録	298

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	4		
(矢盛遺跡第27次調査)			
第2表 新旧遺構名対応表	12	第3表 遺物観察表	49
(野古△遺跡第30次調査)			
第4表 基準点・区画割付杭一覧	53	第7表 出土遺物一覧	182
第5表 遺構名対応一覧	54	第8表 土器重量一覧	190
第6表 RA・RB柱穴一覧	116		

図 版 目 次

第1図 遺跡位置図	2	第3図 周辺遺跡分布図	3
第2図 地形分類図	3		
(矢盛遺跡第27次調査)			
第4図 これまでと今回の調査範囲	8	第16図 RD248~250陥し穴状遺構	30
第5図 グリッド配置図	10	第17図 RD251~253陥し穴状遺構	32
第6図 遺構配置全体図	13	第18図 RD254~256陥し穴状遺構	34
第7図 遺構配置分割図1	14	第19図 RD257陥し穴状遺構・RD258~262土坑	37
第8図 遺構配置分割図2	15	第20図 RG012・014溝跡	39
第9図 RB047掘立柱建物跡	18	第21図 RG013・021溝跡	40
第10図 RB063掘立柱建物跡	19	第22図 RG040・046溝跡	42
第11図 RB064掘立柱建物跡	21	第23図 RG077~080溝跡	45
第12図 RE022竪穴状遺構・RC064・065溝跡	22	第24図 RG081~083溝跡	47
第13図 RG075・076溝跡	24	第25図 出土遺物	48
第14図 RE023・024竪穴状遺構	26	第26図 陥し穴状遺構分布図	51
第15図 RD245~247陥し穴状遺構	28	第27図 矢盛遺跡南部の地形と地割	52
(野古△遺跡第30次調査)			
第28図 基本土層図	54	第41図 RA084堅穴住居跡(1)	76
第29図 これまでと今回の調査範囲	55	第45図 RA084堅穴住居跡(2)	77
第30図 グリッド設定図	56	第46図 RA084堅穴住居跡(3)	78
第31図 遺構配置図	57	第47図 RA085堅穴住居跡(1)	80
第32図 調査区地形図	58	第48図 RA085堅穴住居跡(2)	81
第33図 RA071堅穴住居跡	60	第49図 RA086堅穴住居跡	83
第34図 RA080堅穴住居跡(1)	61	第50図 RA087堅穴住居跡	85
第35図 RA080堅穴住居跡(2)	62	第51図 RA088堅穴住居跡(1)	86
第36図 RA080堅穴住居跡(3)	63	第52図 RA088堅穴住居跡(2)	87
第37図 RA081堅穴住居跡	65	第53図 RA089堅穴住居跡	89
第38図 RA082堅穴住居跡(1)	67	第54図 RA090堅穴住居跡(1)	91
第39図 RA082堅穴住居跡(2)	68	第55図 RA090堅穴住居跡(2)	92
第40図 RA083堅穴住居跡(1)	71	第56図 RA091堅穴住居跡(1)	94
第41図 RA083堅穴住居跡(2)	72	第57図 RA091堅穴住居跡(2)	95
第42図 RA083堅穴住居跡(3)	73	第58図 RA092堅穴住居跡(1)	97
第43図 RA083堅穴住居跡(4)	74	第59図 RA092堅穴住居跡(2)	98

第60図	RA093堅穴住居跡	99	第80図	RD158~160上坑	139
第61図	RA094堅穴住居跡（1）	101	第81図	RE003・004堅穴状遺構	141
第62図	RA094堅穴住居跡（2）	102	第82図	RF005~008焼上遺構	144
第63図	RA094堅穴住居跡（3）	103	第83図	RF009~011焼土遺構	146
第64図	RΔ095堅穴住居跡（1）	105	第84図	RF012~015焼上遺構	148
第65図	RA095堅穴住居跡（2）	106	第85図	RG015溝跡（1）	153
第66図	RA096堅穴住居跡（1）	108	第86図	RG015溝跡（2）	154
第67図	RA096堅穴住居跡（2）	109	第87図	RG022~025溝跡（1）	155
第68図	RA056・063堅穴住居跡	111	第88図	RG022~025溝跡（2）	156
第69図	RA097堅穴住居跡（1）	113	第89図	RG028~029溝跡	157
第70図	RA097堅穴住居跡（2）	114	第90図	RG030溝跡	158
第71図	RB005獨立柱建物跡	115	第91図	RG溝跡断面	159
第72図	RD126~129土坑	119	第92~113図	出土遺物（1）~（22）	160~181
第73図	RD130~134土坑	123	第114図	野古A遺跡全体図	193
第74図	RD135~139土坑	125	第115図	野古A遺跡堅穴住居跡分布図	196
第75図	RD140~144土坑	128	第116図	野古A遺跡焼土遺構分布図	198
第76図	RD145~147土坑	131	第117図	土器重量	199
第77図	RD148~151土坑	133	第118図	野古A遺跡第30次調査出土土器（1）	201
第78図	RD152~154土坑	135	第119図	野古A遺跡第30次調査出土土器（2）	203
第79図	RD155~157土坑	137	第120図	野古A遺跡第30次調査出土土器（3）	204

写真図版目次

〈矢盛遺跡第27次調査〉

写真図版1	A~C区、RB047・063・064 獨立柱建物跡	211	写真図版4	RD258~260・262土坑、 RG012・014溝跡	214
写真図版2	RF022~024堅穴状遺構、 RD245~250土坑	212	写真図版5	RG013・021・040・046溝跡	215
写真図版3	RD251~257・261土坑	213	写真図版6	RG064・065・075~083溝跡	216
	（野古A遺跡第30次調査）		写真図版7	出土遺物	217
写真図版8	調査区（1）	218	写真図版22	RA083堅穴住居跡（3）	232
写真図版9	調査区（2）	219	写真図版23	RA084堅穴住居跡（1）	233
写真図版10	調査区（3）	220	写真図版24	RA084堅穴住居跡（2）	234
写真図版11	調査区全景（4）、調査経過、 普及活動	221	写真図版25	RA084堅穴住居跡（3）	235
写真図版12	RA071堅穴住居跡	222	写真図版26	RA085堅穴住居跡（1）	236
写真図版13	RA080堅穴住居跡（1）	223	写真図版27	RA085堅穴住居跡（2）	237
写真図版14	RA080堅穴住居跡（2）	224	写真図版28	RA086堅穴住居跡	238
写真図版15	RA080堅穴住居跡（3）	225	写真図版29	RA087堅穴住居跡	239
写真図版16	RA081堅穴住居跡（1）	226	写真図版30	RA088堅穴住居跡（1）	240
写真図版17	RA081堅穴住居跡（2）	227	写真図版31	RA088堅穴住居跡（2）	241
写真図版18	RA082堅穴住居跡（1）	228	写真図版32	RA089堅穴住居跡	242
写真図版19	RA082堅穴住居跡（2）	229	写真図版33	RA090堅穴住居跡（1）	243
写真図版20	RA083堅穴住居跡（1）	230	写真図版34	RA090堅穴住居跡（2）	244
写真図版21	RA083堅穴住居跡（2）	231	写真図版35	RA091堅穴住居跡（1）	245
			写真図版36	RA091堅穴住居跡（2）	246

写真図版37	RA092竪穴住居跡（1）	247	写真図版55	RD139～141土坑	265
写真図版38	RA092竪穴住居跡（2）	248	写真図版56	RD142～145土坑	266
写真図版39	RA093竪穴住居跡（1）	249	写真図版57	RD145～148土坑	267
写真図版40	RA093竪穴住居跡（2）	250	写真図版58	RD148～151土坑	268
写真図版41	RA094竪穴住居跡（1）	251	写真図版59	RD152～154土坑	269
写真図版42	RA094竪穴住居跡（2）	252	写真図版60	RD155～157土坑	270
写真図版43	RA095竪穴住居跡（1）	253	写真図版61	RD158～160土坑	271
写真図版44	RA095竪穴住居跡（2）	254	写真図版62	RE003堅穴状遺構	272
写真図版45	RA095竪穴住居跡（3）	255	写真図版63	RE004堅穴状遺構、	
写真図版46	RA096堅穴住居跡	256		RF005焼土遺構	273
写真図版47	RA056・063竪穴住居跡	257	写真図版64	RF005～008焼土遺構	274
写真図版48	RA097竪穴住居跡（1）	258	写真図版65	RF008～010焼土遺構	275
写真図版49	RA097竪穴住居跡（2）	259	写真図版66	RF011～013焼土遺構	276
写真図版50	RB005掘立柱建物跡、 RD126・127土坑	260	写真図版67	RF014・015焼土遺構	277
写真図版51	RD127～129土坑	261	写真図版68	RG015溝跡	278
写真図版52	RD130～133土坑	262	写真図版69	RG022・023溝跡	279
写真図版53	RD133～136土坑	263	写真図版70	RG024・025・028溝跡	280
写真図版54	RD137～147土坑	264	写真図版71	RG029・030溝跡	281
			写真図版72～87	出土遺物（1）～（16）	282～297

I 調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成することを目的として、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（当時）の三者が地域振興整備公団（現、独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成3年12月には建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から当初平成17年度までの15年間を事業予定として、面積313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなったものである。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を行って本調査を必要とする範囲を確定した上で、本調査に関しては、財團法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることになった。

矢盛遺跡第27次調査と野古八遺跡第30次調査は、岩手県教育委員会が盛岡市及び盛岡市教育委員会と協議・調整の結果、平成22年度の事業として確定した。これを受け、平成22年4月1日に財團法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で、委託契約を締結した。

II 立地と環境

1 地理的環境（第1・2図）

矢盛遺跡と野古八遺跡の所在する盛岡市は、岩手県のはば中央に位置し、西側の奥羽山脈と東側の北上山地に挟まれた南北に長い北上盆地の北部にある。市域の中央部には、東北最長・最大の北上川が、奥羽山脈から東流する零石川、北上山地から西流する中津川と梁川を合わせて南流している。この北上川の流域は三区分されており、盛岡市を境として北が上流域、南は中流域、奥州市前沢町以南が下流域となる。本報告の両遺跡は盛岡市の南西部、北上川の西側、零石川の南側右岸に位置する。

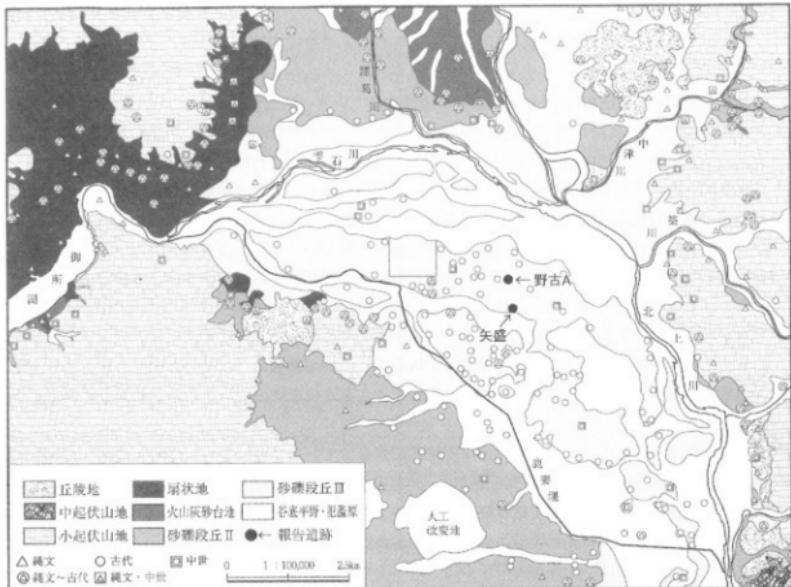
盛岡市の西部地域には、奥羽山脈より多量の土砂が供給される零石川によって、その南側右岸に大小の扇状地が複合する沖積地が形成されており、特に一帯は沖積段丘面が砂礫段丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと層状に重なっている。また、この地域は零石川の度重なる氾濫や流路の変動によって低位段丘（砂礫段丘Ⅲ）と氾濫原である大小の旧河道が複雑に入り組んでいる。今次の両遺跡調査を含め、これまでの周辺地域一帯の各遺跡の発掘調査においても多数の旧河道や低地が確認されている。

盛岡市南西部地区の現況は、調査原因ともなった盛南開発事業が終盤に差し掛かったこともあって、地形的には旧状を全く止めていないが、平成初期の頃までの状況としては低位段丘の自然堤防上などの微高地には宅地や畠地が多く、旧河道や低地と思われるやや低くなっているところには水田が営まれているものであった。周辺地域の古代の集落遺跡のこれまでの調査結果では、遺構の分布状況が現代の土地利用と同様な様相を呈している場合が多く見受けられる。

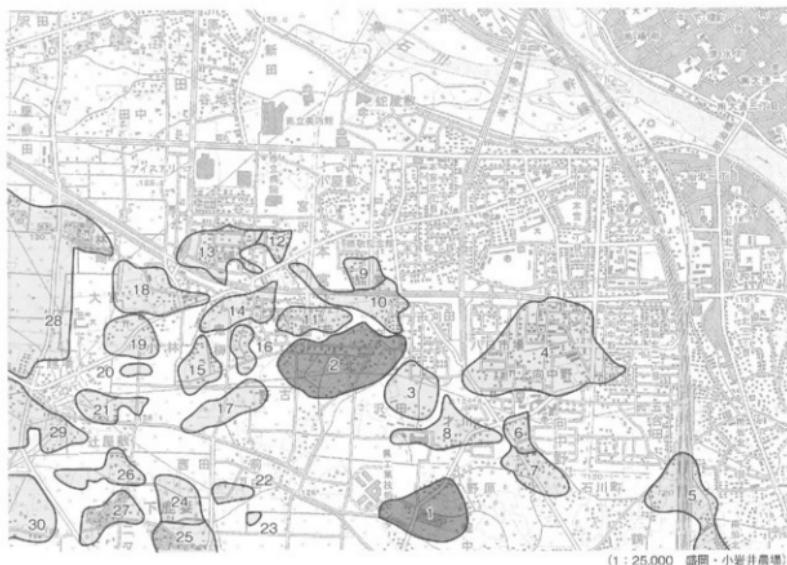
なお、各遺跡の地形等の詳細については各章において後述する。



第1図 遺跡位置図



第2図 地形分類図



第3図 周辺遺跡分布図

2 歴史的環境(第3図)

盛岡市全域では、現在700箇所以上の遺跡が確認されている。時代別に見ると旧石器時代5箇所、縄文時代約550箇所、弥生時代25箇所、古墳時代が4箇所、古代約280箇所、中世約120箇所、近世約65箇所などである。時代別での遺跡総数がかなり多くなっているが、これは複合遺跡が多いことによる。

矢盛遺跡と野古A遺跡の所在する盛岡市南西地域では、零石川右岸の沖積段丘上には古代の集落遺跡が多く、縄文時代では、入り組んだ旧河道が狩り場に適していたためか、旧河道に沿うような配置で陥し穴が検出されることはあるが、集落遺跡は皆無に等しい。また、古代の遺跡のほとんどが段丘微高地に立地することもあって、近世の屋敷跡などと複合していることが多い。本報告の両遺跡でも、これまで縄文時代の狩り場、奈良・平安時代の集落、中近世の環濠居館や掘立柱建物跡などが検出されている。以下に盛岡市南西部の同期・同種の調査された遺跡を列挙する。

縄文時代の狩り場として比較的多く陥し穴が検出されている遺跡は、本報告両遺跡と飯岡才川遺跡、細谷地遺跡などがあり、野古A遺跡を除いた隣接する3遺跡は遺跡の境界となる旧河道沿いに陥し穴が列をなして分布している。

古代の集落遺跡としては、奈良時代と平安時代が複合している場合が多く、野古A遺跡、台太郎遺跡、飯岡才川遺跡、細谷地遺跡、飯岡沢田遺跡、本宮熊堂B遺跡、向中野館遺跡などが広範囲にわたって調査が実施されており、総数では1,000棟以上の竪穴住居跡が検出されていて拠点的な集落も多い。時期的には9世紀後半から10世紀前半の遺跡が全体の約7割を占める。

中世の遺跡としては、矢盛遺跡のほかに、同じく複合遺跡で16世紀を主体とする台太郎遺跡や向中野館遺跡などで掘跡や掘立柱建物跡などが検出されている。18世紀以降では掘立柱建物跡や井戸跡、墓塚など多くの遺跡で検出されており、地形的な土地利用として今日の集落に継続しているものと思われる。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	主な遺構
1	矢盛	縄文・平安・中・近世	陥し穴・竪穴住居・環濠周壁
2	野古A	縄文・古代・近世	陥し穴・竪穴住居
3	飯岡沢田	古代	竪穴住居・古墳群
4	台太郎	古代・中世	竪穴住居・大型居館・堀・墓地
5	南仙北	縄文・古代	陥し穴・竪穴住居
6	向中野館	古代・中世	竪穴住居・堀
7	細谷地	縄文・古代	陥し穴・竪穴住居・墓地
8	飯岡才川	縄文・古代	陥し穴・円形周溝・竪穴住居
9	本宮熊堂A	縄文	竪穴住居
10	本宮熊堂B	縄文・古代	陥し穴・竪穴住居
11	細荷	古代	竪穴住居
12	宮沢	古代	溝
13	小幡	古代・中・近世	竪穴住居・カマド状・掘立柱建物
14	鬼柳A	古代・近世	竪穴住居・掘立柱建物
15	鬼柳B	古代	

番号	遺跡名	時代	主な遺構
16	鬼柳C	古代	
17	野古B	古代	溝
18	大宮北	古代	竪穴住居
19	大宮	中世	人塚
20	小林	古代	
21	水門	古代	
22	西田B	古代	
23	前田	縄文	陥し穴
24	西田A	古代	
25	中屋敷	古代	
26	上越場B	縄文・古代	
27	二又	古代	竪穴住居
28	志波城	古代	城櫓官衛
29	上越場A	縄文・古代	
30	辻原敷	古代	竪穴住居

III 野外調査と室内整理の方法

1 調査方法

(1) グリッドの設定

調査区の区割りとグリッドの設定については、盛岡市教育委員会の方針に則っている。各遺跡は、平面直角座標第X系（日本測地系）に基づき、北西隅の点を原点座標として区割りされ、大グリッドは50m間隔とし、更に各大グリッドを2m間隔で25等分して小グリッドが表されている。

なお、各遺跡の区割りの原点座標値と今次調査における作業上の便宜的な基準点座標値は後述する各章に示している。また、基準杭の測量打設は慣例により委託者が実施している。

(2) 粗掘と精査

粗掘は、両遺跡とも今次調査区と隣接する過年度調査地における基本層序を参考としつつ、状況把握のために適宜トレンチによる試掘を行い、層序の確認をしたところ、旧河道部分を除いては表土直下が遺構検出面であったことから、I層表土は重機を使用して除去することとした。また、部分的に存在した古代の遺構検出面となるII層（低地・旧河道部分）も、遺物包含層が確認されなかつたこともあって、上面で検出作業をしたのち、遺構が確認されなかつた部分については重機により除去した。

なお、各遺跡の基本層序と遺構検出面等については各章で後述する。

精査は、堅穴住居跡・堅穴状遺構は4分法・陥し穴・土坑類は2分法による覆土の観察を行い、重複あるいは不明瞭なプランについては状況把握のために適宜複数のベルトを設定して掘り下げを行った。溝跡については適宜間隔をもってベルトを設定して横断面で覆土の観察を行った。柱穴については、上層注記と柱痕、掘削時の特異な状況等はフィールドカードに記録した。

遺物の取り上げは、遺構内では遺構名と埋土層位を記入し、出土地点を計測した遺物については取り上げ番号も記入した。遺構外出土については出土位置・層位にほとんど意味が認められない状況であったことから、調査区名と各区内の便宜的範囲・位置等を記入して採り上げた。

(3) 遺構の記録

遺構の記録は実測図と写真撮影により、作図に表現できない場合はフィールドカードに記録した。

図面は、遺構の平面形や火山灰・焼土・炭化物範囲、遺物出土状況等を記録した平面図、及び遺構の断面形、覆土の堆積状態を記録した断面図と適宜エレベーション図も作成した。作図は、平面図については原則的に電子平板を使用した光波測量によったが、野古A遺跡では遺構が多く、繁雜な作業に追われる状況となつたことから、併用して簡易造り方測量も準用し、精査途中で必要に応じて作図記録している。その縮尺は、簡易造り方測量による平面図は原則1/20とし、カマド等の微細図が必要なものは適宜1/10で作図したが、電子平板は現場段階では機能・性能により任意的な入力となっている。断面図類は原則1/20で作図した。

写真は、遺構検出時の確認状況、埋土堆積状態、遺物出土状況、完掘状態というように精査の段階毎に必要に応じて撮影を行っている。記録保存を主とした銀塩写真は6×9判のモノクロ、記録及び普及活用を主体として35ミリフィルム相当となる1300万画素のデジタルカメラを使用した。

2 整理方法

図面等の点検と遺物の洗浄は、原則的に現場で野外調査と並行して行った。

遺構名は凡例のとおり、盛岡市教育委員会の方針に則っているが、整理段階で種別による遺構名の変更を行うにあたり混乱を避けるため、調査段階では仮登録として、奈文研方式の遺構略号を用いて検出順に番号を付して整理作業までを行い、本報告に際して遺構名を変更している。

なお、作業上の旧遺構名と本報告に掲載した正式遺構名の対応表は各章にて示している。

野外調査中に撮影した写真は、撮影順に対応するようにモノクロフィルムはネガアルバムに整理をして台帳に記載した。報告書に掲載した写真はデジタルカメラ（1300万画素）撮影データである。

測量図・写真のデジタルデータについては当センターの資料整理保管規程に従って整理して、PCの外付けハードディスクに保管している。

（1）遺構図面の整理

遺構図面は、点検後に断面図及び簡易造り方測量により手実測した平面図をデジタル化し、また、一部簡易写真測量用として撮影したデジタル写真データも取り込み、これらと電子平板によるデジタルデータと合成して作成した。

挿図中の縮尺は、堅穴住居跡は1/50、堅穴状遺構は1/60、掘立柱建物跡と柱穴は1/80、陥し穴・土坑類は1/40、溝跡の平面図は1/100～500、溝跡の断面は1/40、カマド等の微細図は1/30を原則とし、スケールを付している。使用したスクリーン・トーンは凡例のとおりである。

（2）遺物の整理

遺物は洗浄後、遺構内外の種別毎に仕分けを行い、全出土遺物を点検しつつ、接合・注記・復元と作業を進め、実測や採拓の必要なものを選択した後に登録した。報告書に掲載した遺物は、登録した中からさらに選択して実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。作業は、調査員が仕事をの計画と指示・点検、作業員が実際の仕事というように分担している。

報告書に掲載した遺物の選択基準は、基本的には土器は完形品と接合復元したもので器形がおよそ把握できるものとし、同一形状の個体が多数ある場合には床面及び底面出土のものを優先し、可能な限り形狀的な重複掲載を避け、作業の効率化を図った。ただし、出土土器の少ない遺構では口縁部と底部破片を選択している。遺構外出土遺物は出土量と基本層序の状況から掲載を見合せた。

土製品と石器・石製品類は、微小な碎片を除き全点を掲載した。

なお、雜な作りの小形土器については、ミニチュアとせず、一応土器に分類している。

陶磁器類は遺構内出土は全点掲載し、遺構外出土については近世で産地・時期のおよそ特定可能なものを探出し、文様は写真掲載を主とした。

挿図中の縮尺は土器・陶磁器と礫石器・大形の石器（砥石等）は1/3、土・石製品（玉類・紡錘車）は1/2、鉄製品と古銭は原寸としたが、任意の縮尺についてはスケールを付している。

なお、土師器の反転実測は1/4以上が残存するものとし、掲載した遺物の番号は各遺跡毎に1番からの逆しの連番としている。

遺物写真是登録したものをデジタルカメラ（1300万画素）で当センターの写真技師が撮影し、その中から選択して掲載している。

IV 矢盛遺跡第27次調査

1 遺跡の概要と調査歴

矢盛遺跡（第4図）は岩手県のはば中央にある盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅の南方約3km、仙北町駅からは南西に約1.8kmに位置し、北緯39度40分26秒、東経度141度08分01秒付近を中心とする飯岡新田第2地割・第4地割、向中野、矢盛地区と広大な範囲に所在する。

遺跡は零石川の南側右岸に形成された低位の沖積段丘上および後背湿地（低地・旧河道）に立地する。遺跡の微地形としては岩手県工業技術センター付近を要とする東側に広がる扇状の遺跡範囲で、南北に交互に存在する段丘と旧河道がやや蛇行しながら東方に放射状に延びている。開発前の土地の利用状況としては、2例ある段丘徹高地は主に宅地と畠地で標高123m前後、やや低く段丘を挟むように3例ある低地（旧河道部分）は主に水田として使用されており、標高は122m以上である。

矢盛遺跡の調査は平成4年度の1次調査に始まり、平成22年度の今次調査まで試掘調査も含め27回の調査が行われてきた。当埋蔵文化財センター以外の機関が調査を実施した分（第2・7・8・15～17・21・22・28次）については、報告書が未刊行のため詳細は不明であるが、これまでの調査成果からは縄文時代の狩猟場、古代（9世紀後半～10世紀）の集落、中世（16世紀代）の環濠居館と付隨する集落、近世（18世紀）以降の民家跡と付属施設群といった時代・性格共に多岐にわたる複合遺跡であることが判明している。

各時代の遺跡内での占地状況としては、縄文時代では、陥れ穴が遺跡北部（第3～6・12次最北区）の低地部分の旧河道に沿って列をなして多数検出されており、さらに遺跡東側中央部（14次・今次B・C区）の旧河道に挟まれた南側の段丘上でも比較的まとまって検出された。また、この南側の段丘上では第12・19・今次とフラスコ状土坑が数基点在している。平安時代の堅穴住居跡は、遺跡の西部（第1・19次s島区）の南側段丘上で検出されている。中世の環濠居館と堅穴建物跡は遺跡の南西部（第10～13次）の南側低地の西側にまとまっている。近世では民家跡は現代の集落と同様に南北両段丘上（第18・19・23・24・今次A区）に分布している。

2 調査の概要

今次の調査地は3箇所に分かれていたことから、便宜的に西側から順にA～C区として調査を行った。A・B区は、遺跡南側段丘上のはば中央に位置し、盛岡開発に因らない古くからある民家敷地の東西両端にあたる。A区は第18次s民家区の西側に接する敷地境界林跡と畠地部分で、隣接調査区から続く掘立柱建物跡や溝跡など近世の遺構が多く検出された。B区は、民家と接する北・西側を除く東・南二方が第12次調査区と接する畠地部分で、南側から続く古代の溝跡のはかはC区隣接地で比較的多く検出された陥れ穴群の西端となる1基が検出された。C区は遺跡の東側で、遺跡南側段丘との両側の低地（南側及び中央旧河道）を南北に長く横断する範囲で、北側の低地（中央旧河道）では表土下は基盤層の砂礫層が露頭しており、著しい削平によるものかほとんど遺構は検出されず、東西両側の過去の調査でも遺構は皆無に等しい状況である。中央の段丘（南側段丘）は陥れ穴群とフ拉斯コ状土坑1基が検出されたが、残存状況からみて、やはりかなり削平されている模様であった。段丘南縁から南側低地にかけては中世居館の環濠の北東隅から続き、関連性がうかがえる同様の区画をし



第4図 これまでと今回の調査範囲

たと見える溝跡が検出されている。

(1) 調査経過

今次の発掘調査は、平成22年8月10日から11月10日まで行った。ただし、発掘機材は、野古A遺跡第30次調査が終了した8月9日の夕方に搬入している。

お盆休み前の10日と11日は、環境整備と層序確認のための試掘（B区）を行った。

お盆休み明けの18日からは、細谷地遺跡第26次調査が終了し、調査員と作業員が合流したことにより調査体制が整った。しかし、この時点では3ヶ所ある調査区のうち最も広いC区の上山撤去が委託者の都合により未着手であったため、調査に着手できなかったことから、小山内班がB区、金子班がA区を担当して調査を開始した。

A区は狭い調査区ながら宅地境界線であった樹齢100年近い木根が多くあったため、遺構検出までの作業に手間取ったことと9月後半は天候不順の日が多かったため測量作業が進まず、調査の終了は9月末となった。

B区は面積も少なく、遺構も溝跡数条と陥し穴1基と希薄なため、9月上旬で調査を終えた。

C区は9月上旬から、農作物が収穫されたことにより調査が可能となった北部の畑地に着手した。

9月中旬からは委託者による上山の撤出作業が始まり、これを追いかけるようにC区の北側から調査が可能となった範囲の粗掘を随時行った。9月末まではC区北側半分まで粗掘と検出が進み、北部は遺構がほとんどなかったことから精査を終了し、土捨て場として使用することとした。

10月からは、中村調査員が当初計画による他遺跡の担当として転出し、また、本遺跡の上山撤去が遅々として進まないことと遺構密度が希薄なことから、予算と人員に余剰が生じたこともあって盛南開発事業関連の飯岡才川遺跡の調査に着手することとなり、金子班（細谷地遺跡担当人員）が離脱することとなった。

10月の上旬から中旬にかけてはC区中央部の陥し穴の精査を中心に作業を進めた。また、上山の撤去がすべて終了した中旬からはC区南部の重機による粗掘を開始したが、旧河道部分が広く、深いことから土量が多く、調査による排土は撤出対象外なこともあって、これまで土捨て場としていたC区北部では貼りきれなくなったことから、南部は細切れの作業をして、上山の反転を行った。10月は調査員1名体制となっていたため、中旬の重機による粗掘に際しては、監督指示のために数日センター内勤職員による支援を受けた。

10月下旬には検出作業も終わり、遺構数はほぼ確定したが、あまり天候に恵まれず、遺構剥削は辛うじて行えたものの、写真撮影と測量については進捗が芳しくない状況であった。

27日には、県教委生文課・委託者・等センターによる終了確認を行ったが、委託者の手続きの遅れにより、電柱支線が未撤去であった部分に、陥し穴がかかっており、撤去工事が11月4日ということと残る作業量から11月二週まで調査を延長することとなった。

11月も当こそ降らないものの天候不順が続き、調査終盤はテントを建てて光波測量を行った。

10日にはすべての作業を終え、機材を撤収し、野外調査を終了した。

(2) グリッドの設定

調査区の区割りとグリッドの設定（第5図）についてはⅢ章に記したように盛岡市教育委員会の方針に則って行っている。大グリッドは一辺50m間隔とし、これを一辺2mの小グリッドに分割している。本遺跡の位置する飯岡新田地区は、平面直角座標第X系（日本測地系）における座標値X=



第5図 グリッド配置図

36,000,000、Y = +26,000,000を原点として区割りされており、この原点より東側は従来どおり東西方にはアルファベット、南北方向には算用数字をあて、この組み合わせにより、8 C 15 aと小グリッドを呼称しているが、原点から西側の遺跡拡大範囲については大グリッドが-A~-Yと区分されている。

今次の各調査区が位置する大グリッドは、A区は7・8 Aグリッド内、B区は8 B・Cグリッド内、C区は5~11 C・Dグリッドにあたっている。

なお、調査時に、実際にグリッドの設定を行なう際には、調査区域内にあるグリッド交点を便宜的な基準点として使用しており、A区とB区ではそれぞれ2点ずつ基準杭を委託者に打設していただいたが、C区では隣接するB区の基準杭から調査の進行に従い、必要に応じて実際的な杭の打設を行なった。調査で基準点として使用した座標値は次の通りである。

区 域	点 名	X 座標	Y 座標	点 名	X 座標	Y 座標
A 区	基 3	-36,416,000	26,024,000	補 1	-36,400,000	26,024,000
B 区	基 1	-36,414,000	26,100,000	基 2	-36,436,000	26,100,000

*上記表の座標値は日本測地系による

(3) 基 本 層 序

本遺跡の立地する低位段丘では、砂礫層を基底として、その上位を水成シルト層、現表土が覆っている。本遺跡では、過去の調査成果から概ね次のような上層堆積の状況が確認されている。

I層	暗褐色土	表土・耕作土。層厚20~30cm。
I~II層	暗褐色土	II層よりくすんだ灰色。層厚0~20cm。下部が中世の遺構検出面。
II層	黒褐色土	クロボク土。旧河道で厚く、層厚0~40cm。古代の遺構検出面。
III層	暗褐色土	漸移層。層厚0~20cm。実質的な遺構検出面。
IV層	褐~黄褐色土	粘土質だが地点により砂質、また間層として褐色土が認められる。層厚30~50cm。実質的な遺構検出面。
V層	黄褐色砂礫層	地点により黒褐色を呈する。上位は砂、下位は中小の円礫含む。

本遺跡の基本層序は以上の6層に細分されるが、実際には段丘微高地は後世の削平が著しく、I層一下はIV層もしくはV層の場合が多く、I~II層とII層のほとんどは低地・旧河道で確認されている。今次調査区でも、段丘上となるA区とB区及びC区中央部は表土下はほとんどIV層（IV層も上層は削平）となっており、C区北部では南側段丘の北側を縁とする旧河道部分より以北の低地から北側段丘にかけて表土下はV層砂礫層が露出していた。從って遺構検出面は各区微高地の大半がIV・V層である。ただし、C区南部の低地部分はII層が比較的厚く堆積しており、溝跡は本来この上面から掘り込まれたものと思われるが、実際の検出は遺構出土と判別できなかつたため、III層上面で行っている。

(4) 遺構名について

遺構名は凡例のとおり、盛岡市教育委員会の方針に則って命名している。遺構略号はともかく、番号については同一遺跡で調査次数の順に欠番の無いよう逆番をしているが、先に記したように当センター以外の調査報告書が未刊行のため、遺構番号の調整は市教育委員会が行っており、年度末近くにならないと判明しないことから、混乱を避けるため調査段階では、III章に記したように奈文研方式で

3 検出された遺構

仮登録をして整理作業まで行い、報告書掲載に際し、以下の対応表のとおり遺構名を変更した。

なお、過年度調査で命名済みの遺構は略・番号を踏襲したが、調査地が離れていて複数の命名がされていた跡で、今次調査で一連と判明したものについては若い番号を当てることとし、他は（ ）で示した。

第2表 新旧遺構名対応表

掘立柱建物跡

旧	新
S B01	R B063
S B02	R B047
S B03	R B064

堅穴状遺構

旧	新
S K 101	R E022
S K 104東A	R E023
S K 104西B	R E024

上坑跡（陥し穴含む）

旧	新	旧	新
S K T01	R D245	S K T10	R D254
S K T02	R D246	S K T11	R D255
S K T03	R D247	S K T12	R D256
S K T04	R D248	S K T14	R D257
S K T05	R D249	S K 01	R D258
S K T06	R D250	S K 02	R D259
S K T07	R D251	S K 03	R D260
S K T08	R D252	S K 04	R D261
S K T09	R D253	S K 07	R D262

溝跡

旧	新	旧	新	旧	新
S D01	R G040	S D07	R G065	S D14	R G083
S D02	R G077	S D08	R G075	S D15	R G013 (022)
S D03	R G078	S D10	R G076	S D16	R G014
S D04	R G079	S D11	R G081	S D17	R G012
S D05	R G080	S D12	R G082	S D18	R G021 (025)
S D06	R G064	S D13	R G046		

3 検出された遺構

今回の発掘調査では縄文時代、古代（平安時代）、中・近世、時期不明の遺構（第6～8図）と古代と近世から近代の遺物を検出した。ただし、遺構内から出土した遺物は少なく、ほとんどの遺構は、形態やプランの確認状況などから時期を判断するか、時期の特定された遺構との重複関係から時期が判断されたものであり、必ずしも統一された明確な根拠に基づくものではない。各時期の遺構の種別と数量は次のとおりである。

〔縄文時代〕

陥し穴状遺構 13基（R D245～257） フラスコ状土坑 1基（R D261）

〔平安時代〕

上坑 1基（R D262） 溝跡 1条（R G040）

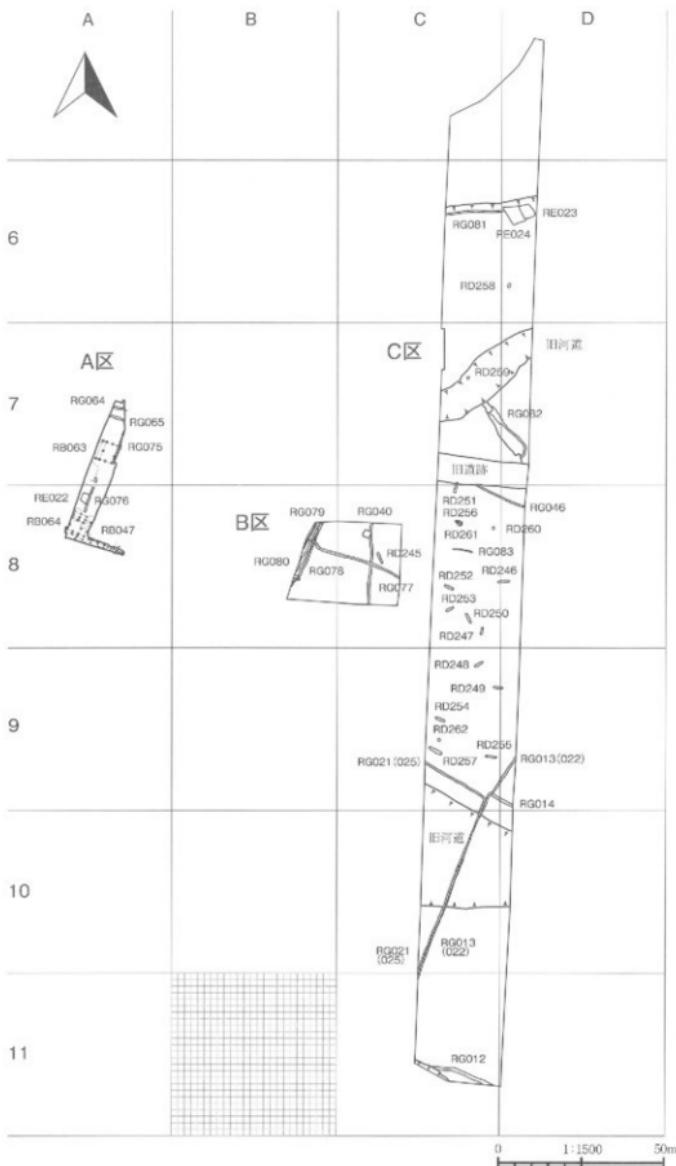
〔中世〕

溝跡 3条（R G013・014・021）

〔近世〕

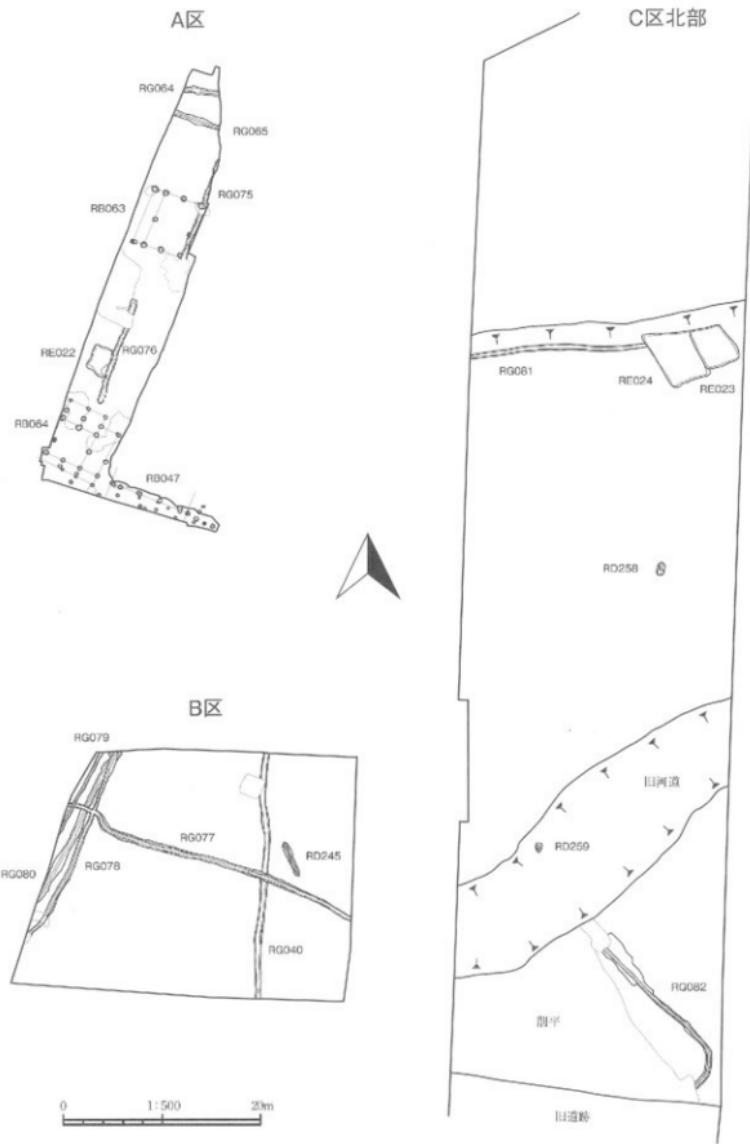
掘立柱建物跡 3棟（R B047・063・064） 坚穴状土坑 9個

〔時期不明（近世以降）〕

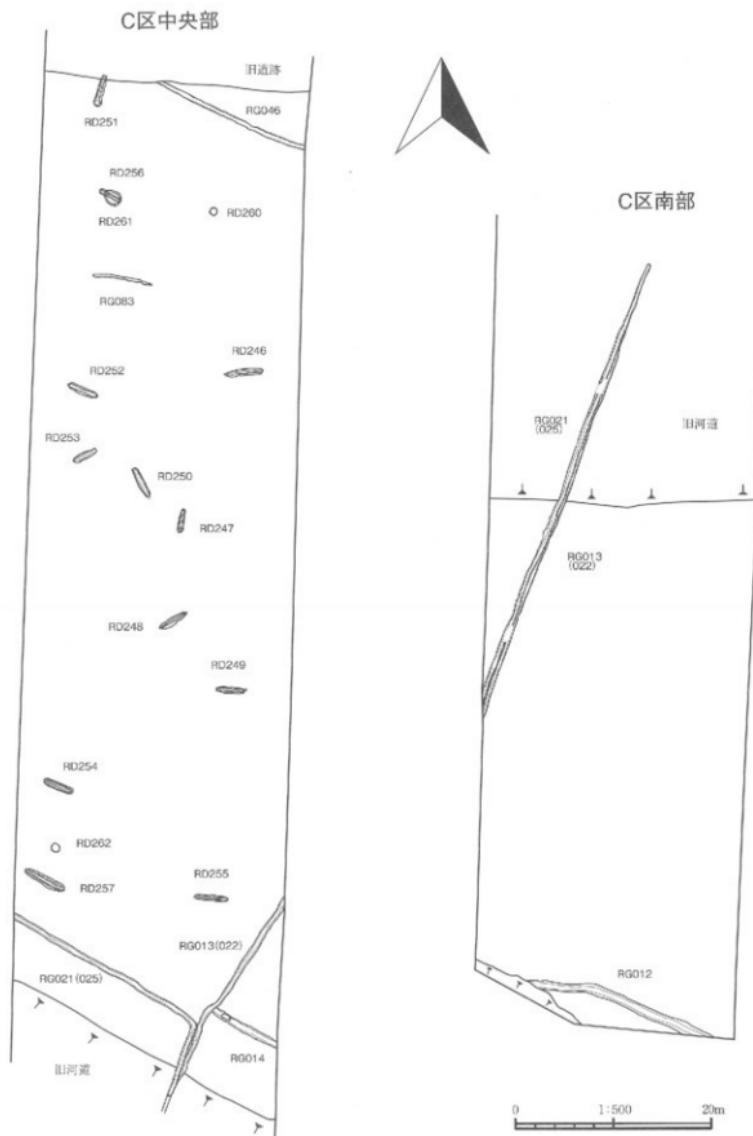


第6図 遺構配置全体図

3 検出された遺構



第7図 遺構配置分割図1



第8図 造構配置分割図2

堅穴状遺構 3棟 (RE022~024) 土坑 3基 (RD258~260)

溝跡 13条 (RG046・064・065・075~083)

以下、各調査区毎に記述する。

(1) A区の遺構 (第9~13図)

本遺跡第18・19次調査のs民家区の西側に隣接した調査区である。幅3~8m、長さ約45.5mと南北に細長く、南端は現在の道路に沿って幅約2.5~3m、長さ13mほど東側にL字状に折れている。調査前は、東半が樹齢約100年の大木がそびえる屋敷林、西半が畠地であった。屋敷林であった東半には巨大な切り株が残っていた。人力による除去を行ったものの、とり切れず残った根や縦横に延びた根によって破壊されている遺構面も多い。南端は前回調査(平成20年度)後に、土取りのため1~1.5mの幅で50cmほどの深さに削られており、実際に調査できたのは1.5~2m程の幅にすぎない。

東側に隣接する前回の調査区では、第IV層の黄褐色砂質シルト層まで一端削平された後、5~15cm程度の黒褐色土 (x1層、x2層) が堆積しており、その上から遺構が掘削されている様相であった。今回はそのような堆積状況は北側の一部 (RG064、RG065の2条の溝周辺) だけで、その他は上面が削平されたIV層の黄褐色シルト層の上に耕作土が堆積していた。

第18・19次調査で検出された東西方向の溝2条 (RG064、RG065) が北端から検出された。これらは、前回の調査では溝の方向が現代の屋敷境とはほぼ直交することなどから近世末~近代以降と推定していた。今回そのうち1条から大堀相馬産の陶器破片が出土したことにより、年代観が裏付けられた。なお、これら2条の溝は前回の調査ではほぼ平行するとみられていたが、今回の調査では若干軸が異なり、両者は西に向かって徐々に近接することがわかった。

また、北東~南西方向の溝2条は屋敷境の方向を反映しているとみられる。

掘立柱建物跡は南端から前回調査でも検出されたものも含め2棟、北側からも1棟検出された。搅乱のため、廬や下屢柱が確認できなかった部分 (RB063の西側中央、RB064の北東隅) もある。また、堅穴状遺構を1基報告した (RE022) が、埋土が類似する凹みをこの遺構の南側に2基確認している。これら2基については、新しい陶磁器片が確認されたため、搅乱として報告を割愛した。よって、新しい遺物は出土しなかったものの、本遺構も近代以降に属する可能性がある。

a 掘立柱建物跡

RB047掘立柱建物跡 (第9図、写真図版1)

〈位置・検出状況〉 調査区内の南端東側8A7~11I~qグリッドに位置し、削平されたIV層で検出した。第18・19次調査において、本建物跡の四辺の側柱を検出しておらず、今回は建物内部の柱筋を検出した (SP21、22、23、8、24、25~26、27~28)。

〈重複関係〉 この東延長線上にSP29、SP7、SP6の3個の柱穴があるが、前回調査でこれらに対応する柱穴が乏しかったことから、本建物とは別と考えた。ただし、これら3個の柱穴の南側に、前回調査でカマド状遺構が3基重複して検出されていることから、カマド状遺構に関連する施設の柱穴の可能性もある。

柱穴に新旧見られるものがあることは前回の調査で検出された柱穴群と同様であり、若干軸をずらして建て替えている。今回検出された柱穴では、重複する柱穴SP25~26、SP28~27のうちいずれも南側の後者のはうが新しい。柱筋の柱間寸法は西から90cm (3.0尺)、212cm (7.0尺)、212cm (7.0尺) 212cm (7.0尺)、90cm (3.0尺) である。

〈平面形・規模〉 平面形は梁行3間×桁行3間で、南側、東側、西側の三方に間尺3尺の下屋柱がまわるが、西側、南側の下屋柱は建て替えの痕跡が不明瞭である。

旧い建物は、梁行の軸方向がN-22°-Eである。梁行は636cm(21.1尺)、桁行は757cm(25.0尺)である。桁行3間、梁行3間で、少なくとも東側には下屋柱がまわる。西からSP23、SP8、SP24、SP25、SP28が相当する。うちSP25、SP28は深さが10cm以下と浅い。

新しい建物は、梁行の軸方向がN-25°-Eで、軸方向が若干東側にずれる。梁行は714cm(23.6尺)、桁行は851cm(28.1尺)である。今回検出した柱穴では西からSP21、SP23、SP8、SP24、SP26、SP27が相当する。SP8、SP26、SP27には柱痕跡が残る。

〈埋土〉 IV層起源の黄褐色土粒を含んだ単層のものから個、柱痕跡と裏込めの土が明瞭なものが2個である。SP8、SP24、SP25、SP28に根固めとみられる礫が検出された。

〈出土遺物〉 ない。

〈時期〉 前回調査で本建物は軸方向が南側に隣接する調査区で検出された16世紀主体の居館、集落跡に一致することや本建物の南東1mから検出されたカマド状遺構の存在から、同時期の可能性もあると述べた。しかし、本建物の軸方向は南側に広がる水路や水田の区画の方向とも一致しており、居館の区画方向が周囲の後世の地割にも影響していたとも考えられることから、居館の年代と同一とばかりも考えられない。また、カマド状遺構は燃焼部が本建物の隅柱より1mしか離れておらず、やや近接しているように思えることから両者には時期差がある可能性がある。

以上の点と三方に下屋柱がまわる構造から、近世以降と考えられる。

R B063掘立柱建物跡（第10・25図、写真図版1・7）

〈位置・検出状況〉 A区北側7A19~22n~qグリッドに位置し、削平されたIV層で検出した。SP5は搅乱が上面を切っており、搅乱除去後に検出した。また、西側のSP6とSP1の中間に柱のあった可能性があるが、この搅乱により検出されていない。北東のSP6は搅乱によって一部が壊されている。また、北東隅のSP9は木根により上面が破壊されている。

〈重複関係〉 東側の柱列がRG075と重複し、本建物跡の方が古い。

〈平面形・規模〉 西面する建物とみられ、桁行の軸方向はN-18°-Eである。梁行は515cm(17.0尺)、桁行は560cm(20.0尺)である。西側に柱間121cm(4.0尺)の廻がつく。使用した柱穴は10個である。柱間寸法はまちまちで、梁行が182cm(6.0尺)、212(7.0尺)cm、桁行は242cm(8.0尺)、318cm(10.5尺)である。廻とみられるSP1、SP6は他の柱穴と異なり、若干東西に細長い楕円形で、浅い。

〈埋土〉 比較的混入物の少ない黒褐色土に地山の黄褐色土粒を多く含む黒褐色土が柱痕跡状にみられるもの（SP2上層、SP3上層、SP7、SP8）があり、柱を抜き取った痕跡と思われる。

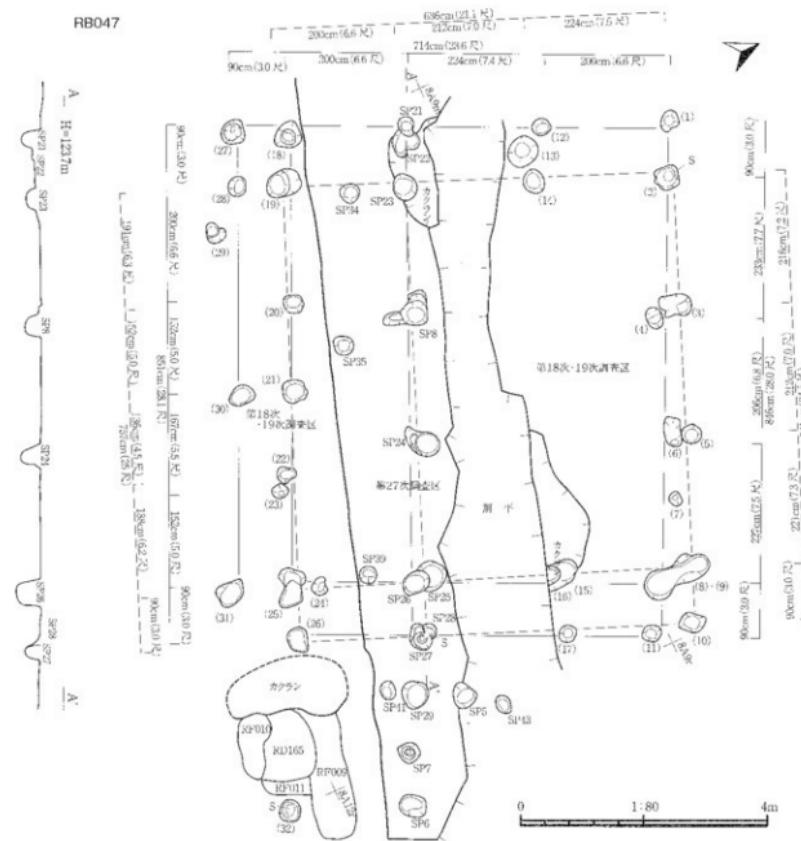
〈出土遺物〉 SP8の埋土上層から鉄釘と思われる鉄製品（図版21）が1点出土している。

〈時期〉 本遺構は、規模から附属屋とみられ、樹齢100年ほどの木根及び屋敷境の溝より古いことから20世紀初頭より下らない時期の建物と考えられる。

R B064掘立柱建物跡（第11・25図、写真図版1・7）

〈位置・検出状況〉 A区南端の8A5~9i~mグリッドに位置し、削平されたIV層で検出した。SP9、10、13、14、17、45は搅乱によって上面を削平されている。また、本遺構北東隅の下屋柱は搅乱により、削平された可能性がある。

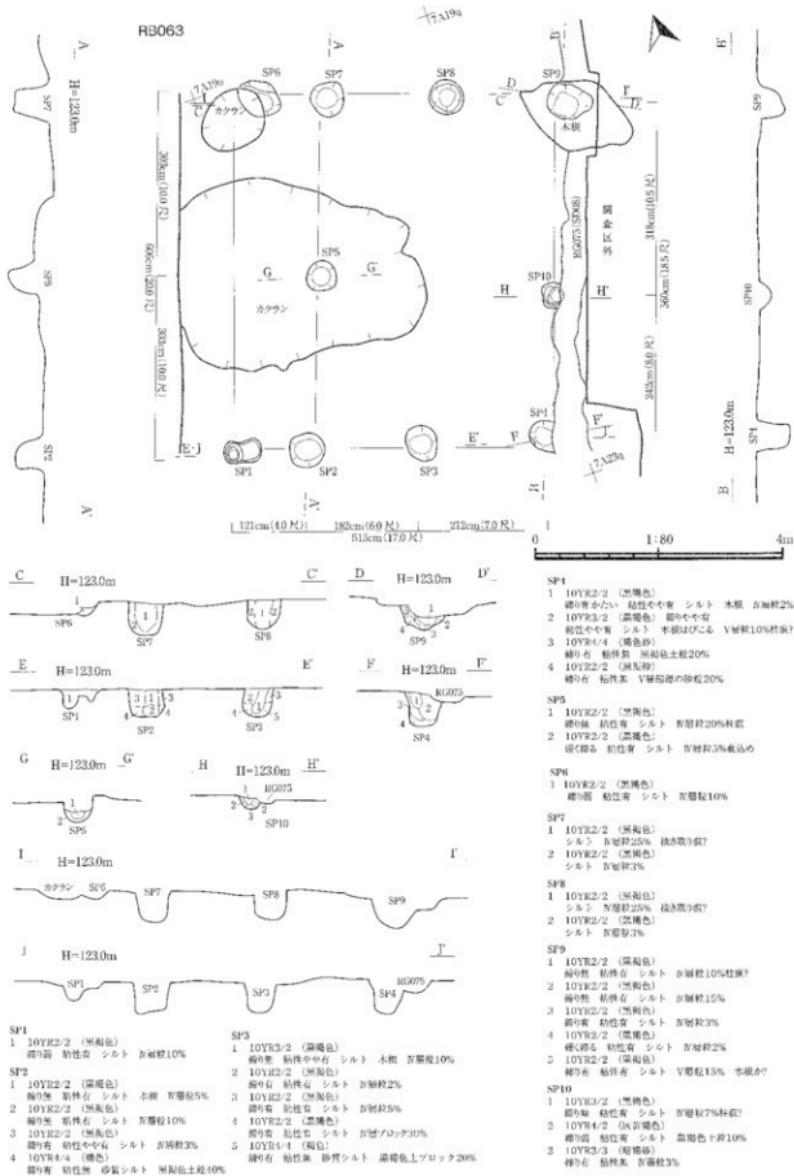
〈重複関係〉 ない。



柱穴観察表

遺構名	形 状	幅 (cm)	深さ (cm)	柱位(cm)	地 上	底面	その他の
SP8	R B047	67×37	27	延4	本腰色 I・青松色 II	砂質	溝干中に鹿子3個、内と金属性に段
SP21	R B047	27×24	31	-	2層 本腰 青松色 II	質	-
SP22	R B047	41×7	13	-	青腰 岩祖 SP21とE色灰岩	質	-
SP23	R B047	29×37	25	-	単腰 丹波赤土・青松色 II	質	-
SP24	R B047	57×69×26	30	-	本腰色 I・青松色 II	砂質	溝干中に鹿子の角礫3個
SP25	R B047	48×40?	3	-	単腰 丹波赤土・青松色 II	質	青松色 SP26に切らち
SP26	R B047	39×31	40	座:142腰柱位	-	1層 丹波赤土・青松色 IIとV層10% 鹿子土層10%	質
SP27	R B047	41×30	27	底600×8	-	2層 丹波赤土・青松色 IIとV層20% 鹿子土層10%	質
SP28	R B047	23×15	9	-	単腰 丹波赤土・青松色 II	質	青松色に細かな理
SP29	-	43×(33)	32	あ2 (深木不)	鹿子土層22% (V層20%, 5%)	質	溝干中に鹿子 植根に北かられる
SP30	-	40×39	33	延15	鹿子土層21% (V層18%, 鹿子土・青松色 II)	質	-
SP31	-	33×11	45	廻穴世1×10	鹿子土層17% (V層15%, 鹿子土・青松色 II)	質	-
SP32	-	41×10	47	-	V層全合人(鶴色)と鹿子土層の瓦解	砂質	-
SP33	-	30×30	16	-	単腰 鹿子土・瓦層10%	質	-
SP34	-	21×31	14	-	単腰 鹿子土・瓦層7% 砂松中2%	質	植生者レセラ
SP35	-	26×30	21	-	鹿子土層 20% (V層15%)	質	植生者レセラ
SP36	-	28×21	30	-	鹿子土・瓦層10%	質	植生者レセラ
SP37	-	20×20	2	-	海綿土層 40% (V層)	砂質	削除 被覆され、砂層に密接のみ

第9図 R B047振立柱建物跡



第10図 R B 063掘立柱建物跡

〈平面形・規模〉 南面する東西棟の可能性があり、西側は調査区外に延びているものと推測される。梁行の軸方向はN-25°-Eである。梁行は656cm(23.0尺)、桁行は561cm(18.5尺)である。使用した柱穴は、22個である。柱間寸法は梁行きが106cm(3.5尺)、182cm(6.0尺)、191cm(6.3尺)、91cm(3.0尺)、106cm(3.5尺)、桁行が182cm(6.0尺)、197cm(6.5尺)である。南辺は下屋柱が2条認められ(SP3-SP4、SP30-SP31-SP42)、付け替えなどの時期差があるが、うちSP3-SP4には柱痕跡が残ることからこちらが新しいと考えられる。これら南面の下屋柱とみられるSP3、SP4、SP30、SP31、SP42は、規模が他より一回り小さい。

〈埋土〉 IV層起源の黄褐色土粒を2~30%含む黒~黒褐色土で、柱痕跡の残るもののが半数の11個ある。

〈出土遺物〉 SP11から18世紀~19世紀の所産と思われる産地不明の陶器片(図番2)が出土している。

〈時期〉 出土遺物と形態から近世~近代初頭の建物と思われる。

b 積穴状遺構

RE022 積穴状遺構 (第12・25図、写真図版2・7)

〈位置・検出状況〉 A区南半の8A2~31~mグリッドに位置し、削平されたIV層で検出した。周辺は表土からの擾乱が広範囲に入っている。それらを取り除いたところ、長方形のプラン2箇所と楕円形のプラン1か所を確認した。三者は埋土が類似しているが、南側の長方形プラン、楕円形プランからは新しい遺物が出土したので、報告を割愛している。従って、本遺構も他の2基と同様近代以降のものの可能性がある。

〈重複関係〉 本遺構は東辺をRG076と接しているが、新旧関係は不明である。

〈平面形・規模〉 平面形はゆがんだ長方形で、規模は2.94×2.05mである。

〈埋土〉 黒褐色土で、IV層起源の黄褐色土粒を3~20%含み、3層に細分される。遺構の南側に黄褐色土粒が多く含まれる。

〈壁・底面〉 壁高は最深部で12cmである。壁は緩やかに内湾気味に立ち上がる。西壁は比較的はっきり立ち上がるが、南壁と東壁の南半の立ち上がりが特に緩やかである。底面はIV~V層中で、若干酸化しており、縮まっていて、若干の凹凸がある。

〈出土遺物〉 埋土中から18世紀前葉の肥前産磁器皿(図番4)、19世紀の大堀相馬産陶器の土瓶体部破片(図番3)が出土した。

〈時期〉 出土遺物と周辺の状況から19世紀以降に属すると考えられる。性格は不明である。

c 溝跡

RG064 溝跡 (第12図、写真図版6)

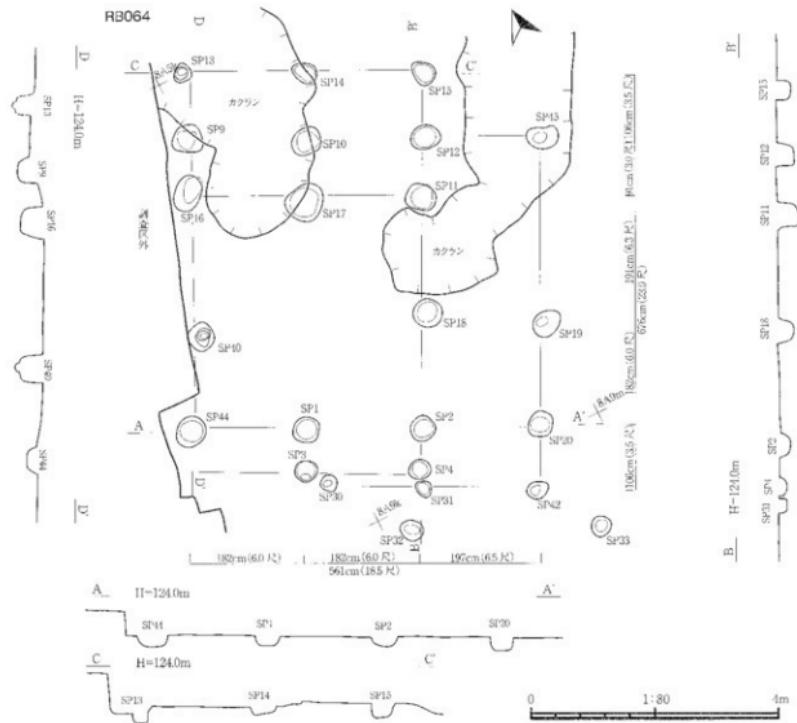
〈位置・検出状況〉 A区北側の7A13~14p~rグリッドに位置する。東西方向の溝で、東側は第18次調査区、西側は調査区外に延びる。検出面は削平されたIV層上に堆積した黒褐色土層(x1、x2層)である。

〈重複関係〉 ない。南側2~3mにやや軸線をずらしてRG065溝跡がある。

〈平面形・規模〉 長さは今回の調査分が3.54m、前回調査分を加えると、9.04mである。幅は44~68cm、深さは最深で45cmである。方向はN-80°-Wである。

〈壁・底面〉 壁は内湾気味に立ち上がるが、開口部でやや開く部分がある。底面は砂層かV層に形成され、内湾して部分的に凹凸が見られる。工具痕は見られなかった。

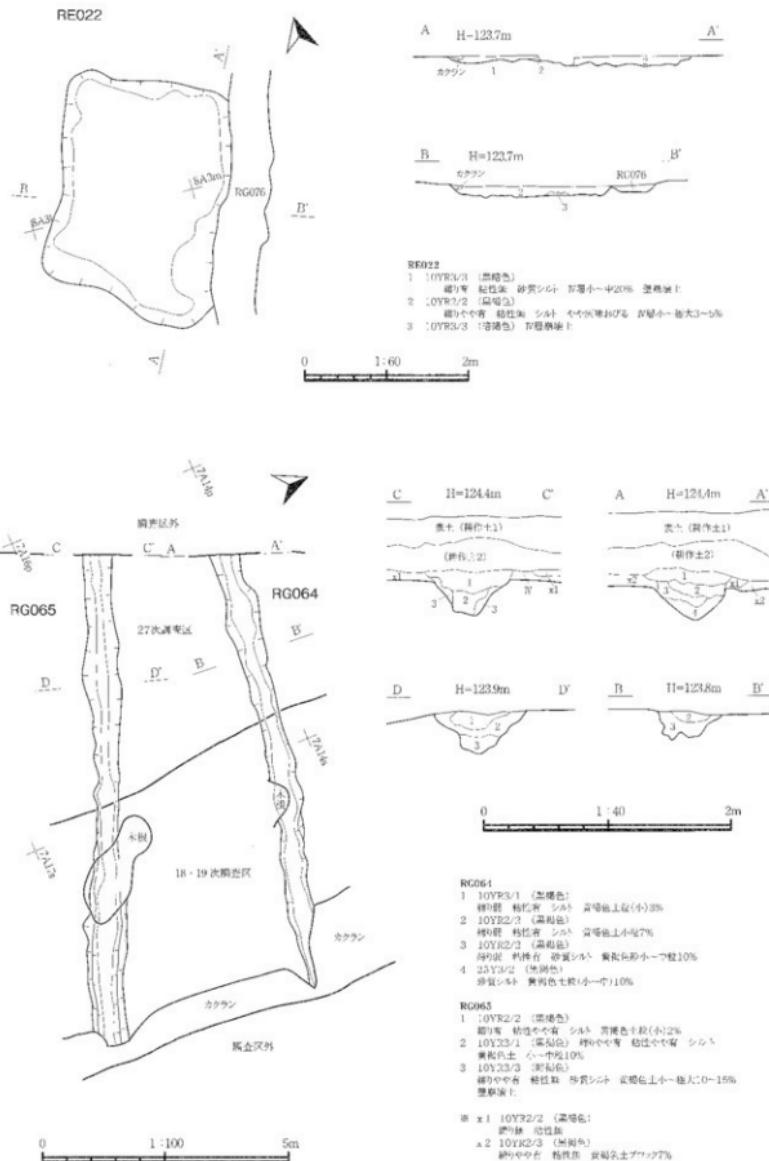
〈埋土〉 黒褐色土で、下位及び壁際に黒褐色の砂質シルト、上位に黒褐色シルトが堆積する。自然堆



柱穴観察表

遺構名	構成	高さ (cm)	底径 (cm)	柱頭 (cm)	土質	底面	その他
SP1	R-B 064	40×40	14	±17	黒褐色、暗褐色、茶色帶の3層 泥炭質、にこり青褐色の2層	砂質	
SP2	R-B 064	42×38	17	±18	褐色、茶褐色、灰褐色の3層	砂質	
SP3	R-B 064	34×31	5	±15 縦15・横10	褐色	角	
SP4	R-B 064	34×30	12	±13	褐色、青褐色の2層 褐色含む	角	
SP5	R-B 064	65×90	30	±25	褐褐色土、斑状透水性の石積ブロック20%	砂質	
SP6	R-B 064	43×41	26	±30	黒褐色土、灰褐色20%	B一層	底面に扁平な段
SP7	R-B 064	47×40	35	±15	褐色土、若木含む褐褐色土	砂質	底面上にV字形の削
SP8	R-B 064	46×40	30	±18	褐褐色土、灰褐色20%	砂質	
SP9	R-B 064	30×28	28	-	褐褐色土、灰褐色20%	砂質	
SP10	R-B 064	41×30	24	-	褐褐色土、灰褐色20%	角	塊四六
SP11	R-B 064	40×31	24	-	褐褐色土、灰褐色10%	砂質	
SP12	R-B 064	56×20	36	-	茶褐色土、有機物2%	砂質	
SP13	R-B 064	59×53	37	±15	褐褐色土、黑色土の2層互層15%	砂質	
SP14	R-B 064	55×42	21	-	草堆、黒褐色土、灰褐色15%	砂質	
SP15	R-B 064	40×40	9	-	草堆、黒褐色土、灰褐色15%	砂質	底面のみ 黒褐色の薄い
SP16	R-B 064	49×30	23	-	2層 黒褐色、青褐色1-2.5%	砂質	
SP17	R-B 064	26×26	30	-	青褐色土、灰褐色22%	砂質	
SP18	R-B 064	31×23	11	-	青褐色土、灰褐色15%	角	
SP19	R-B 064	43×40	60	±15±10	黑褐色土、灰褐色15%	砂質	
SP20	R-B 064	31×26	10	-	黑褐色土と灰褐色の2層、他の可能性有	角	後述面に扁平層1%
SP21	R-B 064	50×47	19	-	黑色土、灰褐色10%、灰褐色の2層、中層少々	砂質	
SP22	R-B 064	45×45	14	±16	灰褐色土、灰褐色土、灰褐色土10%	砂質	新開切りに黄褐色土、19% 同様物群が混入
SP23	-	37×31	14	-	灰褐色土、灰褐色土、灰褐色土5%	角	
SP24	-	32×29	15	-	灰褐色土、灰褐色土5%	角	

第11図 R-B 064掘立柱建物跡



第12図 RE022堅穴状造構・RG064・065溝跡

積と思われる。

〈出土遺物〉 ない。

〈時期〉 本溝跡の方向が現代の屋敷境とはほぼ直交すること、隣接するRG065溝跡と検出面、埋上の状況が類似することから、近世末～近代の遺構と思われる。

R G065溝跡（第12・25図、写真図版6・7）

〈位置・検出状況〉 A区北側の7A15～16 p～r グリッドに位置する。東西方向の溝跡で、東側は第18次調査区、西側は調査区外に延びる。検出面は削平されたⅣ層とその上に堆積した黒褐色土層(x1層)である。

〈重複関係〉 ない。北側2～3mに軸線をややずらしてRG064溝跡がある。

〈平面形・規模〉 長さは今回の調査区分で5.20m、前回調査分を加えると10.08mである。幅は44～73cm、深さは最深で37cmである。方向はN-69°-Wである。

〈壁・底面〉 底面と壁の境は明瞭で、壁は外傾して立ち上がり、開口部で内湾気味にやや開く。底面は砂層で、平坦である。工具痕は見られなかった。

〈埋土〉 黒褐色土で崖際や下位に崖崩壊土の暗褐色砂質シルト、上位にやや粘性のある黒褐色シルトが堆積する。

〈出土遺物〉 土層観察用のベルト（D-D'）から大堀相馬産の陶器碗破片（図番5）が出土した。

〈時期〉 出土遺物から19世紀以降に属すると考えられる。

R G075溝跡（第13図、写真図版6）

〈位置・検出状況〉 A区東調査区間の7A17r～22 p グリッドに位置する。北東～南西方向の溝跡である。現代の屋敷境とはほぼ同一の場所にあり、本溝跡の直上及び延長線上に屋敷林として近年まで残っていた樹木の切り株が並んでいた。

〈重複関係〉 隣接する第18次調査区のRG062溝跡と軸方向がほぼ同一で、一部重複していると思われるが、新旧を確認できなかった。また、RB063掘立柱建物跡の東側柱を切っている。

〈平面形・規模〉 長さ10.32m、幅27～50cm、深さは北側が深く20cmで、南側は10cm程度である。方向はN-20°-Eである。

〈壁・底面〉 壁は外傾～内湾気味に立ち上がる。底面は内湾している。工具痕は見られなかった。

〈埋土〉 Ⅳ層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色土の单層で、自然堆積と思われる。

〈出土遺物〉 ない。

〈時期〉 本溝跡は、検出された位置から東西の屋敷の境界を反映している可能性が高く、屋敷林の樹齢から近世末～近代のものと考えられる。

R G076溝跡（第13図、写真図版6）

〈位置・検出状況〉 A区南側の7A24r～8A5l グリッドに位置する。北東～南西方向の溝跡である。一部近代以降の擾乱及び木根によって破壊されている。

〈重複関係〉 RE022堅穴状遺構と接しているが、新旧関係は不明である。

〈平面形・規模〉 長さは11.24m、幅は40～67cmである。深さは最深で19cmで、北側が深く、南側は周辺が削平されているため、3～4cm程度の深さである。方向はN-19°-Eである。

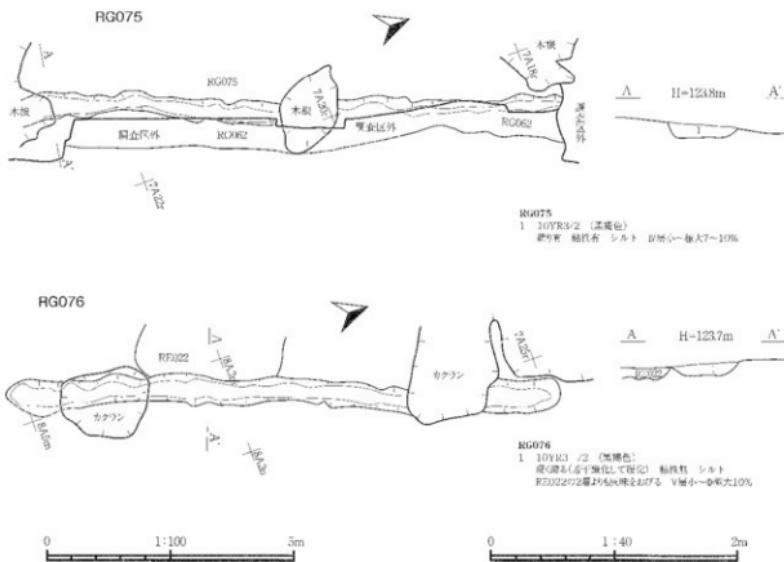
〈壁・底面〉 壁は内湾気味に立ち上がる。底面は内湾気味で工具痕は見られない。

3 検出された遺構

〈埋土〉若干酸化して固く縮まった黒褐色土であるが、やや灰色味を帯びており比較的新しい時期のものと推測される。

〈出土遺物〉ない。

〈時期〉本溝跡は、RG075溝跡及び屋敷境と軸方向がほぼ同一であり、屋敷の区画を意識して掘られている可能性が高いことから、近世末～近代のものと考えられる。



第13図 RG075・076溝跡

(2) B・C区の遺構(第14~24図)

今回検出された縄文時代の遺構はすべてB・C区で検出され、遺跡南側の段丘上に位置する。B区では、南側の第12次調査区から繋がり、出土火山灰から唯一平安時代と判断された溝跡が検出され、C区の遺跡南側低地には、西側の第12次調査区の中世居館の環濠から続く古代~中世と推定される溝跡も検出された。この他では時期不明の溝跡や土坑が検出されており、縄文時代の陥し穴を除くと数量的には時期不明の溝跡が最も多い。

地区ごとの遺構の種別と数量は、B区では縄文時代の陥し穴1基、平安時代の溝跡1条、時期不明の溝跡4条が検出され、C区では縄文時代の陥し穴12基、フラスコ状土坑1基、古代~中世の土坑1基と溝跡3条、時期不明の土坑3基と溝跡5条が検出された。以下、遺構種別毎に記述する。

a 壁穴状遺構

RE023壁穴状遺構(第14図、写真図版2)

〈位置・検出状況〉 C区北部の遺跡中央部低地の北側縁辺の6D8・9c~eグリッドに位置し、水田床下直下の削平されたと思われるV層中で検出した。規模・形態的に一応壁穴状遺構として扱うこととした。

〈重複関係〉 RE024壁穴状遺構と重複する。検出時には一連の遺構と思われたが、断面観察と底面の状況から時間的のある新旧関係にあると判断した。本遺構が新しい。位置的にRG081溝跡との重複関係も考えられる。

〈平面形・規模〉 平面形は直な平行四辺形形状を呈し、長軸方向北北西~南南東にある。規模は長軸約4.2m、短軸は約3.5mを測る。

〈埋土〉 黄褐色土に黒色土が混じっているが、基本的には単層である。人為的堆積の様相を呈する。

〈壁・底面〉 壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は15~20cmを測る。底面は概ね平坦で堅緻だが、粘土による貼床は認められず、砂礫層が露出した状態であった。床面積は約12m²を測る。特に床面施設は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 重複関係から近・現代と思われる。

RE024壁穴状遺構(第14図、写真図版2)

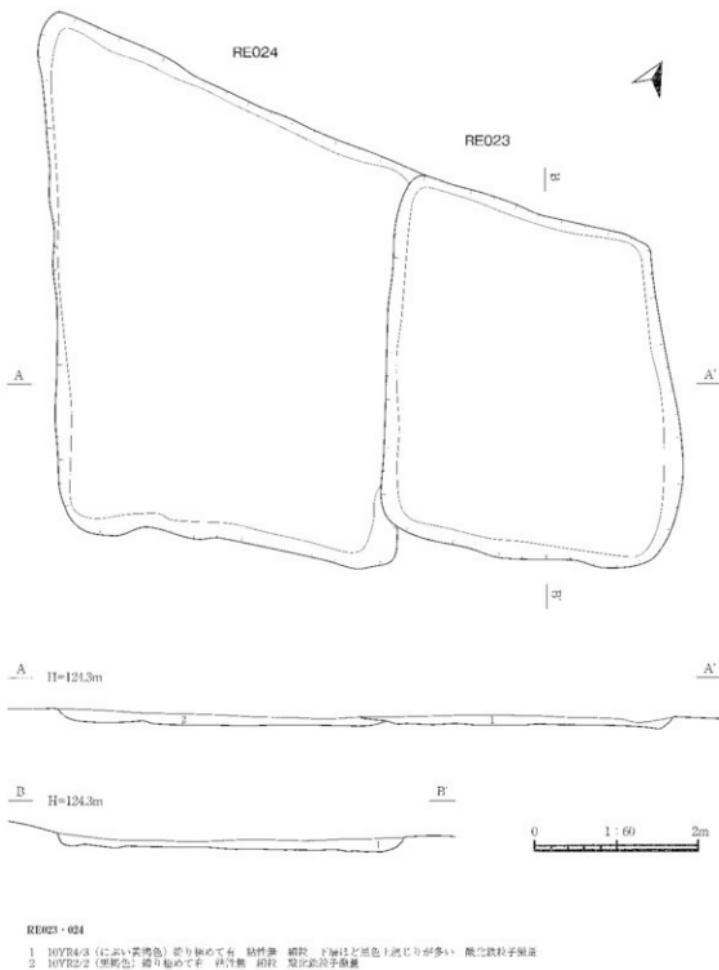
〈位置・検出状況〉 C区北部の遺跡中央部低地の北側縁辺の6D8~10a~dグリッドに位置し、水田床下直下の削平されたと思われるV層中で検出した。RG081溝跡との位置関係等からため池的なものとも考えられたが、V層(砂礫層)中の遺構であって保水機能がないことから、規模・形態的にみてRE023壁穴状遺構と同様に一応壁穴状遺構として扱うこととした。

〈重複関係〉 RE023壁穴状遺構・RG081溝跡と重複する。検出時にはRE023壁穴状遺構と一連の遺構と思われたが、断面観察と底面の状況から時間的のある新旧関係にあると判断した。本遺構が古い。RG081溝跡との重複関係については、一連のものか新旧関係があるかは遺存状況からは判断できなかつた。

〈平面形・規模〉 平面形は東西の壁はおよそ平行し、東側の壁が短い略台形状を呈し、長軸方向は北北西~南南東にある。規模は長軸は5~6.2m、短軸は約4mを測る。

〈埋土〉 黒色土に褐色土が混じっているが、基本的には単層である。人為的堆積の様相を呈する。

3 検出された遺構



第14図 R E 023・024堅穴状遺構

〈壁・底面〉 壁はやや外傾して立ち上がり、段丘縁辺となる北側の残りは比較的良好で、最大壁高約22cmを測るが、東側はRE023堅穴状遺構に、南側は水田造成により削平されており、南側に向かい12~10cm以下と低くなっていた。床面は概ね平坦で堅緻だが、粘土による貼床は認められず、砂礫層が露出した状態であった。床面積は約21m²を測る。特に床面施設は認められなかった。

〈出土遺物〉 摩滅した土師器小片1点と近代陶磁器数点と微小なガラス片とプラスチック片が各1点出土した。北西部分からの出土であり、RG081溝跡に関連する可能性もある。

〈時期〉 出土遺物から近・現代と思われる。

b 土坑類

R D245陥し穴状遺構（第15図、写真図版2）

〈位置・検出状況〉 B区の遺跡南側段丘上の8C11・12cグリッドに位置し、Ⅲ層中で検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、開口部で長軸長約3.6m、幅約60cm、底部では長軸長約3.9m、幅約15cm、検出面からの深さは約1.2mを測る。長軸方向は北北西~南南東である。

〈埋土〉 埋土は7層に細分され、上位と最下層には流入と思われる黒ボク土、中位から下位には壁崩落と思われる褐色系土が堆積する。

〈壁・底面〉 壁は長軸両端下部が僅かに抉れるほかは、全体的に垂直気味に立ち上がり、短軸の上位はやや外反する。底面は概ね平坦で、逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D246陥し穴状遺構（第15図、写真図版2）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の8C15y~8D15a・bグリッドに位置し、削平されたⅣ層中で検出した。畑作により開口部は一部破壊されている。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、開口部で長軸長約3.6m、幅約65cm、底部では長軸長約4m、幅約12cm、検出面からの深さは約0.8mを測る。長軸方向は東~西である。

〈埋土〉 埋土は7層に細分されるが、全体的に壁崩落と思われる褐色系土で、上位と最下層には流入した黒ボク土が滲むように混じる。

〈壁・底面〉 壁は長軸両端下部は抉れ、上位はやや内湾し、短軸両壁は垂直気味に立ち上がるが、上位はやや外反する。底面は概ね平坦で、逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

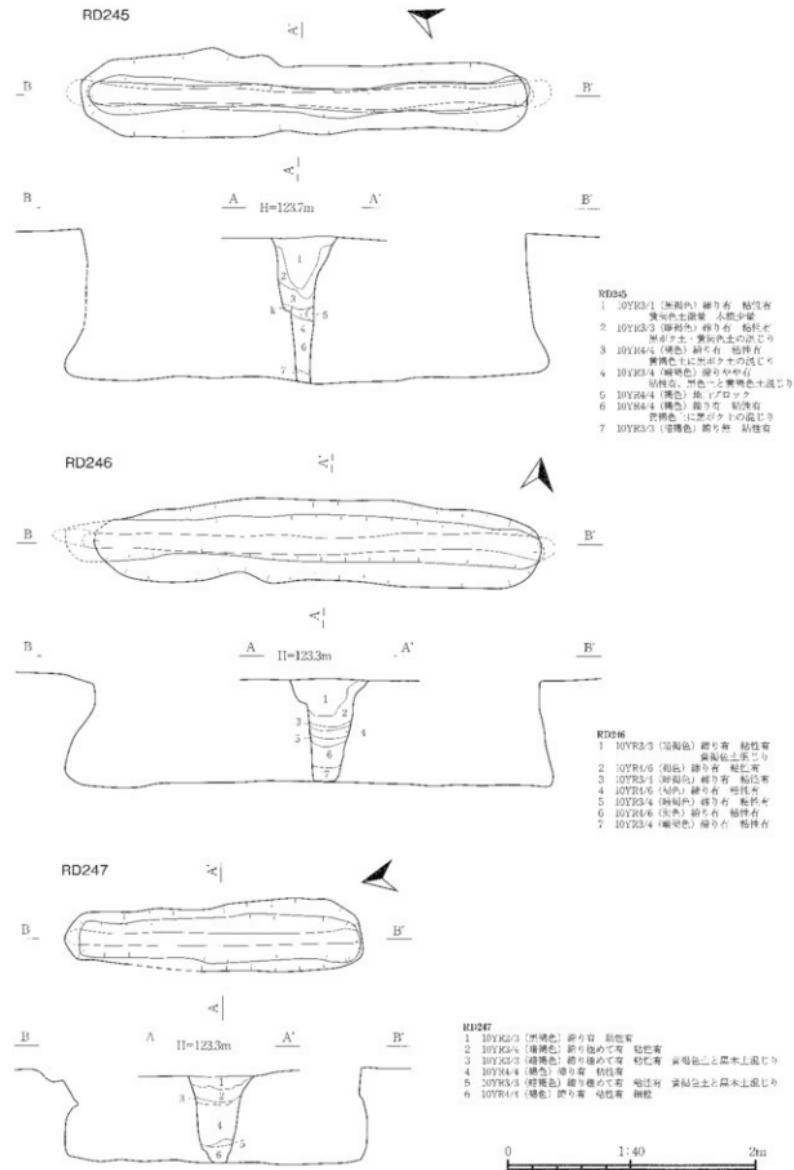
〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D247陥し穴状遺構（第15図、写真図版2）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の8C22・23wグリッドに位置し、削平されたⅣ層中で検出した。畑作により開口部は一部破壊されている。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、開口部・底部とも長軸長約2.4m、開口部幅は約50cm、底部幅は約10cm、検出面からの深さは約0.75mを測る。長軸方向はおよそ北~南である。



第15図 RD245~247陥し穴状遺構

〈埋土〉 埋土は6層に細分されるが、全体的に壁崩落と思われる褐色系土で、上位には流入した黒ボク土が滲むように混じる。

〈壁・底面〉 壁は長軸両端下半が袋状に抉れ、上位と短軸両壁は垂直気味に立ち上がるが、短軸上位はやや外反する。底面は概ね平坦で、逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D248陥し穴状遺構（第16図、写真図版2）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の9C3v・wグリッドに位置し、削平されたIV層中で検出した。畠作により開口部は一部破壊されている。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、開口部で長軸長約3m、幅約56cm、底部では長軸長約3.1m、幅約10cm、検出面からの深さは約0.8mを測る。長軸方向は北東-南西である。

〈埋土〉 埋土は9層に細分されるが、全体的に壁崩落と思われる褐色系土で、上位と下位には流入した黒ボク土が滲むように混じる。

〈壁・底面〉 壁は長軸両端部は袋状に抉れ、短軸両壁は垂直気味に立ち上がるが、上位は全体的に外反する。底面は概ね平坦で、逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D249陥し穴状遺構（第16図、写真図版2）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の9C7x・y～9D7aグリッドに位置し、削平されたIV層中で検出した。畠作により開口部は一部破壊されている。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、開口部で長軸長約2.9m、幅約60cm、底部では長軸長約3.1m、幅約15cm、検出面からの深さは約0.75mを測る。長軸方向は東-西である。

〈埋土〉 埋土は7層に細分されるが、全体的に壁崩落と思われる褐色系土で、上位には流入した黒ボク土が滲むように混じる。

〈壁・底面〉 壁は長軸両端下部は抉れ、上位はやや外湾し、短軸両壁は垂直気味に立ち上がるが、上位はやや外反する。底面は概ね平坦だが、基本層序V層の小砾に達し、凸凹している。逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

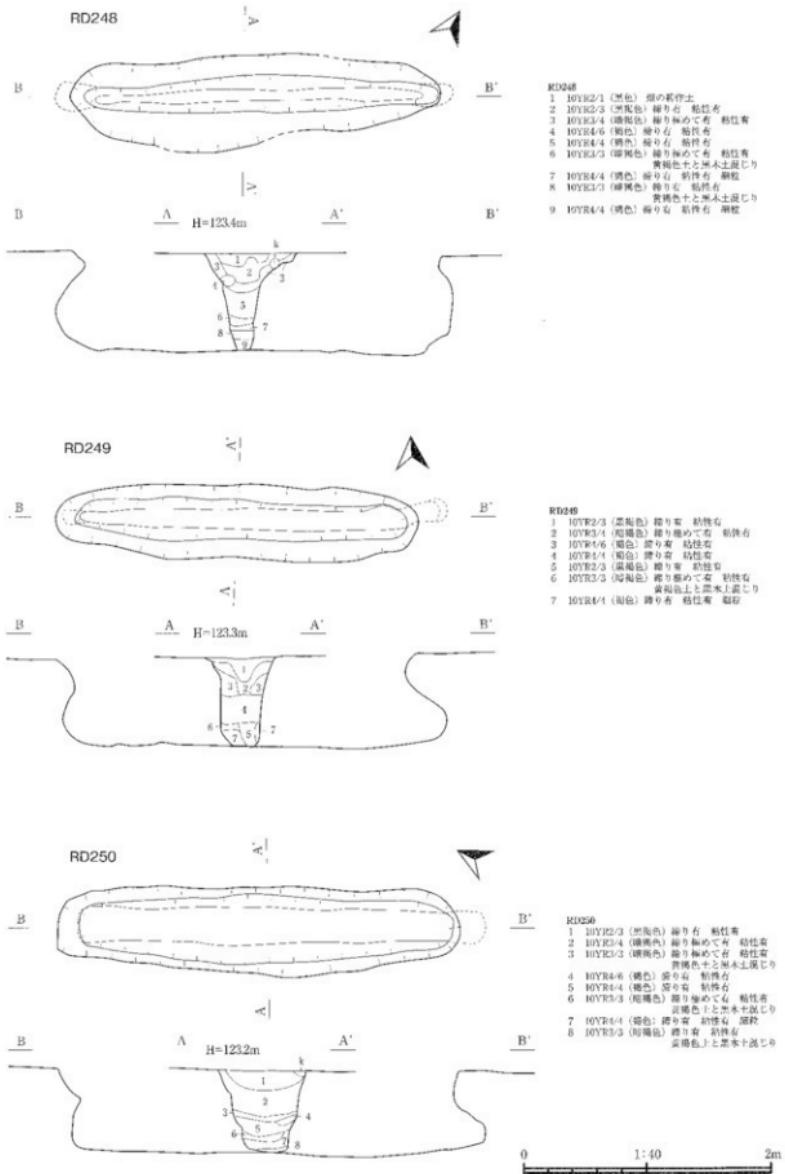
〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D250陥し穴状遺構（第16図、写真図版2）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の8C20～22t・uグリッドに位置し、削平されたIV層中で検出した。畠作により開口部は一部破壊されている。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は長方形基調の溝状を呈し、開口部・底部とも長軸長約3.3m、開口部幅は約65cm、底部幅は約30cm、検出面からの深さは約0.7mを測る。長軸方向は北北西-南南東である。



第16図 RD 248～250陥し穴状遺構

〈埋土〉 埋土は8層に細分されるが、下半と最下層には流入と思われる黒ボク土が薄く堆積し、全体的には壁崩落と思われる褐色系土が堆積する。

〈壁・底面〉 壁は長軸南側下部が抉れるほかは、全体的に垂直気味に立ち上がり。底面は概ね平坦で、逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D251陥し穴状遺構（第17図、写真図版3）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の7C25s~8C1r・sグリッドに位置し、削平されたⅢ層中で検出した。北端の上位は開発前の旧道で破壊されていた。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、両端の下位がやや広くなっている。開口部の長軸長は3.3m前後と推定され、幅約63cm、底部では長軸長約3.1m、幅は約15cmで、両端では25~33cm、検出面からの深さは約0.9mを測る。長軸方向はおよそ北-南である。

〈埋土〉 埋土は8層に細分され、上位と最下層には流入と思われる黒ボク土、中位から下位には壁崩落と思われる褐色系土が堆積する。

〈壁・底面〉 壁は全体的に垂直気味に立ち上がり、短軸の上位はやや外反する。底面は概ね平坦で、逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D252陥し穴状遺構（第17図、写真図版3）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の8C16q・rグリッドに位置し、削平されたⅣ層中で検出した。覆土の判別が難しく、ベルトを除きV層上面の黒色土の砂礫層まで掘り下げてしまった。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、開口部で長軸長約3m、幅約67cm、底部では長軸長約3.3m、幅約18cm、検出面からの深さは約0.7mを測る。長軸方向は北西-南東である。

〈埋土〉 埋土は3層に細分されるが、全体的に壁崩落と思われる褐色系土の堆積である。

〈壁・底面〉 壁は長軸西側下部が袋状となり、上位は両端とも内湾しながら立ち上がり、短軸は外反して立ち上がる。底面は概ね平坦と思われ、逆茂木等の杭痕跡は不明である。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D253陥し穴状遺構（第17図、写真図版3）

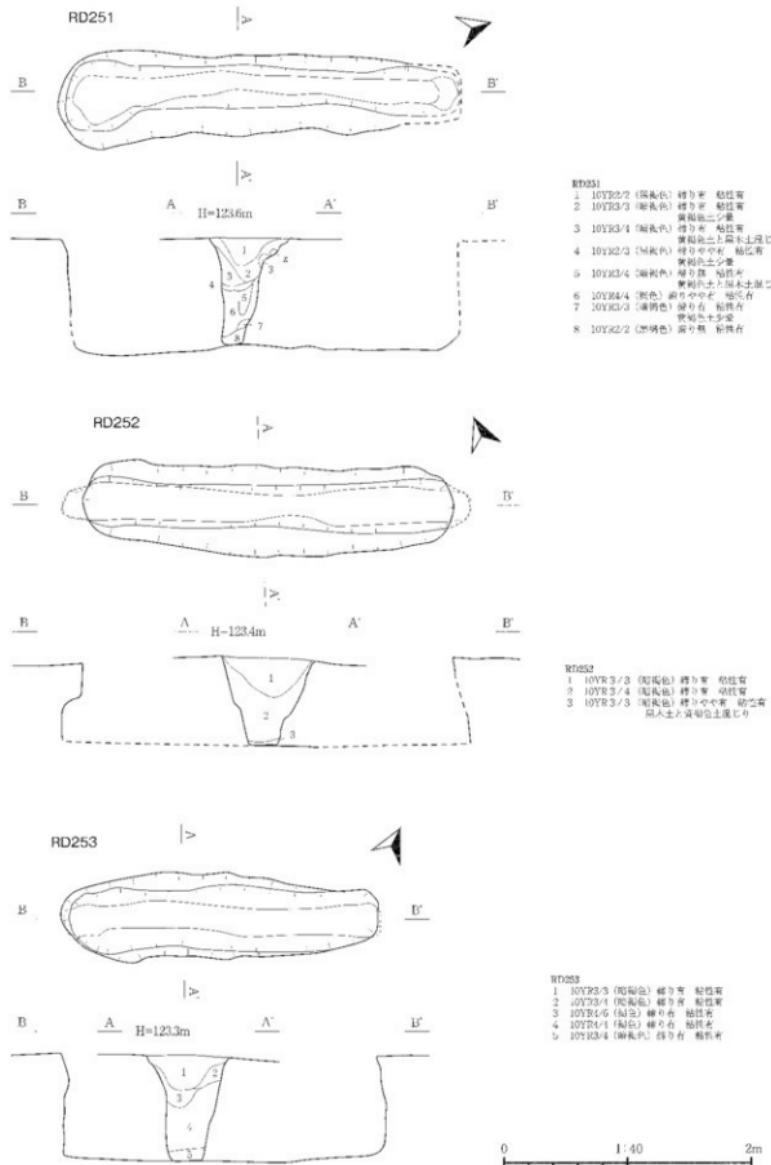
〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の8C20q・19・20rグリッドに位置し、削平されたⅣ層中で検出した。畑作により開口部は一部破壊されている。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は長方形基調の溝状を呈し、開口部・底部とも長軸長約2.6m、開口部幅は約57cm、底部幅は約21cm、検出面からの深さは約0.85mを測る。長軸方向は北東-南西である。

〈埋土〉 埋土は5層に細分されるが、全体的に壁崩落と思われる褐色系土で、上位と最下層には流入

3 検出された遺構



第17図 RD251～253陥し穴状遺構

した黒ボク土が滲むように混じる。

〈壁・底面〉 壁は全体的に垂直気味に立ち上がり、短軸の上位はやや外反する。底面は概ね平坦で、逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D254陥し穴状遺構（第18図、写真図版3）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の9C11・12・p・qグリッドに位置し、削平されたIV層中で検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、開口部・底部とも長軸長約3m、開口部幅は約70cm、底部幅は約14cm、検出面からの深さは約0.8mを測る。長軸方向は北西-南東である。

〈埋土〉 埋土は6層に細分されるが、全体的に壁崩落と思われる褐色系土上で、上位と最下層には流入した黒ボク土が滲むように混じる。

〈壁・底面〉 壁は全体的に外傾して立ち上がり、上位はやや外反する。底面は概ね平坦だが、基本層序V層の小窪に達して凸凹している。逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D255陥し穴状遺構（第18図、写真図版3）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の9C17w~yグリッドに位置し、削平されたIV層中で検出した。東側の上位が畦畔溝により破壊されていた。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、開口部で長軸長約3.4m、幅約52cm、底部では長軸長約3.5m、幅約12cm、検出面からの深さは約0.55mを測る。長軸方向は東-西である。

〈埋土〉 埋土は5層に細分されるが、全体的に壁崩落の褐色系土に黒ボク土が滲むように混じる。

〈壁・底面〉 壁は長軸西側下部が抉れるほかは、全体的に垂直気味に立ち上がり、短軸上位はやや外反する。底面は概ね平坦だが、基本層序V層の小窪に達して凸凹している。逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D256陥し穴状遺構（第18図、写真図版3）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の8C6sグリッドに位置する。RD261プラスコ状土坑の精査中に底面と西側壁に本遺構の存在を確認したので、検出面は削平されたⅢ層中になる。

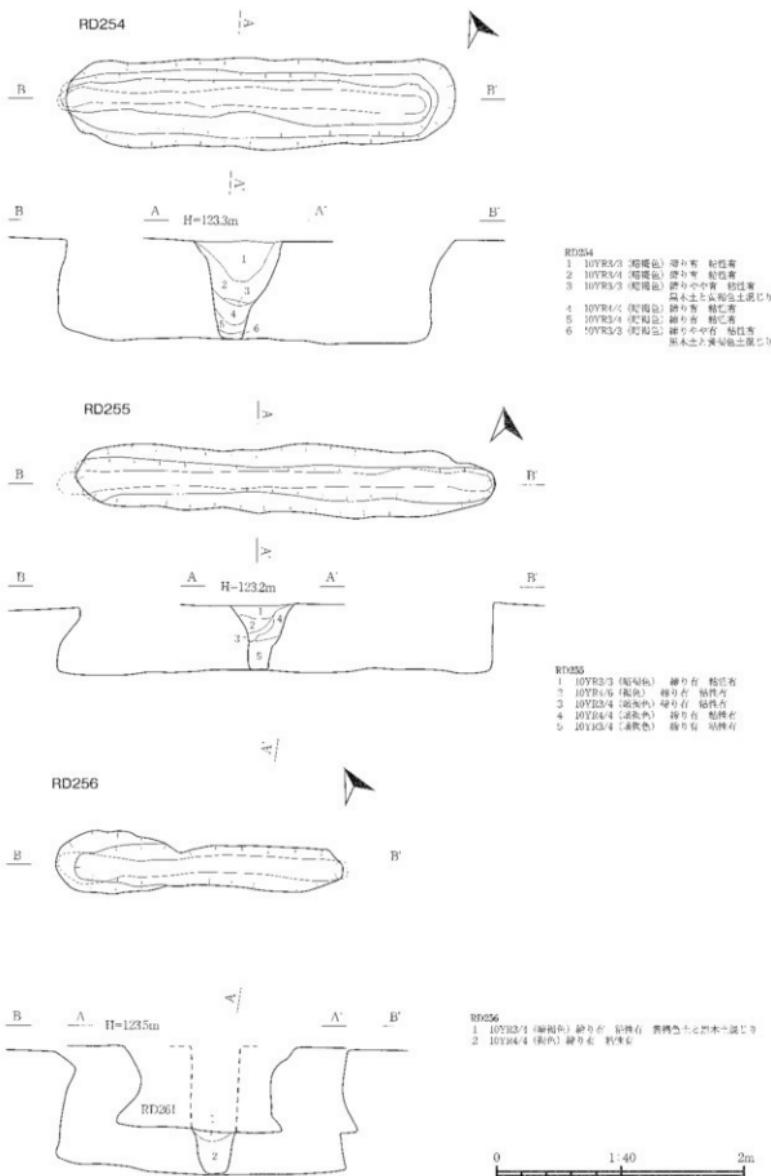
〈重複関係〉 RD261プラスコ状土坑と重複し、本遺構が切られる。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、開口部・底部とも長軸長約2.3m、開口部幅は約50cm、底部幅は約15cm、検出面からの深さは約1mを測る。長軸方向は北西-南東である。

〈埋土〉 埋土は2層に分層されるが、全体的に壁崩落の褐色系土に黒ボク土が滲むように混じる。

〈壁・底面〉 壁は長軸両端は下部から内湾気味に立ち上がり、短軸は垂直気味に立ち上がる。底面は

3 掘出された遺構



第18図 RD254～256陥し穴状遺構

概ね平坦で、逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D257陥し穴状遺構（第19図、写真図版3）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の9C16o~16・17pグリッドに位置し、削平されたIV層中で検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、開口部・底部とも長軸長約4.4m、開口部幅は約90cm、底部幅は約21cm、検出面からの深さは約0.8mを測る。長軸方向は北西-南東である。

〈埋土〉 埋土は6層に細分されるが、上位には黒ボク土が滲むように混じる褐色土、下位には壁崩落と思われる褐色系土、中位と最下層には流入と思われるクロボク土が堆積する。

〈壁・底面〉 壁は長軸西側は下部から内湾気味に、ほかは全体的に外傾して立ち上がり、短軸上位は外反する。底面は概ね平坦で、逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D258土坑（第19図、写真図版4）

〈位置・検出状況〉 C区北部の遺跡中央低地の6D20bグリッドに位置し、V層砂礫層中で検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は、開口部130×75cmの略梢円形を呈し、長軸方向はおよそ北-南である。

〈埋土〉 埋土は基本的には自然堆積と思われる黒ボク土の単層である。

〈壁・底面〉 底面は北側が低く、南側と二つの丸鍋底形を呈し、壁は丸みのある底面から明瞭な稜を持たず緩やかに外傾して立ち上がる。深さは約12cmを測る。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 判断材料が無く、不明である。

R D259土坑（第19図、写真図版4）

〈位置・検出状況〉 C区北部の遺跡中央低地の7C9t・uグリッドに位置し、旧河道の北岸縁辺部のⅢ層中で検出した。確認時の状況からは掘り込み面はⅢ層上面より上位にあると思われる。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は歪な略円形を呈し、開口部で77×68cmを測る。

〈埋土〉 埋土は基本的には自然堆積と思われる黒ボク土の単層で、上位に廃棄と思われる炭化物と焼土がブロック状に混じる。

〈壁・底面〉 底面は丸鍋底形を呈し、壁は丸みのある底面から比較的明瞭な稜を持って外傾して立ち上がる。深さは約18cmを測る。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかったが、炭化物はクリの木との鑑定を得た。

〈時期〉 判断材料が無く、不明である。

R D260土坑（第19図、写真図版4）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の8C7x・yグリッドに位置し、Ⅲ層中で検出した。確認時の状況からは掘り込み面はⅢ層上面より上位にあると思われる。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は開口部径約75cmの歪な略円形を呈する。

〈埋土〉 埋土は基本的には自然堆積と思われるⅢ層起源の黒ボク土の単層である。

〈壁・底面〉 底面は丸錐底形を呈し、壁は丸みのある底面から明瞭な棱を持たずに緩やかに外傾して立ち上がる。深さは約15cmを測る。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 判断材料が無く、不明である。

R D261 フラスコ状土坑（第19図、写真図版3）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の8C6sグリッドに位置し、Ⅲ層中で検出した。

〈重複関係〉 RD256陥し穴状造構と重複し、断面観察から本造構が新しい。

〈平面形・規模〉 平面形は略楕円形を呈し、規模は開口部で180×140cm、底部は170×140cmを測る。長軸方向はおよそ北西-南東である。深さは約65cmを測る。

〈埋土〉 埋土は9層に細分されるが、上位に流入と思われる黒ボク土、中位は黒ボク土混じりの褐色系土、下位には壁崩落と思われる褐色土と大別される自然堆積である。

〈壁・底面〉 断面形はほぼフラットな底面から内湾し、開口部は外反するフラスコ状を呈する。底面中央に西-東方向のRD256陥し穴状造構があり、精査段階では底面ピット等は確認できなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物がないが、形状と重複関係から縄文時代のフラスコ状土坑と判断した。

R D262土坑（第19・25図、写真図版4・7）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の9C15pグリッドに位置し、削平されたⅣ層中で検出した。検出時には小破片ながら摩耗していないしっかりした土器器坏破片が確認された。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は、開口部径約90cmの略円形を呈する。深さは約5cmを測る。

〈埋土〉 埋土は基本的には自然堆積と思われる黒ボク土の単層である。

〈壁・底面〉 断面形は削平されて皿状を呈し、やや丸みのある底面から壁は明瞭な棱を持たずに緩やかに外傾して立ち上がる。底部付近のみ遺存していた。

〈出土遺物〉 検出面から摩滅していない土器器坏破片が2点・約6g出土した。図版1は口縁部片である。

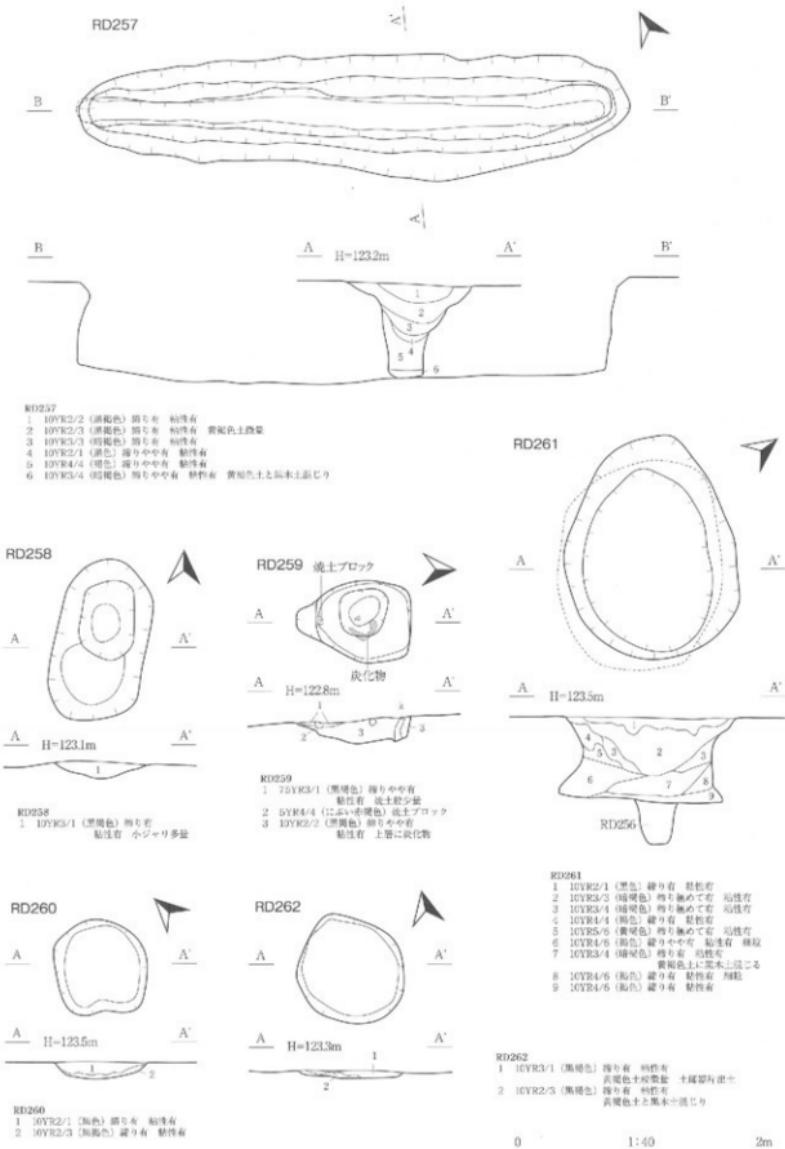
〈時期〉 出土遺物及び周辺造構との配置状況から古代～中世と推定される。

c 溝跡

R G012溝跡（第20図、写真図版4）

〈位置・検出状況〉 C区南端の遺跡南側低地の11C15～18・o～yグリッドに位置し、Ⅲ～Ⅳ層面で検出した。

〈重複関係〉 なし。



第19図 R D257陥し穴状遺構・R D258~262土坑

〈走向・規模〉 西北西－東南東方向に走向し、南側に向かい緩やかに屈曲している。西端は南側の旧河道に繋がり終わるようだが、東方は隣接する第9次調査区に続くが、東端は消失している。検出した部分の長さ約19m、開口部幅は80～110cm、底部幅は約60cmを測る。9次調査分との総延長は約30mを測る。

〈埋土〉 埋土は下層ほど褐色砂質土が多く混入する黒ボク系土2層からなる自然堆積である。

〈底面・壁〉 横断面形はやや丸みのある底面から明瞭な稜を持たずに外傾して立ち上がる。底面は部分的に基本層序V層に達している。深さは12～20cmを測る。底面標高は西側に向い9cm程低くなる。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 判断材料が無く、不明である。9次調査では現畦畔以前の区画溝としているが、根拠に乏しいものと思われる。

R G014溝跡（第20図、写真図版4）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の9C23・24x・y～9D24・25a・bグリッドに位置し、削平されたIV層中で検出した。

〈重複関係〉 RG013と重複し、断面観察から本遺構が古い。

〈走向・規模〉 西北西－東南東方向に直線的に走向している。西端はRG013に切られて終わっており、RG013と重なるように屈曲していた可能性も考えられ、時期差はほとんどないものかもしれない。東方は隣接する第9次調査区を経て第14次調査区まで続き、東端は畑地で削平され消失している。検出した部分では長さ約7.4m、開口部幅はおよそ80cm前後、底部幅は約50cmを測る。9次・14次調査分との総延長は約45.1mを測る。

〈埋土〉 埋土は基本的には自然堆積と思われる黒ボク土の単層である。

〈底面・壁〉 底面は植栽痕による小さな凸凹があり、壁はやや丸みのある底面からやや稜を持って外傾して立ち上がり、深さはおよそ15cm前後を測る。西側には開口部95×50cmの楕円形の落ち込みがあり、底面はおよそ平坦で壁は外傾して立ち上がり、溝底からの深さは約20cmを測る。精査時の埋土状況からは溝と一連のものと思われる。底面標高は東側に向い10cmほど低くなる。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 RG013・021（025）との重複関係から平安時代から中世と推定される。

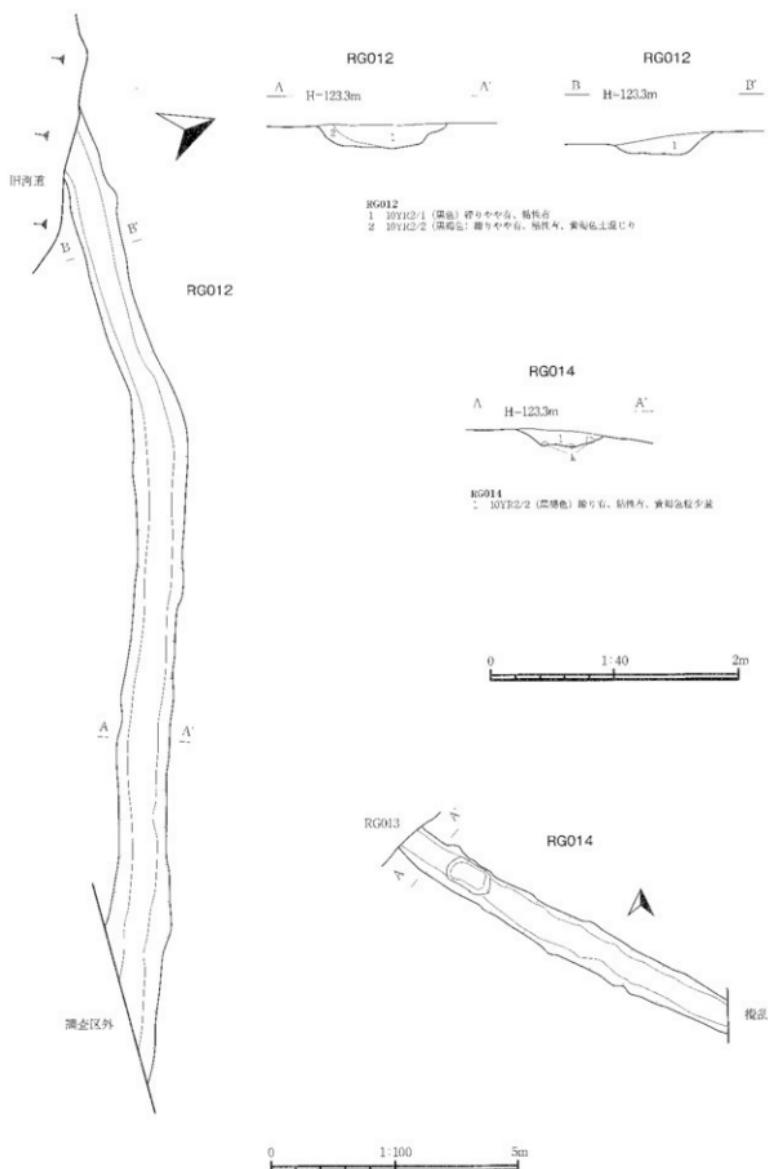
R G013溝跡（第21図、写真図版5）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上から南部の遺跡南側低地にかけての9D18～21a～c、9C21～25w～y、10C1～25m～w、11C1mグリッドに位置し、中央部段丘上では削平されたIV層中で検出した。南部低地では基本層序II層と造構覆土の判別が適わず、結果的にIII層上面で検出したが、本来の掘り込み面はII層上面と考えられる。旧河道最深部では掘り込みがIII層に達していなかったため、一部確認できずに途切れてしまっている。

調査区の離れた第9・14次調査と第11次調査で別名で登録されていたが、今次調査で一連の遺構と判明したため、若い方の番号で扱うこととした。

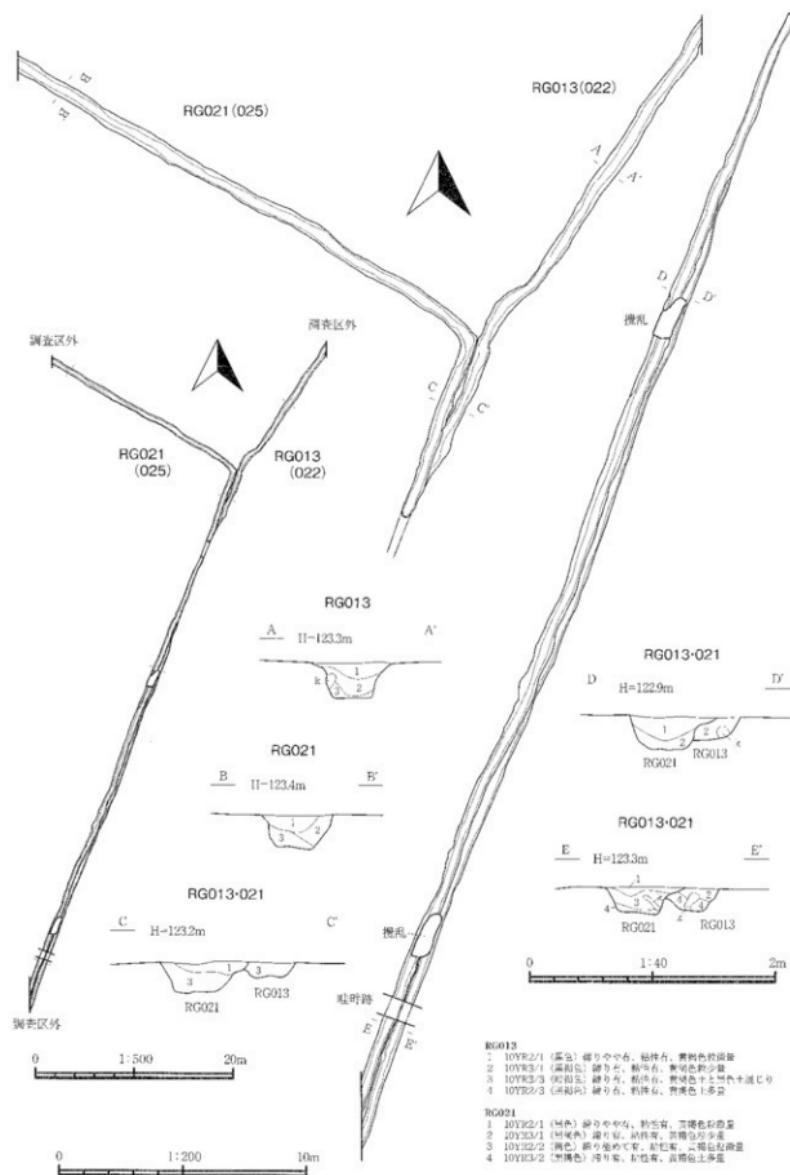
〈重複関係〉 RG014・021溝跡と重複し、断面観察から本遺構よりRG021溝跡が新しく、RG014溝跡が古い。

〈走向・規模〉 北北東－南南西方向に直線的に走向している。南方は隣接する第11次調査区（RG022溝跡）に続き、南端は遺跡南限の堰に至る。北方は隣接する第9次調査区を経て第14次調査区まで続き、



第20図 RG012・014溝跡

3 検出された遺構



第21図 RG013・021溝跡

西北西方向に屈曲する。西端は今次C区調査区の中央部に至るが、畑地で削平され消失している。検出した長さは、途切れた部分も含めて推定約75m、開口部幅は40~65cm前後、底部幅は20~35cmを測る。9次・11次・14次調査分との総延長は約143mを測る。

〈埋土〉 埋土は黒ボク土系の4層に細分され、下層ほど褐色土が混じる自然堆積である。

〈底面・壁〉 底面は植栽痕による小さな凸凹があるが、およそ平坦で、壁は底面から明瞭な稜を持つ外傾して立ち上がり、横断面形はおよそ逆台形様を呈する。深さは10~35cmを測る。底面標高は地形に沿うように南北両方向から南部低地の北側にある旧河道に向い低くなる。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 RG021 (025) 溝跡との重複関係や軸方向からは中世の区画溝と推測されるが、14次調査では出土遺物から近世後半と判断されている。出土地点や状況の詳細が不明なため、不確かではあるが、周辺は畑地で畠間や作物収穫時の掘削があり、必ずしも伴う遺物とは断定できないものと思われる。

R G021溝跡（第21図、写真図版5）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上から南部の遺跡南側低地にかけての9C18~25n~w、10C1~25n~wグリッドに位置し、中央部段丘上では削平されたⅣ層内で検出した。南部低地では基本層序Ⅱ層と遺構覆土の判別が適わず、結果的にⅢ層上面で検出したが、本来の掘り込み面はⅡ層上面と考えられる。旧河道最深部では掘り込みがⅢ層に達していなかったため、一部確認できずに途切れてしまっている。

第11次調査において調査地内で離れていた走向方向の異なる2条の溝跡として別個に登録されていたが、今次調査で一連の遺構と判明したため、若い方の番号で扱うこととした。

〈重複関係〉 RG013溝跡と重複し、断面観察から本遺構が新しい。

〈走向・規模〉 北側は西北西~東南東方向に走向し、RG013溝跡と重複する部分から南北方向におよそ直角に屈曲して北北東~南南西方向に直線的に走向する。南方は隣接する第11次調査区に継ぎ、南端は遺跡南限の壠に至る。北側西方は隣接する第11次調査区(RG025溝跡)を経て第12次調査区まで継ぎ、中世環濠居館の堀の北東隅に繋がっている。検出した長さは、途切れた部分も含めて推定約78m、開口部幅は40~60cm前後、底部幅は20~30cmを測る。11次・12次調査分との総延長は約124mを測る。

〈埋土〉 埋土は黒ボク土系の4層に細分され、下層ほど褐色土が混じる自然堆積である。

〈底面・壁〉 底面は植栽痕による小さな凸凹があるが、およそ平坦で、壁はやや丸みのある底面から明瞭な稜を持つ外傾して立ち上がり、横断面形はおよそ逆台形様を呈する。深さは10~35cmを測る。底面標高は地形に沿うように南北両方向から南部低地の北側にある旧河道に向い低くなる。

〈出土遺物〉 遺物は幾分摩滅した土器器坏の小破片が3点出土した。

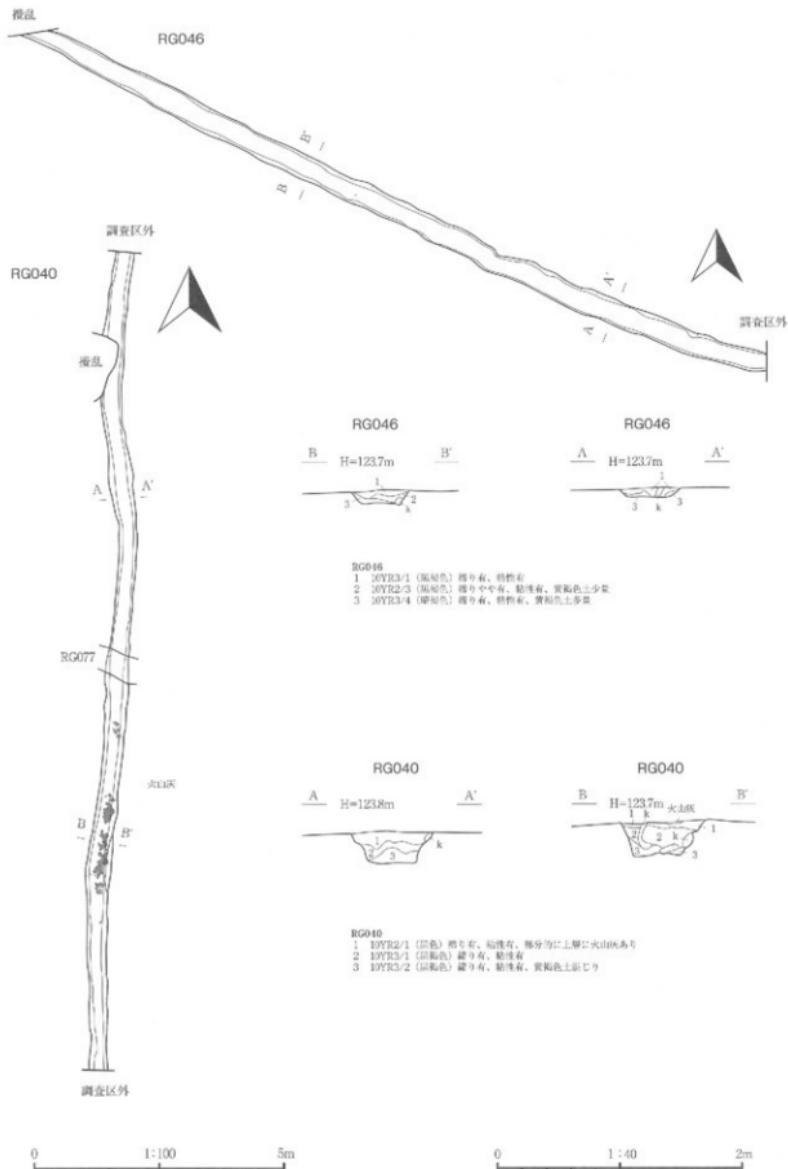
〈時期〉 12次調査では時期不明としながらも、環濠居館の堀跡との接合部の状況や軸方向から中世もしくはそれ以前の可能性も示唆されており、出土遺物と状況から平安時代から中世の区画溝と推定される。

R G040溝跡（第22図、写真図版5）

〈位置・検出状況〉 B区の遺跡南側段丘上の8C6~19e・fグリッドラインに位置し、Ⅲ~Ⅳ層面で検出したが、Ⅲ層が残っていて遺存状況が比較的良好な中央部の検出面で火山灰が確認されており、本来の掘り込み面は削平されたⅡ層面であったと思われる。

〈重複関係〉 RG077溝跡と重複し、断面観察から本遺構が古い。

3 検出された遺構



第22図 RG040・046溝跡

〈走向・規模〉 南-北方向に幾分蛇行しながらほぼ直線的に走向する。南方は一部途切れながらも第12次調査を経て第11次調査区（RG019溝跡？）まで続き、遺跡南限の堰まで達するが、北側の延長は12次調査北北区の段丘縁辺から北側低地まで削平されていたため、確認されていない。ただし、今次調査区の北から西側にかけての隣接地は未調査地であり、この部分で西側に折れ曲がっている可能性も考えられる。検出した部分では長さ約25.5m、開口部幅は55~74cm、底部幅は28~38cmを測る。11次・12次調査分との総延長は約155mである。

〈埋土〉 塙土は下層に褐色砂質土が混入する黒ボク系土3層と検出面で一部ブロック状に火山灰が堆積する4層に細分される自然堆積である。

〈底面・壁〉 底面は植栽痕による小さな凹凸があるが、およそ平坦で、壁はやや丸みのある底面から明瞭な稜を持って外傾して立ち上がり、横断面形はおよそ逆台形様を呈する。深さは10~30cmを測る。底面標高は北側から南側に向かい32cm低くなる。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土火山灰の分析結果から平安時代と判断された。12次調査の判断同様に底面標高差から排水路と思われる。

RG046溝跡（第22図、写真図版5）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の8C1・2v~y、8D2~4a~dグリッドに位置し、削平されたⅣ層中で検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈走向・規模〉 西北西-東南東方向に直線的に走向する。北方は旧道で破壊され消失している。東方は第14次調査区に統くが、遺存状況が悪く途切れている。検出した部分では長さ約16.5m、開口部幅は45~55cm、底部幅はおよそ40cm前後を測る。14次調査分と合わせた推定される総延長は約40mである。

〈埋土〉 塙土は3層に細分されるが、基本的には黒ボク系土で下位層褐色土が混じる自然堆積である。

〈底面・壁〉 底面は植栽痕による小さな凹凸があるが、およそ平坦で、壁は底面から明瞭な稜を持って外傾して立ち上がり、横断面形はおよそ逆台形様を呈する。深さはおよそ10cm前後を測る。底面標高は西側から東側に向かい5cmほど低くなる。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 判断材料が無く、不明である。

RG077溝跡（第23図、写真図版6）

〈位置・検出状況〉 B区の遺跡南側段丘上の8B9~11u~y、8C11~15a~jグリッドに位置し、Ⅲ~Ⅳ層面で検出した。

〈重複関係〉 RG040・078~080溝跡と重複し、検出状況と断面観察からRG040溝跡とRG080溝跡は本遺構より古く、RG079溝跡は新しい。RG078溝跡は覆土状況では判断できず、同時期の可能性が考えられる。

〈走向・規模〉 西北西-東南東方向に走向し、西側でクランク状に2度屈曲する。西側は調査区外に統くようだが、東側の隣接する第12次調査北北区では連続する溝跡は検出されていない。近接する今次調査のC区でも畠地で削平され、延長方向では検出されなかった。検出した部分では長さ約32m、開口部幅は40~70cm、底部幅約21~24cmを測る。

〈埋土〉 埋土は下層ほど褐色土が多く混入する黒ボク系土2層からなる自然堆積である。

〈底面・壁〉 底面はやや丸みがあり、植栽痕による小さな凸凹がある。壁は底面から明瞭な稜を持たずに外傾して立ち上がり、部分的に開口部が外反している。横断面形はおよそ逆さの蒲鉾形を呈する。深さは15~35cmを測る。底面標高は西側から東側に向かい9cmほど低くなる。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 判断材料が無く、不明である。

R G078溝跡（第23図、写真図版6）

〈位置・検出状況〉 B区の遺跡南側段丘上の8B6~16s~wグリッドに位置し、Ⅲ~Ⅳ層面で検出した。

〈重複関係〉 RG077・080溝跡と重複し、検出状況と断面観察からRG080溝跡より新しいが、RG077溝跡とは覆土の状況では判断できず、同時期の可能性が考えられる。

〈走向・規模〉 北北東~南南西方向に直線的に走向し、南側で西方向に緩やかに屈曲するが、南端は擾乱で破壊されており、不明である。北側は調査区外に延びる。検出した部分では長さ約20.5m、開口部幅は30~60cm、底部幅約20cm前後を測る。

〈埋土〉 埋土は下層ほど褐色土が多く混入する黒ボク系土2層からなる自然堆積である。

〈底面・壁〉 底面はやや丸みがあり、植栽痕による小さな凸凹がある。壁は底面から明瞭な稜を持たずに外傾して立ち上がり、部分的に開口部が外反している。横断面形はおよそ逆さの蒲鉾形を呈する。深さは14~26cmを測る。底面標高は北側から南側に向かい26cmほど低くなる。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 判断材料が無く、不明である。

R G079溝跡（第23図、写真図版6）

〈位置・検出状況〉 B区の遺跡南側段丘上の8B6~10t~vグリッドに位置し、Ⅳ層面で検出した。

〈重複関係〉 RG077溝跡と重複し、断面観察から本遺構が新しい。

〈走向・規模〉 北北東~南南西方向に直線的に走向する。南北両側とも調査区外に延びる。検出した部分では長さ約9m、開口部幅は25~35cm、底部幅約15cm前後を測る。

〈埋土〉 埋土は、基本的には下層に褐色土が混入する自然堆積の黒ボク土の単層である。

〈底面・壁〉 底面はやや丸みがあり、植栽痕による小さな凸凹がある。壁は底面から明瞭な稜を持って外傾して立ち上がる。横断面形はおよそ逆さの蒲鉾形を呈する。深さは11~22cmを測る。底面標高は南側から北側に向かい6cmほど低くなる。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 判断材料が無く、不明である。

R G080溝跡（第23・25図、写真図版6・7）

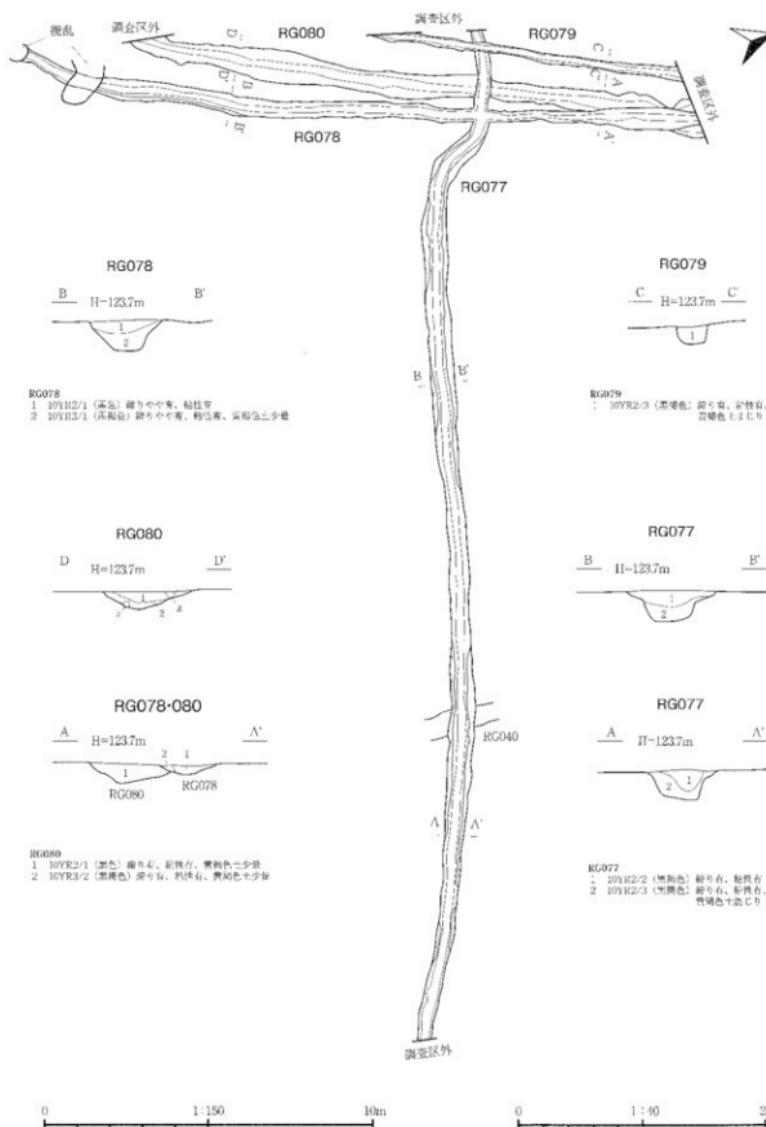
〈位置・検出状況〉 B区の遺跡南側段丘上の8B6~14s~wグリッドに位置し、Ⅲ~Ⅳ層面で検出した。

〈重複関係〉 RG077溝跡、RG078溝跡と重複し、断面観察から本遺構が古い。

〈走向・規模〉 北北東~南南西方向に直線的に走向する。南北両側とも調査区外に延びる。検出した部分では長さ約17.3m、開口部幅は52~90cm、底部幅は20~25cm前後を測る。

〈埋土〉 埋土は下層ほど褐色土が多く混入する黒ボク系土2層からなる自然堆積である。

〈底面・壁〉 底面はやや丸みがあり、植栽痕による小さな凸凹がある。壁は底面から明瞭な稜を持た



第23図 RG077~080溝跡

3 検出された遺構

すぐに外傾して立ち上がり、部分的に開口部が外反している。横断面形は浅い皿形を呈する。深さは7～12cmを測る。底面標高差はほとんどなく、およそ平坦である。

〈出土遺物〉 遺物は18世紀前半と思われる腹前彫器のくらわんか手碗片1点（図番6）が出土した。

〈時期〉 出土遺物から近世後半に亘ると思われる。

R G081溝跡（第24図、写真図版6）

〈位置・検出状況〉 C区北部の遺跡中央部低地の北側縁辺の6C9q～y、6D9aグリッドラインに位置し、削平されたIV～V層中で検出した。

〈重複関係〉 RE024豊穴状遺構と重複するが、新旧関係については遺存状況からは判断できなかった。

〈走向・規模〉 よよそ西～東方向にやや蛇行して走向する。東端はRE024豊穴状遺構と接して終わり、西方は第12次調査北北区に続くが、南製により消失している。検出した部分では長さ約18m、開口部幅は45～55cm、底部幅は30～34cm前後を測る。

〈埋土〉 埋土は5層に細分される黒ボク系土で中位には褐色土が混じり、最下層は細粒の水成と思われる自然堆積である。

〈底面・壁〉 底面はやや丸みがあり、壁は丸みのある底面から比較的明瞭な稜を持って外傾して立ち上がり、横断面形はおよそ逆さの蒲鉾形を呈する。深さは19～30cm前後を測る。底面標高は西側から東側に向かい7cmほど低くなる。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 判断材料が無く、不明である。

R G082溝跡（第24・25図、写真図版6・7）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の北側縁辺の7C14～16x・y、7D16～21a～dグリッドに位置し、削平されたV層中で検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈走向・規模〉 よよそ北西～南東方向に直線的に走向し、南側がカーブを描いて直角に南西に屈曲している。南北両端とも現代の掘削により破壊され、消失している。検出した部分では長さ約18.5m、開口部幅は40～63cm、底部幅は15～20cm前後を測る。

〈埋土〉 埋土は8層に細分されるが、上位は黒ボク系土、下位は褐色系土に大別される下層には細粒の水成と思われる自然堆積である。

〈底面・壁〉 底面はおよそ平坦で、壁は底面から明瞭な稜を持って外傾して立ち上がり、横断面形はおよそ逆台形を呈する。深さは15～40cmを測る。底面標高差はほとんどなく、およそ平坦である。

〈出土遺物〉 遺物は18～19世紀と思われる白磁片1点（図番7）が出土した。

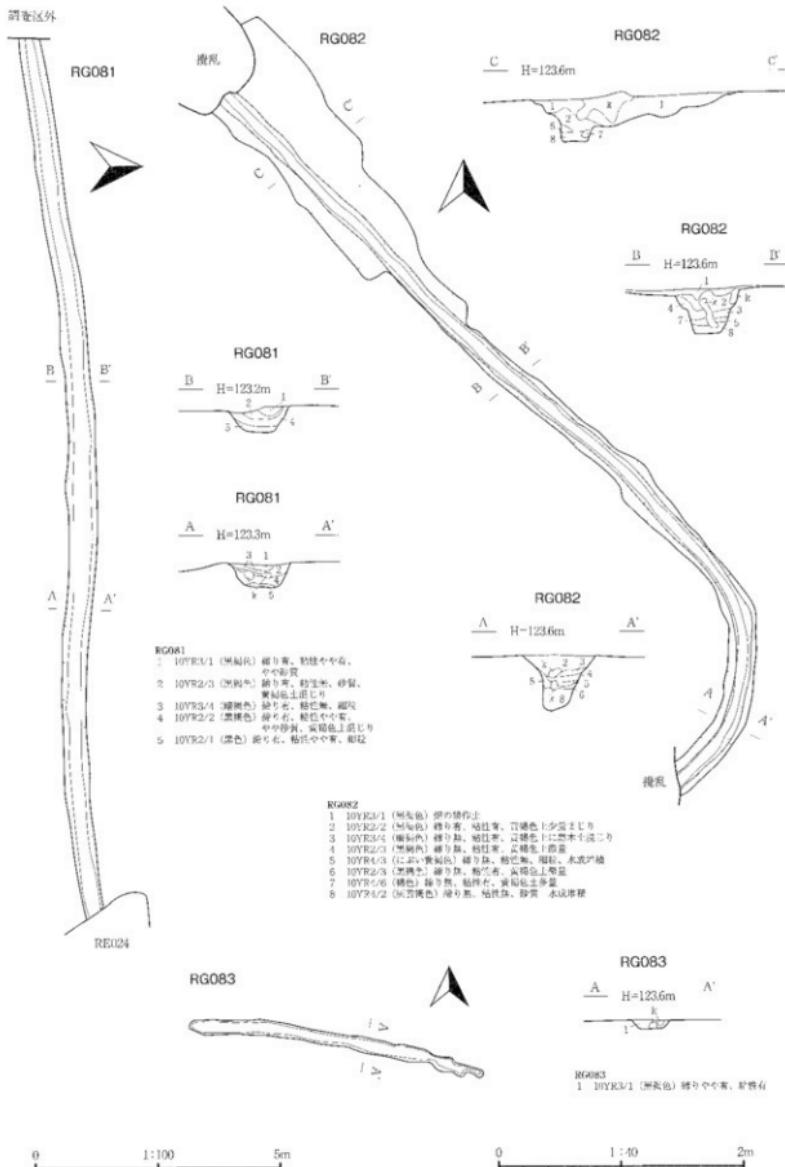
〈時期〉 近世後半～近代の水路と思われる。

R G083溝跡（第24図、写真図版6）

〈位置・検出状況〉 C区中央部の遺跡南側段丘上の8C10・11r～uグリッドに位置し、Ⅲ～Ⅳ層中で検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈走向・規模〉 よよそ東～西方向に直線的に走向する。東西両端とも削平により消失している。検出した部分では長さ約6m、開口部幅は約30cm、底部幅はおよそ17cm前後を測る。



第24図 R G081~083溝跡



第25図 出土遺物

第3表 遺物観察表

団番	出土位置・層位	器種・部位	产地・年代	文様(内面/外面)・釉調	法量(cm)			重量(g)	備考
					口径	器高	底径		
1	C区RD262 埋土上	土師器坏 口縫部	—	テクノ目	—	—	—	3.1	
2	A区RD064・SP11 埋土上	陶器碗 口縫部	不明 18~19c?	施釉/口縫部施釉	—	—	—	4.8	
3	A区RE022ベルト 埋土上	陶器十底 体部	大坂相馬 19c	無釉/平行線	—	—	—	3.3	
4	A区RE022 埋土上	磁器皿・底部	肥前 18c前	見込蛇の目釉剥ぎ/高台無釉	—	(19)	42	65.4	
5	A区RG065ベルト 埋土上	陶器碗・体部	大坂相馬 18~19c	透明釉	—	—	—	8.9	
6	B区RG080北側 埋土上	磁器碗 体~底部	肥前 18c前	/草花文	—	(39)	(40)	22.9	くらわん か手
7	C区RG082 埋土上	白磁盃? 体部	不明(中国)? 中世?	—	—	—	—	12.2	
8	A区擾乱	磁器碗 体~底部	清(中国) 18後~19c	見込み宝文? /草花文	—	(5.8)	(6.9)	81.9	焼き締ぎ
9	A区南半木根周辺 黒褐色土上半	磁器碗 口縫部	清(中国) 18後~19c	宝文/草花文	(10.4)	(39)	—	11.7	
10	A区北半木根周辺 1層	陶器碗 口縫部	肥前 17末~18c前	透明釉・灰黄	(10.3)	(5.4)	—	37.4	
11	A区南半木根周辺	陶器火鉢 口縫部	瀬戸・美濃 19c	無釉/線釉	—	—	—	62.4	
12	A区北半盛土2 下層	陶器碗 口縫部	大坂相馬 18~19c	透明釉	(8.2)	(4.1)	—	15.6	
13	C区中央部南西 表土上	陶器上瓶 口縫部	大坂相馬 19c	無釉/平行線	(7.7)	(2.8)	—	8.9	
14	A区北半木根周辺 1層	陶器碗 口縫部	肥前 18c前	/二重削目文	(9.9)	(4.1)	—	29.7	くらわん か手
15	B区・表土 L縫~底部	陶器碗 L縫~底部	肥前 19c前	平行線/宝文?	(10.7)	5.7	(3.3)	40.0	逆反
16	B区・表土 L縫部	陶器碗 L縫部	瀬戸 19c前	見込み字文/不明	—	(4.9)	3.6	50.0	逆反
17	A区北半木根周辺 1層	陶器碗 口縫部	瀬戸 19c前	平行線/不明	(9.8)	(4.5)	—	19.9	逆反
18	C区中央部北側 盛土	磁器皿 底部	肥前 18c後	見込み松竹梅繋ぎ・蛸唐草 /平行線・裏鉢	—	(1.1)	5.7	25.9	
19	B区・表土 底部	磁器盃 口縫部	肥前 18c後	四方襷文/雲文?	(10.1)	(1.9)	—	13.4	
20	A区北半盛土2 下層	磁器皿 口縫~底部	東北在地? 19c中	見込み松竹梅繋ぎ・みじん唐草 文/切草文・蛇の目四形高台	(14.8)	4.3	8.7	191.8	
団番	出土地点・層位	器種	残存部位	長さ・幅 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
21	A区・RD063・SP8・埋土上層	針	完形?	3.5	0.6	0.5	3.56		
22	C区中央北側・表土	寛永通宝	完形	2.4	—	0.08	1.56		
23	C区中央北側・表土	寛永通宝	完形	2.2	—	0.1	1.99		

〈埋土〉 埋土は、基本的には黒ボク土の単層の自然堆積である。

〈底面・壁〉 底面は植栽痕による小さな凸凹があるが、およそ平坦で、壁は明瞭な稜を持たず外傾して立ち上がる。深さはおよそ5cm前後を測る。底面標高差はほとんどなく、およそ平坦である。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 判断材料が無く、不明である。

4 出 土 遺 物

今回の発掘調査では古代、中・近世、近代の遺物（第25図）が中コンテナで1箱弱程度出土した。遺構内から出土したものは数点の土師器を除くと7点のみで、古代以外の遺物のほとんどは遺構外出土である。

出土量としては、地利用によるものと思われるが、近世から宅地であった地境となるA区に偏っており、特に境界林であった木根の周辺から陶磁器が多く出土している。古くは17世紀末～18世紀前葉の肥前産陶器（図番10）から現代のものまである。近代以降のものを除くと、ほとんど18～19世紀のものであり、屋敷が機能していた年代を示していると思われる。B区は畠地であったが、しばらく作付されておらず、旧耕作土中に廃棄されたものが散見されたものである。C区は畠地と水田であったが、過去の隣接地調査の堆上山となっており、少ない遺物の大半がこの盛り土中のものである。

各種遺物の出土量は、近世から近代にかけての陶磁器類が多く、大半は19世紀以降の産地不明のものである。産地・時期の特定可能なものは近世の肥前産陶磁器、福島県大堀相馬産陶器、瀬戸・美濃産陶磁器、このほか清（中国）産磁器2点、銭貨2枚・鉄製品1点が出土しているが、小コンテナ半箱にも満たない。遺構内出土遺物8点を含め23点図示した。個別の説明は表に記載している。

5 ま と め

矢盛遺跡第27次調査によって得られた資料は、主な遺構としては縄文時代と考えられる陥し穴状遺構13基とフラスコ状土坑1基、平安時代の溝跡1条と土坑1基、中世と推定される溝跡3条、近世の掘立柱建物跡3棟、時期不明の堅穴状遺構3棟、土坑3基、溝跡13条などがある。縄文時代の遺構と近世の掘立柱建物跡は遺跡南側段丘微高地上に立地しているが、溝はかは地形的要素に捕らわれない分布状況である。

遺物は上述のとおりであり、遺構内出土遺物が少ないので、時代を問わず個々の遺構の性格と占地状況によるものと思われる。

縄文時代の陥し穴は、東側に隣接する14次調査の2基を合わせると遺跡南部では計15基の陥し穴が存在することが判明し、（14次調査区の東側について盛岡市教委が今年度28次調査を実施しており、陥し穴数基が検出されている。）遺跡の北部（6次調査ほか）と同様に南部でも狩獵場としての土地使用が確認された。立地としては旧河道に挟まれた遺跡南部の段丘上の狭い範囲に分散している。

形態的にはすべて溝状を呈し、規模的には長軸長2.5m前後が3基、3m前後が7基、3.5m前後が4基、4mが1基の4サイズ、幅は壁崩落などの影響の少ないと思われる底部における法量として、やや幅広の30cmが1基あるほかは20cm未溝が14基とほとんど差異はない。すべて底部には逆茂木痕等は認められない。配置状況等としては、長軸方向が西-東3基、北西-南東4基、北北西-南南東2基、北北東-南南西3基、北東-南西3基のものがある。形態・規模・配置で特に組み合わせに特徴は認

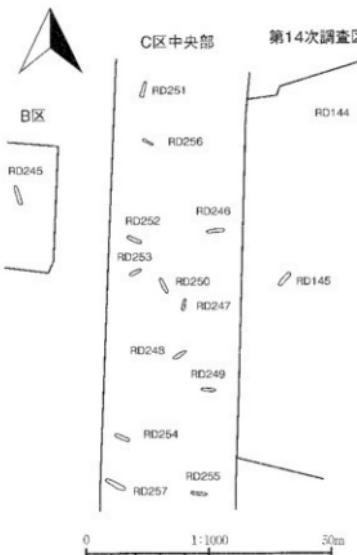
められない。重複もなく、それぞれの位置間隔からみても、あまり規則性のない同時期のものである可能性が高いと思われる。

第27回上は、盛南開発以前の地図に今次調査の溝跡と過年度調査済みの中世・古代の堀・溝跡を重ねたもの、下は明治5年に作成された飯岡新田地割絵図から作成した模式図である。11・12次調査で確認された中世の環濠敷をを中心に地形・地割と対比してみると、RG015環濠は東西の辺はやや外れているものの南北の辺は現況の水田区画とほぼ合致しており、概ね現代の区割りと軸方向は一致している。絵図では環濠の南西隅に沿うように水田区画がランク状になっている。環濠北東隅から東側に繋がるRG021溝跡とこれと関連性の認められたRG013・014も軸方向は一致するが、南側に屈曲した部分は田区の中央を走向しており、近世から現代の水田区画と必ずしも合致しない。このことからも水田として区画される以前の中世における区画溝である可能性が高いと思われる。

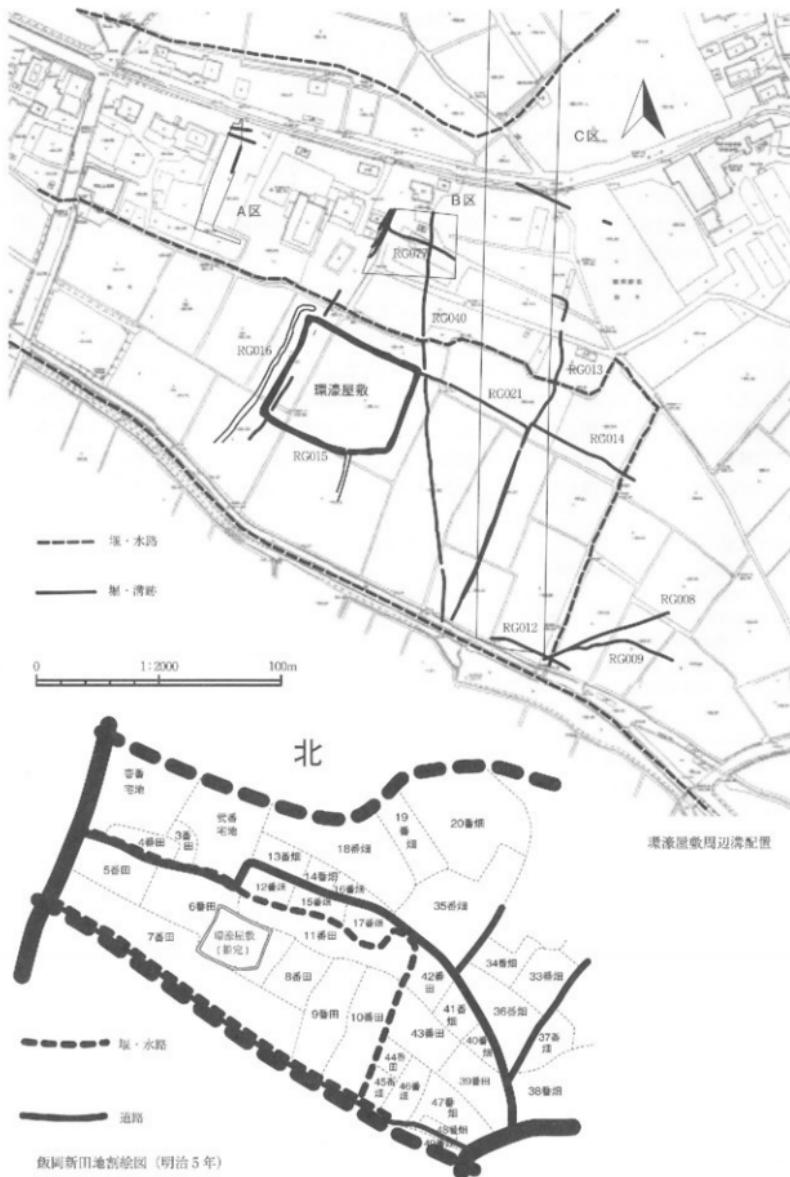
いずれにしても上下図を対比してみると分割された田畠もあるが、宅地位置をはじめ、遺跡南部の段丘とこの南側低地においては中世から近世・近代を経て現代まで土地使用に際して区割りはほとんど変動しておらず、近世には居住区が低地から段丘上に移ったとして、低地を水田として土地使用するにあたっても中世末の土地区画の様相を引き継いでいることが地割上読み取れる。ちなみに遺跡の東南部で検出された十和田a火山灰が出たしたRG040・008・009の平安時代の溝跡3条は、地形や区割りに捕らわれない中世以降の溝跡とは軸方向を異にする配置となっている。時期不明の多数の溝跡については概ね水田区画と軸が一致していることから、中世以降に帰属するものと推測される。

参考文献

- 2005 「矢盛遺跡第6次発掘調査報告書」
(岩文振興文化財調査報告書第488集)
- 2008 「飯岡才川遺跡第7・13次・船谷地遺跡第12次
・矢盛遺跡第9次発掘調査報告書」
(岩文振興文化財調査報告書第508集)
- 2008 「矢盛遺跡第10・11次・向中野館遺跡第9次
・台太郎遺跡第58次発掘調査報告書」
(岩文振興文化財調査報告書第516集)
- 2008 「平成19年度発掘調査報告書」
(岩文振興文化財調査報告書第524集)
- 2009 「矢盛遺跡第12・13次発掘調査報告書」
(岩文振興文化財調査報告書第531集)
- 2009 「矢盛遺跡第18・19次発掘調査報告書」
(岩文振興文化財調査報告書第555集)
- 2010 「平成21年度発掘調査報告書」
(岩文振興文化財調査報告書第571集)



第26図 詳しへ状構造分布図



第27図 矢盛遺跡南部の地形と地割

V 野古A遺跡第30次調査

1 遺跡の概要と調査歴

野古A遺跡は、岩手県盛岡市下鹿妻字北ほか（平成25年以降盛岡市向中野3丁目に地番変更予定）に所在する。国土地理院発行の2万5000分の1の地図「盛岡」N J - 54 - 13 - 14 - 2の図幅に含まれ、北緯39度40分54秒、東経141度7分50秒（世界測地系）付近、JR東北本線仙北町駅北西約1.5kmに位置し、遺跡の北側を流れる宇石川によって形成された、低位の沖積段丘上に立地している。この段丘面には宇石川から北上川に向けていくつかの氾濫源を持ちながら後背湿地が形成されており、遺跡内も、自然堤防状の微高地と旧河道（湿地）が入り組んでいる（第32・114図）。遺跡範囲は東西640m、南北400mを囲む（第29図）。本遺跡周辺は、南東に飯岡沢田遺跡、北東側に熊堂B遺跡、北西に稻荷遺跡が隣接し、古代の集落跡と古墳群が広がっており、とくに近世以降の農業用水路によって分断されている飯岡沢田遺跡とは、本来の地形的には一連の集落跡であると考えられる。

野古A遺跡はこれまでに29次にわたる調査が、当埋蔵文化財センター・盛岡市教育委員会によって行われてきている。平成22年度当初で、調査延べ面積は約48,000m²におよぶ。検出された堅穴住居跡は80棟に手が届くところで、周辺の遺跡同様に奈良・平安時代の集落跡である。また、上述の旧河道への落ち際付近では陥り穴状遺構も多くみつかっており、縄文時代においては狩猟場としての利用されていたようである。

2 調査の概要

（1）調査区の概要

本次調査の範囲は遺跡の南東部に位置し、11・12・15・19・21・23・24・29次調査区と隣接する。調査区は2箇所に分かれ、北側の狭い範囲を調査当時「飛び地」と称していたが、本報告書では、南側の広い部分を「A区」、北側を「B区」と呼称していいたい。調査区の標高は123～125m、A区内は北東～南東方向に旧河道が3本走り、これに挟まれた状態で微高地が南北帯状に広がる。旧河道は北西岸側の傾斜が強く落ち込んでいき、南東岸側は緩く立ち上がり微高地へと続く形状を持つ。

（2）グリッドの設定

グリッドの設定については、平面直角座標第X系（日本測地系）を用いた（第30図）。過年度までの調査同様、盛岡市教育委員会の方針に準じ、X = -35,000、Y = 25,000に調査座標原点を設けた。この原点を起点として

第4表 基準点・区画割付杭一覧

日本測地系		世界測地系		H	グリッド	杭名
X	Y	X	Y			
-35600.000	25790.000	-35292.306	25490.428	124.659m	13P1u	基1
-35550.000	25790.000	-35242.305	25490.429	125.278m	12P1u	基2
-35600.000	25840.000	-35292.305	25540.427	121.339m	13Q1u	補1
-35670.000	25770.000	-35362.307	25470.428	123.799m	14P1k	補2
-35690.000	25770.000	-35382.307	25470.428	123.890m	14P2k	補3-1
-35530.000	25790.000	-35222.305	25490.429	125.278m	11P1u	補3-2

遺跡全体を覆うように、一辺50mの大グリッドを設定し、さらにこれを一辺2mの小グリッドに区割した。大グリッドは原点

から南に算用数字の1・2…、東にアルファベット大文字A・B・C…として「1A」、「1B」と表した。小グリッドは、北から南へ算用数字の1~25、西から東へアルファベット小文字のa~yとして「1A1b」、「3B2c」と大グリッドと組み合わせて表現した。実際の区画設定には、表の基準点を2点・区画割付杭を4点打設し、これを用いた。

(3) 基本層序

本次調査の基本層序は以下の通りである。

I A 10YR4/4 暗褐色 砂多量。盛土。

I B 10YR3/4 暗褐色 表土。

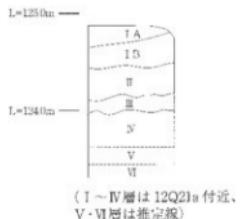
II 10YR2/1 黒色 古代の遺構検出面。旧河道内にのみ残存する。

III 10YR2/3 黒褐色～10YR3/3 暗褐色 減移層。

IV 10YR4/4 暗褐色 地山。地点によっては本層中に黒味のある砂の薄層を挟む場合がある。

V 砂層 A区でのみ確認

VI 砥層 A区北西～B区でのみ確認



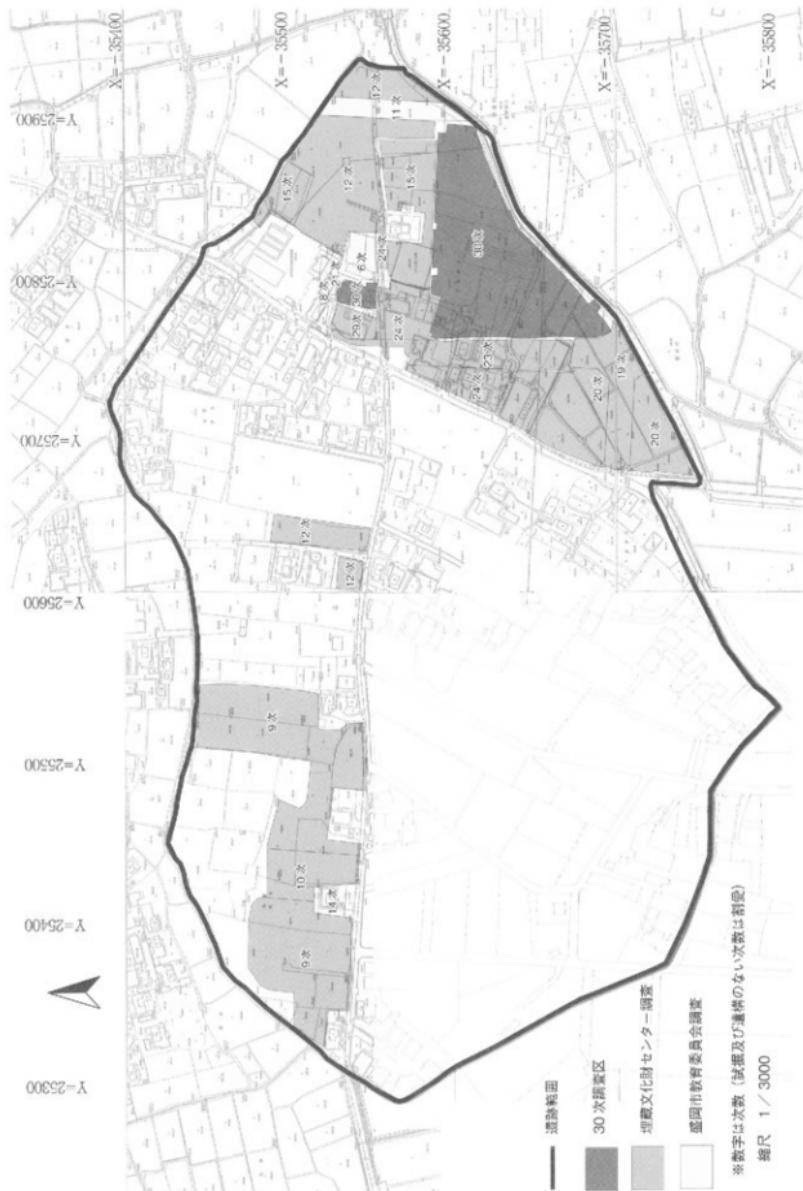
第28図 基本土層図

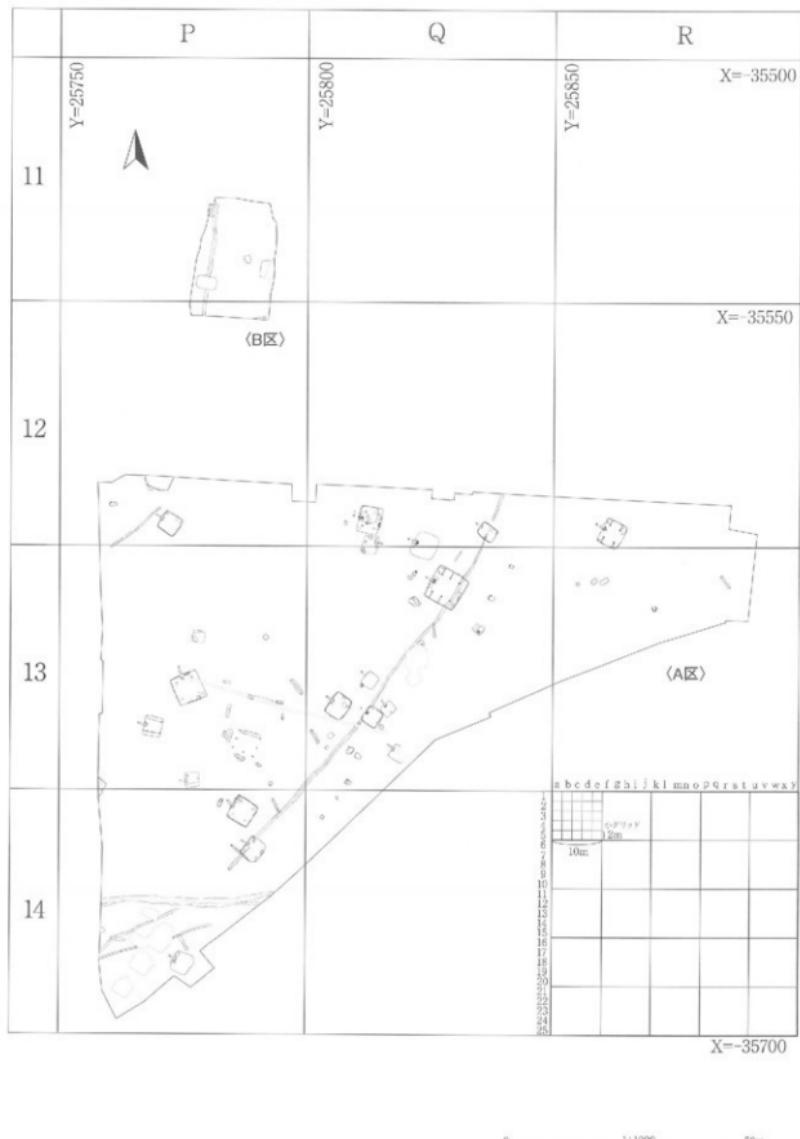
(4) 遺構名について

野外調査時は次盛跡27次調査同様、遺構ごとに略号を設け、仮名称をつけた。その後室内整理時に新たに掲載名称を付したが、命名については盛岡市教育委員会に準じ下記の略号を用いて行った。竪穴住居跡…RA、掘立柱建物跡…RB、柱穴列…RC、土坑…RD、住居状遺構…RE、炉・焼土跡…RF、堀・溝跡…RG、井戸跡…RI、その他遺構…RZ

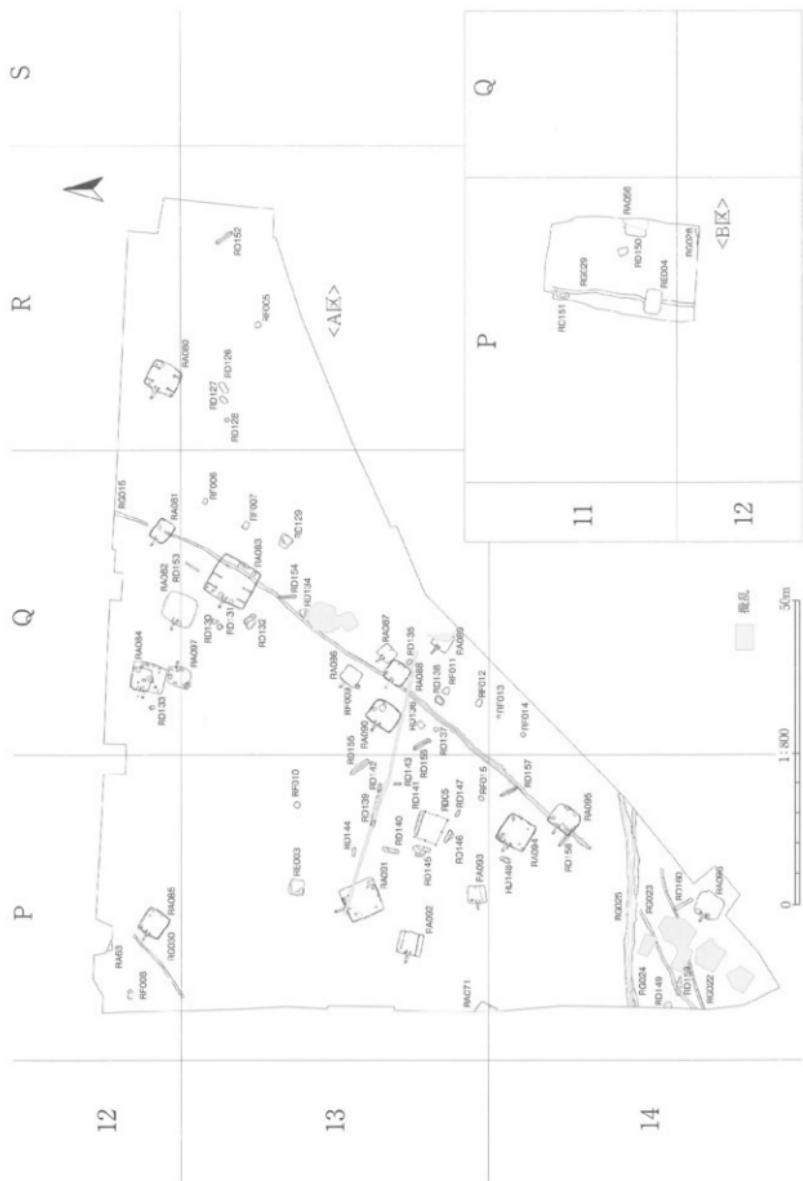
第5表 遺構名対応一覧

掲載名	仮名称	掲載名	仮名称	掲載名	仮名称	掲載名	仮名称	掲載名	仮名称
RA071	SI-17	RA063	SI-06	RD142	SX-04	RF003	SI-16	RG029	SD-07
RA080	SI-14	RA097	SI-05	RD143	SX-05	RF004	SK-01	RG030	SD-05
RA081	SI-08	RB005	SB-01	RD144	SX-09	RF005	SK-08	欠番	SI-15
RA082	SI-07	RD126	SK-26	RD145	SK-25	RF006	SN-01	欠番	SK-03
RA083	SI-09	RD127	SK-09	RD146	SK-21	RF007	SN-02	欠番	SK-04
RA084	SI-04	RD128	SK-10	RD147	SK-22	RF008	SK-02	欠番	SK-05
RA085	SI-02	RD129	SK-12	RD148	SK-24	RF009	SN-03	欠番	SK-07
RA086	SI-10	RD130	SK-13	RD149	SK-01	RF010	SN-04	欠番	SK-11
RA087	SI-12	RD131	SK-14	RD150	SK-29	RF011	SK-20	欠番	SK-27
RA088	SI-13	RD132	SK-15	RD151	SX-06	RF012	SN-07	欠番	SK-28
RA089	SN-08	RD133	SK-06	RD152	SKT-06	RF013	SN-06	欠番	SK-30
RA090	SI-11	RD134	SK-16	RD153	SKT-05	RF014	SN-05	欠番	SKT-03
RA091	SI-18	RD135	SN-10	RD154	SKT-08	RF015	SK-23	欠番	SKT-04
RA092	SI-19	RD136	SK-17	RD155	SKT-12	RG015	SD-06	欠番	SKT-07
RA093	SI-20	RD137	SK-18	RD156	SKT-09	RG022	SD-03	欠番	SKT-10
RA094	SI-21	RD138	SK-19	RD157	SKT-11	RG023	SD-02		
RA095	SI-03	RD139	SX-01	RD158	SKT-13	RG024	SD-04		
RA096	SI-01	RD140	SX-02	RD159	SKT-01	RG025	SD-01		
RA096	SI-22	RD141	SX-03	RD160	SKT-02	RG028	SD-08		

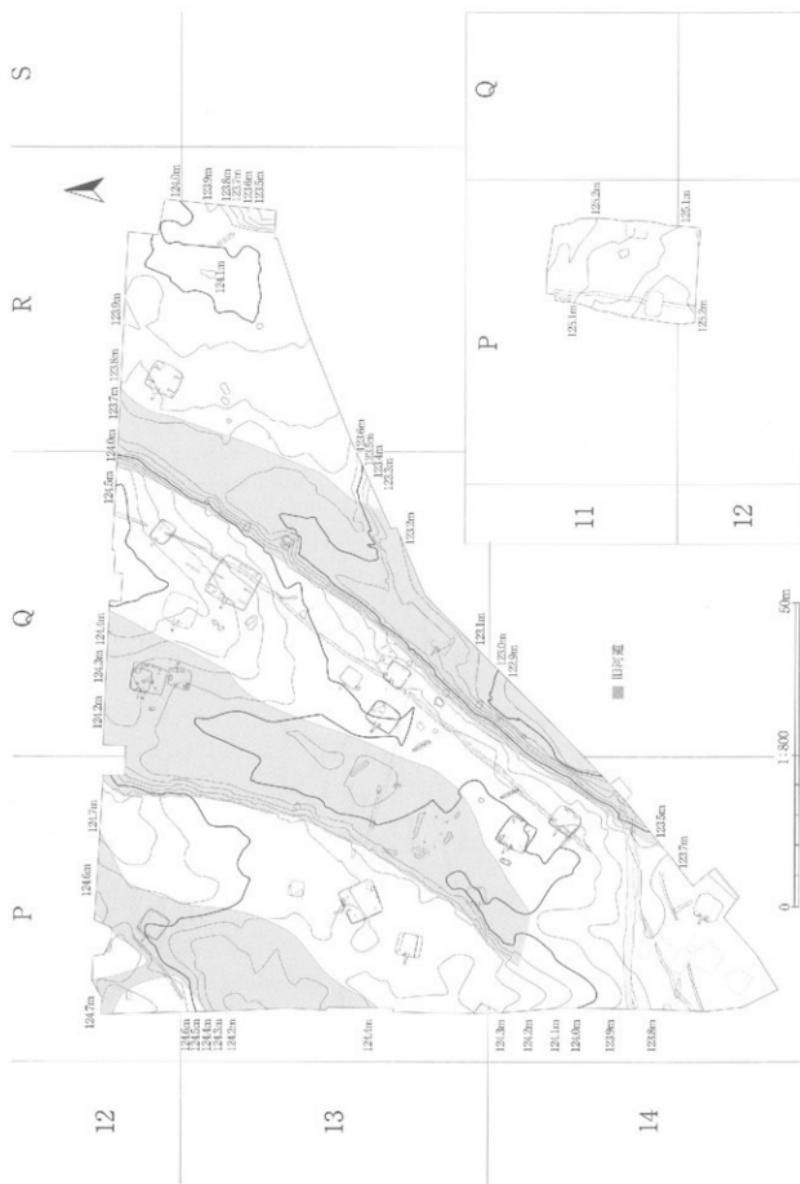




第30図 グリッド設定図



第31回 道構配置図



第32図 調査区地形図

3 検出された遺構と遺物

今回の調査区で検出した遺構は、堅穴住居跡21棟、掘立柱建物跡1棟、土坑26基、陥落穴状遺構9基、堅穴状遺構2棟、焼土遺構11基、溝跡8条である。遺物は土器・陶磁器・土製品・石器・金属製品等が出土している。

(1) 堅穴住居跡

R A071堅穴住居跡（第33図、写真図版12）

〈位置・検出状況〉 A区、南西部、13P25cグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で黒褐色土の広がりを確認した。遺構壁に平行するように畑耕作痕が何条も走っており、平面形をはっきり検出することはできなかった。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 検出された範囲は住居跡の東半、東壁2.98m、北壁2.07m、平面形は三角形である。西半は23次調査区で検出されている。南壁は搅乱により消失し、両調査区の間には調査できなかつた範囲がある。そのため本遺構の全形を把握することはできていないが、南北3.8m、東西3.5m以上の方形プランと推定される。長軸方向はN-53°-Eである。

〈埋土〉 畑の耕作痕によって埋土が分断されているが、底面～壁際に地山ブロックの多い層（3層）、上部には黒味の強い層（1層）とおおむねレンズ状に堆積し、自然に埋没したものと推定される。

〈壁・底面〉 検出面からの深さは30cm程度、壁はほぼ直立する。IV層まで掘り込み、これを均し床としており（4層）、搅乱を受けていない残存する床面は平坦である。壁溝は確認されていない。東壁のほぼ中央、カマドの対面に径45×40cm、深さ22cmの小穴が検出された（P1）。P1の埋土は、暗褐色土を主体とし焼土・ブロック・炭化物を混入する。

〈カマド〉 西壁に設けられ23次調査区内で検出・調査されている。

〈出土遺物〉 土師器214g（壺9g、壺204g）出土しているが、いずれも小片のため図化していない。

〈時期〉 過年度の調査成果もあわせて、出土遺物より奈良時代と判断される。

R A080堅穴住居跡（第34～36図、写真図版13～15）

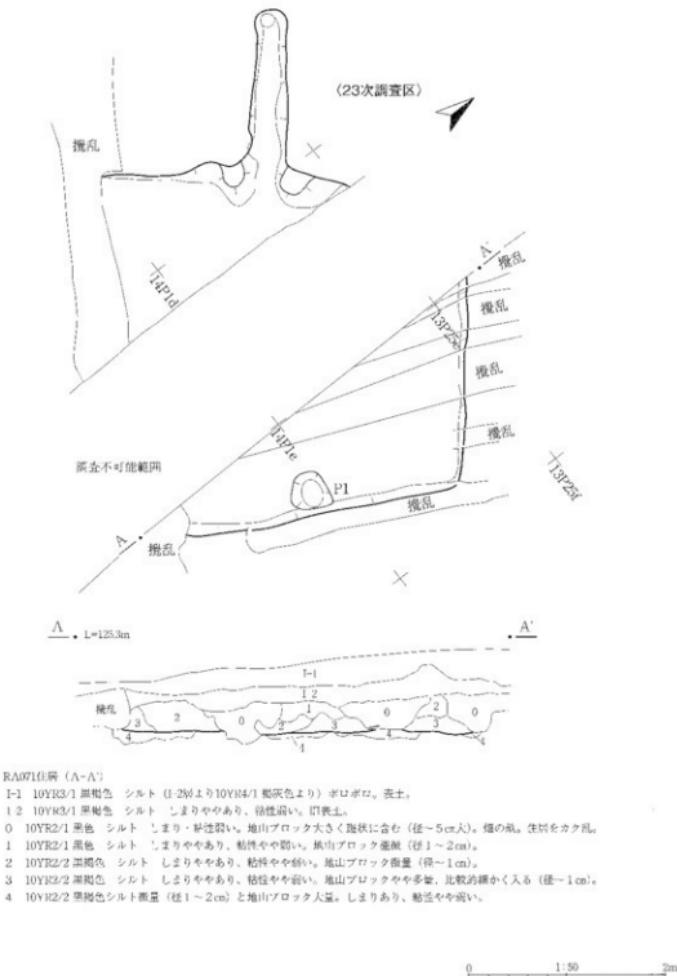
〈位置・検出状況〉 A区東部北側の東側旧河道の東岸、12R23～25e～gグリッドに位置する。本遺構周辺は基本層位の状況が良好でII層が20cm程度残っていたことからII層面での検出を行っているが、遺構覆土とII層黒褐色土の判別が難しく、実質的な確認はIII層上面での検出となった。ただし、過去の調査成果（主に断面観察による確認）から、本来の掘り込み面はII層面と推測される。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は東壁長約5.1m、南壁長約4.4m、西壁長約5.2m、北壁長約4.5mを測る隅丸略方形を呈し、床面積は約21.9m²である。主軸方位はN-61°-Wである。

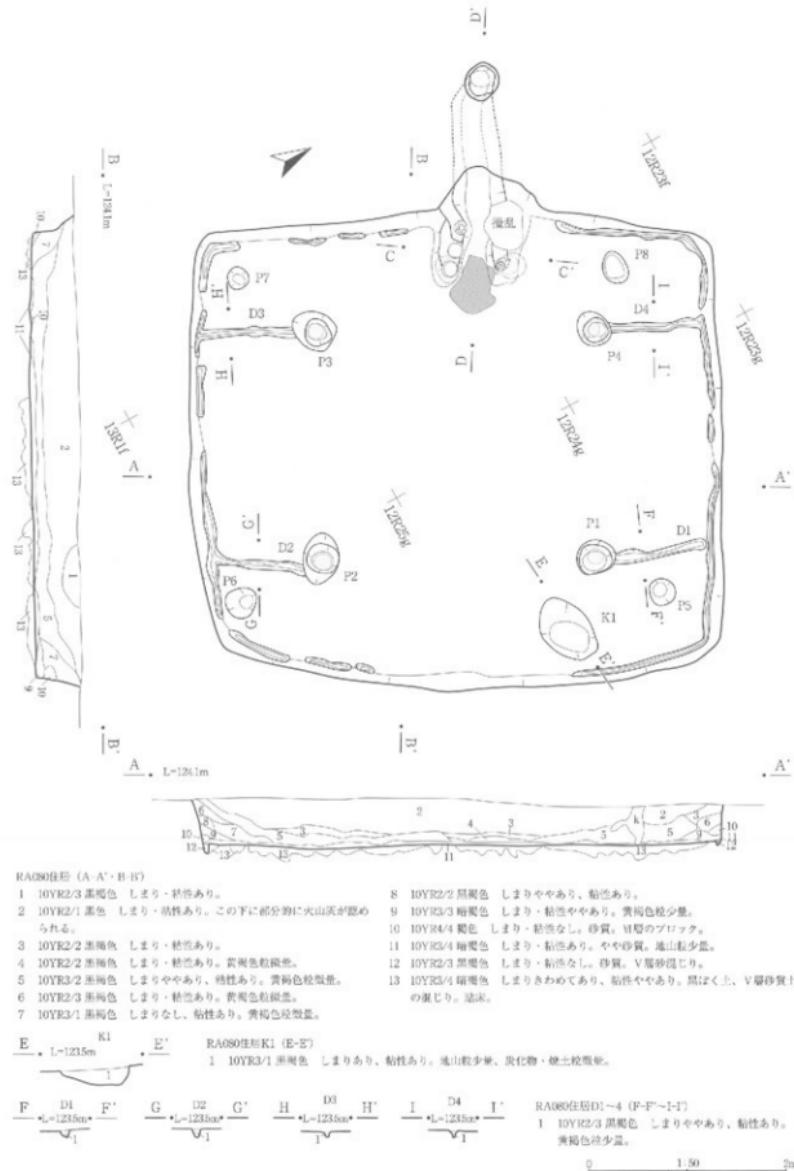
〈埋土〉 埋土は11層に細分される黒ボク上系の自然堆積である。カマド付近の壁際上位ではブロック状の火山灰を確認し、分析の結果十和田a降下火山灰の鑑定結果を得た。

〈壁・底面〉 壁はほぼ垂直に立ち上がり、上位では崩落により一部外反する部分もある。検出したIII層からの壁高は40～46cm前後を測る。床面は平坦で堅締、カマド部分を除き全体的に貼床が施されており、カマドのある西壁を除く3辺の壁際ではやや深い掘り方となっていた。



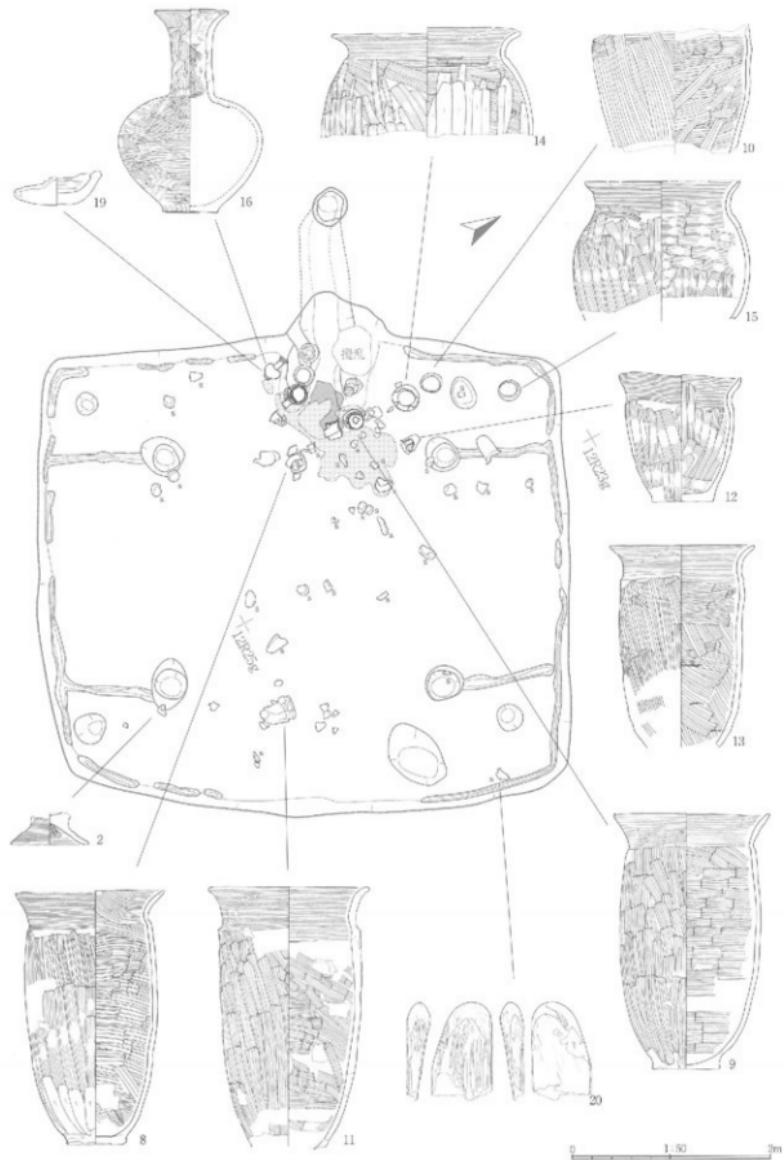
第33図 RA071堅穴住居跡

〈床面施設〉床面施設としては北東部の壁際にK1主坑1基と四隅に2個づつの計8個の柱穴を検出した。カマド部分と対極の壁際を除き一部途切れながらも幅7~10cm、深さ5cm以下の壁溝が巡っている。また壁溝と主柱穴を結ぶ長さ90~100cm、幅6~12cm、深さ8cm前後の間仕切り状のD1~4溝跡4条が確認された。

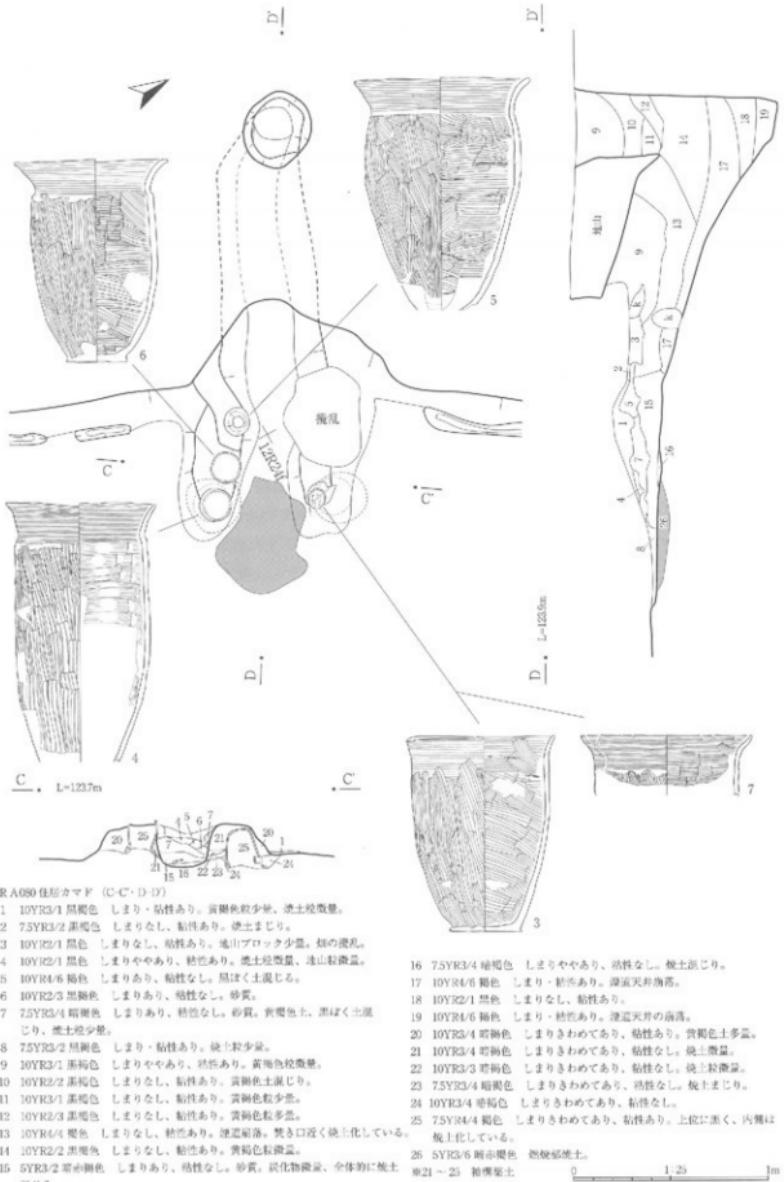


第34図 RA080堅穴住居跡 (1)

3 検出された遺構と遺物



第35図 RA 080堅穴住居跡 (2)



第36図 R A080竪穴住居跡 (3)

K 1 土坑の平面形・規模は、開口部では47×70cmの略楕円形を呈し、壁は丸みのある底面から東側はやや鋭角的に、ほかは緩やかに外反して立ち上がる。埋土は地山上や焼土・炭化物が混じる人為的な単層である。

柱穴は、配置と規模からP 1～4の4個が主柱穴、P 5～8の4個が副柱穴と考えられる。P 1～4の主柱穴にはそれぞれ南北方向の壁側に向う間仕切り状の溝跡が接続している。P 1～4の開口部径は27cm前後、深さは60cm前後を測り、いずれも径17cm前後の柱痕が確認された。P 5～8は開口部径23～32cmを測る略円形で、深さは5～8cmと浅い。

〈カマド〉 カマドは西壁の中央付近に付設されていたが、壁際部分、特に北側が畑作の植栽痕により破壊されていた。本体天井部は崩落しており、袖部は芯材として倒立状態で甕形土器が設置されており、5個体を確認した。配置的に植栽痕により破壊された部分にも1個体あった可能性が高く、片側3個体づつにして粘土を貼り付けた構造であったと思われる。燃焼部は床面よりも若干低く、底面は火熱により48×58cmほどの不整形で厚さ約6cmと強く、袖内面は比較的の弱く赤色変化していた。煙道は奥行き約1.6mの割り貫き式であったが、天井の崩落により径約50cmと広くなっていた。外側に向かい下り勾配となっている。煙出しピットは開口部径約33cm、深さは約1mを測り、煙道よりも若干深く掘り込まれていた。

〈出土遺物〉 遺物は、土師器の甕形土器片と壺形土器片約21kgと須恵器瓶破片1点が出土し、壺形土器片は500g以下と極めて少なく、甕型土器がほとんどを占める。掲載した土器は、カマド芯材と大半が床面から出土したもので、一部欠損したり、土圧等により潰れているが、原形を留めているものが多くいため出土量の約7割と多くなっている。およそ形状を把握できた個体は、カマド芯材の甕5個体(図番3～7)のうち4個体、カマド付近の床面で破碎状態で出土し、接合復元できた2個体(図番8・9)、北西部と東側床面で横倒しで出土し、ほぼ原形を留めていた3個体(図番11～13)、北西部に意図的に置かれたような球胴甕の上半部2個体(図番14・15)とカマド脇に供えられたように見受けられた完形の長頸瓶1点(図番16)などがある。このほか北東隅から砾石1点(図番20)が出土している。(1～20、第92～94図、写真図版72～74)

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

R A081竪穴住居跡（第37図、写真図版16・17）

〈位置・検出状況〉 A区北側中央部微高地上の12Q24sグリッドを中心に位置し、かなり削平されたⅣ層中で検出した。中央部分が南北にかけて盛岡市教委の確認調査により削平されていた。

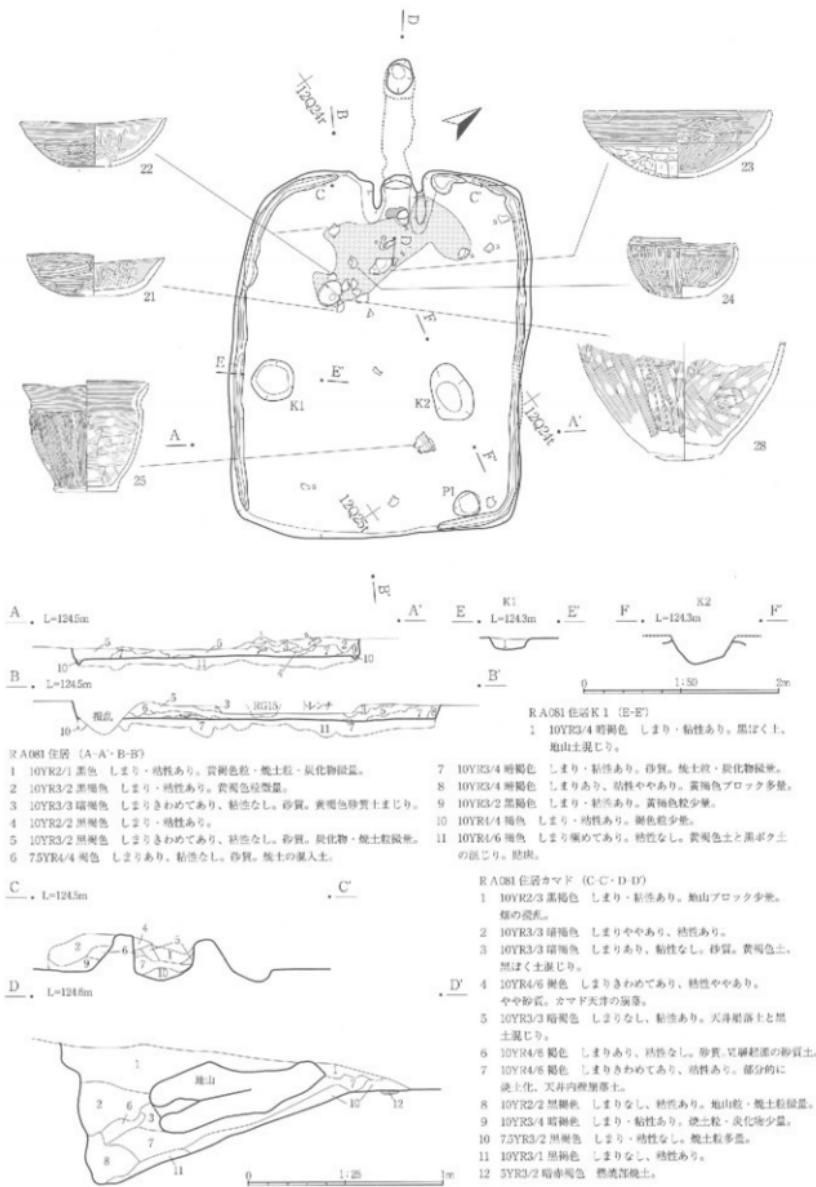
〈重複関係〉 RG015跡と重複し、本遺構が切られる。

〈平面形・規模〉 平面形は東西の壁長は約2.8m、南北の壁長は約3.6mを測る隅丸略長方形を呈し、床面積は約9.6m²である。主軸方位はN-51°-Wである。

〈埋土〉 埋土は10層に細分される黒ボク土系の自然堆積と思われるが、部分的に人為的と見受けられる褐色土の多く混じる部分やカマド周辺の埋土下位には土器や炭化物とともに廃棄された弱い焼土の広がりが認められた。

〈壁・底面〉 壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存する壁高は10～17cmを測り、床面はほぼ全体的に貼床が施され、平扣で堅密である。

〈床面施設〉 床面施設としては南北の壁際でK 1・2の土坑2基と北東隅付近で径約24cm、深さ約15cmの柱穴1個を検出した。東壁の南側を除き一部途切れながらも幅7～12cm、深さ4cm以下の壁溝が巡っている。



第37図 R A 081堅穴住居跡

K 1 土坑は南壁際の中央に位置し、平面形・規模は、開口部径約44cm、底部径約30cmの略円形を呈し、断面形は深さ約12cmの丸底風の鍋形を呈する。埋土は人為的な暗褐色土の單層である。

K 2 土坑は北側中央に位置し、当初不整なシミのように見えていたことから貼床の一部と思っていたものだが、貼床除去後に土坑と判断したものである。平面形・規模は、開口部で長軸約60cm、短軸約40cmの略椭円形を呈し、壁は丸みのある底面から明瞭な稜を持たずに外傾して立ち上がる。深さは約30cmを測る。埋土は暗褐色土と褐色土の混じった人為的堆積であった。

〈カマド〉 カマドは西壁の中央に付設されていた。本体天井部は崩落し、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められず、遺存していた部分は造り出しとなっていた。燃焼部底面は、火熱により11×23cmほどの略椭円形で厚さ1cm以下と弱く赤色変化していた。煙道は奥行き約1.3m、径約28cmの割り貫き式で、外側に向かいドリ勾配となっていたが、断面観察からは天井部は耕作によるものが崩落していた。掘出しビットの上位も耕作により破壊されており、確認した部分では開口部で25×33cm、深さは約68cmを測り、煙道よりも若干深く掘り込まれていた。

〈出土遺物〉 遺物は、土師器の壺形土器と壺形土器片約4.3kgが出土し、壺形土器が約7割を占める。掲載した土器は出土量の約6割にある。形状をおよそ把握できた個体としては、カマド周辺の床面及び下層に欠損品の発見と思われる状況で出土した土師器の壺形土器4点（図番21～24）とK 2 土坑の南側埋土下部に横位の潰れた状態で出土した壺形土器1点（図番25）がある。（21～29、第94・95図、写真図版74）

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

R A082堅穴住居跡（第38・39図、写真図版18・19）

〈位置・検出状況〉 A区北側中央部の中央旧河道路跡の東岸、12Q25Ⅰ・m、13Q1Ⅰ・mグリッドを中心に位置し、Ⅲ層及びⅣ層上面で検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は東壁長約4.9m、南壁長約4.6m、西壁長約5m、北壁長約4.3mを測る隅丸略方形を呈し、床面積は約213m²である。主軸方位はN-64°-Wである。

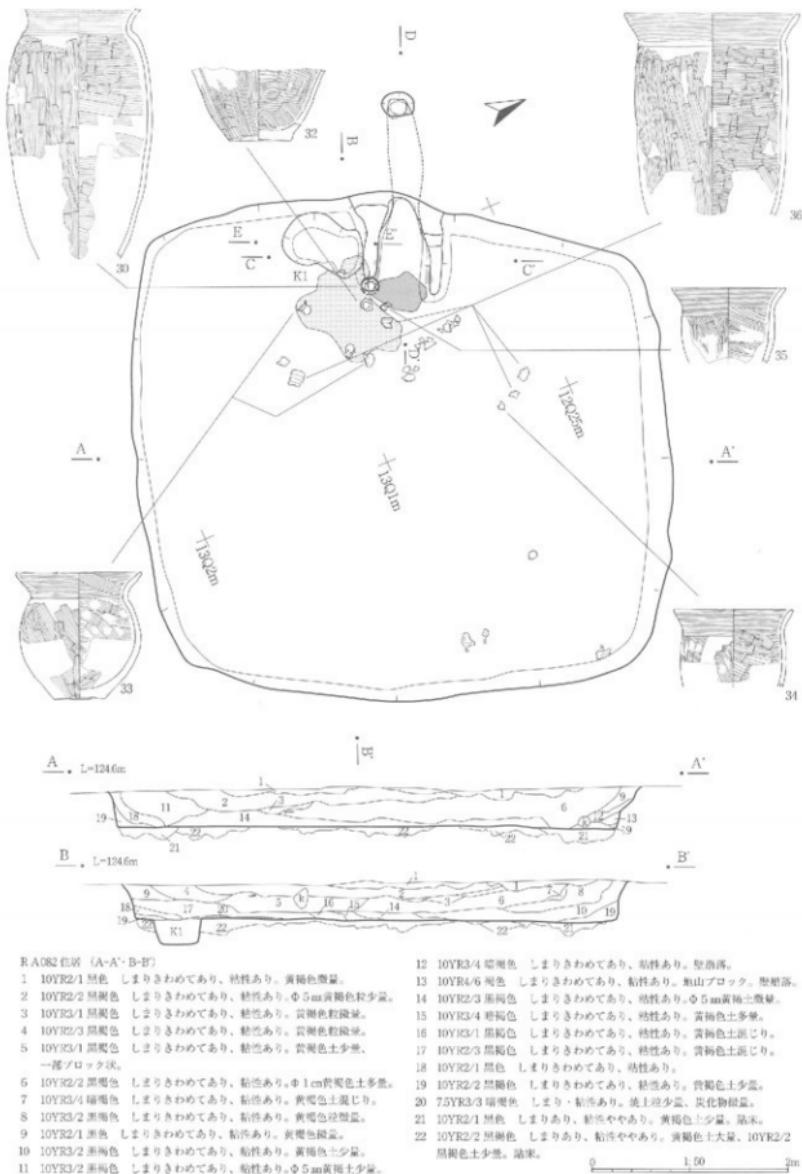
〈埋土〉 埋土は20層に細分される黒ボク土を主体とする自然堆積と思われる。カマド脇の床面にはカマド関連と思われる焼土の広がりが認められた。

〈壁・底面〉 壁はほぼ垂直に立ち上がるが、一部崩落により上位が外反する部分もある。遺存する壁高は37cm前後を測る。床面は平坦で堅緻、カマド部分を除き全体的に貼床が施されており、特にカマドのある西壁を除く3辺の壁際ではコの字状に深い掘り方となっていた。

〈床面施設〉 カマドの南脇に貯蔵穴と思われるK 1 土坑1基を検出した。

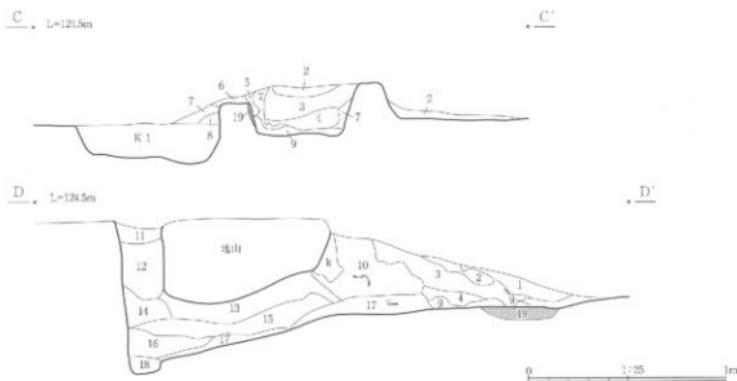
K 1 土坑の平面形・規模は、開口部は長軸約83cm、短軸46-56cm、底部では約67×33-38cmの略円形の連結しただらま形を呈し、壁はカマド袖部分が一部内湾気味となっているが、およそ外傾して立ち上がる。深さは約16cmを測る。埋土は上位のカマド崩落土を除き、焼土が多く混じる4層からなる人為的堆積である。

〈カマド〉 カマドは西壁の中央に付設されていた。本体天井部は崩落しており、袖部は壁側が部分的に造り出しとされ、南側の燃焼部横には芯材として底部を欠く壺形土器（図番30）1個が倒立で埋設されていた。燃焼部は床面よりも若干低く、底面は火熱により40×50cmほどの不整形で厚さ約6cmと強く、袖内面は比較的弱く赤色変化していた。煙道は奥行き約1.3m、径約30cmの割り貫き式で、外側に向かいドリ勾配となっている。掘出しビットは開口部で24×32cm、深さは約78cmを測り、煙道よりも



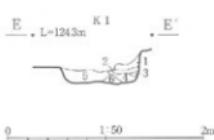
第38図 R A082堅穴住居跡 (1)

3 検出された遺構と遺物



RA082 住居カマド (C-C'・D-D')

- 1 IOYR2/1 黒色 しまりややあり、粘性あり。黄褐色土微量。
- 2 IOYR2/4 喀褐色 しまりややあり、粘性あり。黄褐色土少量、流土粒微量。
- 3 7SYR3/3 喀褐色 しまり・粘性あり。焼上部じりの黄褐色土。
- 4 IOYR4/6 黄色 しまり・粘性あり。天井崩落土。
- 5 7SYR4/4 黄色 天井崩落の跡の底土。
- 6 IOYR2/2 黑褐色 しまり・粘性あり。黄褐色土多量。
- 7 10YR2/1 黑色 しまりややあり、粘性あり。燒土粒微量。
- 8 7SYR3/4 喀褐色 しまり・粘性あり。燒土粒少量、黄褐色土少量。
- 9 10YR2/2 黑褐色 しまり・粘性あり。黄褐色土少量、上位に
黄褐色ブロック。
- 10 10YR4/6 棕色 しまり・粘性あり。カマド天井崩落土。
- 11 10YR3/3 喀褐色 しまりややあり。
- 12 10YR3/4 喀褐色 しまりややあり、粘性あり。
- 13 10YR2/1 黑色 しまりなし、粘性あり。黒ほく土、黄褐色土の混じり。
- 14 10YR3/1 黑褐色 しまりなし、粘性あり。黒ほく土、黄褐色土の混じり。
- 15 10YR4/6 棕色 しまりあり、粘性ややあり。煙道天井崩落土。
- 16 10YR2/2 黑褐色 しまりなし、粘性あり。燒土粒微量。
- 17 7SYR3/2 黑褐色 しまり・粘性あり。燒土粒多量。
- 18 10YR3/2 黑褐色 しまりなし、粘性あり。
- 19 5YR4/6 赤褐色 燃焼部焼土。



- R A082 住居 K1 (E-E')
- 1 IOYR4/6 黄色 しまりきわめてあり、粘性あり。燒土粒微量。カマド構造土崩落。
 - 2 IOYR4/4 黄色 しまり・粘性あり。
 - 3 10YR3/4 喀褐色 しまり・粘性あり。燒土泥じり。
 - 4 7SYR3/4 喀褐色 しまりなし、粘性あり。燒土粒多量。
 - 5 10YR3/4 喀褐色 しまり・粘性あり。燒土ブロック少量。
 - 6 10YR4/4 黄色 しまり・粘性あり。

第39図 R A082堅穴住居跡 (2)

若干深く掘り込まれていた。

〈出土遺物〉 遺物は、カマド芯材以外では、主にカマド周辺の埋土からの出土で、土師器の変形土器片と壺形土器片約5.5kgが出土し、ほとんどが壺型上器である。掲載した土器は出土量の約5割にあたる。形状をおよそ把握できた個体としては、カマド芯材の底部を欠く変形土器1点(図番30)と復元個体では、埋土上位出土の破片が接合した変形土器2点(図番33・36)がある。(30~38、第95・96図、写真図版75)

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

R A083堅穴住居跡 (第40~43図、写真図版20~22)

〈位置・検出状況〉 A区北側中央部微高地上の13Q 3~7 m ~ q グリッドに位置し、削平されたIV層中

で検出した。

〈重複関係〉 RG015溝跡と重複し、本遺構が切られる。

〈平面形・規模〉 平面形は東壁長約6.9m、南壁長約6.7m、西壁長約7.3m、北壁長約7mを測る隅丸略方形を呈し、床面積は約46.1m²である。主軸方位はN-58°-Wである。

〈埋土〉 埋土は8層に細分される黒ボク土系の自然堆積である。1層には粒子状及びブロック状の火山灰が視認され、中央部下位ほどブロック状のまとまりが多く認められた。分析の結果ト和田a火山灰の鑑定結果を得た。

〈壁・底面〉 壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺存する壁高は12~32cmを測り、東側旧河道よりに低くなっている。床面は平坦で堅緻、カマド部分を除き全体的に貼床が施されていた。

〈床面施設〉 床面施設としてはカマドの両脇と東壁際の南側にK 1~4 土坑4基と柱穴状ピット11個を検出した。カマド部分の壁際を除き一部途切れながらも幅10cm前後、深さ6cm以下の中溝が巡っている。また壁溝と主・副柱穴を結ぶ長さ134~145cm、幅10~16cm、深さ5~9cmの間仕切り状のD 1~4溝跡4条とカマドの対面の東壁から内側に長さ約80cm、幅約15cm、深さ約10cmのD 5溝跡も確認された。

K 1 土坑はカマドの南側に位置する貯蔵穴と思われるもので、平面形・規模は、開口部径約76cmの略円形を呈し、断面形は深さ約31cmの丸底鍋形を呈する。埋土は4層に細分され、上位は黒ボク土、中位以下は褐色土主体の地山土・焼土・炭化物・土器破片の混じる人為的堆積である。

K 2 土坑は南東隅付近の壁際に位置し、平面形・規模は、開口部径約68cmの略円形を呈し、断面形は深さ約14cmの浅い皿形を呈する。埋土は焼土・炭化物の混じる人為的単層である。

K 3 土坑は東壁際の中央に位置し、平面形・規模は、開口部で長軸約151cm、短軸約37cm、底部では長軸約110cm、短軸約20cmの溝状を呈し、底面は中央部が深く丸みを持ち、壁は明瞭な稜を持たずに入り上がる。深さは20~30cmを測る。埋土は4層に細分され、中位以下は褐色土主体の地山土・焼土の混じる人為的堆積である。D 5溝跡とともに出入り口に隣接する可能性を考えられる。

K 4 土坑はカマド北脇で袖部と一部重複して位置する。床面ではプランを確認できなかったものだが、貼床除去後に形態から土坑と判断したものである。位置と覆土の状況からみて、カマド構築時に未使用で埋め戻されたか、住居よりも古い土坑の可能性も考えられる。一応ここでは本遺構に伴うものとして扱う。平面形・規模は、開口部径約82cmの略円形を呈し、断面形は深さ約50cmの丸底鍋形を呈する。埋土は褐色土と黒ボク土の混じる人為的堆積である。

柱穴は、配置と規模からP 1~4 の4個が主柱穴、P 5~6 の2個が副柱穴と思われる。残りのP 7~11の5個は北西隅にまとまる。P 1~6 の柱穴のうち中央より西側のP 1~4 の4個はそれぞれ南北方向の壁間に向う間仕切り状の溝跡が接続している。東側のP 2~3 の2個は横断するRG015溝跡に切られているため不明だが、おそらく同様に溝跡があったと思われる。主・副柱穴の開口部径は25~40cm前後を測り、西側2個の主柱穴が遺存状態として良いことから大きい。深さは床面から見た場合には主柱穴4個は60cmを超え、副柱穴は35cmと50cmとやや浅くなっている。いずれも径18cm前後の柱痕が確認された。P 7~11は開口部径15~33cmを測る略円形で、深さは10cm前後と浅く、5個の位置する北西隅は床面が緩やかに5cmほど高くなっていた。

〈カマド〉 カマドは西壁の中央に付設されていた。本体天井部は崩落しており、袖部は壁際が一部造り出しつされ、燃焼部両側には芯材として倒立状態で3個体の壺形土器が設置されており、これに粘土を貼り付けた構造であったと思われる。燃焼部底面は火熱により47×70cmほどの不整形で厚さ約5cmと強く、残っていた袖部分の内面は弱く赤色変化していた。煙道は奥行き約1.2m、幅26~30cmの割り

貫き式で、一部天井の崩落により広くなっていた。外側に向かいドリ勾配となっている。撲出しビットは開口部径約30cm、深さは約72cmを測り、檻道よりも若干深く掘り込まれていた。

〈出土遺物〉 遺物は、土師器の壺形土器片と壺形土器片約24kgと須恵器瓶破片1点が出土し、壺形土器片は1kg未満と少なく、壺形土器がほとんどを占める。出土状況としては、袖芯材として原位置を留める壺形土器3個体も含め、原形を留めている個体は無く、西側から北側の壁沿いの床面から埋土中に都度度壊れた土器が発見されていたようである。およそ形状を把握できた個体は、カマド芯材の壺形土器2個体（図番45・46）、K 1周辺の埋土下部出土の破片から壺形土器2個体（図番55・56）とP 4付近の埋土中出土で復元できた壺形土器1個体（図番52）などであり、掲載した土器は出土量の約4割とあまり多くはない。このほか、火山灰の含まれる1層中からロクロ成形の墨書き土器1点（図番67）と南西隅の埋土下位から切子玉1点（図番71）、P 5・6副柱穴の近くの埋土下位から砥石と台石各1点（図番69・70）が出土している。（39～71、第96～99図、写真図版75～78）

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

R A084 A・B 竪穴住居跡（第44～46図、写真図版23～25）

〈位置・検出状況〉 A区北側中央部の中央旧河道内、12Q22～21 f～hグリッドに位置する。本遺構は旧河道内ということもあって周辺は基本層位の状況が比較的良好でⅡ層が15cm程度残っていたことからⅡ層面での検出を行っているが、遺構覆土とⅡ層黒褐色土の判別が難しく、実質的な確認はⅢ層上面での検出となった。RA080住居跡同様、本来の遺構掘り込み面はⅡ層面と推測される。

また、精査過程において並列してカマド煙道を確認し、造り替えと判断して作業を進めたが、貼床掘削の段階で小型の住居からの拡張建て替えであることが判明したもので、拡張した新しい住居をA、古い住居をBとして扱うこととした。

〈重複関係〉 直接的な重複はないものの、位置的にRA097竪穴住居跡と同時存在はあり得ないことから、新旧関係にあると思われ、出土遺物から本遺構が古い。

R A084 A 竪穴住居跡

〈平面形・規模〉 平面形は東壁長約5.6m、南壁長約4.2m、西壁長約5.3m、北壁長約4.4mを測る隅丸略方形を呈し、床面積は約23m²である。主軸方位はN-74°-Wである。

〈埋土〉 埋土は6層に細分される黒ボク土系の自然堆積である。

〈壁・底面〉 壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出したⅢ層からの壁高は23～33cm前後を測る。床面は全体的に貼床が施されており、平坦で堅密である。

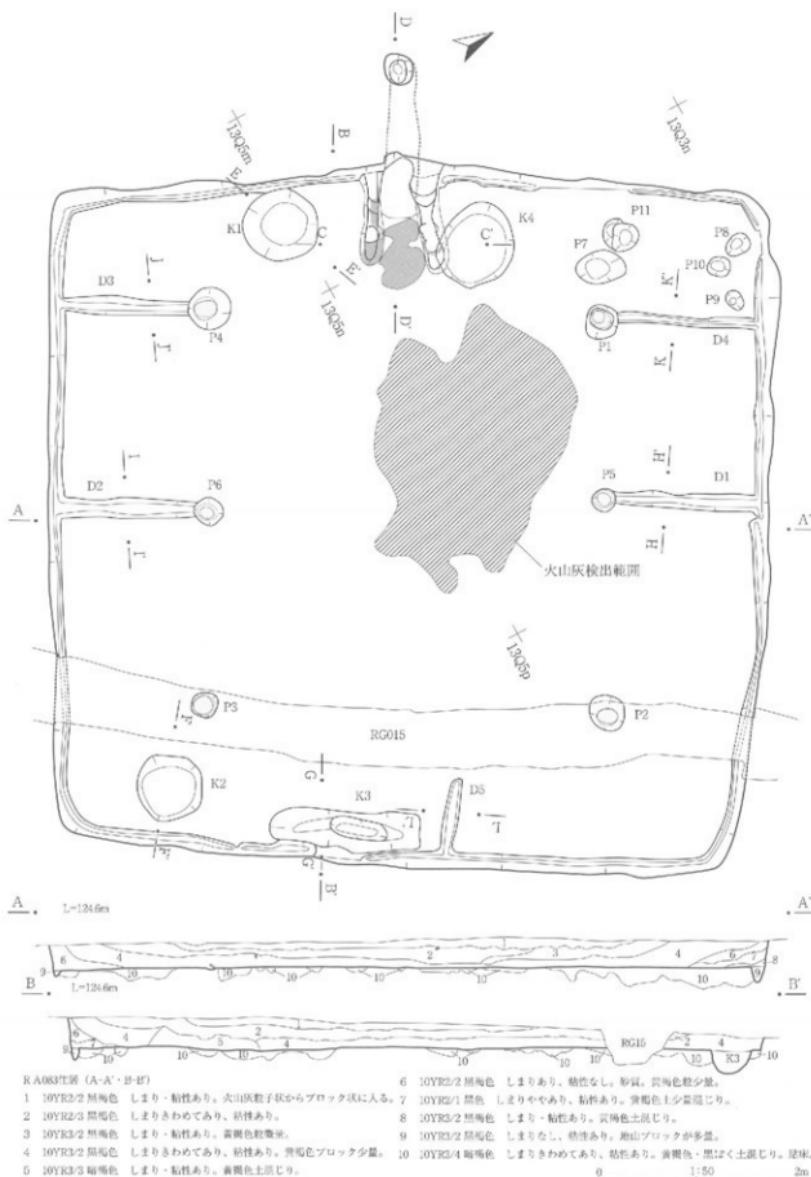
〈床面施設〉 床面施設としては中央カマドよりと東壁際にK 1～6の土坑6基と柱穴8個を検出した。

K 1土坑は中央カマドより位置し、平面形・規模は、開口部径約60cmの略円形を呈し、断面形は深さ約19cmの丸底鍋形を呈する。埋土は焼土や炭化物混じりの人为的な单層である。

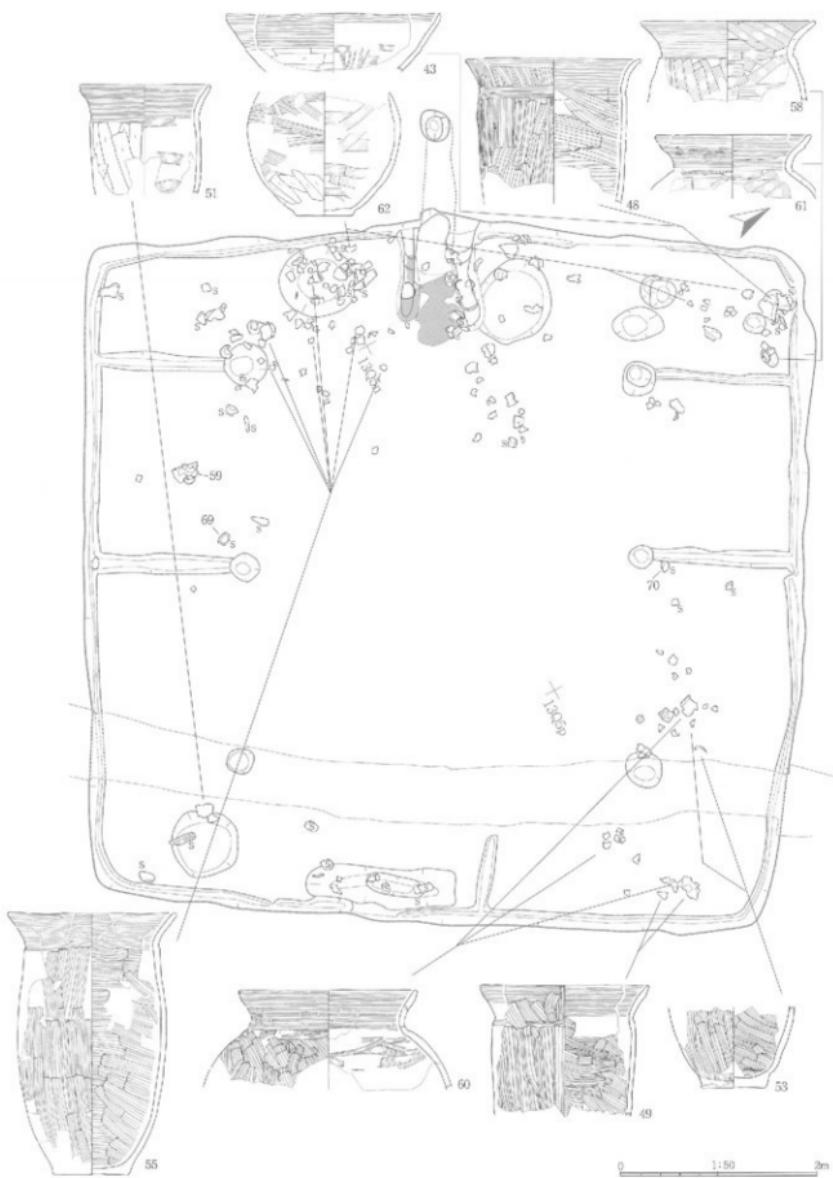
K 2土坑は北東部に位置し、平面形・規模は、開口部径約51cmの略円形を呈し、断面形は深さ約22cmの平底鍋形を呈する。埋土は黒ボク土系2層からなる自然堆積である。

K 3土坑は東壁際中央に位置し、平面形・規模は、開口部径約45cmの略円形を呈し、断面形は深さ約32cmの寸胴風鍋形を呈する。埋土は黒ボク土系2層からなる自然堆積である。

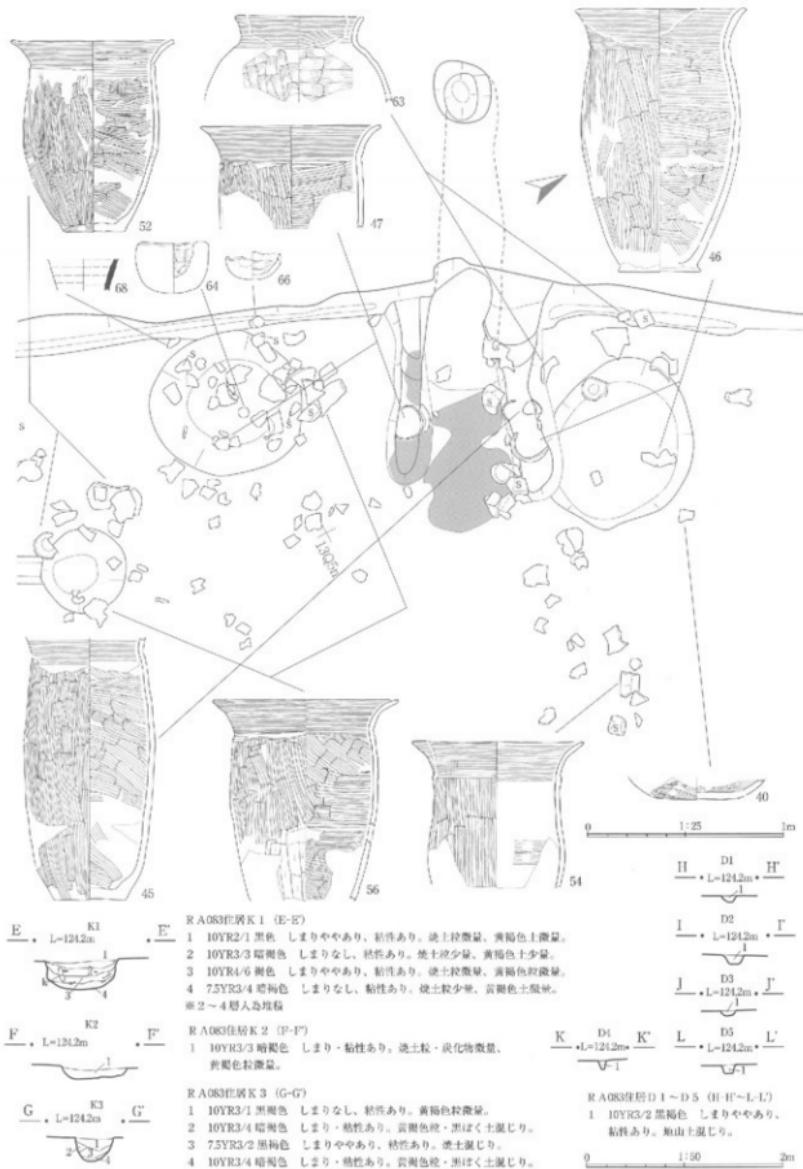
K 4土坑はK 3土坑の精査中に確認したもので、当初は貼床のシミと考えていたものである。平面形・規模は、開口部径約40cmの略円形を呈し、断面形は深さ約14cmの平底鍋形を呈する。埋土は黒ボク土に地山土が混じる人為的堆積と思われる。



第40図 R A083堅穴住居跡 (1)

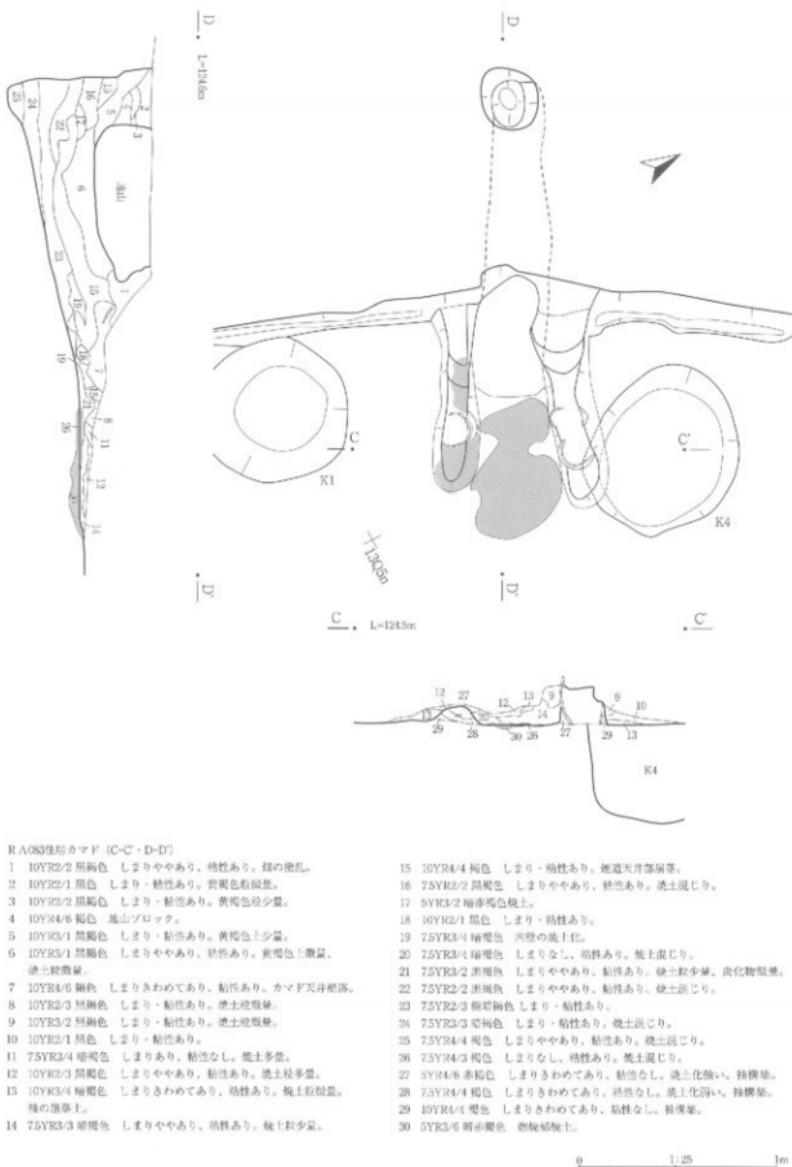


第41図 RA 083竪穴住居跡 (2)



第42図 R A083堅穴住居跡 (3)

3 検出された遺構と遺物



第43図 R A 083壁穴住居跡 (4)

K 5 土坑は東壁際中央に位置し、平面形・規模は、開口部で長軸約58cm、短軸30~40cmの不整形を呈し、壁は丸みのある底面から明瞭な棱を持たずに外傾して立ち上がる。深さは約13cmを測る。埋土は自然流入と思われる黒ボク土の単層である。

K 6 上坑南東部に位置し、平面形・規模は、開口部径約32cmの略円形を呈し、断面形は深さ約15cmの丸底鍋形を呈する。埋土は上位の黒ボク土と下位の廃棄焼土の2層に分層される。

柱穴は、配置と規模からP 1~4の4個が主柱穴と考えられ、いずれも開口部径は約32cm、カマドよりの西側のP 1・4は深さ約1m、東側のP 2・3は深さ約80cmを測る。P 1・4では径約20cmの柱痕も確認された。P 5は開口部32×46cm、底部19×30cm、深さ約20cmの楕円形で、抜き取り痕と思われる。埋土下部には焼土が廃棄されていた。P 6は開口部径25cm前後、深さ約11cmの略円形、P 7は径約25cm、深さ約40cmの略円形を呈する。P 8は開口部径約17cm、深さ約4cmの略円形で、位置的にカマド芯材の抜き取り穴と考えられる。

〈カマド〉カマドは西壁の中央に付設されていた。本体は潰れており、袖部は壁際で一部造り出し部分が残っていた。上記に示したとおり、芯材として土器を埋置したと思われる小ピットが1個検出されている。燃焼部底面は火熱により50×58cmほどの不整形で厚さ約5cmほどと強く赤色変化していた。煙道は奥行き約1.2m、径約33cmの割り貫き式で、外側に向かい下り勾配となっている。煙出しひつは径約32cm、深さは約70cmを測り、煙道よりも若干深く掘り込まれていた。

〈出土遺物〉遺物は、上部器の壺形土器片と壺形土器片約12.5kgが出土し、壺形土器が約9割を占める。いずれも破片状態で壺形土器は埋土上位からの出土が多い。埋土下位から底面付近では東西向壁際に破片が点在していた。掲載した土器は出土量の約4割にあたる。形状をおよそ把握できた個体としては、カマド脇の底面で破片が比較的まとまって出土した底部を欠く壺形土器1点(図番78)と東壁際底面で廃棄と思われる半完形の土器の壺形土器1点(図番74)、西壁側に点在した破片が接合した壺形土器1点(図番75)、K 3 埋土から出土した壺形土器1点(図番72)などがある。埋土中からは刻書き器片1点(図番73)も出土している。このほかK 6 検出面から砥石1点(図番98)、埋土上位と床面から紡錘車各1点(図番86~87)、東壁際の埋土下位から勾玉1点(図番97)と近接するK 5 検出面と周辺の床面から土玉9点(図番88~96)が出土している。(72~98、第99~101図、写真図版78・79)

R A 084 B 穴住居跡

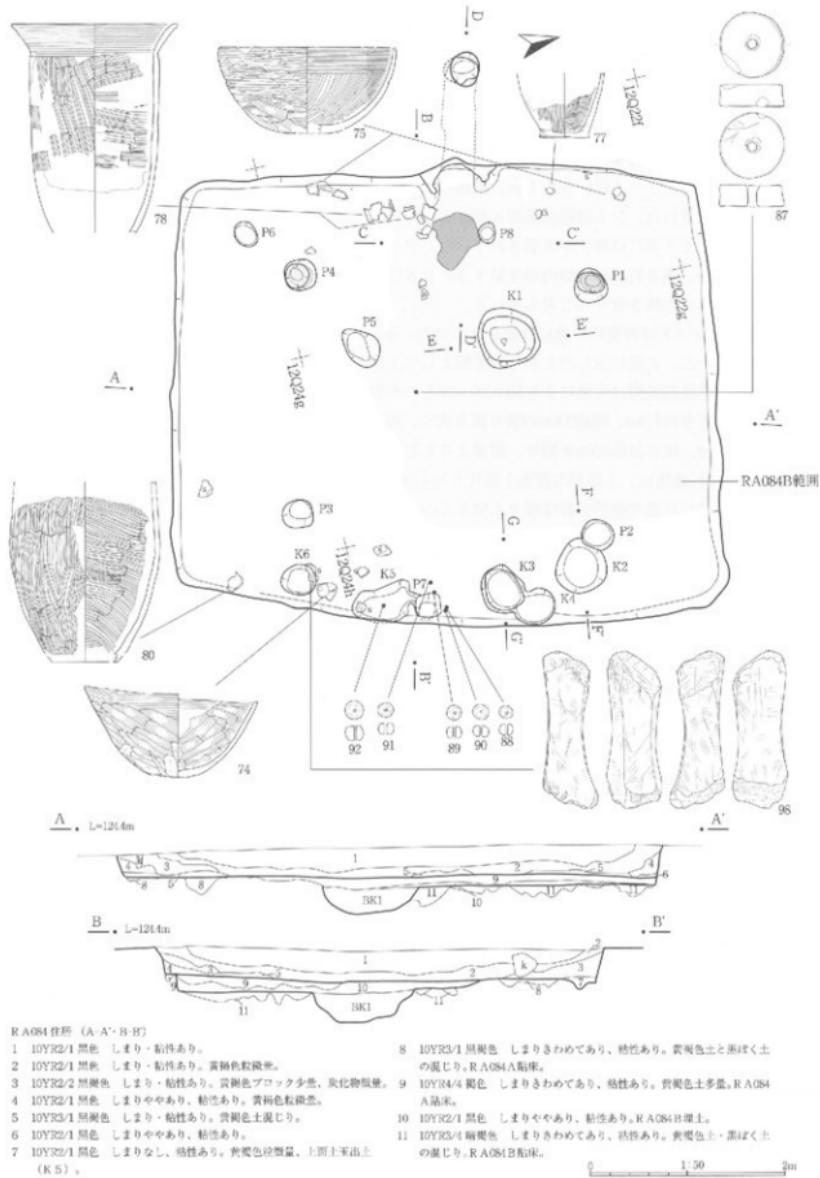
〈平面形・規模〉平面形は東西の壁長は約3.1m、南北の壁長は約3.3mを測る隅丸略方形を呈し、床面積は約9.8m²である。主軸方位はN-78°Wである。

〈埋土〉埋土はA住居貼床土と底面に薄く堆積した黒ボク土の2層に分層される。

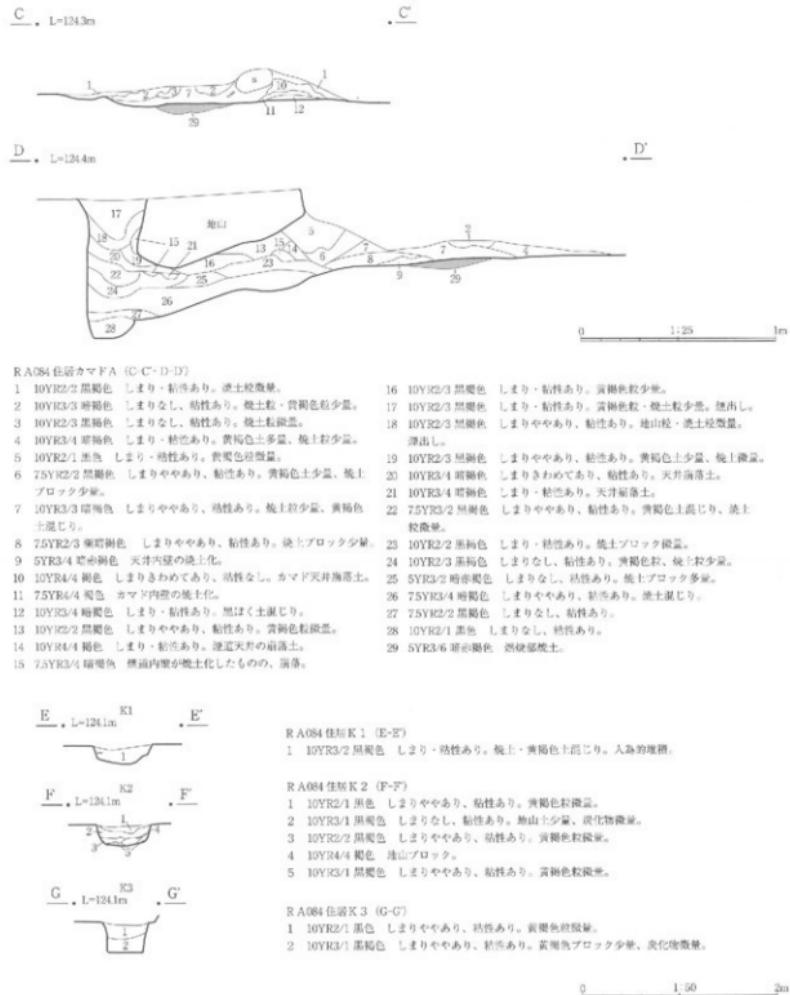
〈壁・底面〉壁は、A住居の壁に続く北側から西側にかけてはほぼ直立に立ち上がり、残る2辺はやや外傾して立ち上がる。残存する壁高は8~16cm前後を測り、北西隅から内側に向かい低くなる。床面は全体的に貼床が施されており、平坦で堅緻である。

〈床面施設〉床面施設としてはB K 1・2の土坑2基を検出した。いずれもA住居の貼床掘削に伴って検出したものである。

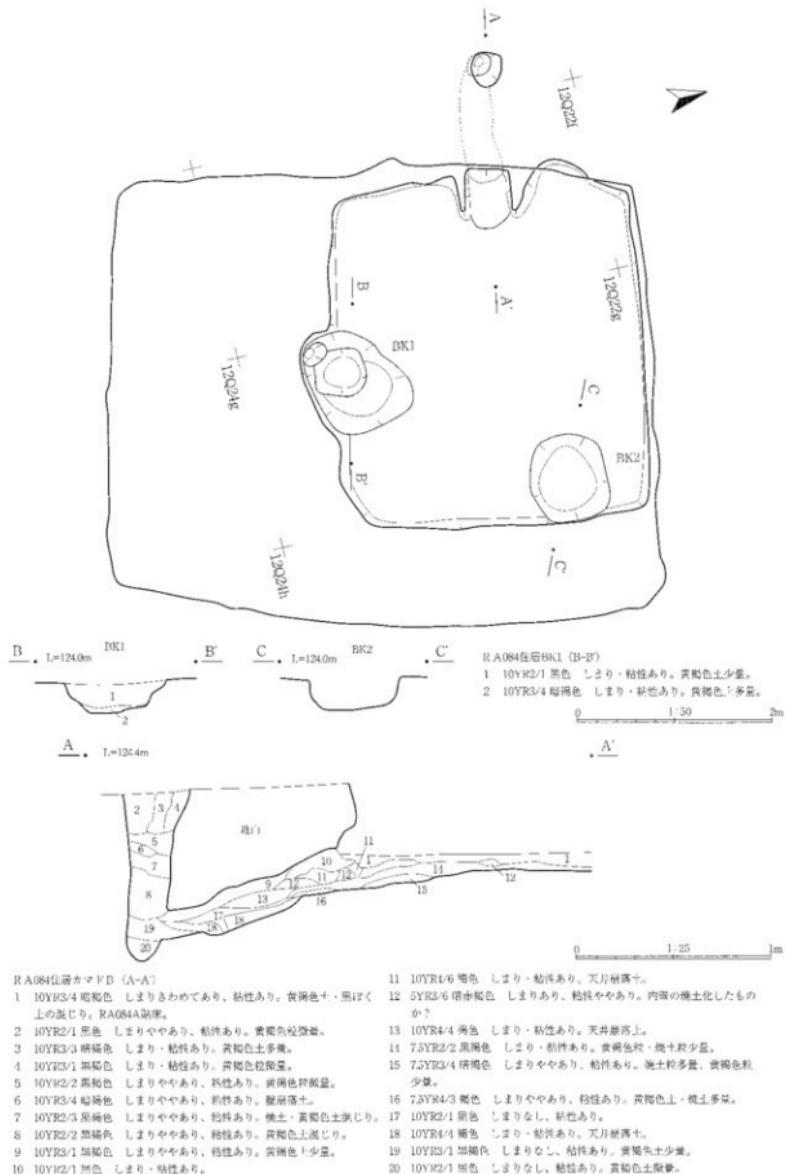
B K 1 土坑は南壁の中央から張り出しており、開口部で長軸約110cm、短軸約80cmの略楕円形を呈する。底面は僅かに段差があり、中央部が深く丸みを持ち、東側は幾分平らになっている。壁は、丸みのある底面から明瞭な棱を持たずに外傾して立ち上がる。深さは約28cmを測る。埋土は2層に分層されるが、基本的には黒ボク土に下位ほど多く褐色土が混じる単層である。南側張り出す壁際には開口部で18×27cm、深さ約10cmの柱穴状のピットがある。



第44図 RA084竪穴住居跡 (1)



第45図 R A084竪穴住居跡(2)



第46図 R A084竪穴住居跡 (3)

B K 2土坑は北東部の貼床掘削後に、形態から土坑と判断したもので、平面形・規模は、開口部径約78cmの略円形を呈し、断面形は深さ約33cmの半底鍋形を呈する。埋土はA住居の貼床土に類するものであった。

〈カマド〉 カマドは西壁の中央に付設されていた。本体燃焼部は建て替えにより消失しており、袖部は壁際で造り出しの痕跡が良く残っていた。煙道は奥行き約1.3m、径約33cmの割り貫き式で、外側に向かい下り勾配となっている。煙出しビットは径約31cm、深さは約84cmを測り、煙道よりも深く掘り込まれていた。

〈出土遺物〉 遺物は、カマド周辺と煙道から底部を欠く土師器の壺形土器ほぼ1個体分（図版76）の破片が出土した。

〈時期〉 A・B住居とも出土遺物から奈良時代と判断される。

R A085堅穴住居跡（第47・48図、写真図版26・27）

〈位置・検出状況〉 A区北西部、12P23Iグリッド付近に位置する。地山（IV層）面で明瞭な黒色土の方形プランとして検出した。

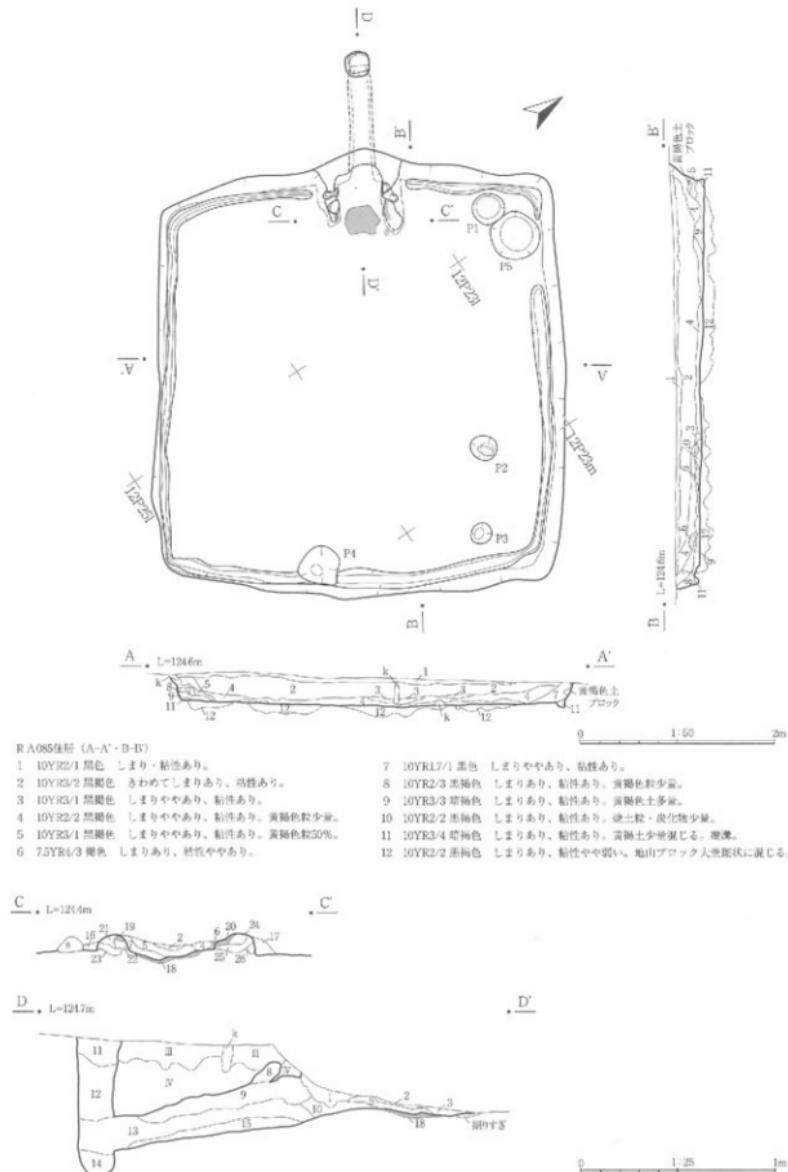
〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 4.38×4.23mの方形、主軸方位はN-56°-W、床面積は15.7m²である。

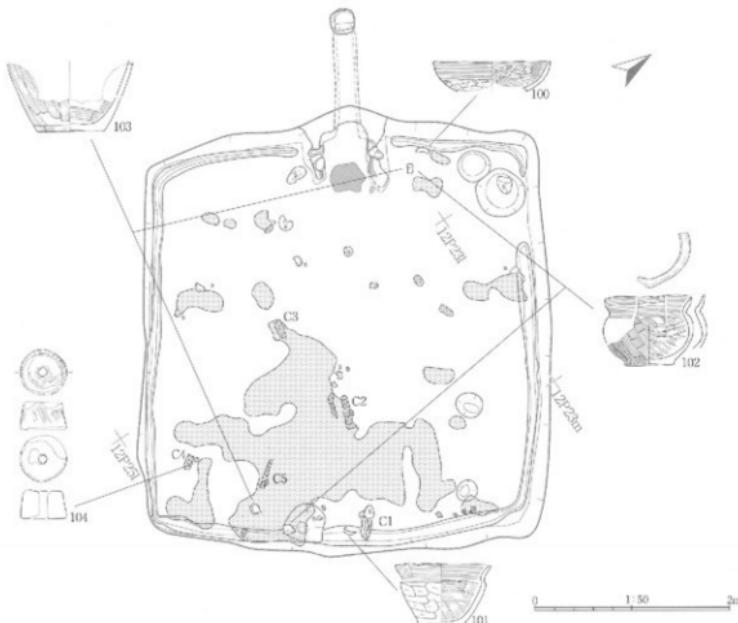
〈埋土〉 黒色～暗褐色土を主体とする。壁際から床面付近に地山ブロックを多く含む層（4・5・8・9層）と黒色土層（7層）がたまたた後に、炭化物・焼土ブロック層（6層）が住居西側からこれらの層上面を覆い、さらに混入物の少ない黒色～暗褐色土が堆積する（1・2層）。住居壁際から床面付近が埋まつた廃絶後ある程度時間がたった状態で焼失・倒壊し、その後自然に土が流入し埋没したものと推測される。本遺構内に出土した炭化材を採取して鑑定を行った結果、クリとナラと判定された。

〈壁・底面〉 壁の残存状態は良く、高さ20～35cm程度、外傾して立ち上がる。IV層まで掘り込み、掘り方土（12層）を均して床とする。その範囲はカマド周辺を除くほぼ床全面において、壁際が深く中心部へ向かって浅く、中心ほど主体土の色調もやや明るくなる。床面は比較的締まっており平坦で、カマド付近は周囲よりやや隆む。壁際には周溝が巡る。周溝は幅5～20cm、深さ10～20cm程度、北西コーナー付近で一部途切れる。床面からは5個の小穴を検出した。P 1～4は床面精査中、P 5は掘り方土を掘り下げる過程で確認した。小穴の規模は開口部径が20～50cm程度と様々で、深さは12～25cmと比較的浅い。P 1～3は住居北半に東西方向直線状に並ぶが、南側にこれと対応する穴は確認できず、上屋を支える主柱穴との断定はできなかった。P 4はカマドの対面に位置する。P 5は埋土上部が床掘り方土と類似しているために床面で検出できなかったものの、埋土下部には焼土ブロックを多く含んでいるため、住居使用段階では開口し、いずれかの段階で埋め戻された可能性が考えられる。その位置・規模から貯蔵穴とも推定される。P 5以外（P 1～4）は、いずれの埋土も黒色土を主体としている。

〈カマド〉 北西壁、ほぼ中央に設置され、煙道方向はN-59°-Wである。袖は、住居壁側は地山（IV層）を掘り残し、焚口側は床面上に黒褐色土、その上に地山上を積み構築している。掘り残しと積み上げ部分の境界には小穴が検出されており、礫などをいれ補強していた痕跡の可能性がある。燃焼部底面には直径35cm程度の不整形な焼成面が広がり、袖の内側（燃焼部内）も被熱する。煙道部は全長115cm、地山土をくり抜き、燃焼部側から住居外へ向かって緩やかに下り、煙出し部で一段低くなる。埋土は、煙出し底面に黒褐色土が堆積（14層）後、天井部が崩落（10・13・15層）し、残った隙間に



第47図 R A 085竪穴住居跡 (1)



R A085住居跡 (C' - D')

- 1 10YR2/1 黒褐色 シルト しまり弱い、粘性ややあり。黒味強くやわらかい触。地山ブロック細かく（径1～2mm）混じ。炭化物・粘土ブロック無痕量、細かく混じる（径5mm）。
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト しまり弱い、粘性ややあり。地山ブロック微微、細かい（径1～2mm）。炭化物・粘土ブロック微量（径～5mm）。
- 3 10YR3/3 黒褐色 シルト しまり弱い、粘性やや弱い。地山ブロック全体に少しひこまれて混じる。炭化物・粘土ブロック淡灰状にやや多量（径～1cm）。
- 4 7.5YR3/3 黒褐色 シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。地山ブロック少量、粗かく（径1～2mm）。炭化物・粘土ブロック少量。（2層と差別化するが、2層より明るく、炭化物・焼土ブロック多い。）
- 5 7.5YR3/2 黒褐色 シルト しまり・粘性ややあり。地山ブロック粗量、粗かく（径1～2mm）。炭化物・粘土ブロック少量。（2層と差別化するが、2層より明るく、炭化物・焼土ブロック多い。）
- 6 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりやや弱い、粘性やや弱い。地山ブロック細微量（径1～2mm）、炭化物細微量（径～5mm）。
- 7 5層に似るがやや明るく、焼土ブロック多い。
- 8 10YR2/2 黑褐色 シルト しまり、粘性やや弱い。地山ブロック粗微量。
- 9 10YR2/1 黒色 シルト しまり弱い、粘性ややあり。主底土少些と10YR2/2 黑褐色土が全体に大きくなっている。燒土微痕量（径1～2mm）、地山ブロック少量（径1～2mm）。
- 10 7.5YR3/3 黑褐色 シルト しまり弱い、粘性やや弱い。被熱した地山土（やや汚れるくらい）。燒土ブロック大きく（径～1cm）斑状に含む（天津崩落）。
- 11 10YR2/1 黑色 シルト しまり弱い、粘性やや弱い。地山ブロック少量（径～1cm）。
- 12 10YR2/1 黑色 シルト しまり弱い、粘性やや弱い。地山ブロック微量（径～5mm）、焼土ブロック微量。
- 13 7.5YR2/2 黑褐色 シルト しまり弱い、粘性やや弱い。地山ブロックこなれて全体にやや多量混じる。被熱した主底土もブロックで斑状にはいる。
- 14 10YR2/2 黑褐色 シルト しまり・粘性弱い。地山ブロック・焼土ブロック少量（径1～2cm）。
- 15 7.5YR2/2 黑褐色 シルト しまりやや弱い。地山ブロック少量、主底土混入、被熱したブロックも斑状に少部分含む。
- 16 10YR3/2 黑褐色 シルト しまりやや弱い、粘性やや弱い。地山ブロック多く混じる（崩落土）。燒土ブロック微量（径2～3mm）。
- 17 13層に似るがやや地山ブロック多く粗粒大きい（雜砾层）。
- 18 BYR3/4 黑褐色 焼土層。
- 19 7.5YR3/3 黑褐色 焼土層。
- 20 7.5YR4/4 黑色 焼成熟土。
- 21 地山ブロック層。しまり弱い、粘性やや弱い。
- 22 10YR2/2 黑褐色 シルト しまり弱い、粘性弱い。地山ブロックがやや汚れた感じ。
- 23 21層に似る。
- 24 6層に似るが地山ブロック微量（径1～2mm）細かく混じる。
- 25 23層に似る。

第48図 R A085竪穴住居跡 (2)

黒色土が流入している（1・9・11・12層）。燃焼部側には、焼上ブロックや炭化物が混入する暗褐色～黒褐色土が堆積しており、天井や袖の崩落上層は確認できなかった。

〈出土遺物〉 土師器1049g（壺類135g、甕類959g）出土し、壺2点、甕3点、紡錘車1点、総重量の約65%を掲載した（99～104、第102図、写真図版79）。床面よりも、埋土下部からの出土が日立つ。他の住居跡と比較すると出土量は少ない方で、個体ごとの残存率も低い。102は口唇部の一部が外側に押され突出し片口の可能性があるが、突出した部分からもの径に戻ることなく欠損しているため、歪んでいるだけとも考えられる。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

R A086 窓穴住居跡（第49図、写真図版28）

〈位置・検出状況〉 A区中央部微高地上の13Q14gグリッドを中心に位置し、やや削平されたIV層中で検出した。

〈重複関係〉 RF009焼土遺構と重複し、本遺構が切られる。

〈平面形・規模〉 平面形は東壁長約2.9m、南壁長約2.7m、西壁長約3.2m、北壁長約2.5mを測る隅丸略方形を呈し、床面積は約7.4mである。主軸方位はN-50°-Wである。

〈埋土〉 埋土は13層に細分され、壁際下位の黒ボク土は自然流入と思われるが、全体的には褐色土と黒ボク土の混じった人為的堆積である。

〈壁・底面〉 壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺存する壁高は33～40cmを測る。床面はカマド周辺を除き、全体的に貼床が施され、平坦で堅綺である。

〈床面施設〉 無し。

〈カマド〉 カマドは西壁の中央付近に付設されていたが、検出当初の木体部は褐色土の壇状となっており、IV層と一体的で外観的には判別できなかったが、一部造り出しの袖があったかもしれない。燃焼部に相当する部分では使用的痕跡は認められなかった。煙道は奥行き約1.3m、径約35cmの割り貫き式で、外側に向かいドリ勾配となっている。煙出しピットは径約25cm、深さは約84cmを測り、煙道よりも若干深く掘り込まれていた。

〈出土遺物〉 遺物は、埋土から土師器の壺形土器片約140gと極めて少量が出土した。形状を把握できた個体はない。（105、第102図、写真図版79）

〈時期・その他〉 遺構形態から奈良時代と思われる。カマド煙道埋土との断面の繋がりや燃焼部本体部の状態、埋め戻された埋土などの状況から構築途中で放棄されたように見受けられた。

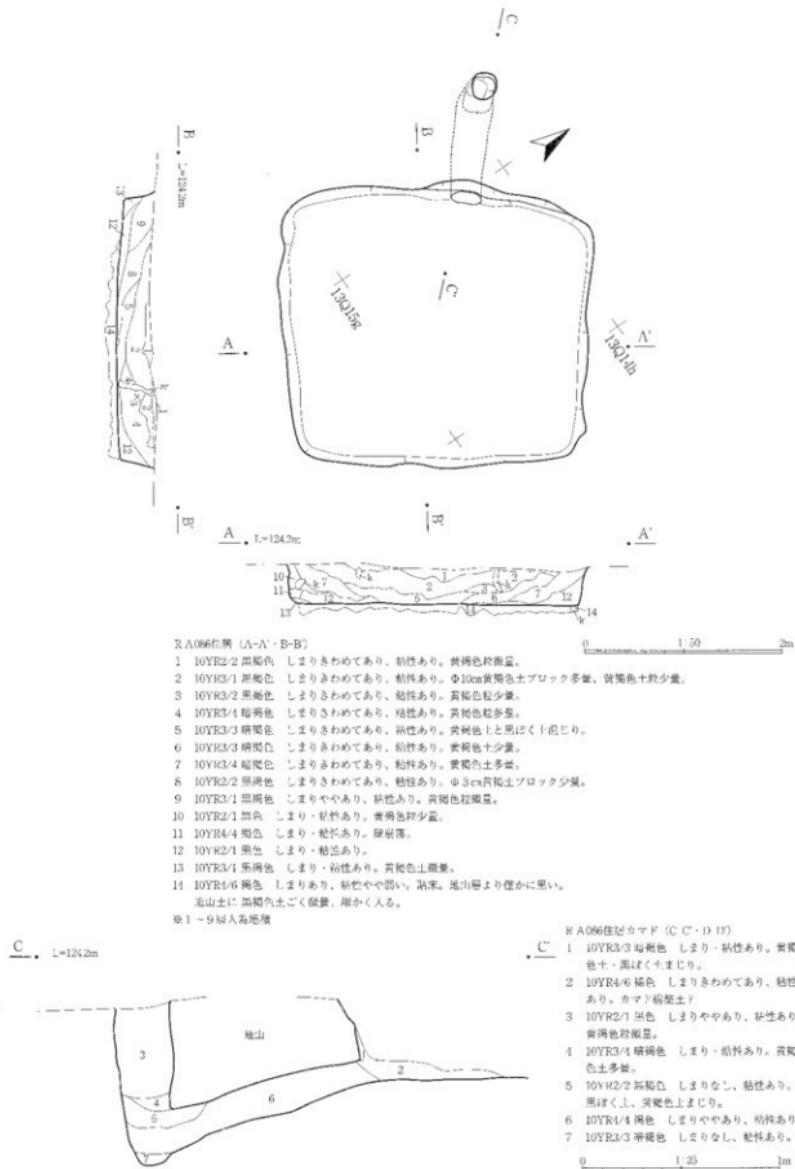
R A087 窓穴住居跡（第50図、写真図版29）

〈位置・検出状況〉 A区中央部微高地上の13Q17iグリッドを中心に位置し、削平されたIV層中で検出した。

〈重複関係〉 直接的な重複はないものの、位置的にRA088窓穴住居跡と同時存在はあり得ないことから、新旧関係にあると思われるが、具体は不明である。

〈平面形・規模〉 平面形は東西の壁長は約2.7m、南北の壁長は約2.3mを測る隅丸略方形を呈し、床面積は約5.5mである。主軸方位はN-40°-Wである。

〈埋土〉 埋土は11層に細分されるが、自然流入と思われる中央上位と壁際下位の黒ボク土と中位の褐色土と黒ボク土が混じった人為的堆積に大別される。カマド脇の床面にはカマド関連と思われる焼土粒の広がりが認められた。



第49図 R A 086竪穴住跡

〈壁・底面〉 壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺存する壁高は13~22cmを測り、東側旧河道よりに低くなっている。床面はカマド部分を除き、全体的に貼床が施され、平坦で堅締である。

〈床面施設〉 カマドの対極の壁際で径約22cm、深さ約13cmの柱穴1個が検出された。

〈カマド〉 カマドは西壁の中央に付設されていた。本体は、天井部構築土は残骸として残っておらず、袖部は架構・芯材として石や土器などは認められないが、一部造り出しとして褐色粘土で構築されていた。燃焼部は床面よりも若干低く、底面は火熱により21×15cmほどの不整形で厚さ約1cm程度に弱く、袖内面は比較的強く赤色変化していた。煙道は奥行き約1.2m、径約31cmの割り貫き式で、外側に向かい下り勾配となっている。煙出しピットは径約26cm、深さは約44cmを測る。

〈出土遺物〉 遺物は、埋土から土師器の壺形土器片と壺形土器片約186gが出土し、9割以上が壺形土器である。形状を把握できた個体はない。

〈時期〉 造構形態から奈良時代と判断される。

RA088堅穴住居跡（第51・52図、写真図版30・31）

〈位置・検出状況〉 A区中央部微高地上の13Q18gグリッドを中心に位置し、やや削平されたIV層中で検出した。

〈重複関係〉 RG015溝跡と重複し、本遺構が切られる。また、上記のとおりRA087堅穴住居跡と新旧関係にあると思われるが、具体は不明である。

〈平面形・規模〉 平面形は一辺約3.6mの隅丸方形を呈し、床面積は約11.4m²である。主軸方位はN-53°-Wである。

〈埋土〉 埋土は5層に細分されるが、全体的に下位ほど褐色土が多い黒ボク土と混じる人為的堆積である。カマド周辺には廐棄と思われる焼土の広がりが認められた。

〈壁・底面〉 壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺存する壁高は24~36cmを測り、東側旧河道よりに低くなっている。床面はほぼ全体的に貼床が施され、平坦で堅締である。

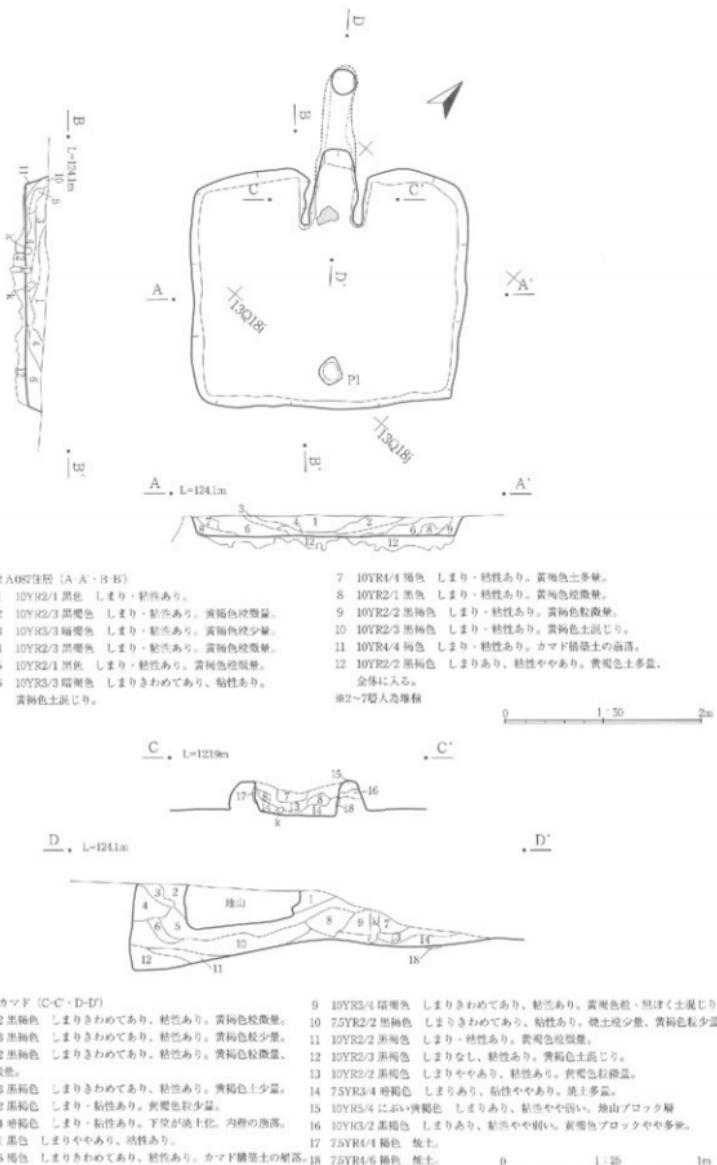
〈床面施設〉 床面施設としては北西隅付近と東壁際にK1~3の土坑3基を検出した。土坑とカマド部分を除き一部途切れながらも幅6~13cm、深さ4cm以下の堅溝が巡っている。

K1土坑は北壁際の西側に位置し、平面形・規模は、開口部で長軸約60cm、短軸26~44cm、底部では約22×47cmの略円形の連結しただらま形を呈し、短軸断面形は深さ約14cmの平底鍋形を呈する。南西側底部には径約24cm、土坑底面からの深さ約15cmの柱穴が1個ある。埋土は4層に細分される焼土と褐色系土混じりの人為的堆積である。

K2土坑は東壁際の北よりに位置し、平面形・規模は、開口部径約37cm、底部は20×26cmの略円形を呈し、断面形は深さ約17cmの平底鍋形を呈する。埋土は焼土と炭化物の混じる人為的な褐色土の単層である。

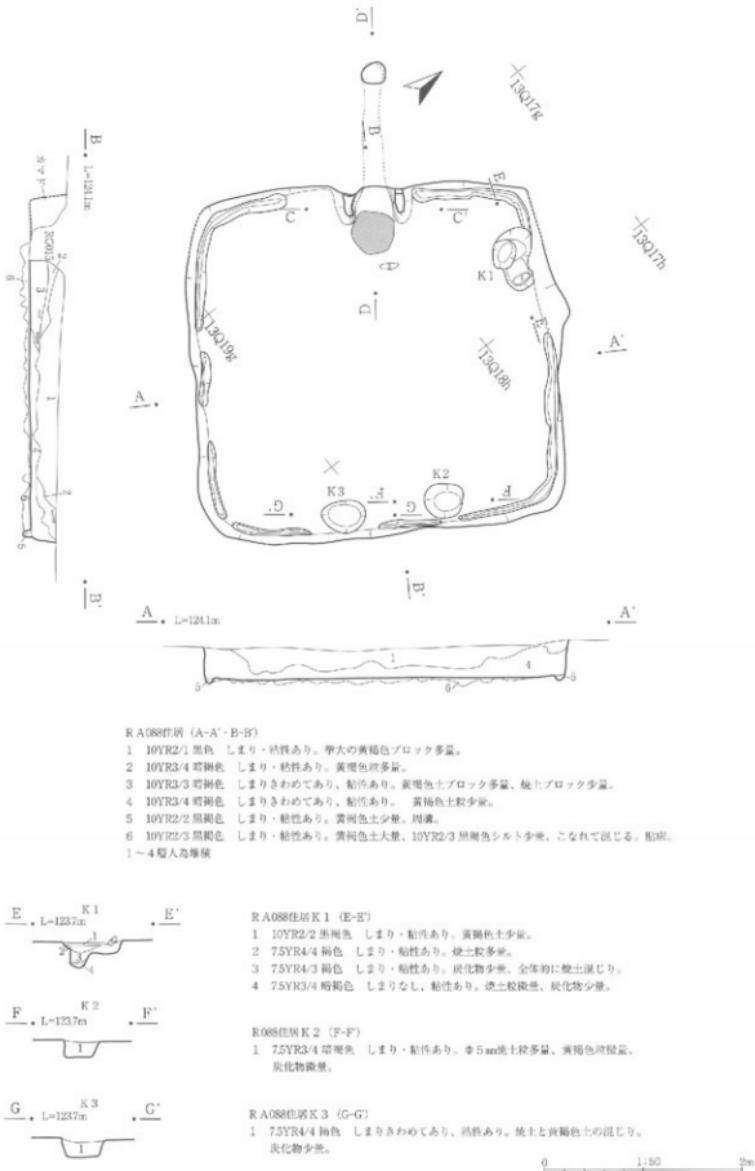
K3土坑は東壁際の南よりに位置し、平面形・規模は、開口部33×44cm、底部21×32cmの略椭円形を呈し、断面形は深さ約20cmの平底鍋形を呈する。埋土は焼土と炭化物の混じる人為的な褐色土の単層である。

〈カマド〉 カマドは西壁の中央に付設されていた。本体は、壁際を除き、燃焼部部分がRG015溝跡により破壊されており、遺存状況はあまり良好ではない。天井部構築土は残骸として残っておらず、袖部は芯材として石や土器などは認められず、遺存していた部分は造り出しえていた。燃焼部はRG015溝跡により凸凹の状態となっていたが、底面は火熱により径約42cmほどの略円形で厚さ最大で約5cm、袖内面も強く赤色変化していた。煙道は奥行き約1.4m、径約20cmの割り貫き式で、外側に向

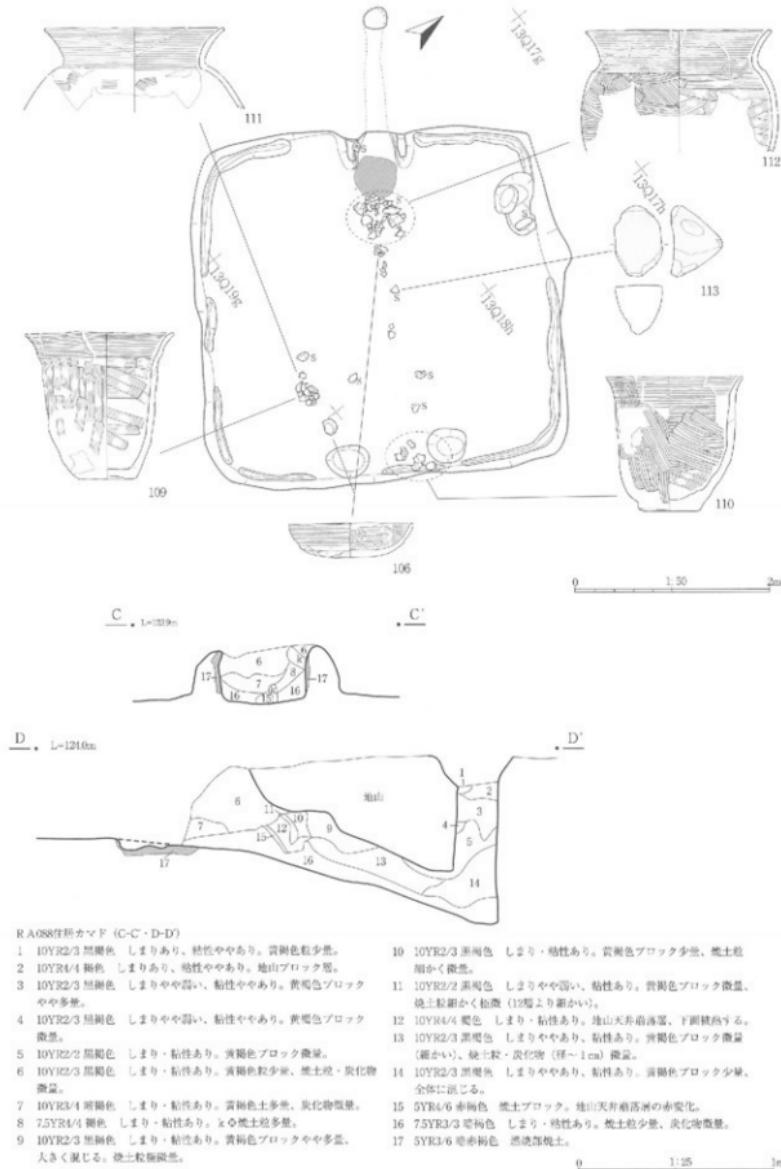


第50図 R A 087堅穴住居跡

3 検出された遺構と遺物



第51図 R A 088竪穴住居跡 (1)



第52図 R A 088穴住居跡 (2)

かい下り勾配となっている。煙出しピットは径約24cm、深さは約85cmを測る。

〈出土遺物〉 遺物は、出土状況としては埋土下層の4層上面に廃棄された状態で、土師器の壺形土器片と壺形土器片約4.2kgが出土し、壺型土器が約9割を占める。掲載した土器は出土量の約5割にあたる。形状をおよそ把握できた個体としては、一括廃棄と思われるほぼ完形の土師器の壺形土器1点(図番106)と壺形土器1点(図番109)、復元個体では、壺形土器1点(図番110)とカマド近くから破碎状態で出土した球胴壺の上半1点(図番112)があり、この下半はRG015溝跡により消失したものと思われる。このほか砥石の破片1点が出土している。(106~113、第102図、写真図版79・80)

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

R A089堅穴住居跡（第53図、写真図版32）

〈位置・検出状況〉 A区南部、13Q22jグリッド付近に位置する。旧河道への落ち際、II~III層で溝状の焼上が広がる範囲を検出した。本遺構の南西側にはRF011~014焼上遺構がならんでいることから、本遺構もこれらと同種類と考え精査を開始したところ、形状・埋土の堆積状況とも焼上遺構とは異なり、カマドの煙道部と類似していた。そのため再度丁寧に検出したところ、南側にⅢ層よりも黒味の強い方形プランを確認し、住居跡と判断した。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 南東部を擾乱によって消失する。南西壁は3.12m、北西壁は3.07m、残存部から方形のプランをもち、床面積は8.6m²ほどと推定される。主軸方位はN-56°-Wである。

〈埋土〉 黒色~黒褐色土を主体としレンズ状に堆積する。地山土の混入は微量~少量と少なく、炭化物・焼土ブロックをわずかに含む。

〈壁・底面〉 壁は残存高20cm程度、ほぼ直立する。IV層まで掘り込み、II層とIV層の混ざった掘り方土を均し床とする。その範囲はカマド周辺を除き全面に及ぶ。床面は平道で、IV層を掘り残したカマド周辺は若干高くなる。周溝・小穴等の床面施設は検出されなかった。

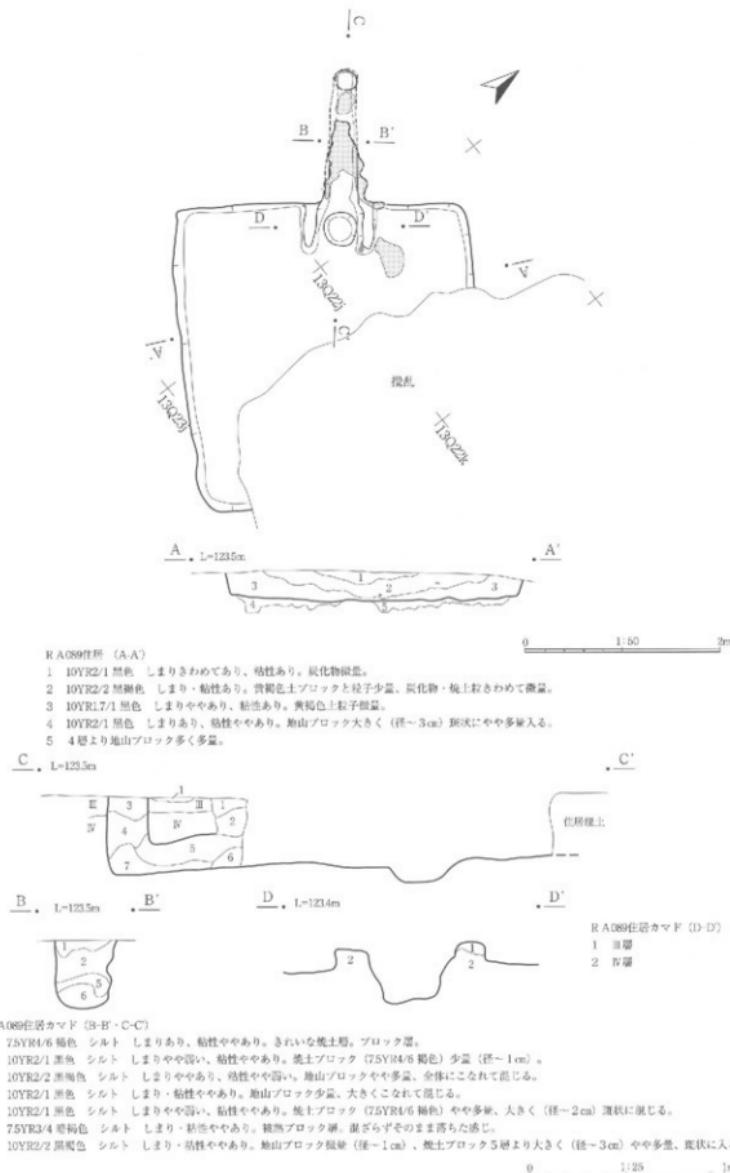
〈カマド〉 北西壁、ほぼ中央に設置され、煙道方向はN-50°-Wである。袖は地山土(III~IV層)を掘り残しており一部被熱する。燃焼部内の底面に焼土は検出されず、直径34cm、深さ10cm程の円形の掘り込みが確認された。煙道部は全長130cm、地山上をくり抜いている。底面の高さは住居床面と変わらず煙出しまでのびる。埋土は、上述の通り、焼土遺構として精査を開始したため、煙道部南半から燃焼部にかけての記録を欠く。掘り進める際の観察では黒色~黒褐色土を主体として、焼土ブロックを多く含んでいた(カマド断面2・5層のような土)。煙道部北半は、煙道内に天井崩落土(6層)、焼土を多く含んだ黒色~黒褐色土(5・7層)が堆積、煙出し内は地山ブロックの混入量が多い。くり抜いた地山上(III~IV層)の上にも焼土ブロックが広がっており、自然に堆積したものとは説明がつきにくい。煙道内に地山崩落土が少ないが焼土ブロックの混入量が多いこと、煙出しの地山ブロック量、などもあわせて考えると、煙道部は人為的に埋め戻され天井部が崩落、その上面に焼土ブロックが広がったものと考えられる。

〈出土遺物〉 出土していない。

〈時期〉 遺物は出土していないが、住居主軸方位、カマドの設置方向から奈良時代と考えられる。

R A090堅穴住居跡（第54・55図、写真図版33・34）

〈位置・検出状況〉 A区南部、13Q17dグリッド付近に位置する。地山層(IV層)で明瞭な黒色土の方形プランとして検出した。



第53図 R A 089竪穴住居跡

〈重複関係〉なし。

〈平面形・規模〉 $5.15 \times 4.18\text{m}$ の方形、主軸方位はN-53°-W、床面積は 14.4m^2 である。

〈埋土〉黒色～黒褐色土を主体とする。埋土下部に地山ブロックが多く大きく含み（4層）、上部（2・3層）は量が減り細くなり、最上層は混入物の少ない層が堆積する。2層以下は地山ブロックの混入量が多いことから、人為的に埋め戻された可能性がある。一方で埋土最上層（1層）は自然堆積と考えられ、埋め戻し平らにするというより、周囲の住居跡を掘り下げる際などの堆土場として利用されたとも推測される。

〈壁・底面〉壁は残存高40～50cm程度、ほぼ直立する。IV層まで掘り込み、掘り方土を均しており、その範囲はカマド燃焼部内を除き全面に及ぶ。掘り方の深さは壁際が深く、中心部が浅い。埋土も深い部分のはうが黒色土を多く含んでいる。カマド設置場所以外の壁際には、一部途切れるものの周溝が全周する。その幅は5～25cm、深さ5cm前後である。その他床面からは5基の土坑・小穴が検出された。土坑（K1～4）は、いずれも住居南東部で検出され、開口部径はK3が最も大きく 116cm 、これ以外は $50\sim60\text{cm}$ 程度、深さはいずれも 25cm ほどである。小穴（P1）は開口部径 34cm 、深さ 27cm 、カマド脇で検出された。これらの土坑・小穴の埋土中には焼土ブロックを含む層が確認されている（K1～3・2層、P1・3層）。住居の埋土中には、これと類似する層は確認できず、住居使用中～廃絶・埋没前までに人為的に埋め戻されているものと考えられる。しかし、その位置・深さから上層を支える柱穴とも考えにくく用途は不明である。

〈カマド〉北西壁、ほぼ中央に設置され、煙道方向はN-54°-Wである。袖は壁から連続して地山土を掘り残し、焚口側は地山ブロックを用いて補強している。燃焼部底面には $28 \times 34\text{cm}$ の焼土が形成され、袖内側（燃焼部内）も被熱する。煙道部は全長 115cm 、底面は焼出しに向かって緩やかに下り、くり抜かれている。埋没過程は、黒色土の流入（16・17層、7・8層）と天井の崩落（15、10、5・6層）が繰り返されている。焼出し上部は大きくえぐれ、被熱土や地山ブロックが斜めに細長く混入し（13・14層）、天井も他の住居跡と比べ大きく崩落している。

〈出土遺物〉土師器3458g（壺類355g、甕類3103g）出土し、総重量の約60%を掲載した（壺4点・甕4点・石器1点、114～122、第103図、写真図版80）。床面～下部、K2・3内からの出土が目立つ。

〈時期〉出土遺物から奈良時代と判断される。

R A091堅穴住居跡（第56・57図、写真図版35・36）

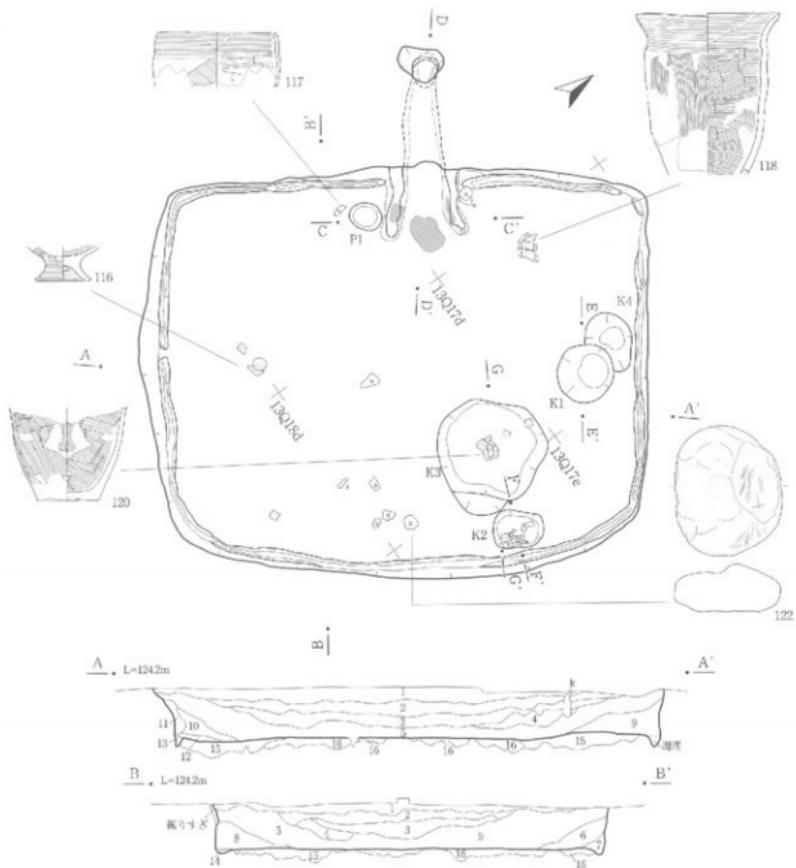
〈位置・検出状況〉A区西部、13P15nグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で明瞭な黒色土の方形プランとして検出した。

〈重複関係〉なし。

〈平面形・規模〉 $6.00 \times 5.76\text{m}$ の方形、主軸方位はN-25°-W、床面積は 32.9m^2 である。カマド燃焼部から東壁にかけて溝状に搅乱される。

〈埋土〉黒色土を主体とし、壁際から床面付近にかけて地山ブロックの混入量が多くなる。

〈壁・底面〉壁の残存状態は悪く、高さ10～15cm程度、IV層まで掘りこんでいる。掘り方土を均して床としており、カマド袖の下を含め、壁周辺が深く中央部へ向かって浅くなり。燃焼部内には掘り方土はみられず地山面を底面としている。床面は平坦で、北東隅だけは130の土師器甕を埋め込んでおり、周囲より若干高くなっている。東壁を除く壁際には断続的に周溝が巡る。幅4～13cm、深さは2～8cm程度である。埋土は住居内の埋没土よりも地山ブロックの混入量が多い。その他、土坑3基、小穴7個が検出された（K1～3、P1～7）。K1・K3は住居南東に位置し、開口部径 80cm 前後の不整椭円



RA090住居（A-A'・B-B'）

- 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少々、塊状（径~1cm）混入物少ない層。白っぽい。
 - 10YR2/1 黑色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少々量、比較的細かい（径大きさで5mm~1cm程度）。
 - 10YR1/7 黑色 シルト しまりややあり、粘性弱い。地山ブロック少々量、（径大小様々）、2層より多い。10YR2/1 黑色シルト少量。
 - 4 5層に及ぶが地山ブロック人骨類々。
 - 5 10YR2/2 黒褐色 シルト しまり・粘性やや弱い。地山ブロック全体にやや多量、比較的細かく混じる（2層と同じくらいの大きさ）。
 - 6 10YR1/7 黒色 シルト しまり・粘性やや弱い。地山ブロック塊状に斜めに複数入る。
 - 7 10YR1/7 黑色 シルト しまり・粘性やや弱い。地山ブロック（砂質）やや多量、全体に入る。
 - 8 10YR1/7 黒色 シルト しまりやや弱い、粘性あり。地山ブロック塊状にやや多量入る。
 - 9 10YR1/7 黒色 シルト しまりやや弱い。地山ブロ
- ックとても大きなブロックでやや多量入る。
- 10YR1/7.1 黑色 シルト しまり・粘性やや弱い。地山ブロック少々、やや塊状に入る。
 - 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少々量、塊状に入れる（径~1cm）。
 - 12層に及ぶが、しまり弱く色々やや黒い。
 - 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少々量、雜かく入る（径~5mm）。
 - 10YR2/2 黑色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロックやや多量、10YR2/2 黑褐色シルト多量、10YR1/7 黑色シルト少量、大きさ（径~cm）斑状に混じる。
 - 10YR2/2 黑色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック人骨、主土体混入（径~1cm）、10YR2/2 黑褐色シルトとなって少混合入。

0 1:50 2m

第54図 RA090整穴住居跡（1）



第55図 R A090堅穴住居跡 (2)

形である。床面からの深さは35cm程度、埋土は地山土と黒色土の混土で、掘り方構成土と同じである。特にK1は、床面稍高時は1層下面を底面と認定し、掘り方土を取り除く際にさらに掘り下がることが判明した。K3は板状の礫が北壁に立てかけてあった。柱などを支える側石の可能性も考えられるが、柱痕跡は確認していない。両者は規模や埋土などが類似することから同類の用途が想定されるが、それを特定することはできなかった。K2は直径50cm程度の円形のものが二つ重なったような形状を持ち、埋土内に焼土ブロックが含まれる層が確認された(2層)。この層は、上述の北東隅の高まりに広がる焼土ブロック層と類似しており、土坑内に東側から流入した痕跡もみられることから、住居使用時には開口していた可能性が高い。その位置から貯蔵穴であろうと推測される。P1~4内には、柱痕跡が認められ、住居の上屋を支える主柱穴と考えられる。直径31~36cm、深さはいずれも50cmを超える。各柱間は350cm程度である。P5はカマドの対面壁際、P6・7はカマド袖脇に位置し、後者は埋土下部に焼土ブロックを混入する。

〈カマド〉 北西壁、中央やや北寄りに設置され、煙道方向はN-21°-Wである。西側の袖と燃焼部の壁際から東袖にかけて溝状に搅乱される。残存範囲では、壁側の地山土を掘り残し、焚口側は地山土を貼り付け土器器壺(127)を倒位で置き芯材として利用している。燃焼部底面には59×46cmの焼成面が広がり、壁内側(燃焼部側)にも被熱が及ぶ。煙道部の長さは185cm、住居壁際から煙出しに向かって緩やかに下がりくり抜かれる。煙道天井壁はよく被熱している。埋土は、燃焼部から煙道部南半にかけて底面直上に天井部が崩落し、煙道北側は、被熱土が混入するものの、地山ブロックの量は多くない。廃絶後早い段階で燃焼部へ煙道部南半が崩れ、その後自然に黒色土が流入し埋没したものと考えられる。

〈出土遺物〉 土師器4590g(壺類504g、甕類4086g)出土し、総重量の約4割、壺類4点、甕類7点、紡錘車1点を掲載した(123~134、第101図、写真図版80・81)。上述の通り、127はカマドの芯材、130は床面に胴部を埋め込まれて使用されていた。その他、床面～埋土下部からの出土が多く、カマドの設置壁側から器形を復元できる個体が多く出土した。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

R A092堅穴住居跡 (第58・59図、写真図版37・38)

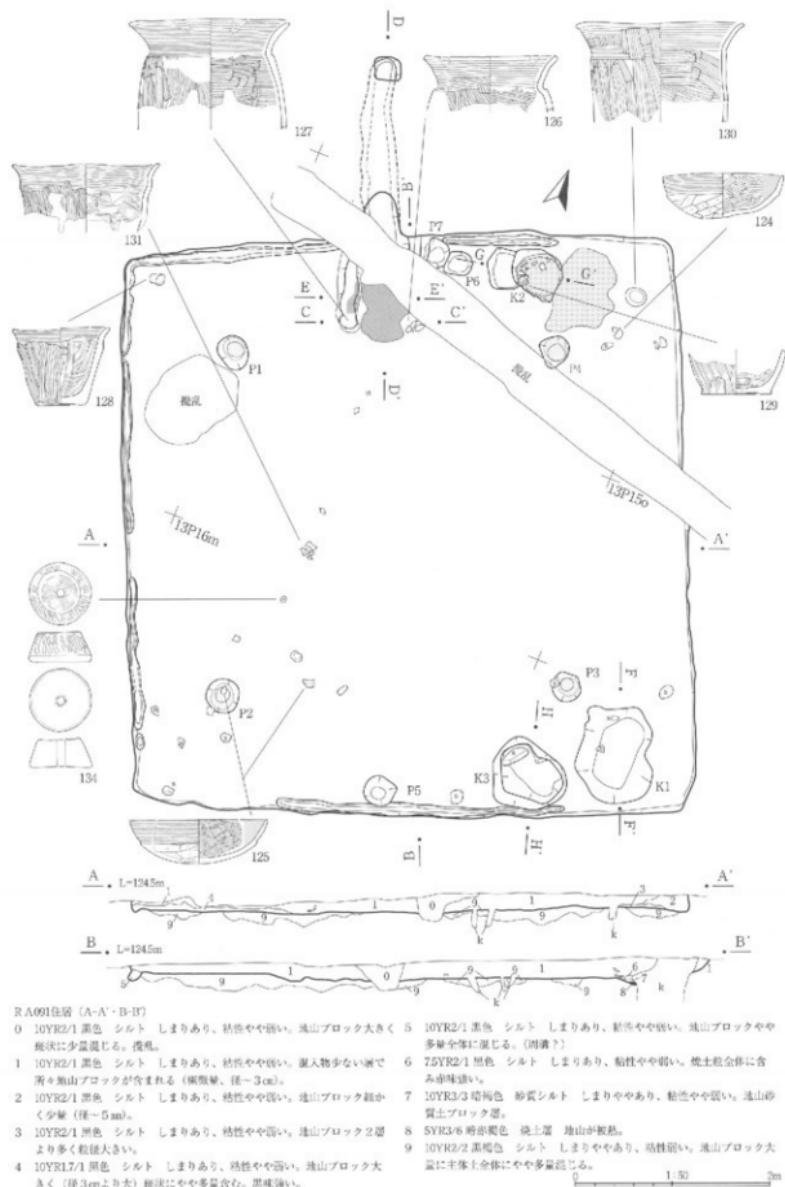
〈位置・検出状況〉 A1区西部、13P19jグリッド付近に位置する。地山層(IV層)で明瞭な黒色土の方形プランとして検出した。

〈重複関係〉 なし。

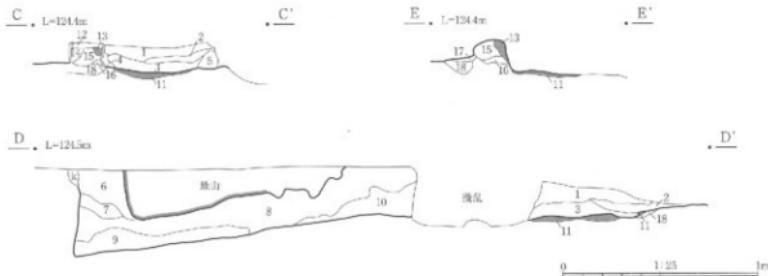
〈平面形・規模〉 3.69×4.06mの方形、主軸方位はN-77°-W、床面積は13.5m²である。

〈埋土〉 壁際は黒色土(5~8層)が堆積した後、黒褐色土(2~4層)が壁際から中央へ、住居全体を1層が覆う。3・4層は炭化物・焼土ブロックを多く含んでおり、住居南半、壁際には溜まった埋土の上面を覆うように、壁際には高く中央部へ向かって低くなつて広がる。廃絶後若干時間がたつた状態で焼失・倒壊したものと推定される。これらの層を覆う1層は、大小様々な粒径の地山ブロックを多く混入しているため、焼失・倒壊後、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

〈盤・底面〉 残存する壁の高さは15~20cm程度、ほぼ直立する。IV層まで掘りこみ、掘り方土(地山ブロックと黒色土の混土)を均し床とする。カマド内はIV層を底面としている。床面には溝が東西方向、主軸方向に沿って2条平行して検出された。幅5~15cm、深さ5cm程度である。北側の溝より壁際の床面は、溝を境に若干高くなる。溝内からは棒状の材(C5)が出土している。溝と壁の間は70~80cmと狭くこの空間を区切った間仕切と考えるのは難しく、床面に板材並べ敷いた痕跡と考えられるが、

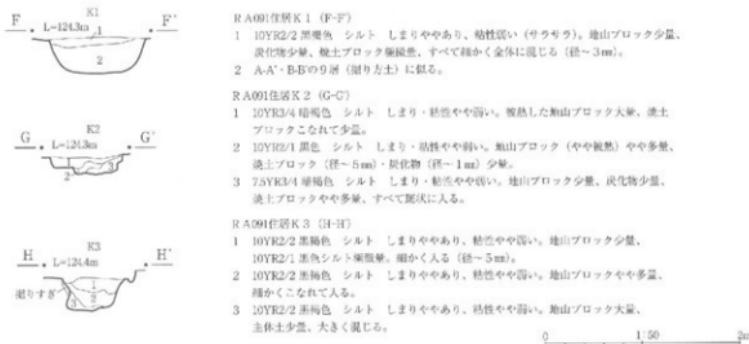


第56図 R A091竪穴住居跡 (1)



R A091住居カマF (C-C'-E-E')

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック上面に大きくなるが箇中にほんの少く硬い。(径~1cm)。
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック微量。(径~5mm) 粘土ブロック少量。(径~5mm)
炭化物微量(径~5mm)。
- 3 7SYR3/4 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性なし。地土ブロック全体に斑状に多量含む(径5mm~1cm)。中心ほど多い。
炭化物微量(径~5mm)。天井・柱脚等の付着土。
- 4 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地土ブロック多量。(径~1cm)。
- 5 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地土ブロック微量。(径~2mm)。
- 6 7SYR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック微量、或の被熱層落上含む。地土ブロック少量。
- 7 7SYR2/1 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック微量(径~1cm)、地土ブロック少量(径~1cm)。
- 8 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック細かく少量(径~1cm)、箇所中心に多くなる。
地土ブロック微量(径~1cm)。
- 9 7SYR2/1 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック微量(径~1cm)、或の被熱層土が大きいブロックではいる(径5cm程度)。
- 10 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック多量、被熱層の被熱土組成多く現状に入る。
- 11 5YR3/6 硫赤褐色 残土層 (地山土が被熱)。洗出とてもよい。
- 12 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地土ブロック微量含む(径~1cm)。
- 13 5YR4/6 硫赤褐色 残土、15層が被熱。
- 14 5YR4/6 硫赤褐色 被熱した地上に堆積する地山土(径~1cm)・10YR2/2 黑褐色シルト(径1~2mm) 略量含む。
- 15 10YR4/4 黄褐色 シルト 地山ブロック解。しまりあり、粘性なし。
- 16 10YR4/4 黄褐色 シルト 地山ブロック解。しまりあり、粘性なし。炭化物・地土ブロック微量含む(径~5mm)。
- 17 10YR3/3 黑褐色 シルト しまりあり、粘性やや弱い。地山ブロック細かく少量(径2~3mm)。
- 18 10YR4/4 黄褐色シルト 大量に10YR2/1 黑色シルト少量、全体にこなれて混じる。しまりややあり、粘性弱い。住居壁面方土。



第57図 R A091堅穴住居跡 (2)

板材を敷いた範囲、床面の硬化部分などは確認できなかった。その他、小穴が2個検出された（P1・P2）。両者とも廐土が床面の掘り方土と類似していたために、床面では検出できず、掘り方土を剥がす際に確認した。カマド脇のP1プラン内には土師器甕（141）が置かれているが、土器は床面から数cm程度の深さ、黒色土で埋め込まれ、P1はさらに下へ30cm程度掘られ、廐土は地山土を多く含んでいることから、土器を埋めるためにP1は掘り下げたと考えにくい。一方で北西隅のP2もP1と同様の規模・深さ・埋土のため、これらは対になっての利用が推測され、棚などを設置するための柱を埋め込んだ後、さらに土器をおいたものとも考えられる。これら以外に、カマド対面の壁が若干張り出し、床面が円形に窪んでいた。周囲が新期耕作痕による擾乱が多く、調査時はこれも新しいものと判断し記録を欠いたが、調査区内の他の住居跡でこの位置に小穴・窪みがあるものが多いことから、本遺構の窪みも床面に設置された小穴の可能性も考えられる。

〈カマド〉 西壁ほぼ中央に位置し、煙道方向はN-76°-Wである。カマド袖は壁側の地山土を掘残し、焚口側に土師器甕（137）を倒位で置き芯材としている。燃焼部底面には、45×52cmの焼土が形成されており、袖内壁まで被熱する。他の住居に比べ焼成が深くまで及んでおり、よく被熱している。燃焼部底面には礫が出土しており、支脚の可能性があるが、礫自体が被熱している様子は観察できなかつた。煙道部は全長150cm、底面は燃焼部から住居外へと平らに伸びてから、途中で緩やかに下り傾出しへとくり抜かれる。埋土は燃焼部底面直上に天井が崩落（6・7層）、煙道部には黒色土が流入する（11層）。その後煙道部は天井崩落（3・10層）、被熱ブロック・地山ブロックを含む黒色土（5・8・9層）が繰り返し堆積する。最下層の11層は自然堆積と推定され、これに対し10層（天井崩落上）より上位層は、混入物の量が多いまたはその粒径が大きいため、住居の焼失に伴い崩落が激しくなった、もしくは焼失後住居内と同様に人为的に埋め戻されたものと考えられる。

〈出土遺物〉 土師器が7489g出土しており、このうち壺類が60g、甕類が7428gと圧倒的に後者が多い。このうち壺類は全量で1点、甕類は約70%で6点を掲載した（135-141、第104・105図、写真図版81・82）。138はカマド芯材として、141は上半だけをカマド脇に置かれ（台か？）利用されていた。その他カマド付近、焼土ブロックの広がる範囲から器形復元可能な個体が出上している。炭化材は鑑定の結果クリが多く、ナラ、ケヤキと次ぐ。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

R A093堅穴住居跡（第60図、写真図版39・40）

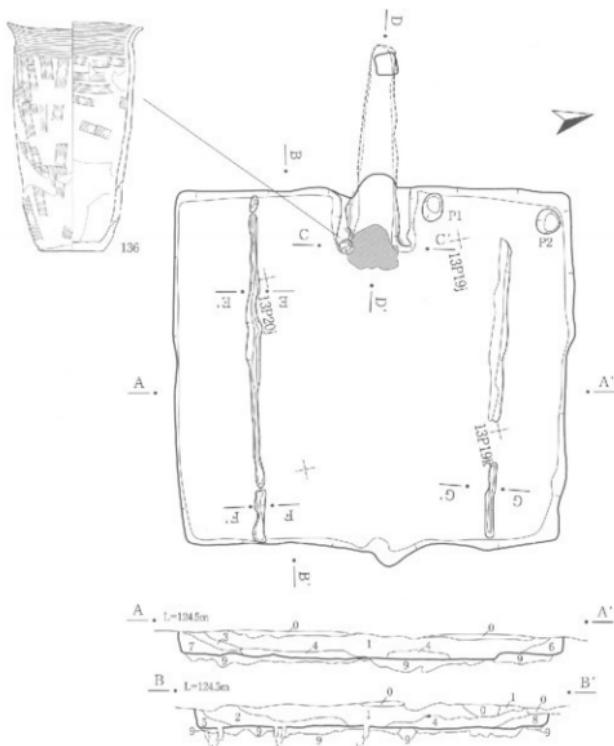
〈位置・検出状況〉 A区内部、13P25nグリッド付近に位置する。II～III層中で周囲よりやや黒味の強い方形プランとして検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 2.90×3.06mの方形、主軸方位はN-92°-W、床面積は7.4m²である。

〈埋土〉 壁際に黒味の強い層（7・9層）が堆積後、焼土ブロック・炭化物を含む層（6・8層）が東半に広がり、地山ブロックの混入量が異なる黒色土がレンズ状に堆積し埋没する。6・8層は、壁際に堆積した層を覆うように壁際に高く、中央は低く床面直上となる。住居廃絶後若干時間がたったのちに焼失・倒壊し、その後自然に埋没したものと推測される。

〈壁・底面〉 壁の残存状態は良く、検出面からの高さ45cm前後である。床面はIV層まで掘りこみ、その掘り方土を均している。掘り方はカマド周辺を除き全体で確認でき、深さは壁際に深く、住居中央へ向かって浅くなり、住居中央部及びカマド周辺はIV層が床面となる。床面は平坦だが、南側が一段高くなる。その範囲は南壁から0.8～1.0m程度の幅で、掘り方土を積み上げ北側より10cmほど高くして



R A092住居 (A-A'・B-B')

○ 展布。

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりやあり、粘性やや弱い。地山ブロック〔大小様々、径1mm~5cm〕全体にやや多量含む。炭化物（径~5mm）微少。
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック細かく（径~5mm）少量、炭化物少量（径~5mm）。4層と似る土体土。
- 3 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。7.5YE3/3暗褐色シルト・硬土ブロック大量、炭化物微量（径~5mm）。
- 4 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック細かく（径~5mm）少量、炭化物・硬土ブロック少量（径~5mm）上面に被熱した燒土（3層と同様）多くなる。
- 5 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少量（径~2cm）。
- 6 7層に似る。
- 7 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック細かい（径~5mm）。
- 8 10YR2/1 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少（径~1cm）。10YR2/2 黑褐色シルトや多量。
- 9 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック大半、土体少（量）、こなれて混じる。

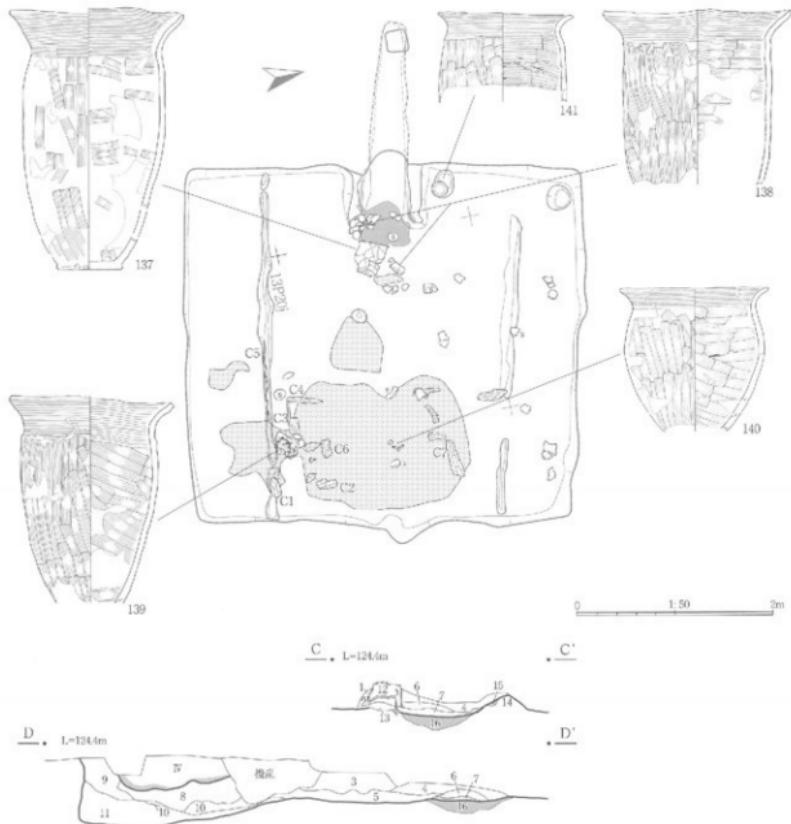


R A092住居 (E-E' - G-G')

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少（量）、細かく入る（径~5mm）。
- 2 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロックやや多量。
- 3 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック極微量（径2~3mm）。

0 1.50 2m

第58図 R A092堅穴住居跡 (1)



0 1.25 2m

第59図 R A092堅穴住居跡 (2)



第60図 R A 093堅穴住居跡

いる。その他小穴が2個検出されたが、いずれも埋土が掘り方土と類似しており床面では検出できず、掘り方土を取り除く段階で確認した。P1はカマド対面壁近く、P2はカマド北側に位置している。

〈カマド〉 西壁ほぼ中央、煙道方向はN-91°-Wである。袖は壁側の地山土を掘残し、焚口側は黒褐色土と地山土を使用して層状に土を積み上げている。燃焼部内底面には、20×40cm不整輪円形の炭化物層が広がるが、焼土は形成されてなかった。袖の被然も認められない。しかし、炭化物層直上には焼土ブロック層（11～13層、袖・天井崩落土）が堆積しており、カマド内での焼成は行われていたものと考えられ、底面の焼土を定期的に掃きだしかマドを使用していた可能性がある。燃焼部底面には礫が2個出土しており、北側のものは、その位置から、支脚に使用されていた可能性がある。煙道部は全長105cm、底面は燃焼部から住居壁付近で若干高くなっているから、煙出しに向かって緩やかに下り、くり抜かれる。埋土は、燃焼部底面上に袖・天井崩落土層（10～13層）、煙道部も埋没の比較的早い段階で崩落する（16～17層）。その後、黒色土が自然流入している。本カマドが実際に使用されていたものであろうと、上述したが、煙道内の天井・崩落土中に焼土ブロックを含まれておらず、周間に住居跡に比べて使用頻度は低かったものと推定される。

〈出土遺物〉 1:鉢器891g（坏類86g、甕類805g）出土し、総重量の27%、坏類3点、甕類2点を掲載した（142～146、第105図、写真図版82）。遺物出土量も比較的少なく、器形を復元できる個体も出土していない。床面から下部よりも、上部（1～2層）中に遺物が多く含まれていた。炭化材は、鑑定の結果ナラとタモであった。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

R A094堅穴住居跡（第61～63図、写真図版41・42）

〈位置・検出状況〉 A区南東部、14P3sグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で明瞭な黒色土の方形プランとして検出した。

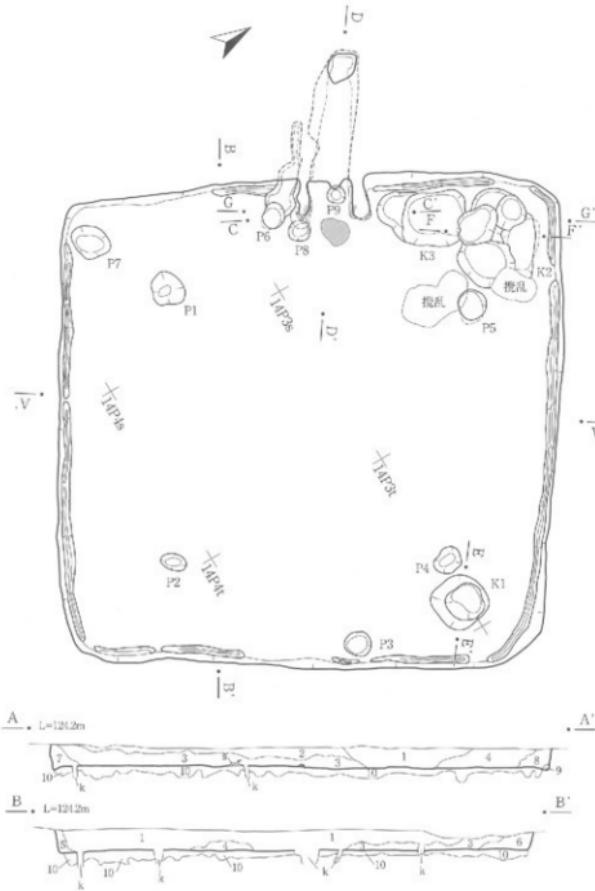
〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 5.10×5.11mの方形、主軸方位はN-57°-W、床面積は21.2m²である。

〈埋土〉 黒色土を主体とし、地山ブロックを混入する。混入量は下部に多く上部に少ない。また、3層中には炭化物・焼土ブロックを含んでおり、その平面範囲は南東壁際に広がる。壁際が崩落し、住居跡が若干埋没した後、焼失・倒壊した可能性が考えられる。

〈壁・底面〉 壁の残存状態は比較的悪く、15～25cm程度、IV層まで掘り込み床とする。床面は、カマド付近はIV層のまま、それ以外は掘り方土を平らに均しており、比較的しまる。壁際には断続的に周溝が巡る。幅6～12cm、深さ5cm程度である。その他土坑が3基、小穴が10個検出された。土坑は、K1が北東隅、K2・3が北西隅、カマド脇に位置する。いずれも埋土内に焼土ブロック・炭化物を含んでいる。K2・3は、焼土ブロック・炭化物の量比で何層かに分層することができる。住居廃絶時に開口し、焼失・倒壊とともに一気に土や焼土・炭化物が流入したというよりも、住居使用途中でカマドの焼土等を投げ込み埋め戻されたのではないかと考えられる。とくにK2は小穴が重なったような底面形状を持ち、土層断面を観察すると、1・2・5・6層と3・4・7層で別遺構とも判断でき、掘っては埋め戻すという行為が複数回行われた可能性が考えられる。小穴はP1・2・4・5が住居上屋を構成する主柱穴と推定される。いずれも開口部径30cm前後、深さはP5以外50cmを超える。P4・5では柱痕も確認したが、記録を欠いてしまった。これらの柱間は、東西が約270cm、南北が約300cmである。その他P3はカマドの対面、P7は南西隅、P6・8・9はカマド周辺に位置する。

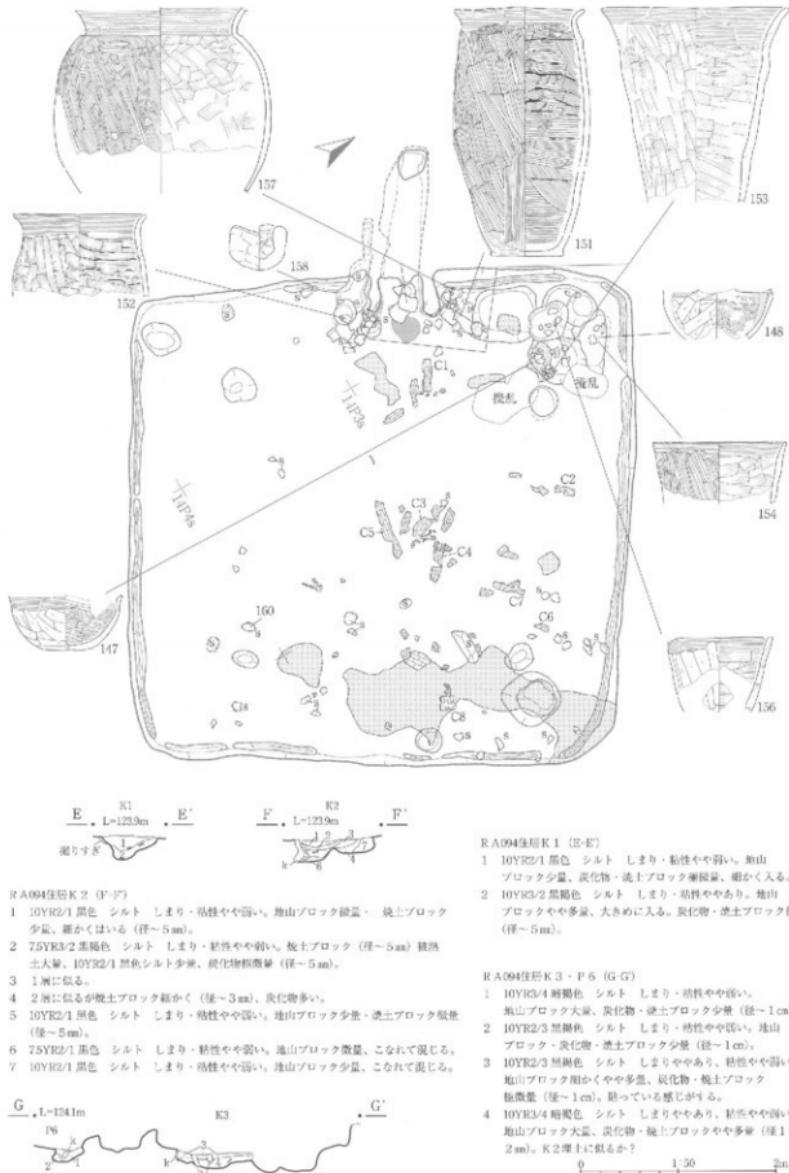
〈カマド〉 北西壁、中央よりやや北寄りに位置し、煙道方向はN-53°-Wである。袖は、壁側の地山



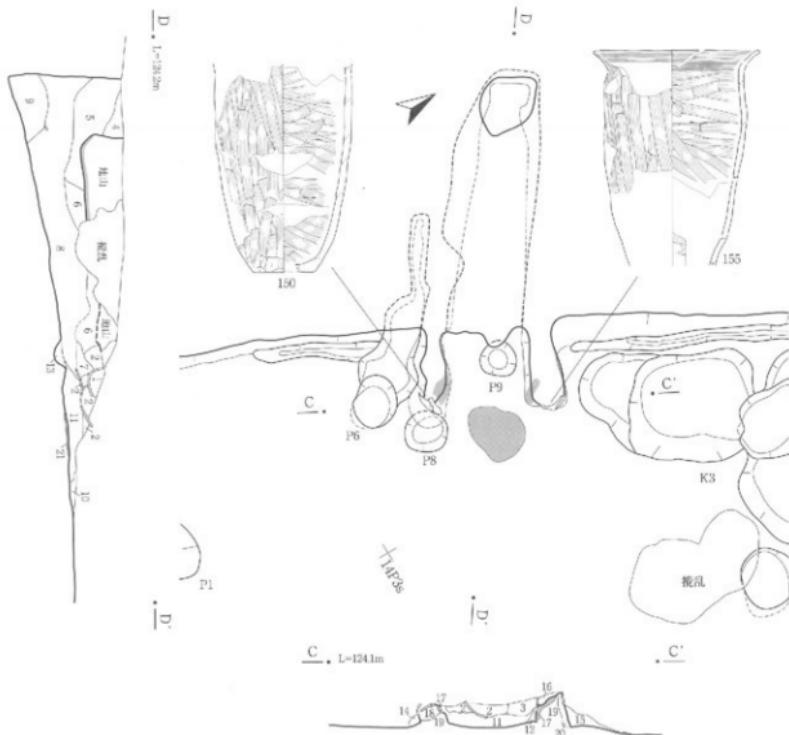
R A094住居 (A-A'・B-B')

- 1 IOYR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性や弱い。地山ブロック大きく頭状（径～5cm大）に少量入る。量も場所強い。
- 2 IOYR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性や弱い。地山ブロック細微量。混入物少くきれいな層。
- 3 IOYR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少並、細かく（径～5mm）全体に混じる。炭片含む。
- 4 3層に似るが、炎化物・埴上ブロック含まない層。
- 5 IOYR2/2 黑褐色 シルト しまり、粘性やや弱い。地山ブロック細かく（径～5mm）、全体に多く混じる。炭化材・炭片（径～1cm）を多く含む層。地山ブロック細微量（径2～3mm）。
- 6 IOYR2/1 黑色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック混じてこれで混じる。
- 7 IOYR2/1 黑色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少並、全体に混じる。
- 8 IOYR2/1 黑色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック細かく（径～5mm）少並、全体に混じる。
- 9 IOYR2/1 黑色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロックや多量、主全体と細かく混じる。
- 10 IOYR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック大量、急状に混じる。IOYR2/1 黒色シルトも少量含む。

第61図 R A094竪穴住居跡 (1)



第62図 R A094竪穴住居跡 (2)



R A094住居カマド (C-C'・D-D')

- 1 IOYR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック・焼土ブロック無微量 (径1~2mm)。
- 2 IOYR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少量 (径1~1cm)。
- 3 IOYR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
- 4 IOYR2/2 黒褐色 シルト しまりやや弱い。地山ブロックや多量金物に混じる。やや多量。
- 5 IOYR3/1 黒褐色 シルト しまり弱い、粘性ややあり。遠山ブロックこれにて全体に覆する (4層より多いが炭化物・焼土ブロック無微量)。
- 6 IOYR3/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。遠山ブロック大きく述べに多量 (径~5cm)、炭化物・焼土ブロック細かく微量 (径2~3mm)。
- 7 7SYR3/2 黑褐色 シルト しまり・粘性やや弱い。被熱した焼土。瓦井焼土。
- 8 IOYR2/2 黒褐色 シルト しまり弱い、粘性ややあり。遠山ブロック少量 (径1~2cm)、焼土ブロック少量全体に混じる (径~1cm)。炭化物微量 (径~5mm)。大井窯跡のような質焼土ブロック名大体く混じる。
- 9 8層に既に瓦井焼土ブロック多く、焼土ブロック少くなる。
- 10 IOYR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック無微量、焼土ブロック・炭化物少量 (径5mm~1cm)。
- 11 7SYR3/4 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。被熱土・焼土ブロック (径~5mm) 多く含む。以文化物微量 (径~1cm)。
- 12 5YR4/4 ないし黒褐色 シルト 焼土ブロック層。前崩落土。
- 13 IOYR3/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。遠山ブロック微量 (径~1cm)、焼土ブロック微量 (径~5mm)、炭化物微量 (径2~3mm)。
- 14 IOYR3/3 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。後上ブロック微量 (径~5mm)。
- 15 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性弱い。遠山ブロックやや多量 (径~1cm)。
- 16 IOYR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性弱い。遠山ブロック少量、炭化物・焼土ブロック極量、細かく入る。
- 17 5YR3/0 黑褐色 土 壤熱質。
- 18 IOYR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性弱い。遠山ブロック・炭化物少量、焼土ブロック細かく混じる。
- 19 10YR4/6 雪色 地山層。
- 20 18層に似るが、炭化物・焼土ブロック含まない。
- 21 7SYR3/4 黑褐色 烧土層。被熱ともや弱い。

0 1:25 1m

第63図 R A094竪穴住居跡 (3)

層を掘残し、燃焼部側には土器を芯材とし使用しており、土器との隙間には地山土と黒褐色土を入れている。燃焼部底面には、 $29 \times 26\text{cm}$ の焼成範囲が広がり、袖内側も被熱する。焼上範囲の奥、壁際には開口部径20cm程度の小穴が検出された(P10)。穴内には炭化物・焼土ブロックが含まれており、その位置を合わせて考えると、支脚が抜き取られた痕跡と考えられる。煙道部は、全長約130cm、燃焼部底面から煙出しへ向かって緩やかに下りくり抜かれる。煙道天井部はよく被熱する。埋土は、被熱土が崩落し、これを多く伴いながら黒褐色土～暗褐色土(8・9・11層)が堆積後、壁際の煙道天井部が崩落(7層)、再び黒色～黒褐色土が地山ブロック・焼土ブロック・炭化物を混入しながら流入(1・2・4～6層)しており、自然堆積と推定される。カマドの南隣には、小穴(P6)と地山をトンネル状に掘った溝状のプランが確認された。埋土を記録できなかったが、床掘り方土と類似した層が堆積している。炭化物・焼土ブロックを含んでおらず、カマドを掘りかけ途中で作業をやめ、これよりも北側に作り替えたの可能性を考えらる。この煙道掘りかけ？入口(住居窓)には疊が埋め込まれていた。

〈出土遺物〉 土師器10405g(壺類161g、甕類10244g)出土し、総重量の50%、壺類4点、甕類8点、紡錘車・石器・鉄製品を各1点掲載した(147～161、第106・107図、写真図版82・83)。150・155の土師器壺はカマド芯材、それ以外の器形を復元できた個体は、カマド周辺とK2内に集中する。158は小形の壺で、カマド南側、壁際より出土した。炭化物は、鑑定の結果クリが大半を占め、ケヤキ・ナラ・エンジュも確認された。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

R A095整穴住居跡(第64・65図、写真図版43～45)

〈位置・検出状況〉 A区南西部、14P6uグリッド付近に位置する。地山層(IV層)で明瞭な黒色土の方形プランとして検出した。

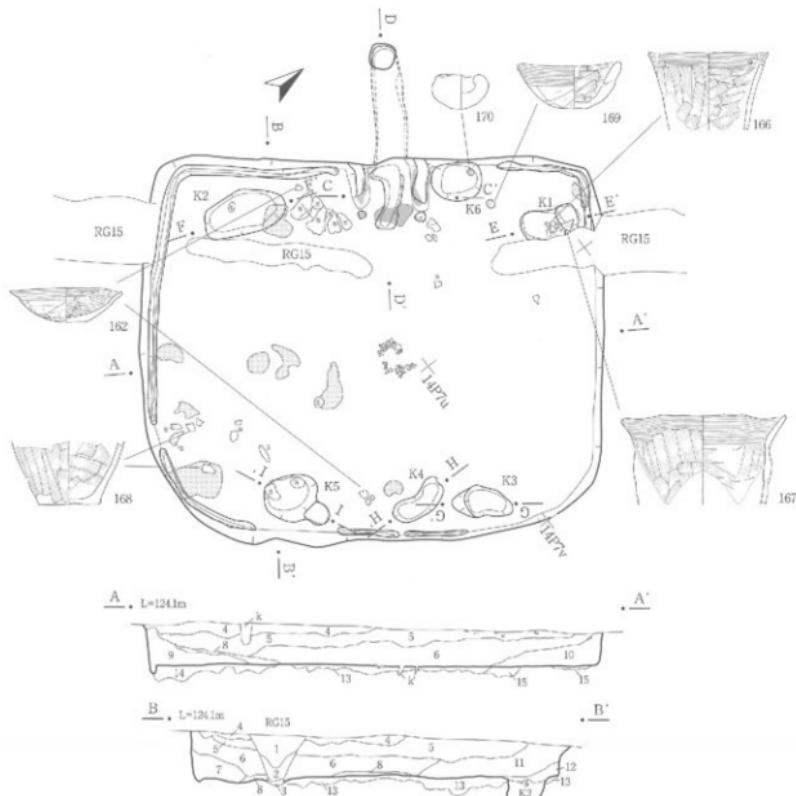
〈重複関係〉 RG015溝跡・RD158陥し穴状造構と重複し、溝跡より古く、陥し穴状造構より新しい。

〈平面形・規模〉 $3.90 \times 4.68\text{m}$ の方形、主軸方位はN-52°-W、床面積は 16.1m^2 である。

〈埋土〉 壁際の黒褐色土層(9層)上面から床面に沿って焼土ブロックを多く含む層が堆積、その後黒色～黒褐色土が覆い埋没する。最上層の4層以外、壁際の層も含め、地山ブロックの混入量が多く、粒径も大きいことから、人為的に埋め戻された可能性がある。焼土ブロック層(8層)は住居南側に広がっているが、小塊で点在するのみで、炭化物は検出されなかった。壁際の堆積土も人為堆積とすると、焼土ブロック層も人為的に投棄されたものか、もしくは焼失・倒壊したもの可能性を考えられる。

〈壁・底面〉 壁の残存状態は良く、検出面からの高さは30～50cm程度である。床面は、IV層まで掘り下げ、掘り方土を均している。掘り方はカマド周辺を除き住居全体で確認でき、壁際が深く黒色土を多く含み、中央部が浅く地山上の混入量が増える。床面は比較的しまっており、とくに中心部は周囲よりさらに固くなる。周溝は、北東壁側を除き断続的に巡り、幅4～11cm、深さ5～15cm程度である。その他土坑が6基検出された。いずれも住居壁に近い場所で、K1・2・6はカマド側、K3～5はその対面に位置する。K1・3・4は直径60cm程度の不整縁円形で、埋土は黒褐色土を主体とし地山ブロックを含む。K2・5は、黒色～黒褐色土を主体とするが、地山土を多く含む層を挟み、層状に堆積している。K6は、地山ブロック・焼土ブロック・炭化物が斑状に混ざっており、K2・5・6は人為的に埋め戻されたものと考えられる。主柱穴等の小穴は検出されなかった。

〈カマド〉 北西壁ほぼ中央に設置され、煙道方向N-57°-Wである。袖は地山土を掘り残している。両



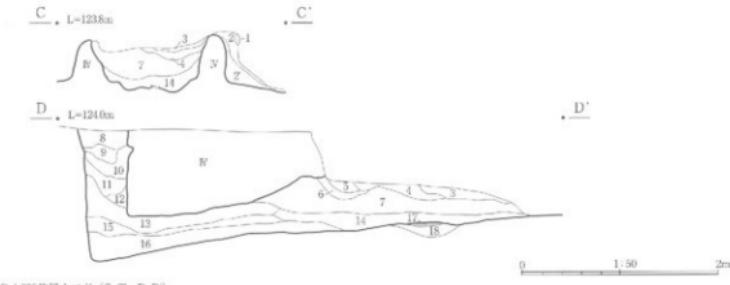
RA095住居 (A-A'・B-B')

- 1 10YR2/1 黒褐色 シルト しりりややあり。粘性やや低い。白色の苔子含む。地山ブロック強度、こなれて混じる。
- 2 10YR2/1 黒色 シルト しよりややあり。粘性やや低い。地山ブロック微量、こなれて混じる。
- 3 10YR2/1 黑褐色 シルト しまりやや低い。粘性ややあり。地山ブロック斑状に少量（径～2cm）。
- 4 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりやや低い。粘性やや低い。地山ブロック葉状、面かく入る（径1～2cm）。炭化物微量（径～1cm）。
- 5 10YR2/2 黑褐色 しまりややあり。粘性やや低い。地山ブロック全体に葉状、やや多量（径～1cm程度）。炭化物・施土ブロック 程度（径～1cm）。
- 6 10YR2/2 黑褐色シルト大量、10YR2/1 黑色シルトやや多量、地山ブロックや多量、頂状に大きくなっている（幅2～3cm程度多い）。しまりややあり。粘性やや低い。
- 7 10YR2/2 黑褐色 シルト しまり・粘性やや弱い。地山ブロック面かく（径～5cm）微量。
- 8 10YR2/2 黑褐色 シルト しより・粘性やや弱い。5YR3/6暗赤褐色斑状ブロック多量。
- 9 10YR2/2 黑褐色 シルト しよりやや弱い。粘性ややあり。地山ブロック少量、耕かく（径～5mm）、所々大きくなっている（径～5cm）入る。
- 10 7箇に分れる地山ブロックの程度や大きさ。
- 11 10YR3/3 黄褐色 シルト しまり・粘性やや弱い。地山ブロックやや多量、10YR2/2 黑褐色ブロック少量、全体に斑状に入る。
- 12 10YR2/2 黑褐色 シルト しまり・粘性やや弱い。地山ブロック・10YR5/4に比べ黄褐色粘土質シルト（B'解下の明るい地山）多量、10YR2/2 黑褐色シルト少量斑状に混じる（径1～2cm）。しまり・粘性ややあり。
- 13 10YR4/6褐褐色シルト（B'解）-10YR5/4に比べ黄褐色粘土質シルト（B'解下の明るい地山）多量、10YR2/2 黑褐色シルト少量斑状に混じる（径1～2cm）。しまり・粘性ややあり。
- 14 10YR2/1 黑色 シルト しまり・粘性ややあり。地山ブロック（10YR5/4に比べ黄褐色）大量、主体土は上面に多い。
- 15 10YR2/1 黑色シルトやや多量と地山ブロック大量こなれて混じる。しまりややあり。粘性やや弱い。

0 1:50 2m

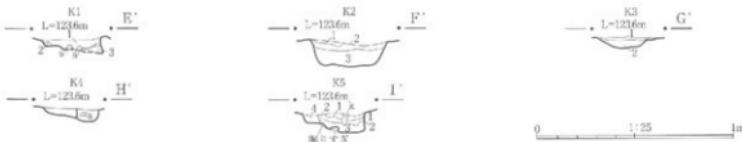
第64図 RA095壁穴住居跡 (1)

3 検出された遺構と遺物



R A095住居カマド (C-C'・D-D')

- 1 地山ブロック層
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりやあり、粘性ややあり。地山ブロック微量 (径~5mm)。
- 2' 地山ブロック層
- 3 2層と似る地山ブロック微量 (径~5mm)。
- 4 10YR4/4 黄褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック層 (混ざりものなし)。瓦片等落層。
- 5 2層に似る。
- 6 4層と同地山ブロック層だがしまり弱い。天井板落層。
- 7 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック細かく微量 (径1~2mm) 程量、被熱ブロック微量 (径~5mm)。
- 8 2層に似る。
- 9 10YR3/3 黒褐色 シルト しまりややあり。地山層移層? 屋敷土。
- 10 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりやや弱い。粘性ややあり。10YR3/3 黒褐色シルト、地山ブロックこなれて細かく混ざる。
- 11 10YR3/3 黑褐色 シルト 9層と同じだがしまり弱い。
- 12 10YR2/1 黑褐色 シルト しまりやや弱い。地山ブロック微量 (径~1mm)。
- 13 10YR2/2 黑褐色 シルト しまり弱い。粘性ややあり。地山ブロック少量、被熱ブロック微量 (径~1cm)。
- 14 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりやや弱い。粘性ややあり。地山ブロック微量 (径~5mm)、被熱ブロック・粘土ブロック少量と炭化物微量が斑状にはいる (径~3mm)。
- 15 14層に似るがしまり弱くなる。
- 16 10YR2/2 黑褐色 シルト しまり弱い。粘性ややあり。地山ブロック多量大きくなれて混じる。
- 17 SYRK2/2 黑褐色 シルト 梁上層。
- 18 10YR2/2 黑褐色 シルト しまり、粘性あり。地山ブロックやや多量全体に混じる。



R A095住居 K 1 (E-E')

- 1 10YR2/2 黑褐色 シルト しまり、粘性ややあり。地山ブロック少量、10YR2/1 黑色シルト微量 (径~5mm)。
- 2 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり。地山ブロック多量。
- 3 1層に似るがしまり弱い。

R A095住居 K 2 (F-F')

- 1 10YR2/1 黑色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック微量。
- 2 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり。粘性やや弱い。地山ブロックやや多量大きくなれる (径2~3cm)、炭化物・被土ブロック微量 (径1~2cm)。
- 3 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少量 (径~1cm)、炭化物・被土ブロック微量 (径~2cm)。

R A095住居 K 3 (G-G')

- 1 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック微量、25Y6/2 黑褐色土大きく塊状に少量 (径5cm)。
- 2 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少量 (径5mm~2cm)。

R A095住居 K 4 (H-H')

- 1 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少量 (径~5mm)、炭化物・被土ブロック少量 (径~5mm)

R A095住居 K 5 (I-I')

- 1 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック微量 (径~5mm)、炭化物微量 (径~1cm)。
- 2 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック多量、細かく全体に混じる。
- 3 10YR2/1 黑色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック微量 (径~1cm)。
- 4 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック少量、細かく混じる (径~5mm)。

第65図 R A095竪穴住居跡 (2)

袖の先端付近には、直径10cm弱の小穴が検出された。埋土はK6と類似しており、焼土ブロック・炭化物を混入しており、芯材の抜き取り痕の可能性が考えられる。燃焼部底面には39×22cmの焼土が形成され、袖内側も被熱する。焼成面の下には逆L字状の掘り込みが確認された。煙道部は全長約120cm、燃焼部底面から突出しまで緩やかに下りくり抜かれる。埋土は黒色～黒褐色土を主体とし、煙道底面に地山ブロックを大きく混入する層（16層）が堆積、その後被熱土・ブロック・炭化物を含む層（7・13～15層）で煙道内から燃焼部が埋まり、さらに天井部・壁の崩落（4・5・9・11層）と主体土の流入（3・5・8・10・12層）を繰り返し埋没する。自然堆積と考えられ、煙道部下半（天井崩落より下位層）はしまりが弱い。

〈出土遺物〉 土師器4485g（坏類320g、甕類4165g）出土し、総重量の約30%、坏類7点、甕類3点、紡錘車・鉄製品を各1点掲載した（162～173、第107図、写真図版83）。器形の復元が可能な個体は、床面～埋土下部堅際・K1内からの出土が多い。小形の坏（169・170）はカマド脇北側、171はRG015との重複部付近と比較的近い位置にまとまっていた。またカマド脇南側には碟が敷き並べられていた。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

R A096堅穴住居跡（第66・67図、写真図版46）

〈位置・検出状況〉 A区南西部、1MP19mグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で黒色土の方形プランとカマド燃焼部焼土を検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 4.10×4.32mの方形、主軸方位はN-64°-W、床面積は15.6m²である。東壁の一部が張り出している。

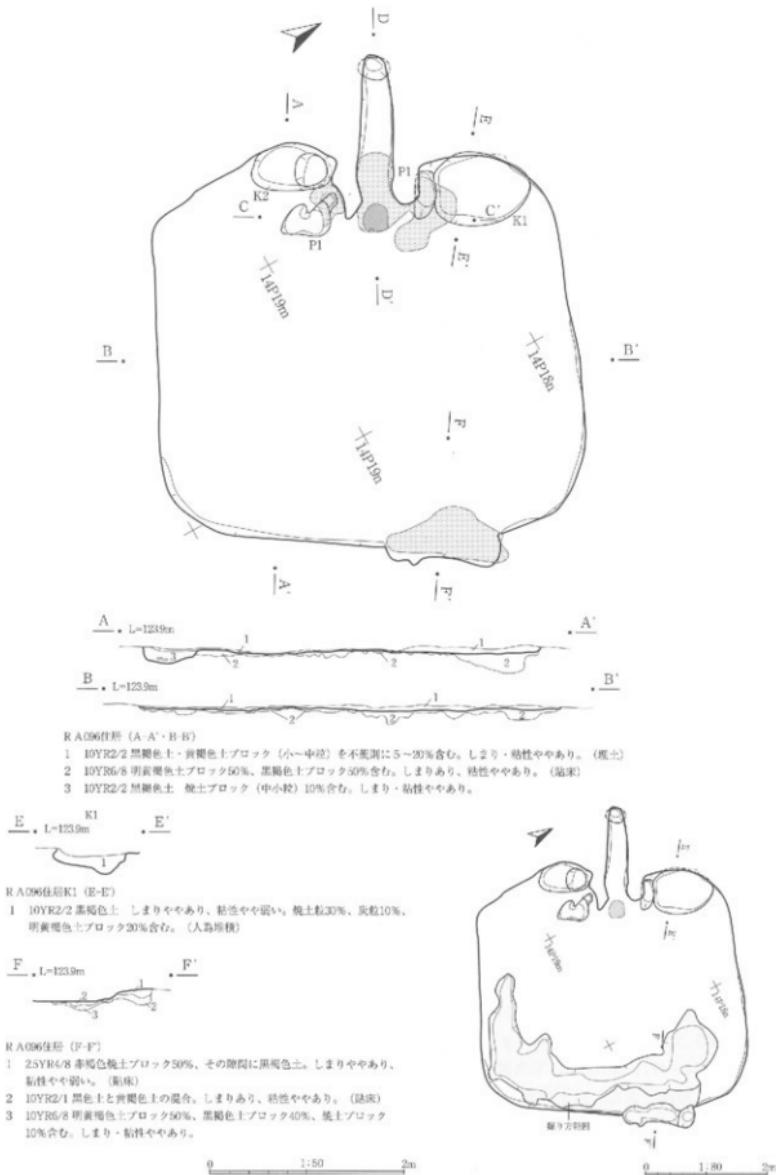
〈埋土〉 厚さ数cm程残るのみで、黒褐色土に地山ブロックを混入する。

〈壁・底面〉 壁の残存状態は悪く、北東側で高さ数cm、南西側はわずかに窪む程度である。IV層まで掘り込み、掘り方土を均し床をしている。掘り方土の厚さは中央部が浅く壁際が深くなり、特にカマド対面の南東側が深い。東側の張り出した部分には、焼土ブロックが広がるが、掘り方内にも焼土ブロックが含まれ、本遺構が焼失したことを示すものではなく、床面を均す際に混入したものと考えられる。この張出部の埋土を取り除いたところ、柱穴状の掘り込みが2個並んで検出された。住居内の位置からこの張出部は、出入り口（階段等？）施設の可能性が考えられる。カマド脇には上坑が2基（K1・K2）設けられており、その位置から貯蔵穴と推定される。両者とも底面は平坦ではなく埋土中に焼土ブロックを混入する。またカマド袖と貯蔵穴の間には、それぞれ小穴が検出された。深さは、貯蔵穴と同じくらいで埋土中に多くの焼土ブロックが含まれていた。周溝・主柱穴は検出されていない。

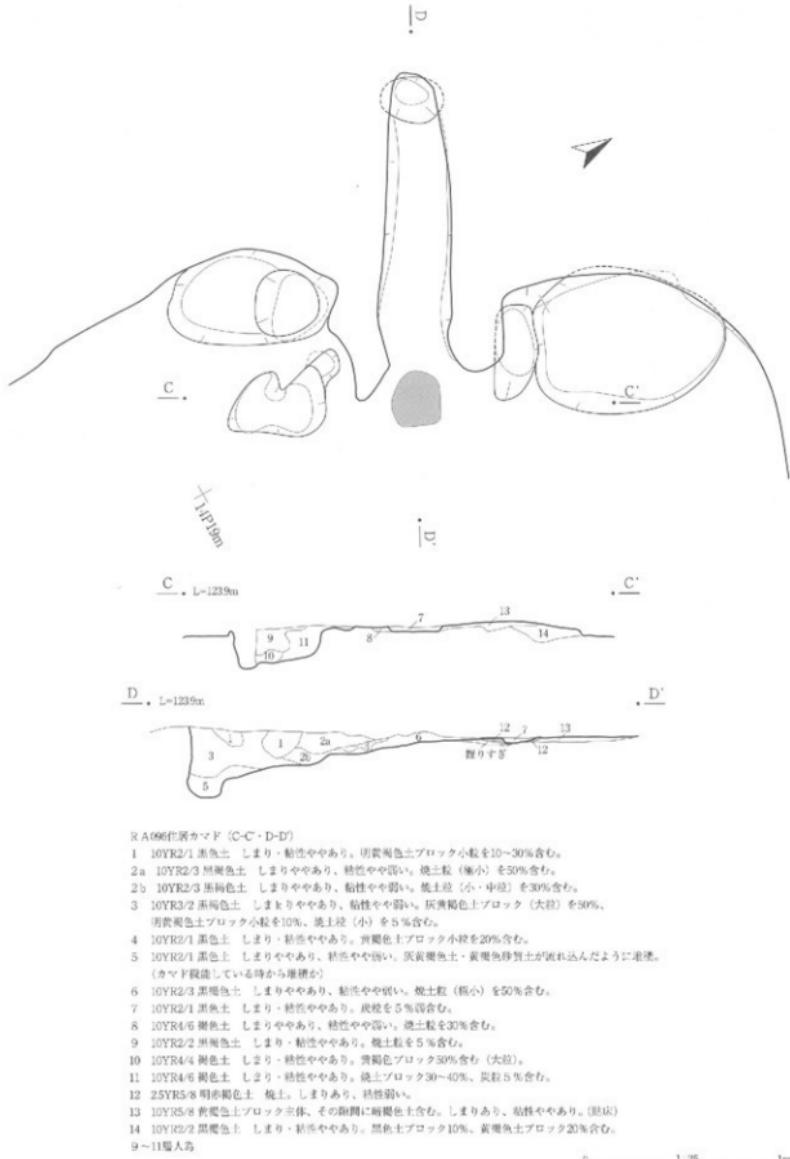
〈カマド〉 北西壁中央、やや北寄りに設置され、煙道方向はN-61°-Wである。袖は地山土を掘り残しており、燃焼部底面は25×28cmの焼成面が広がる。煙道部は全長約100cm、燃焼部底面から緩やかに下って、煙出しで一段低くなる。埋土は、黒色～黒褐色土を主体とし、焼土ブロック・地山ブロックを混入する。壁や天井部が崩落した痕跡（地山ブロック層）は堆積していない。

〈出土遺物〉 土師器1576g（坏類17g、甕類1559g）出土し、総重量の約15%、坏類1点、甕類2点を掲載した（174～177、第108図、写真図版83・84）。床面からの出土は少なく、壁のコーナー付近に若干残っている程度である。出土遺物の大半は貯蔵穴内からであるが、接合状況は悪く、器形を復元できた個体は限られていた。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。



第66図 R A096竪穴住居跡 (1)



第67図 R A096竪穴住居跡 (2)

R A056竪穴住居跡（第68図、写真図版47）

〈位置・検出状況〉B区東側、11P22uグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で明瞭な黒色土の方形プランとして検出した。束縛（全形の2/3程度）は第21次調査で調査済みである。

〈重複関係〉なし。

〈平面形・規模〉本次調査で検出した範囲は1.70×3.45m、主軸方位はN~93°~Wである。

過去の調査と合わせると3.45×3.40m、床面積は11.7m²程度と推測される。

〈埋土〉黒色土を主体とする。壁際に堆積する層がより黒味が強く、A区の住居跡と比べ、埋土全体の地山ブロックの混入量が少ない。2層上面には炭化材が残っており、過去の調査結果も加味しなければならないが、焼失、倒壊した可能性を考えられる。

〈壁・底面〉検出面からの壁の高さは20cm程度、IV層からV層上面まで掘りこんでいる。壁際は掘り方埋土を均し床面としているが、中央部は床面に疊が露出する。

〈カマド〉東壁に設置されており、第21次調査にて調査済みである。

〈出土遺物〉土師器787g（坏類243g、甕類544g）、須恵器49g出土し、総重量の約90%、土師器坏類2点、甕類1点、須恵器瓶類1点を掲載した（178~182、第108図、写真図版84）。床面付近から埋土下部からの出土が多い。

〈時期〉出土遺物から平安時代と判断される。

R A063竪穴住居跡（第68図、写真図版47）

〈位置・検出状況〉A区北西端の微高地の12P19kグリッド杭を中心に位置し、削平されたIV~V層中で検出した。本遺構は第24次調査で検出・精査が行われた竪穴住居であり、未精査となっていた南西隅部分について検出したものである。24次調査終了後の区画整理に伴う道路工事によるものと思われるが、24次調査当時よりも削平された模様で残存状況は極めて悪い。

〈重複関係〉なし。

〈平面形・規模〉24次調査成果から、一辺約4m前後の隅丸方形と推測され、主軸方位はおよそ東~西である。

〈埋土〉残っていた埋土は黒色土の單層であった。

〈壁・底面〉壁は掘るかに外傾して立ち上がり、壁高は8cm前後を測る。床面は概ね平坦で堅継、點床が施されていた。本遺構の位置するあたりはV層砂礫層が部分的に露頭しており、掘り方は一部V層を掘り込んでいた。

〈床面施設〉なし。

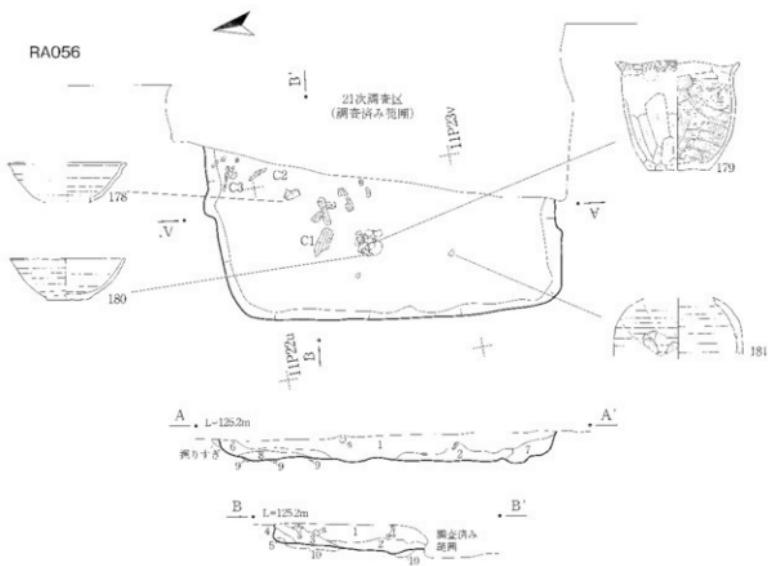
〈出土遺物〉遺物は、掲載した須恵器瓶の頸部片1点約56gが出土した。（183、第108図、写真図版84）

〈時期〉24次調査から平安時代（9世紀後半から10世紀初頭）と思われる。

R A097竪穴住居跡（第69・70図、写真図版48・49）

〈位置・検出状況〉A区北側中央部の中央旧河道内、12Q25g、13Q1gグリッドを中心位置する。本遺構は旧河道内ということもあって周辺は基本層位の状況が比較的良好でII層が15cm程度残っていたことからII層面での検出を行っているが、隣接するRA084竪穴住居跡と同様に遺構覆土とII層黒褐色土の判別が難しく、実質的な確認はIII層上面での検出となった。

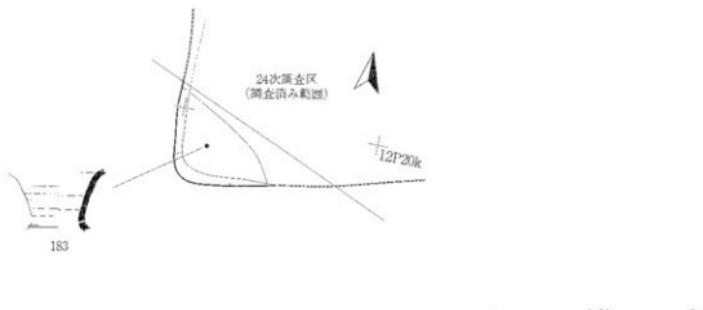
〈重複関係〉直接的な重複はないものの、位置的にRA084竪穴住居跡と同時存在はあり得ないことから、新旧関係にあると思われ、出土遺物から本遺構が新しい。



R A056住居 (A-A'・B-B')

- 1 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。調合む。地山ブロック含まない。
- 2 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。1層よりやや黒味強い。上面に炭化材、炭片のる。
- 3 10YR2/1 黒色 シルトしまりやや弱い。粘性やや弱い。地山ブロック微量、こなれて全体に混じる。3層より弱い。
- 4 10YR2/1 黒色 しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック強度、こなれて全体に混じる。
- 5 10YR3/4 細弱筋 地山ブロック層。
- 6 10YR2/1 正色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。黒味あり。地山ブロック亜微量 (厚1~2mm)。
- 7 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。黒味あり。調合む。地山ブロック極微量 (厚1~2mm)。
- 8 10YR2/2 黒褐色 シルト しまり・粘性ややあり。地山ブロック少量化こなれて混じる。
- 9 10YR2/2 黒褐色 シルト しまり・粘性ややあり。調合多く混じる。
- 10 10YR2/2 黒褐色 シルト しまり・粘性ややあり。調合多く混じる。

RA063



第68図 R A056・063堅穴住居跡

〈平面形・規模〉 平面形は東壁長約3.7m、南壁長約3.2m、西壁長約3.6m、北壁長約2.8mを測る歪な隅丸略方形を呈し、床面積は約9.4m²である。主軸方位はS-74°-Eである。

〈埋土〉 埋土は8層に細分されるが、全体的に黒ボク土に地山土・焼土のブロックや塊と炭化物が混じる人為的堆積で、カマドのある北東部の中位から下位には廃棄と思われる焼土の広がり、中央部下位には炭化材が多く認められた。

〈壁・底面〉 壁はほぼ垂直に立ち上がるが、一部崩落により上位が外反する部分もある。検出したⅢ層からの壁高は40cm前後を測る。床面は概ね平坦で堅締、全体的に貼床が施されており、特にカマドのある北東部から中央部を除いた壁際では深い掘り方となっていた。

〈床面施設〉 床面施設としては東壁際のカマド南横に2基、北壁際の中央と南西隅に各1基のK 1～4の土坑4基を検出し、北東部と西壁際では6個の柱穴状ピットも検出した。

K 1 土坑は東壁際の中央に位置し、平面形・規模は、開口部では約50×70cmの略楕円形を呈し、断面形は深さ約5cmほどの浅い皿形を呈する。底面南西側には径約40cm、土坑底面からの深さ約22cmの柱穴状ピットが1個ある。埋土は土坑と柱穴で2層に分層されるが、いずれも焼土・炭化物混じりの人為的堆積である。

K 2 土坑は南西隅付近の壁際位置し、平面形・規模は、開口部では約57×50～65cm、底部は20×44cmの不整形を呈し、住居内側の上位は深さ4cm前後のテラス状となっていた。断面形は南壁側が外側にかなり抉れた袋状を呈し、深さ約30cmを測る。埋土は4層に細分され、上位は黒ボク土、中位以下は褐色土主体の地山上・焼土・炭化物の混じる人為的堆積である。

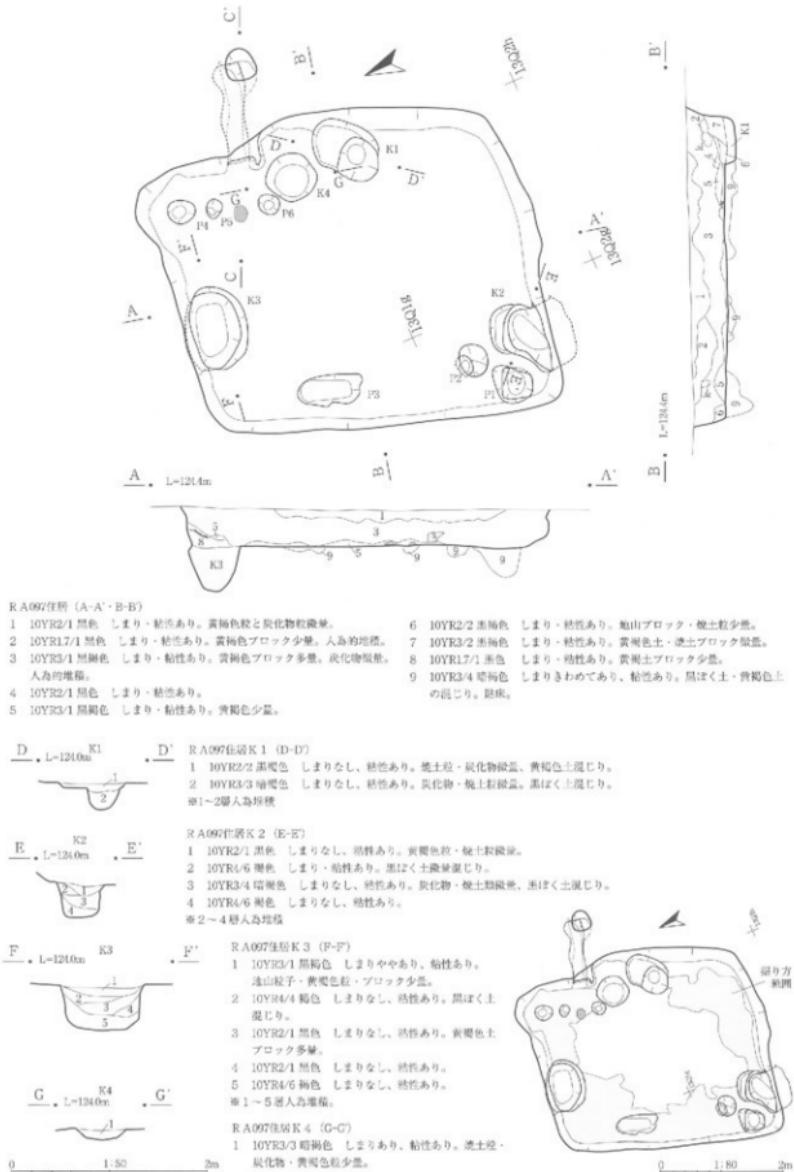
K 3 土坑は北壁際の中央に位置し、平面形・規模は、開口部56×87cm、底部30×51cmの略楕円形を呈し、断面形は深さ約46cmの丸底風の鉢形を呈する。埋土は5層に細分される黒ボク土と褐色土の混じる人為的堆積である。

K 4 土坑はカマドの南脇に位置する貯蔵穴と思われるもので、平面形・規模は、開口部径約50cmの略円形を呈し、断面形は深さ約10cmの丸底鉢形を呈する。埋土は焼土・炭化物が混じる人為的堆積の單層である。

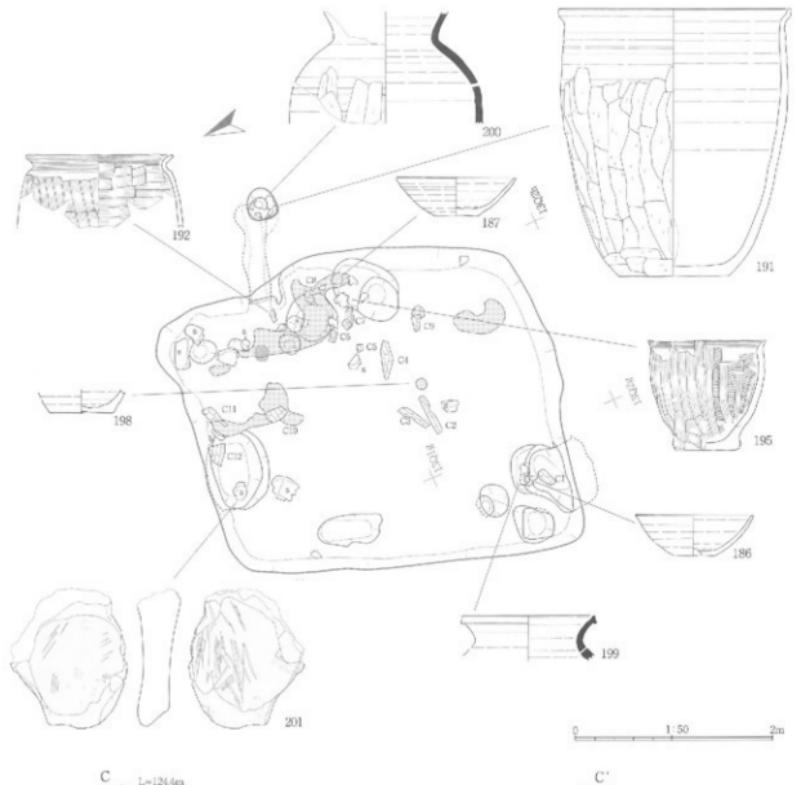
P 1 は開口部径約32cm、深さ約26cm、P 2 は開口部径約32cm、深さ約25cm、P 4 は開口部径約24cm、深さ約5cmの円形で、P 3 は開口部28×62cm、底部20×51cmの楕円形で、柱穴2個の重複か、抜き取り痕と思われる。P 5・6 は径15～20cm、深さ5cmほどの略円形を呈し、位置的にカマド芯材の抜き取り穴と考えられる。

〈カマド〉 カマドは東壁の北側に付設されていた。本体は、検出時には天井部は消失しているが、袖部は遺存しているものと思われたが、精査の結果、袖部は南側の壁際の一部が造り出しで残っていたが、大半が潰れていることが判明した。上記に示したとおり、芯材として土器を埋置したと思われる小ピットが検出されている。燃焼部底面は火熱により径15cmほどの略円形で厚さ約1cm未満と弱く赤色変化していた。煙道は、南寄りの斜めに割り貫かれており、奥行き約1m、径約22cmで外側に向かい下り勾配となっている。煙出しピットは、煙道からさらに南寄りにずれて掘られており、開口部径約30cm、深さは煙道の中位まで約59cmを測る。

〈出土遺物〉 遺物は、土師器の壺形土器片と壺形土器片約7kgと須恵器瓶の破片数点が出土し、土師器の壺型土器が約9割を占める。壺形土器の一部を除き大半がロクロ成形の土器である。掲載した土器は出土量の約5割にあたる。出土状況としては遺構埋土と同様にすべて一括的に廃棄されたものである。形状をおよそ把握できた個体としては、カマド煙出しピットに廃棄されていた壺形土器1点(図番191)とK 2 土坑テラス出土の壺形土器1点(図番186)、K 1 検出面から出土の壺形土器と壺形



第69図 R A097堅穴住居跡 (1)



- | | |
|---------------------------------------|-----------------------------------------------|
| R.A097住居カマ F (C-C') | |
| 1 IOYR4/4 黄褐色 しまりあり、粘性なし。砂質。 | 8 IOYR4/6 黄褐色 しまりややあり、粘性あり。蘿の崩落。 |
| 2 IOYR2/2 黒褐色 しまり、粘性あり。黄褐色を微量。 | 9 IOYR2/1 黑色 しまりなし、粘性あり。地山ブロック供置。 |
| 3 IOYR2/3 黒褐色 しまりなし。粘性あり。黄褐色土、薄く土混じり。 | 10 7SYR2/2 黑褐色 しまりなし、粘性あり。底上ブロック・黄褐色土 ブロック多量。 |
| 4 IOYR4/4 黄褐色 しまり・粘性なし。砂質。Vf層に厚く土混じり。 | 11 IOYR2/3 黑褐色 しまりなし、粘性あり。黄褐色土少量。 |
| 5 7SYR3/4 塗褐色 塗土ブロック。 | 12 IOYR3/3 黑褐色 しまりなし、粘性あり。塗土粒微量。 |
| 6 IOYR4/4 黄色 しまり・粘性なし。砂質。 | 13 IOYR2/2 黑褐色 しまりなし、粘性あり。黄褐色土混じり。 |
| 7 IOYR2/3 黑褐色 しまりなし、粘性あり。黄褐色土少量。 | 14 7SYR3/4 塗褐色 热焼部地土。 |

第70図 R.A097竪穴住居跡 (2)

土器各1点（図番187・195）と埋土出土の环形土器2点（図番188・190）がある。このほかに埋土中から黒墨土器1点（図番185）と台石1点（図番201）、K3埋土から棒状鉄製品1点（図番202）が出土した。出土した炭化材については同定の結果、クリとケヤキとの鑑定であった。（184～202、第108・109図、写真図版84・85）

〈時期〉 出土遺物から平安時代と判断される。

（2）掘立柱建物跡

R B005掘立柱建物跡（第71図、写真図版50）

〈位置・検出状況〉 A区南西部、13P21sグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面で検出した。

〈重複〉 RD141土坑と重複するが、新旧関係は確認できていない。

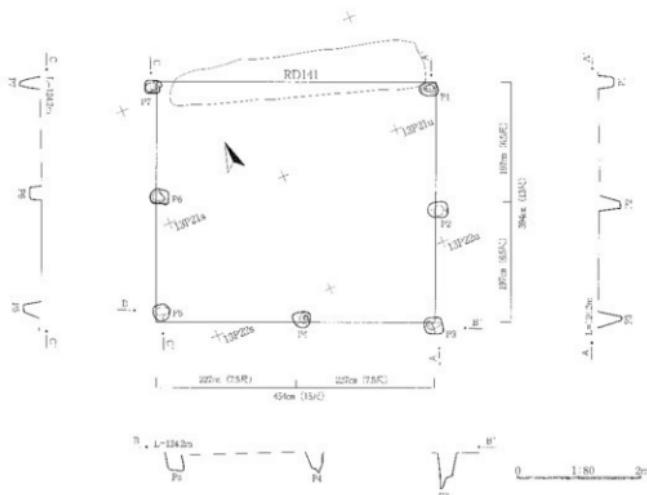
〈規模・方向〉 桁行4.54m（15尺）、梁間3.94m（13尺）、面積17.89m²の掘立柱建物跡である。軸方向はN-66°-W。

〈柱間寸法〉 桁行で227cm（7.5尺）、梁間で197cm（6.5尺）を使用している。

〈柱穴〉 7個使用した。直径はすべて30cm前後で揃うが、深さは23～62cmと様々である。P1では径13×12cm、深さ27cmの柱痕跡を確認した。本来はRD141土坑との重複部にP4と対応する柱穴が存在し8個の柱穴で建物を構成していたものと推定される。

〈出土遺物〉 出土していない。

〈時期〉 不明である。



第71図 RB005掘立柱建物跡

第6表 RA・RB柱穴一覧(1)

編集番号	遺跡名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	柱体寸	柱軸(cm)	土壌状況・備考
RA071	P1	45	49	22	7.5YR3/1 黒褐色	-	砂質シルト。しまりややあり、粘性やや弱い。地山の堆山ブロック層に焼上ブロック多く混在にみる(3cm~3cm程度)。炭化物発現(径=1cm)。上部は10YR3/2 黑褐色と土風じが隠り方内にはない(断面下に埋めか?)
RA080	K1	70	47	15	断面あり	-	
RA080	P1	34	49	62	-	15×14	
RA080	P2	33	29	62	-	17×16	
RA080	P3	28	26	50	-	15×15	
RA080	P4	26	25	59	-	14×13	
RA080	P5	27	26	7	-	-	
RA080	P7	23	22	6	-	-	
RA080	P8	31	24	-	-	-	
RA081	K1	44	42	12	断面あり	-	
RA081	K2	61	42	30	-	-	
RA081	T1	26	24	15	-	-	
RA082	K1	83	46~56	16	断面あり	-	
RA083	K1	76	75	31	断面あり	-	
RA083	K2	68	68	14	断面あり	-	
RA083	K3	151	37	20~30	断面あり	-	
RA083	K4	82	79	50	-	-	
RA083	P1	35	32	70	-	21×18	
RA083	P2	36	36	64	-	22×18	
RA083	P3	27	25	57	-	22×21	
RA083	P4	43	43	59	-	23×20	
RA083	P5	25	24	33	-	22×19	
RA083	P6	30	29	52	-	20×15	
RA083	P7	51	34	15	-	-	
RA083	P8	26	29	9	-	-	
RA083	P9	29	15	11	-	-	
RA083	P10	23	26	12	-	-	
RA083	P11	28	25	15	-	-	
RA084	K1	60	59	19	断面あり	-	
RA084	K2	51	(51)	22	断面あり	-	
RA084	K3	(45)	43	32	-	-	
RA084	K4	40	37	14	-	-	
RA084	K5	58	30~20	13	-	-	
RA084	K6	32	36	15	-	-	
RA084	P1	35	34	100	-	23×20	
RA084	P2	38	30	71	-	-	
RA084	P3	31	29	76	-	-	
RA084	P4	38	32	98	-	26×21	
RA084	P5	32	46	20	-	-	
RA084	P6	27	23	11	-	-	
RA084	P7	25	25	40	-	-	
RA084	P8	17	20	4	-	-	
RA084	DK1	110	80	28	断面あり	-	
RA084	DK2	78	78	33	-	-	
RA085	P1	33	32	12	10YR2/1 黒色	-	しまり・粘性ややあり。地山ブロック多く埋生(径1~2cm)、10YR3/2 黑褐色とブロック入り(径2~3cm)埋生。
RA085	P2	27	28	23	10YR2/1 黒色	14×13・深さ12	P2~4透通。しまり・粘性ややあり。地山ブロック細かく埋生(径1~2cm)。
RA085	P3	21	22	17	10YR2/1 黒色	-	
RA085	T4	39	50	22	10YR2/1 黑色	-	
RA085	P5	49	49	25	10YR2/2 黑褐色	-	埋り方下げ中に見つかる。地山ブロックと土体土斑状に交りる。焼上ブロックで常に塊状に多く含む。
RA087	P1	32	23	13	-	-	
RA088	K1	60	26~44	14	断面あり	-	
RA088	K2	37	35	17	断面あり	-	
RA088	K3	44	33	20	断面あり	-	
RA090	K1	60	58	25	断面あり	-	
RA090	K2	30	40	24	断面あり	-	
RA090	K3	15	110	24	断面あり	-	
RA090	K4	58	48	27	10YR2/1 黑色	-	しまり・粘性ややあり。地山ソリッドモード多量、風化(1cm)。
RA091	P1	34	27	16	断面あり	-	
RA091	K1	73	97	33	断面あり	-	
RA091	K2	75	53	15~22	断面あり	-	

第6表 RA・RB柱穴一覧（2）

層域地層	岩場番号	基盤（m）	冠高（m）	深さ（m）	土質上 断面番号	柱穴（m）	土層記述・備考
RA091	K3	76	70	35	-	24×21・深 344	
RA091	P1	36	29	52	10YR2/1 黒色	P1～4汚泥	
RA091	P2	35	31	62	10YR2/1 黄色	22×23・深 561 10YR2/1 黄色	柱孔：やや明るめ。しまり・粘性やや低い。地山ブロック径は小さく はいる。
RA091	P3	31	28	69	10YR2/1 黑色	21×19・深 346 10YR2/1 黑色	掘り方：しまり・粘性やや低い。地山ソリッド大きさで漸次に減少する。 掘り方より土作付多い。
RA091	P4	36	31	50	10YR2/1 黑色	25×25・深 519 10YR2/1 黑色	
RA091	P5	35	31	11	-		
RA091	P6	Q27・P33、 基盤・4 (22)	10	10YR2/1 黑色	-	地山ブロック少、剥がれ感～5cm)、下部に流入する。	
RA091	P7	(20)	21	10	-		
RA092	P1	30	20	46	-	掘り方検査中に検出	
RA092	P2	26	24	37	-	掘り方検査中に検出	
RA093	P1	26	24	30	-	掘り方検査中に検出	
RA093	P2	26	30	32	-	掘り方検査中に検出	
RA094	K1	61	56	25	表面あり	-	
RA094	K2	102	83	14~38	表面あり	-	
RA094	K3	88	57	16	表面あり	-	
RA094	P1	33	34	58	10YR2/1 黑色	-	地山ブロック少、やや細かくはいる(延～1cm)、下部地盤が大量に 10YR2/1 黑色混入。良いか根板感(延～5cm)。
RA094	P2	28	18	50	10YR2/1 黑色	-	地山ブロック少、やや細かくはいる(延～1cm)、根板感ない。
RA094	P3	28	25	17	10YR2/1 黑色	-	地山ブロック・根化物・地土ブロック大量に入。根化物も少量。
RA094	P4	39	24	65	10YR2/1 黑色	-	地山ブロック・根化物・地土ブロック混入。根化物も少量。
RA094	P5	32	29	43	10YR2/1 黑色	-	地山ブロック・根化物・地土ブロック混入。すべて細かくはいる(P22 ~3cm)。根板感は見受け難い。
RA094	P6	22	21	16	表面あり	-	地山ブロック・根化物・地土ブロック混入。すべて細かくはいる(P22 ~3cm)。根板感は見受け難い。
RA094	P7	41	34	18	10YR2/1 黑色	-	しまり・粘性やや低い。地山ブロックやや多量、根板に進む(延～ 3cm)
RA094	P8	20	22	-			
RA094	P9	19	18	5	表面あり	-	
RA095	K1	59	30	11	表面あり	-	
RA095	K2	85	46	18	表面あり	-	
RA095	K3	63	34	12	表面あり	-	
RA095	K4	58	22	15	表面あり	-	
RA095	K5	72	50	24~13	断面あり	-	
RA095	K6	52	40	23	10YR3/3 深褐色	-	しまり・粘性やや低い。地山ブロック・根化物少、地土ブロック根 板感～2cm)、延びて進む。
RA096	K1	96	73	23	-		
RA096	K2	82	50	16~22	-		
RA096	P1	49	22	24	-		
RA096	P2	48	36	29	-		
RA097	K1	70	51	5	表面あり	-	
RA097	K2	57	50~60	30	表面あり	-	
RA097	K3	56	87	46	表面あり	-	
RA097	K4	48	48	10	表面あり	-	
RA097	P1	32	35	26	-		
RA097	P2	33	30	25	-		
RA097	P3	28	62	28	-		
RA097	P4	28	21	6	-		
RA097	P5	16	18	9	-		
RA097	P6	23	20	5	-		
RB005	P1	30	23	52	10YR1/1 黑色	13×12・深 327	しまり・粘性やや低い。地山ブロック根板感(延～1cm)。
RB005	P2	30	26	46	10YR1/1 黑色	-	しまり・粘性やや低い。地山ブロック少。
RB005	P3	31	28	62	10YR1/1 黑色	-	P3に根る
RB005	P4	30	28	34	10YR1/1 黑色	-	P4に根る
RB005	P5	29	28	32	10YR1/1 黑色	-	しまり・粘性やや低い。地山ブロック根板感(延～1cm)。
RB005	P6	32	28	23	10YR1/1 黑色	-	P6に根る
RB005	P7	28	23	34	10YR1/1 黑色	-	P7に根る

(3) 土 坑

RD126土坑（第72図、写真図版50）

〈位置・検出状況〉 A区東部の東側旧河道跡の東岸、13R 4e・fグリッドに位置する。本遺構の周辺は旧河道の岸辺ということもあって基本層位の状況が比較的良好でⅡ層が10cm程度残っていた。このため周辺ではⅡ層面での検出を行っているが、遺構覆土とⅡ層黒褐色土の判別が難しく、実質的な確認はⅢ層上面での検出となった。隣接するRD127土坑の状況からみて、本来の遺構掘り込み面はⅡ層面と推測される。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は、開口部で長軸約200cm、短軸約90cmの隅丸長方形を呈する。長軸方向はN-60°-Eである。

〈埋土〉 埋土は黒ボク系土5層に分層されるが、自然堆積か人為的堆積か判然としない。

〈壁・底面〉 底面は概ね平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。残存する深さは約30cmを測る。

〈出土遺物〉 遺物は埋土から土師器の壺形土器片と壺形土器片が240g出土した。ロクロ使用の破片が多く、形状をおよそ把握できた個体は、掲載した底部を欠く壺形土器2点と壺形土器の上半部1点である。(203~205、第110図、写真図版85)

〈時期〉 出土遺物から平安時代と判断される。

RD127土坑（第72図、写真図版50・51）

〈位置・検出状況〉 A区東部の東側旧河道跡の東岸、13R 4d・cグリッドに位置する。本遺構は当初、重機による表土除去を行っていた際、Ⅱ層上位で多量の土器が確認され、埋甕の可能性が考えられたものだが、隣接するRD126土坑と同様に遺構覆土とⅡ層黒褐色土の判別が難しく、実質的な確認はⅢ層上面での検出となった。本来の遺構掘り込み面はⅡ層面と推測されるが、遺構・遺物の遺存状況からみて、上層は削平されたものと思われる。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は、開口部で長軸約135cm、短軸約80cmの隅丸長方形を呈する。長軸方向はN-46°-Eである。

〈埋土〉 埋土は基本的に自然堆積と思われる黒ボク土の単層である。

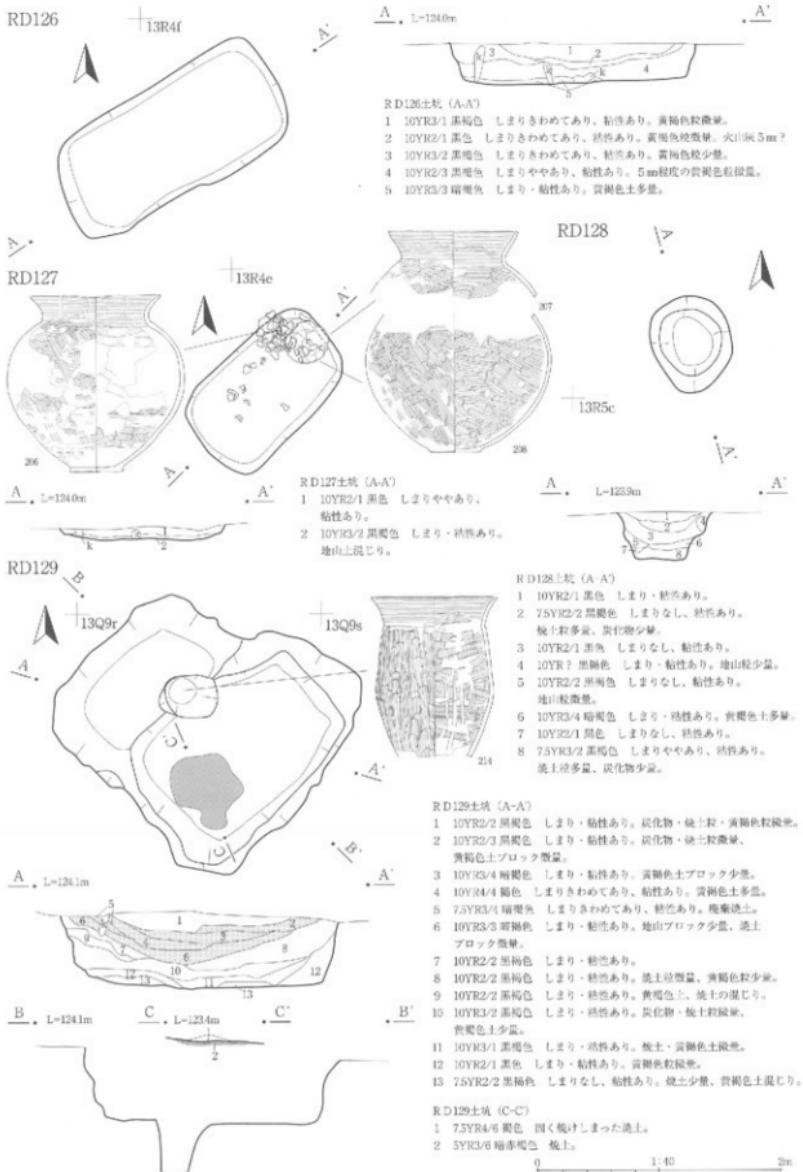
〈壁・底面〉 底面は概ね平坦である。壁は確認できたⅢ層以下の掘り込みは浅く、残存する部分では底面から比較的明瞭な稜を持って緩やかに外傾して立ち上がる。確認できた深さは約10cmを測るが、遺物の出土状況からみて、本来は30cm以上あったと思われる。

〈出土遺物〉 遺物は、土師器の壺形土器が約4.2kg分出土した。出土状況としては長軸北端に球胴壺の下半部が正立して残り、この西側に上半部が倒れ破砕した1個体と思われたが、出土量の8割方の破片が接合し、掲載した3点、2個体の球胴壺形土器が復元された。(206~208、第110図、写真図版85)

〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

RD128土坑（第72図、写真図版51）

〈位置・検出状況〉 A区東部の東側旧河道跡の東岸、13R 4cグリッドに位置する。本遺構も隣接するRD126・127土坑と同様に遺構覆土とⅡ層黒褐色土の判別が難しく、実質的な確認はⅢ層上面での検出となった。本来の遺構掘り込み面はやはりⅡ層面と推測される。



第72図 RD126～129土坑

〈重複関係〉なし。

〈平面形・規模〉平面形は開口部では67×76cmの重な略円形を呈する。

〈埋土〉埋土は8層に細分されるが、上位と下位は廃棄と思われる焼土混じりの人为的堆積、中位には流入と思われる黒ボク土の自然堆積に大別される。

〈壁・底面〉底面は概ね平坦で、壁は中位で屈曲しながら外傾して立ち上がる。残存する深さは約20cmを測る。

〈出土遺物〉遺物は埴上から土師器の壺形土器片が181g出土したが、形状を復元できた個体はない。

(209、第110図、写真図版86)

〈時期〉出土遺物から奈良時代もしくはそれ以降と判断される。

RD129土坑（第72図、写真図版51）

〈位置・検出状況〉A区北側中央部の東側旧河道跡内、13Q 9rグリッドに位置する。本遺構は重機による表土除去を行っていた際、II層面で焼土や黄褐色土が多量に混じる範囲として確認され、精査の結果遺構であることが判明したものである。

〈重複関係〉なし。

〈平面形・規模〉平面形は、大小の長方形基調のプランが連結した凸形状を呈し、開口部では2m×1.5~2mを測る。底部では大長方形部は長軸長約1.4m、短軸長約1m、小長方形部は長軸長約1m、短軸長約55cmを測る。

〈埋土〉埋土は13層に細分され、全体的に焼土や黄褐色土が混じり、特に中位には焼土の廃棄の繰り返しが認められ、下位の壁際には壁崩落か自然流入と思われる黒ボク土も見受けられたが、全体的には人为的堆積の様相を呈する。

〈壁・底面〉底面は大小の長方形部で5cmほどと僅かではあるが段差があり、大長方形部は概ね平坦であるが、小長方形部は幾分凹凸がある。プラン中央の連結部には径約35cm、深さ約45cmの柱穴状ピットが1個あり、大長方形部の南側には火熱により径約55cmほどの略円形で、厚さ3cm以下に赤色変化した現地性の焼土が確認された。壁はIV層の掘り込みは浅く、II層が主体のため崩落によるものか全体的に外傾するして立ち上がり、上位で外反する。深さは小長方形部で約58cm、大長方形部で約62cmを測る。

〈出土遺物〉遺物は、土師器の壺形土器片と壺形土器片が約2.8kg出土し、壺形土器が9割を占める。掲載した土器は出土量の4割程度である。出土量の少ない壺形土器は破片がほとんどで形状を復元できた個体はない。壺形土器では柱穴上から出土した大破片が接合し底部を欠く1個体が復元された。

(210~214、第110・111図、写真図版86)

〈性格・時期〉規則的に居住には耐えないと思われることから土坑として扱っているが、炉跡と思しき現地性焼土や、上屋の存在が考えられる柱穴が確認されており、かなり簡便な住居状遺構の可能性も考えられる。出土遺物から奈良時代と判断される。

RD130土坑（第73図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉A区北側中央部微高地土の13Q 4lグリッド杭付近に位置する。本遺構は調査開始当初の層序確認の試掘時にIV層上面で土器が確認されたことから、遺構の存在を推定していたもので、検出時には全体的に不明瞭なプランであったが、精査の結果、RD131土坑と攪乱との重なりであることが判明した。検出面はIV層中であるが、遺構・遺物の遺存状況からみて、本來の遺構掘り込み面は

II層面と推測され、上層は削平されたものと思われる。

〈重複関係〉なし。

〈平面形・規模〉平面形は、南西部が擾乱で破壊されて一部不明であるが、北東側に柱穴状の張り出しをもつ不整な略円形を呈する。規模は開口部で長軸約90cm、短軸約60cm、張り出し部分の柱穴状ピットの径は約40cmを測る。

〈埋土〉埋土は黒ボク土・3層に細分され、下位ほど黄褐色土が多く混じり、上位には土器が廃棄されていた。全体的に人為的堆積の様相を呈する。

〈壁・底面〉底面は概ね平坦であるが、張り出し部分は袋状を呈し、一段低くなっている。壁は底面から比較的明瞭な稜を持って外傾して立ち上がる。残存する深さは約20cmを測り、張り出し部はさらに3cm低い。

〈出土遺物〉遺物は、土師器の壺形土器が約1.2kg分出土した。出土状況としては遺構の遺存する上位に廃棄されたもので、中央上位の大破片から上半部の形状が把握できた壺形土器2個体と張り出し部の中位から出土した球胴壺の底部を掲載した。掲載した土器は出土量の3分の2程度である。(215~217、第111図、写真図版86)

〈時期〉出土遺物から奈良時代と判断される。

RD131土坑（第73図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉A区北側中央部微高地上の13Q 4kグリッドに位置する。本遺構は検出時には全体的に不明瞭なプランであったが、精査の結果、RD130土坑と攪乱との重なりであることが判明したものの、検出面はIV層中になる。

〈重複関係〉なし。

〈平面形・規模〉平面形は、開口部で106×95cmを測る西側にステップ状の張り出しをもつ歪な略円形を呈する。

〈埋土〉埋土は黒ボク土を基調として黄褐色土が混じる9層に細分される人為的堆積の様相を呈する。

〈壁・底面〉底面は概ね平坦である。壁は底面から明瞭な稜を持って外傾して立ち上がり、上半は内湾気味である。覆土の状況からステップ状の張り出しあは壁の崩落の可能性が高い。残存する深さは約35cm、張り出し部では約15cmを測る。

〈出土遺物〉遺物は、土師器の壺形土器が約300g出土した。掲載した土器は出土量の4割程度であるが、形状を復元できた個体はない。(218、第111図、写真図版86)

〈時期〉出土遺物から奈良時代もしくはそれ以降と推定される。

RD132土坑（第73図、写真図版52）

〈位置・検出状況〉A区北側中央部微高地上の13Q 6k・1グリッドに位置し、やや削平されたIV層中に検出された。

〈重複関係〉なし。

〈平面形・規模〉平面形は、開口部では長軸2.5m×短軸1.9mを測る不整形プランを呈する。

〈埋土〉埋土は10層に細分され、上位は全体的に自然流入と思われる黒ボク土系、下位は黒ボク土と黄褐色土が互層となる廃棄の繰り返しが認められた。

〈壁・底面〉底面及び壁は大小様々な袋状の掘り込みが繋がった様相を呈し、深さは20~50cm程度となっている。

〈出土遺物〉 遺物は、土師器の壺形土器片と壺形土器片が約430g出土し、壺形土器片が9割を占める。掲載した上器は出土量の7割程度である。形状を復元できた個体は、掲載した丸底風の壺形土器3点である。(219~221、第111図、写真図版86)

〈性格・時期〉 遺構の掘り方形状からは粘土探査坑の可能性が考えられる。出土遺物から奈良時代と判断される。

R D133土坑（第73図、写真図版52・53）

〈位置・検出状況〉 A区北側中央部の中央旧河道跡内、12Q23dグリッドに位置する。本来の遺構掘り込み面はⅡ層面と推測されるが、遺構覆土とⅡ層黒褐色土の判別が難しく、実質的な確認はⅢ層上面での検出となった。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は開口部で88×62cmを測る略楕円形を呈する。長軸方向はおよそ北-南である。

〈埋土〉 埋土は黒ボク土系3層からなる自然堆積と思われる。

〈壁・底面〉 底面はやや丸みがあり、北端は柱穴状に浅く窪んでいる。壁は丸みのある底面から鋭角的に外傾して立ち上がり、北側では袋状に内湾している。深さは約35cmを測り、柱穴状の窪みはさらに5cm低い。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 検出面から古代以降と推定される。

R D134土坑（第73図、写真図版53）

〈位置・検出状況〉 A区中央部北側の微高地上の13Q10lグリッドに位置し、やや削平されたⅣ層中に検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は、南西側上位がステップ状になった略楕円形プランを呈し、南東側には柱穴状の張り出しがつく。規模は開口部で長軸約134cm、短軸約90cm、張り出し部分の径は約57cmを測る。ただし、南西側ステップは状況から崩落した部分である可能性があり、本来は径約95cmの略円形プランに柱穴状の張り出しがついたものと考えられる。

〈埋土〉 埋土は6層に細分され、上位には土器や焼土が廃棄されており、全体的に人為的堆積の様相を呈する。

〈壁・底面〉 底面は丸底を呈し、壁は底面から明瞭な稜を持たずに内湾気味に外傾して立ち上がる。残存する深さは約44cmを測り、張り出し部は約17cmを測る。

〈出土遺物〉 遺物は、土師器の壺形土器片と壺形土器片が約2.2kg出土した。出土状況としては遺構埋土上位に廃棄されたもので、壺形土器片が6割を占めるが、形状を復元できた個体数は壺形土器が多く、掲載した丸底の6点がある。掲載した上器は出土量の5割程度である。(222~229、第111~112図、写真図版86・87)

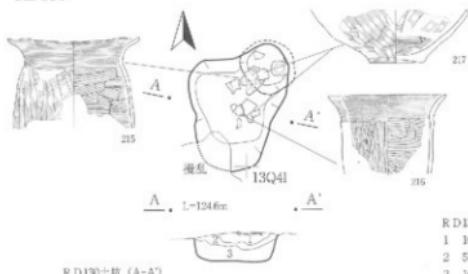
〈時期〉 出土遺物から奈良時代と判断される。

R D135土坑（第74図、写真図版53）

〈位置・検出状況〉 A区中央部微高地上の13Q19hグリッドに位置し、Ⅲ~Ⅳ層面で検出した。

〈重複関係〉 なし。

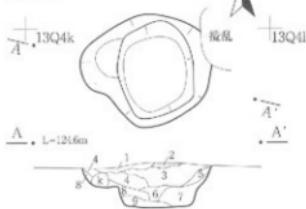
RD130



RD130土坑 (A-A')

- 1 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性あり。窓の一側全体が崩壊。
 - 2 10YR2/1 黑色 しまり・粘性あり。黄褐色土混じる。
 - 3 10YR2/3 黑褐色 しまりきわめてあり。粘性あり。
- 黄褐色土と黑ばく土混じり。
※人為堆積

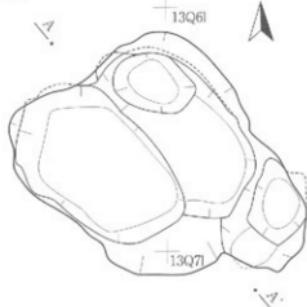
RD131



RD131土坑 (A-A')

- 1 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性あり。
- 2 SYR2/2 黄褐色 土炭化土。
- 3 10YR3/3 塗褐色 しまり・粘性あり。黄褐色土混じり。
- 4 10YR2/1 黑色 しまり・粘性あり。
- 5 10YR2/3 黑褐色 しまり・粘性あり。黄褐色土混じり。
- 6 10YR2/2 黑褐色 しまり・粘性あり。黄褐色土根茎。
- 7 10YR2/1 黑色 しまりややあり。粘性あり。
- 8 10YR3/3 塗褐色 しまり・粘性あり。塗褐色土。
- 9 10YR3/4 塗褐色 しまりきわめてあり。粘性あり。

RD132

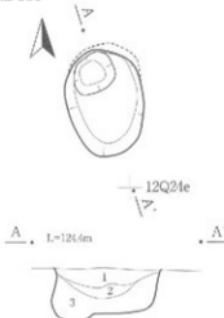


RD132土坑 (A-A')

RD132土坑 (A-A')

- 1 10YR2/1 黑色 しまり・粘性あり。黄褐色土微量。
 - 2 10YR2/2 黑褐色 しまり・粘性あり。黄褐色土出じり。
 - 3 10YR2/1 黑色 しまり・粘性あり。地山ブロック出見。
 - 4 10YR3/4 塗褐色 しまり・粘性あり。黄褐色土多量。
 - 5 10YR2/1 黑褐色 しまりなし・粘性あり。黄褐色土微量。
 - 6 10YR4/6 黑色 しまり・粘性あり。黑ばく土混じり。
 - 7 10YR2/2 黑褐色 しまり・粘性あり。黄褐色土混じり。
 - 8 10YR2/1 黑褐色 しまり・粘性あり。
 - 9 10YR4/6 黑褐色 しまり・粘性あり。黒ばく土混じり。
 - 10 10YR2/2 黑褐色 しまり・粘性あり。
- ※6~10層人為的堆積

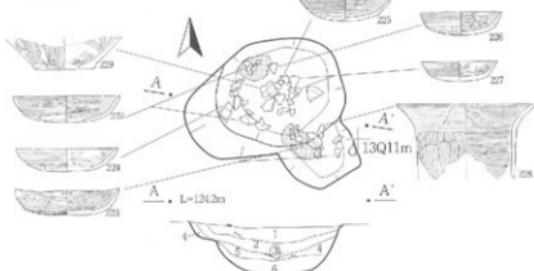
RD133



RD133土坑 (A-A')

- 1 10YR2/1 黑色 しまりなし・粘性あり。
- 2 10YR3/2 黑褐色 しまりなし・粘性あり。
- 3 10YR2/1 黑色 しまりなし・粘性あり。

RD134



RD134土坑 (A-A')

- 1 10YR3/1 黑褐色 しまり・粘性あり。炭化物少量、硬土粒微量、下段に土器が多い。
 - 2 10YR3/2 黑褐色 しまりややあり・粘性あり。黄褐色土微量、炭化物微量。土器多く含む。
 - 3 10YR5/4 ぶい黄褐色 しまり・粘性あり。破砕粘土塊。
 - 4 10YR3/3 塗褐色 しまり・粘性あり。黄褐色土少量。
 - 5 10YR2/3 黑褐色 しまり・粘性あり。黄褐色土根茎。
 - 6 10YR2/1 黑色 しまり・粘性あり。
- ※人為堆積

第73図 RD 130~134土坑

〈平面形・規模〉 平面形は開口部で長軸約96cm、短軸約79cmを測る隅丸略長方形を呈する。長軸方向はN-55°-Wである。

〈埋土〉 埋土は墨ボク土系4層からなる自然堆積と思われる。

〈壁・底面〉 底面は概ね平坦だが、北東隅は楕円形の柱穴状に窪んでいる。壁は全体的に緩やかに外傾して立ち上がり、柱穴状部分では袋状にやや内湾している。深さは約20cmを測り、柱穴状の窪みはさらに約5cmほど低い。

〈出土遺物〉 遺物は、土師器の壺形土器片1点と壺形土器片2点の約45g出土した。(230、第112図、写真図版87)

〈時期〉 出土遺物から奈良時代もしくはそれ以降と判断される。

R D136土坑（第74図、写真図版53）

〈位置・検出状況〉 A区南部、13Q20cグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で黒色土のひろがりを検出した。

〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径1.30×0.97m、隅丸方形である。長軸はN-53°-E、南西-北東方向に持つ。

〈埋土〉 底面付近に地山ブロックを多く含むが、大半は混入物を含まない黒色土で、自然堆積と推定される。

〈壁・底面〉 底面は丸みを帯び、1.06×0.75m、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは25cm程度である。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 不明である。

R D137土坑（第74図、写真図版54）

〈位置・検出状況〉 A区南部、13Q21cグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で黒色土のひろがりを検出した。

〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径0.72×0.69m、円形である。

〈埋土〉 黒色土を主体とする。地山ブロックの混入量は下部に多くなる。

〈壁・底面〉 底面は0.63×0.59cm、丸みを帯び、やや凹凸が見られる。壁は直立し、検出面からの深さは15~20cm程度である。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 不明である。

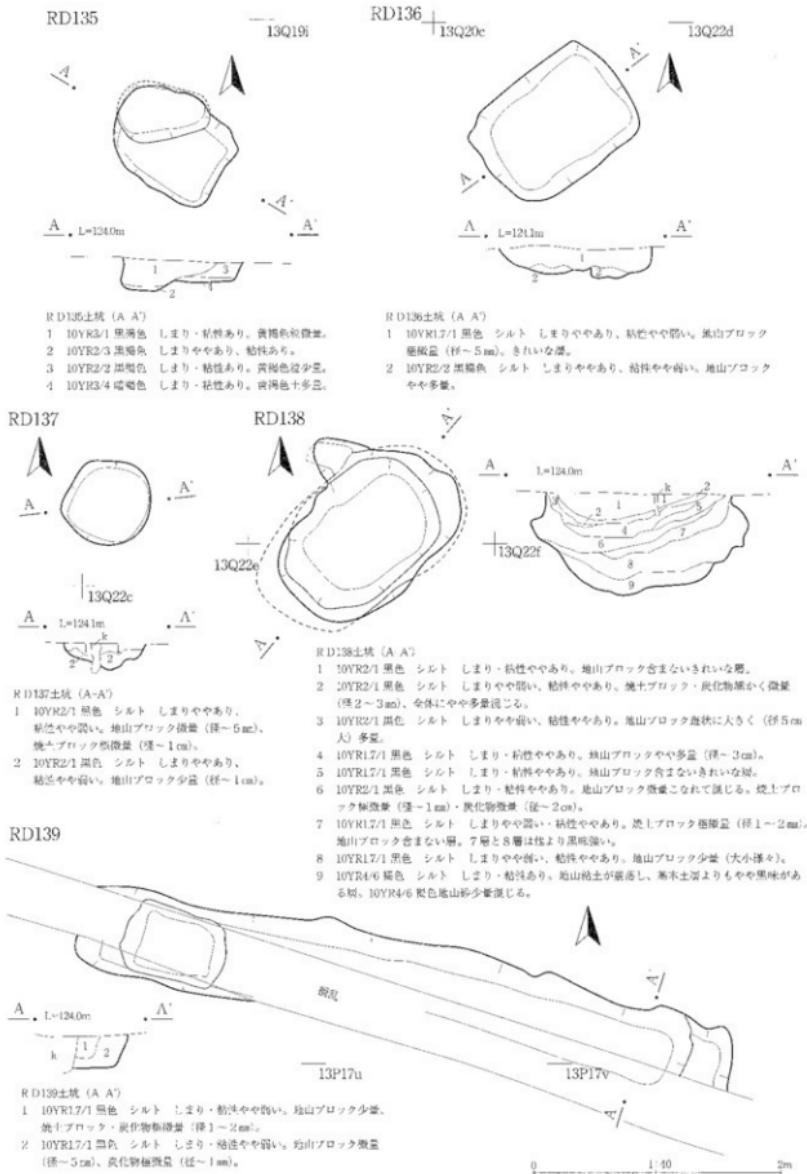
R D138土坑（第74図、写真図版54）

〈位置・検出状況〉 A区南部、13Q21eグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で墨色土の広がりを検出した。

〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径1.60×1.06m、楕円形である。北側に柱穴を半裁したような突出部を持ち、これを含めると短軸は1.32mとなる。長軸はN-49°-E、南西-北東方向に持つ。

〈埋土〉 底面に壁（IV~V層）が崩落した層（9層）が堆積し、その後混入物の少ない黒色土層（1・



第74図 RD135~139土坑

5・7層)、炭化物・焼土ブロックを含む層(2・6・7層)、地山ブロックを多く含む層(3・4層)によって埋没する。塗崩落土と黒色土層は他層に比べ層が厚く、これらは自然堆積、それ以外は人為堆積の可能性が考えられる。

〈壁・底面〉 底面は丸みを帯び 1.02×0.69 m、壁はオーバーハングして立ち上がる。検出面からの深さは83cm、V層まで掘りこんでおり、突出部はこれよりも浅く46cmである。

〈遺物〉 土師器壺片が577g出土している。このうち口縁部片2点を掲載した(231・232、第112図、写真図版87)。

〈時期〉 出土遺物より奈良時代もしくはそれ以降と判断される。

RD139土坑(第74図、写真図版54・55)

〈位置・検出状況〉 A区南部、13P16uグリッド付近に位置する。地山層(IV層)上面で黒色土の広がりを検出した。

〈重複〉 重複する遺構はないが、排水管が遺構内を通り破壊されている箇所が多い。

〈規模・形状〉 扰乱を受けているため全形を把握できないが、推定される開口部径は 5.04×0.72 m、隅丸長方形である。長軸はN-76°-W、北西-南東方向に持つ。

〈埋土〉 黒色土を主体とし、炭化物・焼土ブロックを含む。遺構の中心部の層(1層)は外周(2層)より地山ブロックを多く含む。人為堆積と推定される。

〈壁・底面〉 底面は平坦で、規模は推定 4.71×0.51 m、西端が 0.85×0.59 mの隅丸方形範囲が一段低くなる。壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは25cm、西端で49cmである。

〈遺物〉 土師器壺901g(坏類351g、甕類553g)出土し、坏4点・壺1点を掲載した(233~237、第112図、写真図版87)。いずれも埋土上部からの出土量が多い。

〈時期〉 出土遺物より奈良時代もしくはそれ以降と判断される。

RD140土坑(第75図、写真図版54・55)

〈位置・検出状況〉 A区南部、13P18rグリッド付近に位置する。地山層(IV層)上面で黒色土の広がりを検出した。

〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径 2.77×0.67 m、梢円~隅丸の長方形である。長軸はN-13°-E、南北方向に持つ。

〈埋土〉 黒色土を主体とし、遺構の中心部の層(1層)は外周(2層)より地山ブロックを多く含む。人為堆積と推定される。

〈壁・底面〉 底面径は 2.03×0.42 m、南側が一段低くなるが、それぞれ概ね平坦な底を持つ。壁は外傾もしくは直立し、検出面からの深さは北側が35cm、南側が40cm程度である。

〈遺物〉 土師器壺片が13g出土したが、小片のため図化していない。

〈時期〉 出土遺物より奈良時代もしくはそれ以降と判断される。

RD141土坑(第75図、写真図版54・55)

〈位置・検出状況〉 A区南部、13P20tグリッド付近に位置する。地山層(IV層)上面で黒色土のひろがりを検出した。

〈重複〉 RB005掘立柱跡と重複するが、新旧関係は確認できていない。

〈規模・形状〉開口部径4.19×0.83m、隅丸長方形である。長軸はN-72°-W、東西方向に持つ。

〈埋土〉黒色土を主体とし上中下3層に分層されるが、上・下層に地山ブロックが多く含む。下層は土自体の縮まりはそれほどでもないが、地山ブロックがやや横につぶれた感じで、敷きならした可能性も考えられる。しかし長軸の土層断面を確認していないため、遺構内全面を均したか否か、その範囲は不明である。上中層には炭化物・焼土ブロックが含まれる。人為堆積と推定される。

〈壁・底面〉底面径は3.46×0.61m、中心部が高く、東西端は長軸1.3~1.4m程度の隅丸方形の範囲で一段低くなる。壁はやや外傾して立ち上がる。検出面からの深さは中心部で45cm、西側50cm、東側65cm程度である。

〈遺物〉土師器969g（坏20g、壺948g）出土し、壺3点を掲載した（238~240、第112図、写真図版87）。埋土上部、とくに1層中からの出土が多い。

〈時期〉出土遺物より奈良時代もしくはそれ以降と判断される。

R D142土坑（第75図、写真図版54・56）

〈位置・検出状況〉A区南部、13P17wグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で黒色土のひろがりを検出した。

〈重複〉なし。

〈規模・形状〉開口部径1.38×0.53m、やや不整な隅丸長方形である。長軸はN-78°-W、東西方向に持つ。

〈埋土〉底面付近は地山ブロックを多く含む層と黒色土層が薄く互層となり、それより上部はRD139土坑同様に遺構の中心部の層（1層）は外周（2層）より地山ブロックを多く含み、炭化物・焼土ブロックも混入する。人為堆積と判断される。

〈壁・底面〉底面径は1.38×0.53m、図示できていないが東西に3分割したそれぞれが浅皿状に窪み、波打つような形状を持つ。西端にはさらに直径25cm程度の小穴を設ける。壁は西側～南側の一部がオーバーハングし、北側が直立、東側が外傾して立ち上がる。検出面からの深さは50cm程度、小穴はさらに10cm深くなる。

〈遺物〉土師器315g（坏280g、壺280g）出土し、壺1点・壺2点を掲載した（241~243、第112図、写真図版87）。上部からの出土が日立った。

〈時期〉出土遺物より奈良時代もしくはそれ以降と判断される。

R D143土坑（第75図、写真図版54・56）

〈位置・検出状況〉A区南部、13P18wグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で黒色土のひろがりを検出した。

〈重複〉なし。

〈規模・形状〉開口部径1.32×0.46m、やや不整な隅丸長方形である。長軸はN-1°-W、南北方向に持つ。

〈埋土〉黒色土を主体とし、地山ブロックの混入量の違う層が、数cm~1~数cmの厚さで積み重ねられる。人為堆積と推定される。

〈壁・底面〉底面径は0.86×0.25m、やや丸みを帯びる。壁は下部が内湾気味に立ち上がり、上部は外傾する。検出面からの深さは45cmである。

〈遺物〉出土していない。



第75図 RD140～144土坑

〈時期〉周囲の類似する遺構から考えると奈良時代もしくはそれ以降と判断される。

R D144土坑（第75図、写真図版54・56）

〈位置・検出状況〉A区西部、13P14rグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面で炭化物と焼土の広がりと、これらの炭・焼土を西端にした直径70cm程度の円～隅丸長方形の黒色土の範囲を検出した。焼土遺構の可能性を考え精査をすすめていたが、焼土はブロック状に埋土に混入したものとわかり、土坑と判断した。さらにこの焼土ブロックの西側、擾乱（0層）下に埋土が続いており遺構が延びることがわかった。

〈重複〉なし。

〈規模・形状〉開口部径1.39×0.62m、やや不整な隅丸長方形である。長軸はN-79°-W、東西方向に持つ。

〈埋土〉黒色土を主体とし、検出面付近には炭化物・焼土ブロックを含む。層厚が薄いため、堆積状況を把握しきれていないが、炭化物・焼土ブロックがまとまっていることから人為堆積の可能性が高い。

〈壁・底面〉底面径は1.35×0.32m、V層まで掘りこんでおり、一部これを掘りすぎてしまったが、ほぼ平坦な底を持つ。壁は外傾して立ち上がり、検出面からの深さは15cm程度である。

〈遺物〉出土していない。

〈時期〉周囲の類似する遺構から考えると奈良時代もしくはそれ以降と判断される。

R D145土坑（第76図、写真図版54・56・57）

〈位置・検出状況〉A区南部、13P20rグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面で不整形な黒色土の広がりを検出した。プランから遺構が重なっている可能性を考え、複数回平面からその確認を試みたが困難だったので、重複が想定される箇所に土層観察用のベルトを設定し掘り下げを開始した。その結果、東西に3基の遺構並び重複していることが分かったが、それぞれの平面形を完全切り離すことができず、便宜上東から西へa・b・cと命名し一遺構として扱った。

〈重複〉上述の通り3つの遺構が重複するが、これら以外の遺構と重複はない。

〈規模・形状〉遺構全体の開口部径は2.82×1.74m、個々はa 2.27×0.66m、b 2.21×0.76m、c 1.18×0.54m、で隅丸長方形の遺構が東西方向に連なっているものと判断した。長軸はN-15°-E、南北方向に持つ。

〈埋土〉1・2層はa、3～6層はb、7～9層はcの埋土となり、堆積状況からaが最も新しくb・cと続くことが分かった。個別の状況としてaは地山ブロックの混入量が少ない黒色土が堆積する。bは、黒色土を主体とし、地山ブロック・黒褐色土（Ⅲ層）ブロックが混入量をかえて含まれる。西側から東側へ低く斜めに層が重なっており、一方からだけでなく東西同じように土が流入したと仮定すると、bの本来のプランはaの範囲に及び短軸は1.2～1.3m程度、a・cに比べ横に広い形状を持つ可能性がある。cは黒色土を主体とし、地山ブロック・黒褐色土（Ⅲ層）ブロックを含む。下部ほど混入量が多い。

〈壁・底面〉aの底面は丸みを帯び、径0.47×0.21m、壁は緩急角度を変え外傾して立ち上がる。検出面からの深さは40cm程度である。bの底面も丸みを帯び、南側に直径0.8m程度円形の溝みを持つ。壁は外傾して立ち上がり、検出面からの深さは35cm、北側は50cmである。cの底面径は2.04×0.54m、南北は比較的平凹で、北半は摺鉢状に窪む。壁は直立気味、検出面からの深さは南側が25cm、北側が55

cm程度である。

〈遺物〉 土師器498g（壺30g、甕468g）出土し、甕2点を掲載した（244・245、第113図、写真図版87）。2点ともaの南側埋土上部より出土している。この他b cでも遺物は出土したがいずれも埋土上部に多く含まれる。

〈時期〉 出土遺物より奈良時代と判断される。

R D146土坑（第76図、写真図版54・57）

〈位置・検出状況〉 A区南部、13P22sグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面で黒色土の不整形な広がりを検出した。その形状から2つの遺構が重複していると判断したが、平面形で新旧を確認できなかったため、断面を設定し掘り下げを開始した。その結果南側の遺構のほうが新しいことが判明したが、同時に掘り下げた結果平面形を完全に把握することができず、便宜上南側をa、北側をbと命名し、一道構として扱った。

〈重複〉 本遺構自体が2基重複するが、それ以外の遺構との重複関係はない。

〈規模・形状〉 遺構全体の開口部径は2.19×1.07m、個々はaが1.31×0.45m、bが2.19×0.68m、aは北側を消失してしまったが、両者とも隅丸方形と思われる。長軸はN-60°-W、北西-南東方向を持つ。

〈埋土〉 1層がa、2～7層がbとなり、上述の通りaのほうが新しい。aは黒色土を主体とし、地山ブロックを大きく混入する。bも黒色土を主体とし、混入物の少ない層（4・5・9層）、地山ブロックを多く含む層（3・8層）、炭化物・焼土ブロックを含む層（2・6・7層）が積み重なるように堆積する。図示した炭化物・焼土ブロックの範囲は6・7層の広がりである。人為堆積と判断される。

〈壁・底面〉 aの底面は、径0.68×0.33m、やや丸みを帯び南東へ向かって低くなる。壁は底面から直立し上部は緩く外傾する。検出面からの深さは南東側で41cmである。bの底面は、径2.08×0.47m、長方形のプランが2つ並ぶ。検出面から深さは北西端30cm、中央の長方形プラン50cm、南東側が55cmと、南東ほど深くなる。壁は直立気味である。

〈遺物〉 土師器甕151g出土し、1点掲載した。また4層より紡錘車も1点出土している。（246・247、第113図、写真図版87）

〈時期〉 出土遺物より奈良時代と判断される。

R D147土坑（第76図、写真図版54・57）

〈位置・検出状況〉 A区南部、13P23uグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面で黒色土のひろがりを検出した。

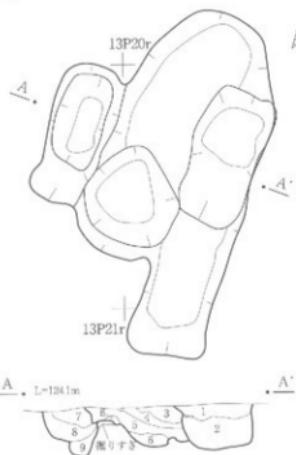
〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径1.38×0.52m、梢円～隅丸長方形である。長軸はN-61°-W、北西-南北方向に持つ。

〈埋土〉 底面に黒色土が堆積後（5層）、焼土ブロックを多く含む層が遺構を覆い（3・4層）、その上には炭化物・焼土ブロックを混入する黒色土層（1・2層）が堆積する。3・4層は西側に厚く、東側が薄い。人為堆積と推定される。

〈壁・底面〉 底面径は1.10×0.38m、入れ子状に隅丸長方形の範囲で一段低くなる。壁は直立し、検出面からの深さは、肉端の浅い所で約20cm、中心部で約30cmである。

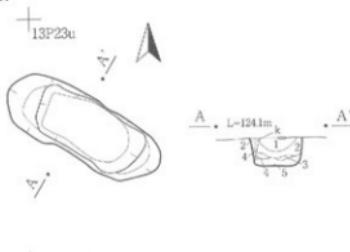
RD145



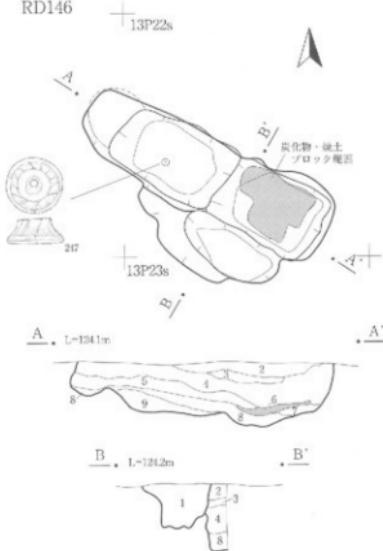
RD145土坑 (A-A')

- 1 IOYRL1/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。堆山ブロック極微量 (径1~3cm)。
- 2 IOYRL1/1 黒色 シルト しまりややあり。粘性やや弱い。
- 3 IOYRL1/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
- 4 IOYRL1/1 黒色 シルト しまりややあり。粘性やや弱い。
- 5 IOYRL1/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
- 6 IOYRL1/2 黑褐色シルト (漂浮層) 粘度極大く混じる。
- 7 IOYRL1/2 黑褐色シルト (漂浮層) と堆山ブロック大きくなれて混じる。
- 8 IOYRL1/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
- 9 IOYRL1/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。
- 10 IOYRL1/2 黑褐色 シルト しまりやや弱い。堆山ブロック微量 (径1~3cm)。
- 11 IOYRL1/2 黑褐色 シルト しまりやや弱い。堆山ブロック微量 (径1~5cm)。
- 12 IOYRL1/2 黑褐色 シルト しまりやや弱い。堆山ブロック微量 (径1~5cm)。
- 13 IOYRL1/2 黑褐色 シルト しまりやや弱い。

RD147



RD146



RD146土坑 (A-A'・B-B')

- 1 IOYRL1/1 黒色 シルト しまりやや弱い。堆山ブロック 大きく (径1~5cm) 極微量。
- 2 IOYRL1/1 黒色 シルト しまり、粘性やや弱い。堆土ブロック 極微量 (径1~2cm)。
- 3 IOYRL1/1 黒色 シルト しまり、粘性やや弱い。堆山ブロック やや多量、これで漂じる。
- 4 IOYRL1/1 黒色 シルト しまり、粘性やや弱い。堆山ブロック 褐量、これで洗ざる。
- 5 4層に気泡が堆山ブロック少量、従じり方は同じ。
- 6 IOYRL1/1 黒色 シルト しまり、粘性やや弱い。堆山ブロック 少量、堆土ブロック・炭化物や多量。堆山ブロック (径1~1cm)。
- 7 IOYRL1/1 黒色 シルト しまり、粘性やや弱い。堆土ブロック 極微量 (径2~3mm)。
- 8 IOYRL1/2 黑褐色 シルト しまり、粘性やや弱い。
- 9 IOYRL1/1 黒色 シルト しまりやや弱い。堆山ブロック 极微量 これで漂じるきれいな黒層。

RD147土坑 (A-A')

- 1 IOYRL1/1 黒色 シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。堆山ブロックこなれて少量、堆土ブロック・炭化物微量 (径1~5cm)。
- 2 IOYRL1/1 黒色 シルト しまり、粘性やや弱い。黑褐色の堆山ブロック極微量 (径1mm)、堆土ブロック微量 (径1~5mm)。
- 3 IOYRL1/1 黒色 シルト しまり、粘性やや弱い。堆土ブロック (径2~3mm)、多量。
- 4 75YRL1/2 灰褐色 堆土ブロック。
- 5 IOYRL1/1 黒色 シルト しまりやや弱い。堆山ブロック微量 (径1~2mm)。



第76図 RD145~147土坑

〈遺物〉 土師器92g（坏68g、壳24g）出土し、坏1点を掲載した（248、第113図、写真図版87）。

〈時期〉 出土遺物より奈良時代と判断される。

R D 148土坑（第77図、写真図版57・58）

〈位置・検出状況〉 A区南西部、14P2qグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面で黒色土のひろがりを検出した。

〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径1.77×0.85m、隅丸長方形である。長軸はN-28°-E、北東-南西方向に持つ。

〈埋土〉 黒色土を主体とする。下部（3・4層）は地山ブロックを多く含む層で、4層の地山ブロックは横長で縦まりは弱いが、敷きならされた様子に見える。上部は（1・2層）炭化物・焼土ブロックを含む層で、遺物を多く含む。人為堆積と推定される。

〈壁・底面〉 底面径は1.63×0.79m、側面にくびれをもち大小規模の違う円形の穴が入れ子状に3つ連なる。北から直径54cm、67cm、36cm、底面形状は丸みを帯びる。検出面からの深さは北側が45cm、中央と南側が18cmと3つとも大差ない。壁は円形の穴部分がオーバーハング気味、それより上部は外傾して立ち上がる。

〈遺物〉 土師器壺1387g出土し、3点掲載した（249～251、第113図、写真図版87）。

〈時期〉 出土遺物より奈良時代と判断される。

R D 149土坑（第77図、写真図版58）

〈位置・検出状況〉 A区南西部、14P15eグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面で黒褐色土のひろがりを検出した。

〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 西側が調査区外（第23次調査区）へ延びているが、過年度の調査では同一遺構が検出されていない。RA071堅穴住居跡で記載したとおり両次調査区間には、調査不可能な範囲がありここにおさまる可能性がある。そのため全形は不明、円～椭円形と推定される。検出範囲の径は1.26×0.88mである。

〈埋土〉 黒褐色土を主体とし、壁から底面付近には地山ブロックも混入する。自然堆積と推定される。

〈壁・底面〉 底面は丸みを帯び、検出範囲の径は0.66×0.50m、壁は下部が直立気味、上部が緩い角度で大きく外形する。検出面からの深さは25cm程度である。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 不明である。

R D 150土坑（第77図、写真図版58）

〈位置・検出状況〉 B区中央部、11P21sグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面で黒色土のひろがりを検出した。

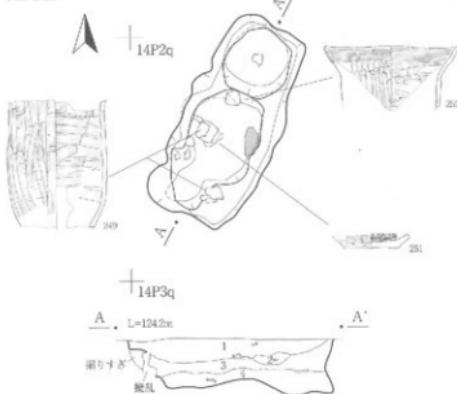
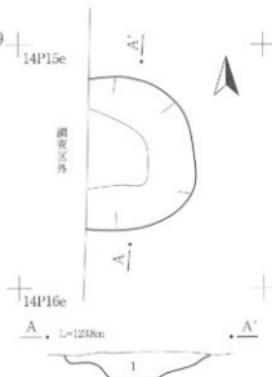
〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径1.62×1.03m、隅丸長方形である。長軸はN-13°-W、南北方向に持つ。

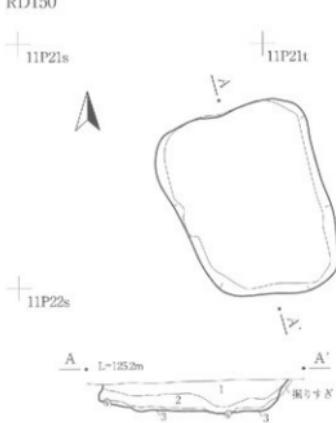
〈埋土〉 底面付近には地山ブロックを多く含む黒褐色土（3層）、遺構全体には混入物の少ない黒色土が堆積する。自然堆積と推定される。

〈壁・底面〉 底面は浅皿状に丸みを帯び、径1.50×1.13m、中心部は疊層（VI層）まで掘りこむ。壁は直立、部分的にオーバーハングする。検出面からの深さは25cm程度である。

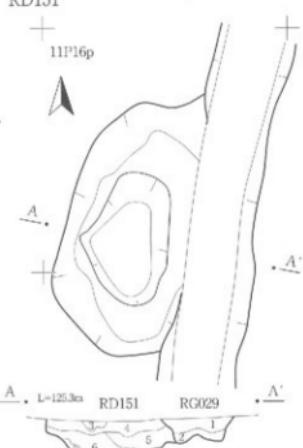
RD148

RD149 +
14P15e

RD150



RD151



RD150 土坑 (A-A')

- 10YR17/1 黒色 シルト しまりやや弱い、粘性やや弱い。地山ブロック含まない。2層より白っぽい。
- 10YR17/1 黑褐色 シルト しまりやや弱い、粘性ややあり。黒味強め。地山ブロック少量 (径～1mm)。
- 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりやや弱い、粘性ややあり。地山ブロックやや多量、全体にこなれて混じる。

0 1:40 2m

第77図 R D148～151土坑

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 不明である。

R D151土坑（第77図、写真図版58）

〈位置・検出状況〉 B区北西部、11P16pグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面で黒褐色土の不明瞭な広がりを検出した。

〈重複〉 RG029溝跡と重複し、本遺構のほうが古い。

〈規模・形状〉 東側を溝によって切られるが、残存する開口部径2.19×1.05m、梢円形である。長軸はN-13°-E、南北方向を持つ。

〈埋土〉 下部は地山ブロックを含むする層（5～7層）、上部は混入物の少ない層（4層）が堆積する。自然堆積と推定される。

〈壁・底面〉 底面も東側は溝により消失しているが、残存部径1.72×0.93m、径1.08×0.72mの梢円形の穴が入れ子状におさまり一段深くなる。壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは40cm程度である。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 不明である。

R D152陥し穴状遺構（第78図、写真図版59）

〈位置・検出状況〉 A1×東端微高地上の13R4rグリッドを中心に位置し、削平されたIV層中で検出した。〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、長軸長は開口部・底部とも約3.2m、幅は開口部で約60cm、底部では幅約10cmを測る。長軸方向はN-37°-Wである。

〈埋土〉 埋土は6層に細分され、上位と最下層には流入と思われる黒ボク土、中位から下位には壁崩落と思われる褐色系土が堆積する。

〈壁・底面〉 壁は長軸両端下部が僅かに抉れ、全体的に下位は垂直気味に立ち上がり、上位ではやや外反する。検出面からの深さは約1mを測る。底面は概ね平坦で、逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D153陥し穴状遺構（第78図、写真図版59）

〈位置・検出状況〉 A区北側中央部微高地上の13Q1・2pグリッドに位置し、かなり削平されたIV層中で検出した。

〈重複関係〉 なし。

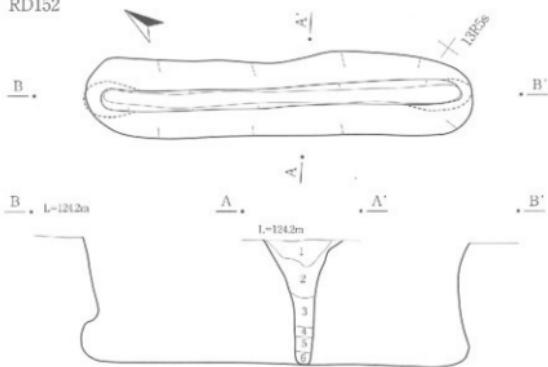
〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、開口部で長軸長約2.6m、幅約35cm、底部では長軸長約2.3m、幅約7cmを測る。長軸方向はN-35°-Eである。

〈埋土〉 埋土は5層に細分されるが、流入と思われる黒ボク土と壁崩落と思われる褐色系土が混じった堆積状況である。

〈壁・底面〉 壁は全体的に垂直気味に立ち上がり、検出面からの深さは約63cmを測る。底面は概ね平坦ながらやや蛇行している。逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

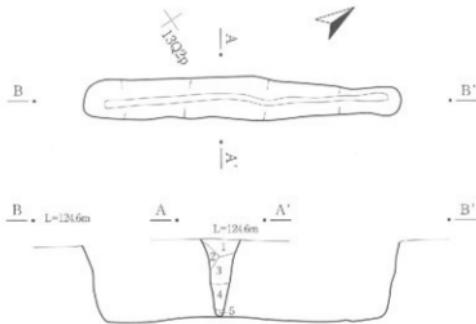
〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

RD152



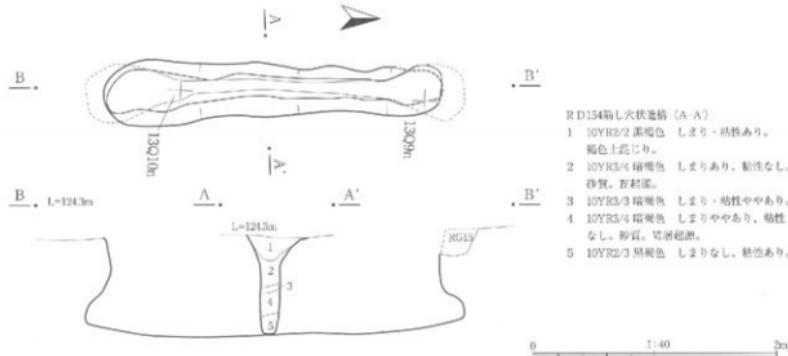
- R D152深し穴状遺構 (A-A')
- 1 10YR2/1 黒褐色 しまり・粘性あり。
毛張多量。
 - 2 10YR2/3 灰褐色 しまりさわめてあり。
粘性あり。地山にまじり。
 - 3 10YR4/6 棕褐色 しまりさわめてあり。
粘性なし。砂質。
 - 4 10YR2/4 灰褐色 しまり・粘性なし。
砂質。3層に黑土混じり。
 - 5 10YR4/6 棕褐色 しまりさわめてあり。
粘性なし。砂質。IV段階。
 - 6 10YR2/3 黒褐色 しまり・粘性なし。
砂質。

RD153



- R D153深し穴状遺構 (A-A')
- 1 10YR2/2 黒褐色 しまりさわめてあり。
粘性なし。砂質。黄褐色土被り。
 - 2 10YR3/4 棕褐色 しまりあり、粘性なし。
砂質。
 - 3 10YR2/3 灰褐色 しまりあり、粘性なし。
砂質。
 - 4 10YR3/4 灰褐色 しまり・粘性ややあり。
やや砂質。
 - 5 10YR2/2 黑褐色 しまり・粘性なし。
砂質。

RD154



- R D154深し穴状遺構 (A-A')
- 1 10YR2/2 黒褐色 しまり・粘性あり。
褐色土被り。
 - 2 10YR3/4 灰褐色 しまりあり、粘性なし。
砂質。青粘土。
 - 3 10YR3/3 灰褐色 しまり・粘性ややあり。
 - 4 10YR3/4 灰褐色 しまりややあり、粘性
なし。砂質。VII層起源。
 - 5 10YR2/2 黑褐色 しまりなし、粘性あり。

第78図 R D152~154土坑

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D154陥し穴状遺構（第78図、写真図版59）

〈位置・検出状況〉 A区中央部北側の微高地上の13Q 9・10n グリッドラインに位置し、やや削平されたIV層中で検出した。

〈重複関係〉 RG015溝跡と重複し、北端が切られている。本遺構が古い。

〈平面形・規模〉 平面形は溝状を呈し、開口部では長軸長約2.7m、幅は40~55cm、底部では長軸長約3m、幅は平均的には約10cmほどであるが、長軸両端では最大約45cmを測る。長軸方向は北-南である。

〈埋土〉 埋土は5層に細分されるが、上位と下層には流入と思われる黒ボク系土、中位から下位には黒崩落と思われる褐色系土が多く堆積する。

〈壁・底面〉 壁は長軸両端下部が抉れ、全体的に下位は垂直気味に立ち上がり、上位ではやや外反する。検出面からの深さは約0.8mを測る。底面は概ね平坦ながら長軸両端が膨らむ縦棒状を呈する。逆茂木等の杭痕跡は認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 出土遺物はないが、形状から縄文時代の陥し穴と判断した。

R D155陥し穴状遺構（第79図、写真図版60）

〈位置・検出状況〉 A区南部、13P15xグリッド付近に位置する。旧河道の範囲に位置するためⅡ~Ⅲ層が残存しており、これを除去し地山層（IV層）上面で検出した。溝状に細長いIV層起源上の外側を楕円形のドーナツ状に黒色土が囲む広がりとして確認した。

〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径3.71×1.01m、溝状である。長軸はN-39°-W、南西-北東方向に持つ。

〈埋土〉 底面に地山ブロック、黒色土の薄層（7・8層）、埋土下部は地山壊崩落層（4~6層）、上部は黒色土層（1・3層）とこの間に地山ブロック層（2層）が堆積する。上述の通り、検出面より上にはⅡ~Ⅲ層が残存したことから、これらの層の形成が本遺構より古い場合、地山面の標高は遺構のあった当時と大差なく、2層が自然に入り込むのは無理があり、人为堆積と判断される。しかし、Ⅱ~Ⅲ層の形成が本遺構より後、本遺構埋没時には地山面の標高が現在より高く、その後削られⅡ層が堆積した場合は、自然堆積の可能性も考えられる。また本遺構は周囲より低い所に立地しているため微高地上から流入した可能性もある。Ⅱ層の形成時期は奈良時代以前ということしかわからないことと、本遺構以外の陥し穴状遺構はすべて微高地上に作られていているため、埋土の比較ができないこともあり、2層の堆積過程を人為か自然かを判断することはできなかった。

〈壁・底面〉 底面は長軸が3.81m、幅は20~25cm程度、両端部約60cmに広がる。短軸方向の壁は底面から直立し、上部で外形して立ち上がり、長軸方向はオーバーハングする。検出面からの深さは108cm、南へ向かって徐々に深くなる。

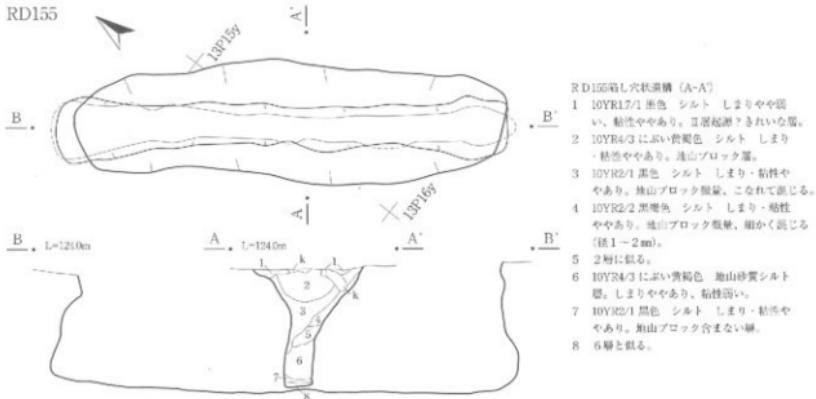
〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、遺構の形状から縄文時代と判断される。

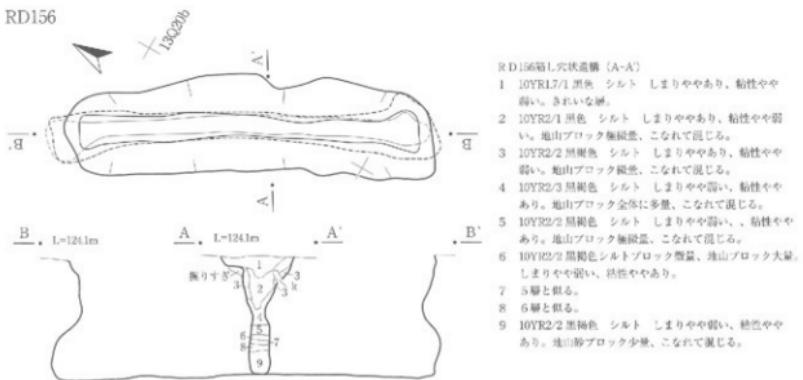
R D156陥し穴状遺構（第79図、写真図版60）

〈位置・検出状況〉 A区南部、13Q20aグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面で黒色土の広が

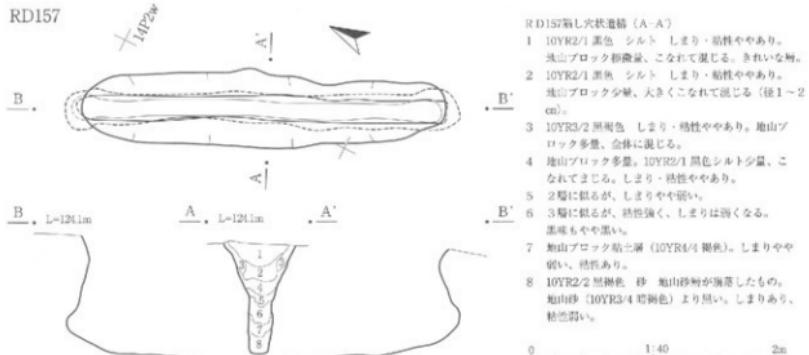
RD155



RD156



RD157



第79図 R D155~157土坑

りを検出した。

〈重複〉なし。

〈規模・形状〉開口部径2.99×0.81m、溝状である。長軸はN-31°-W、北西-南東方向に持つ。

〈埋土〉下部は、黒色土層（5・7・9層）と壁崩落した地山ブロック層（4・7・8層）の互層となる。上部も漸移層（Ⅲ層）の崩落層が隙間、全体には黒色土層（1・2層）で覆われ、自然堆積と推定される。

〈壁・底面〉底面は平坦で、長軸3.13m、幅は10~15cm程度、両端部では35cmに広がる。短軸方向の壁は底面から直立し、上部で外形して立ち上がり、長軸方向はオーバーハングする。検出面からの深さは100cm程度である。

〈遺物〉出土していない。

〈時期〉出土遺物はないが、遺構の形状から縄文時代と判断される。

R D157陥し穴状遺構（第79図、写真図版60）

〈位置・検出状況〉A区南部、14P2vグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面で黒色土のひろがりを検出した。

〈重複〉なし。

〈規模・形状〉開口部径2.98×0.63m、溝状である。長軸はN-26°-W、北西-南東方向に持つ。

〈埋土〉下部は壁の地山層（IV・V層）の崩落層（6~8層）、上部は地山ブロックを多く含む層（4層）と黒色土層（1・2層、5層）交互に堆積する。下半（5層以下）は上半（4層以上）にくらべしまりが弱い。自然堆積と推定される。

〈壁・底面〉底面は中心部が低く端部が上がる形状を持ち、長軸3.01m、幅は15cm程度、両端部では20cmに広がる。短軸方向の壁は底面から直立し、上部で外形して立ち上がり、長軸方向はオーバーハングする。検出面からの深さは95cm程度である。

〈遺物〉出土していない。

〈時期〉出土遺物はないが、遺構の形状から縄文時代と判断される。

R D158陥し穴状遺構（第80図、写真図版61）

〈位置・検出状況〉A区南西部、14P7sグリッド付近に位置する。北西半は地山層（IV層）で検出したが、南東半はRA095陥穴住居跡の掘り方土を除去し確認した。

〈重複〉上述の通りRA095陥穴住居跡と重複し、これよりも古い。

〈規模・形状〉残存する開口部径は4.10×0.72mの溝状、本次調査検出された陥し穴状遺構の中で最も規模が大きい。長軸はN-50°-W方向に持つ。

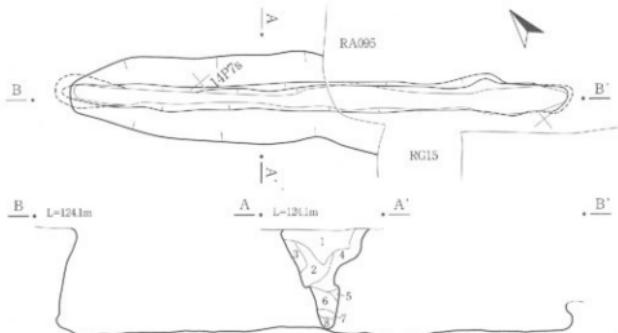
〈埋土〉下部～壁際は地山ブロックが多く含まれ、中心部には黒色土が堆積する。上部（1~5層）に比べ下部（6~8層）はしまりが弱い。自然堆積と推定される。

〈壁・底面〉底面はおおむね平坦で、V層まで掘りこまれる。長軸は4.03m、幅は10~15cm程度で端部でもあまり広がらない。短軸方向の壁は底面から直立し、上部で外形して立ち上がり、長軸方向はオーバーハングする。検出面からの深さは85cm程度である。

〈遺物〉出土していない。

〈時期〉出土遺物はないが、重複関係から奈良時代以前、遺構の形状から縄文時代と判断される。

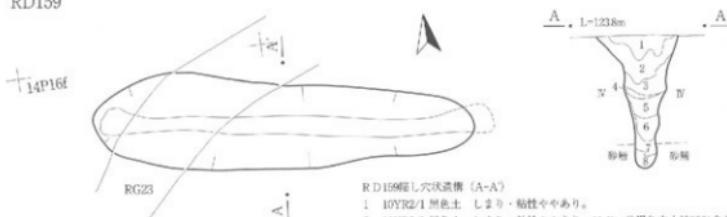
RD158



RD158陥し穴状構造 (A-A')

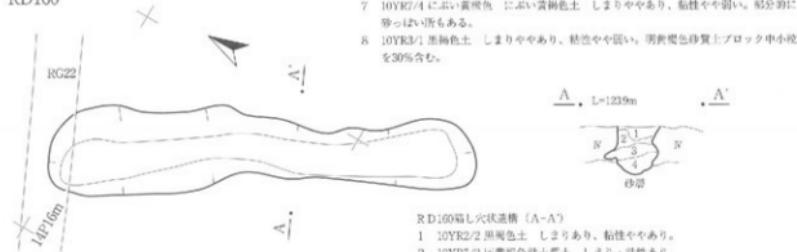
- 1 10YR1/2/1 黒色 シルト しまり・粘性ややあり。
- 2 10YR2/1 黒色 シルト しまり弱い、粘性ややあり。埴山ブロック少量 (径 - 1 cm)。
- 3 10YR3/4 茶褐色 シルト しまりあり、粘性ややあり。埴山ブロック層 (埴山よりしまり弱い)。
- 4 3層に似るが10YR2/2 黑褐色シルト少量こなれて混じる。
- 5 10YR2/2 黑褐色 シルト しまりやや弱い、粘性ややあり。埴山ブロック微疊組か混じる。
- 6 10YR5/4 ぶい・黄褐色 滾山粘土質シルト層。しまり・粘性あり。
- 7 10YR4/4 茶色 シルト しまりやや弱い、粘性ややあり。
- 8 7層に10Y1/3/3 暗褐色埴山層こなれて少量まる層。しまり・粘性やや弱い。

RD159



- 1 10YR2/1 黒色土 しまり・粘性ややあり。
- 2 10YR2/1 黑色土 しまり・粘性ややあり。にぶい黄褐色中大小50%含む。
- 3 10YR7/6 黄褐色土と同褐色土との混上。しまりややあり、粘性あり。
- 4 10YR2/1 黒色土 しまり・粘性ややあり。
- 5 10Y3/6 の明黄色土とソロック大吹が主体、その隙間に黒褐色土10%。しまりあり、粘性ややあり。
- 6 10YR2/2 黑褐色土 しまり・粘性ややあり。明黄色土ブロック大~中混30%含む。
- 7 10YR7/4 4C-4Eの黄褐色 地にぶい黄褐色土 しまりややあり、粘性やや弱い。部分的に砂っぽいものもある。
- 8 10YR3/1 黑褐色土 しまりややあり、粘性やや弱い。明黄色土質上ブロック中小吹を30%含む。

RD160



0 1:40 2m

第80図 RD158～160土坑

R D 159陥し穴状遺構（第80図、写真図版61）

〈位置・検出状況〉 A区南西部、14P16fグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面とRG023溝跡底面で黒色土の広がりを検出した。

〈重複〉 RG023溝跡と重複しこれよりも古い。

〈規模・形状〉 開口部径3.11×0.74m、溝状である。長軸はN-81°-W、東西方向に持つ。

〈埋土〉 黒色～黒褐色土層（1・2・4・6・8層）と地山ブロックの多い層（3・5・7層）が、交互に堆積する。自然堆積と推定される。

〈壁・底面〉 底面長軸は3.20m、幅は10cm程度で両端部は20cmと広がる。短軸方向の壁は底面から直立し、上部で外形して立ち上がり、長軸方向はオーバーハングする。V層まで掘りこんでおり、検出面からの深さは110cm程度である。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、遺構の形状から縄文時代と判断される。

R D 160陥し穴状遺構（第80図、写真図版61）

〈位置・検出状況〉 A区南西部、14P16mグリッド付近に位置する。地山層（IV層）上面で黒褐色土のを検出した。

〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径3.50×0.74m、溝状である。長軸はN-31°-W、北西～南東方向に持つ。

〈埋土〉 黒褐色土層（1・3層）と地山ブロックの多い層（2・4層）の互層となる。自然堆積と推定される。

〈壁・底面〉 底面長軸は3.23m、幅は15～25cmと比較的広く、端部では40cmとさらに広がる。短軸方向の壁は底面から直立し、上部で外形して立ち上がり、長軸方向はオーバーハングする。V層まで掘りこんでおり、検出面からの深さは40cm程度である。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、遺構の形状から縄文時代と判断される。

（4）堅穴状遺構

R E 003堅穴状遺構（第81図、写真図版62）

〈位置・検出状況〉 A区北東部、13P10oグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で、方形プランの西側に張出部を持つ遺構を確認した。堅穴建物の可能性を考え掘り進めたが張出部は本遺構より新しい塗などで搅乱された範囲と判明した。

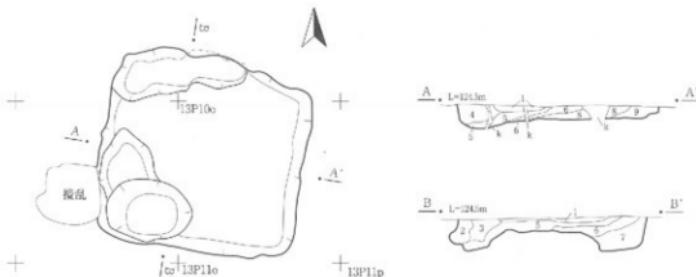
〈重複関係〉 なし。

〈形状・規模〉 開口部径2.48×2.43m、正方形に近い。長軸はN-78°-W、東西方向に持つ。

〈壁・底面〉 底面径は2.23×2.30m、高さは揃うものの小さな起伏があり、面積は4.7m²。北西部と南西部横円形の掘り込みを持つ。検出面からの深さは15cm程度である。北西部の掘り込みは径1.67×0.56m、深さ40cm程度、南西部は横円形プランが2つ連なり、径1.23×1.05m、深さは北側で35cm、南側で50cm程度である。壁は外傾して立ち上がり、北西部の一段低くなる範囲ではオーバーハングする。

〈埋土・遺構の性格〉 黒色土を主体とする。主土の多い層（1・3・4・6・9層）と地山ブロックを多く混入する層（5・7・8層）が交互に、南東方向から流入する。壁崩落土などもなく人為堆

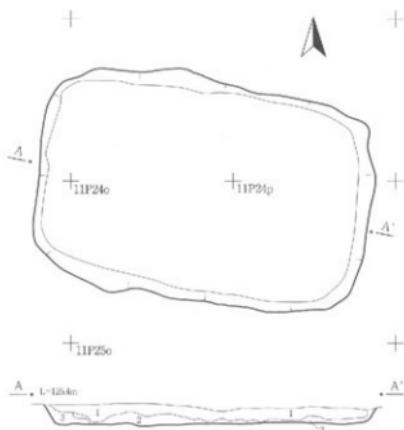
RE003



RE003堅穴状遺構 (A-A'・B-B')

- 1 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック多量（径～2cm）されいな層。層床強い。
- 2 10YR2/1 黒色シルトと地山ブロックが大きく塊状に混じる。（オバーハングし）、地山ブロックが層状に流れ込むようにも見える。複雑か？
- 3 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック微量（径～1cm）。
- 4 3層に似る。
- 5 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック多量（全体に粒子が混じりブロックも含む（径～2cm））。3層と接する北側はブロックが大きくなる。
- 6 3層に似るが地山ブロックや多い。
- 7 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロックや多量（径1～2cm）、全体に混じる。
- 8 5層に似る。
- 9 10YR2/1 黒色 シルト しまりややあり、粘性やや弱い。地山ブロック微量。

RE004



RE004堅穴状遺構 (A-A')

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり、粘性弱い。地山ブロック多量、大きく塊状に含む（径～3cm）。
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり、粘性弱い。地山ブロック少飛、全体に塊状に混じる。1層より粒径小さい（径～1cm）。
- 3 1層に似る。

0 1:60 2m

第81図 R E 003・004堅穴状遺構

積と推定される。北西部と南西部の楕円形プラン内にも土が連続して入り込むことから、これらの穴は住居の掘り方のように埋め戻して床面を平らにしていたものではなく、遺構廃絶時に開口していたものと考えられる。また、規模・形状から竪穴住居跡作りかけの可能性も考えられるが、調査区内の住居跡の構造と比較すると、本遺構ほど床面下に掘り方を深く設けている遺構はなく、断定はできなかった。

〈出土遺物〉 出土していない。

〈時期〉 不明である。

R E004 竪穴状遺構（第81図、写真図版63）

〈位置・検出状況〉 B区南西部、11P24oグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で黒褐色土の広がりを検出した。

〈重複関係〉 RG029溝跡と重複しており、本遺構のほうが新しい。

〈形状・規模〉 開口部径4.15×2.79m、長方形である。長軸はN-79°-W、東西方向に持つ。

〈埋土〉 黒褐色土を主体とする。埋土中に地山ブロックを斑状に含んでおり、人為的に埋め戻されたものと推測される。

〈壁・底面〉 底面は平坦で、径は3.89×2.38m、床面積は8.8m²である。壁は外傾し立ち上がる。礫層まで掘り込み、底面には礫が露出している。検出面からの深さは30cm程度である。

〈出土遺物〉 陶磁器が2点出土している（252・253、第113図、写真図版87）。

〈時期〉 出土遺物から近世もしくはそれ以降と判断される。

（5）焼土遺構

R F005 焼土遺構（第82図、写真図版63・64）

〈位置・検出状況〉 A区東側微高地の13R7kグリッドに位置し、削平されたIV層中で検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は開口部径約93cm前後の歪な略円形を呈する。

〈埋土〉 埋土は黒ボク土系3層に細分され、下層は廃棄された炭化物と焼土が多く混じる。

〈壁・底面〉 底面は概ね平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がり、深さは約20cmを測る。底面と北西側の壁面を除き、壁面は部分的に火熱により厚さ約5mm未満で弱く赤色変化していた。焼土の状況からみて坑内の清掃をしっかりと行って繰り返しの使用をしていたものと思われる。

〈出土遺物〉 遺物は、土師器の壺形土器片約15gが出土した。

〈時期〉 出土遺物から古代と推定される。

R F006 焼土遺構（第82図、写真図版64）

〈位置・検出状況〉 A区の北側中央部の東側旧河道跡内、13Q2・3uグリッドに位置する。本遺構はⅡ層面で焼土の部分的な縁取りとして不整なプランを確認したもので、精査の結果遺構であることが判明したものである。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は開口部で長軸約90cm、短軸約67cmを測る隅丸略長方形を呈する。長軸は旧河道を横断する方向でN-66°-Wである。

〈埋土〉 埋土は4層に細分されるが、上位は黒ボク土の自然堆積、下位は廃棄された炭化物と焼土が

多く混じる人為的堆積の2層に大別される。

〈壁・底面〉 底面は大きな凹凸がある。壁は垂直気味に立ち上がり、南東側ではやや外傾している。深さは約25cmを測る。短軸西側壁面の南半は火熱により厚さ約1cmほどが赤色変化していた。焼土の状況からみて坑内の清掃を行って繰り返しの使用をしていたものと思われる。

〈出土遺物〉 遺物は、土師器の壺形土器片約21gと縄文土器片1点が出土した。(254、第113図、写真図版87)

〈時期〉 出土遺物と隣接する同類の遺構との対比から古代と推定される。

R F007焼土遺構 (第82図、写真図版64)

〈位置・検出状況〉 A区の北側中央部の東側旧河道跡内、13Q6sグリッドに位置する。本遺構はⅡ層面で焼土の部分的な縁取りと炭化物混じりの長方形基調のプランを確認したもので、精査の結果遺構であることが判明したものである。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は開口部で長軸約120cm、短軸約95cmを測る長方形を呈する。長軸は旧河道を横断する方向でN-59°-Wである。

〈埋土〉 埋土は7層に細分されるが、北西側の中位には多量の炭化物と焼土が廃棄されており、全体的に人為的堆積の様相を呈する。

〈壁・底面〉 底面は比較的平坦だが、やや凸凹がある。壁は短軸内壁は垂直気味に、ほかは外傾して立ち上がる。深さは約23cmを測る。壁面の西側は部分的に火熱により厚さ約5mmほどに赤色変化していた。焼土の状況からみて坑内の清掃を行って繰り返しの使用をしていたものと思われる。

〈出土遺物〉 遺物は、土師器の壺形土器片約80gが出土した。大きめの炭化材はクリと鑑定された。

〈時期〉 出土遺物から古代と推定される。

R F008焼土遺構 (第82図、写真図版64・65)

〈位置・検出状況〉 A区北西端微高地上の12P21fグリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層面で検出した。

〈重複関係〉 なし。

〈平面形・規模〉 平面形は開口部で長軸約150cm、短軸55～80cmを測る隅丸略長方形を呈するが、長軸東側は掘り込みの浅いテラス状でやや不整形となっており、西側は長軸約100cm、短軸約80cmのきれいな隅丸長方形となっている。長軸方向はほぼ西一東である。

〈埋土〉 埋土は5層に細分されるが、上位は黒ボク土の自然堆積、下位は廃棄された炭化物と焼土が混じる人為的堆積の2層に大別される。

〈壁・底面〉 底面は比較的平坦だが、やや凸凹がある。壁は南北の内壁は垂直気味に、東西の短軸側は外傾して立ち上がる。深さは西側で約16cm、東側テラス部分では約6cmを測る。西側壁面は部分的に火熱により厚さ約5mm未満で赤色変化していた。焼土の状況からみて坑内の清掃を行って繰り返しの使用をしていたものと思われる。

〈出土遺物〉 遺物は、土師器の壺形土器片約30gが出土し、口縁部1点を掲載した(255、第113図、写真図版87)。その他炭化材はクリと鑑定された。

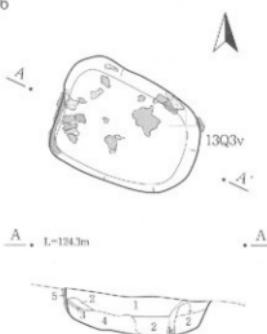
〈時期〉 出土遺物から古代と推定される。

3 検出された地盤と地物

RF005



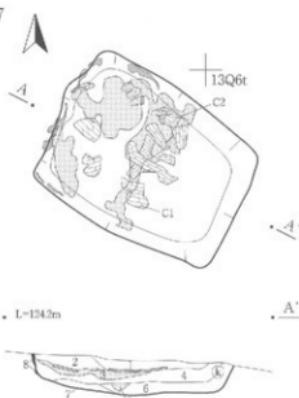
RF006



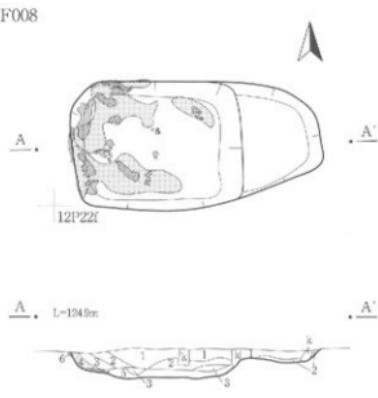
R F006地土造構 (A-A')

- 1 10YR2/2 黒褐色 しまり、粘性あり。炭化物微量、黄褐色ブロック微量。
- 2 10YR2/1 黒色 しまりきわめてあり、粘性あり。炭化物微量。
- 3 7SYR4/6 棕褐色 粘土ソック
- 4 10YR2/1 黒褐色 しまり、粘性あり。炭化物多量、焼土少量、黄褐色微量。
- 5 5YR5/6 赤褐色 塩漬け土

RF007



RF008

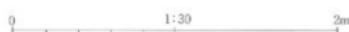


R F007地土造構 (A-A')

- 1 10YR2/2 黒褐色 しまりややあり、粘性あり。炭化物微量。
- 2 10YR2/3 深褐色 しまりややあり、粘性あり。炭化物・黄褐色色、燒土粘性。
- 3 5YR4/3 に赤褐色 塩漬け土。
- 4 10YR2/2 黑褐色 しまり、粘性あり。黄褐色色微量。
- 5 5YR4/4 に赤褐色 しまりあり、粘性なし。泥炭灰土。
- 6 10YR2/1 黑褐色 しまり、粘性あり。黄褐色色微量。
- 7 7SYR2/1 黑褐色 しまり、粘性あり。地山土と地土混じり。
- 8 5YR3/6 深赤褐色 燃灰土。

R F008地土造構 (A-A')

- 1 10YR2/2 黒褐色 しまりややあり、粘性あり。
- 2 10YR3/1 深褐色 しまりややあり、粘性あり。黄褐色色微量。
- 3 10YR2/1 黑褐色 しまりなし、粘性あり。
- 4 10YR2/1 黑褐色 しまりややあり、粘性あり。地土较少量。
- 5 10YR2/3 黑褐色 しまりややあり、粘性あり。黄褐色土混じり。
- 6 5YR4/8 赤褐色 燃土



第82図 R F005~008地土造構

R F 009 焼土遺構（第83図、写真図版65）

〈位置・検出状況〉 A区中央部微高地上の13Q15fグリッドに位置し、やや削平されたIV層中で検出した。検出時の状況では重複する R A086 壁穴住居のカマド関連の可能性を考えながら精査を進めたが、単独の遺構であることが判明したものである。

〈重複関係〉 RA086 壁穴住居と重複し、本遺構が切る。

〈平面形・規模〉 平面形は開口部径約67cm前後の歪な略円形を呈する。

〈埋土〉 埋土は5層に細分され、中位は褐色土、下位は腐棄された炭化物と焼土が混じる人為的堆積である。

〈壁・底面〉 底面は丸みを持ち、やや凹凸があり、壁は丸みのある底面から明瞭な縦を持たずに緩やかに外傾して立ち上がり、残存する深さは約11cmを測る。底面から壁面にかけて一部分的に火熱により弱く赤色変化していた。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈時期〉 重複関係から及び類似する遺構の存在から古代以降と推定される。

R F 010 焼土遺構（第83図、写真図版65）

〈位置・検出状況〉 A区北東部、13P10uグリッド付近、旧河道の落ち際斜面地に位置する。地山層（IV層）で焼土を検出し、その後周囲を再度検出したところ焼土の外側に黒色土の広がりを確認した。

〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径1.02×1.01m、不整な隅丸方形である。主軸はN-57°W、北西-南東方向に持つ。

〈壁・底面〉 底面は凹凸を持ち、径0.84×0.92m、壁は外傾して立ち上がる。壁の一部は被熱している。検出面からの深さは20cm程度である。

〈埋土〉 埋土下部（3～5層）は地山ブロック・炭化物を混入し、その上面に炭化物・焼土ブロックが広がり（2層）、上部は混入物の少ない黒色土が堆積する。2層は浅皿状に広がっており、被熱範囲は壁際でしか確認できなかったが、おそらくこの面で火を焚き、焼成後にこの面を人為的に動かしたため（もしくは自然の埋没過程で）崩れたものが焼土ブロックではないかと推測する。2層より下位に、炭化物・焼土ブロックが混入すること、底面に凹凸がみられることなどから、2層形成以前にも焼成が行われ、何らかの理由で焼成面が壊され新しい面（3～5層上面）を形成し、再び焼成がおこなわれた可能性があると考えられる。1層は混入物の少ない黒色土（II層起源か）で自然堆積と推定される。

〈遺物〉 土器器382g（壺24g、壺358g）出土し、壺1点を掲載した（256、第113図、写真図版87）。

〈時期〉 出土遺物より古代もしくはそれ以降と判断される。

R F 011 焼土遺構（第83図、写真図版66）

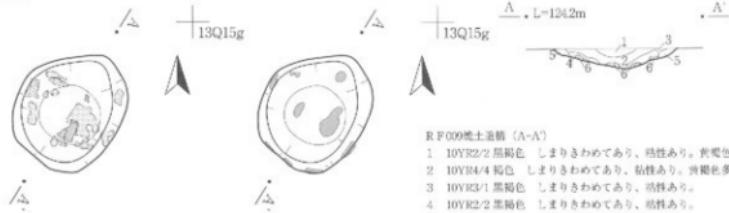
〈位置・検出状況〉 A区南部、13Q22fグリッド付近、旧河道への落ち際斜面地に位置する。地山層（IV層）で黒色土の広がりを検出した。

〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径1.26×1.17m、不整円形である。長軸はN-55°W、北西-南東方向に持つ。

〈壁・底面〉 底面は凹凸を持ち、径1.18×0.99m、壁は外傾して立ち上がる。斜面上方、北西壁は被熱している。検出面からの深さは20cm程度である。

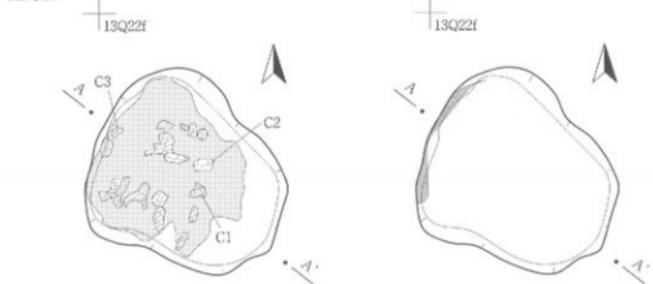
RF009



RF010



RF011



0 1:30 2m

第83図 R F009~011焼土遺構

〈埋土〉 3層上面に炭化物・焼土ブロックが広がる。それよりも下位（3層）は地山ブロックが多く炭化物・焼土ブロックを含む層、上位には地山ブロックの混入量が少なく、炭化物や焼土ブロックを含む層が堆積する。RF010焼土遺構同様、被熱範囲は壁にしかないが、土坑内で数度焼成がおこなわれたものと推定される。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、同形状・性格の遺構から判断すると、古代もしくはそれ遺構と判断される。

RF012焼土遺構（第84図、写真図版66）

〈位置・検出状況〉 A区南部、13Q25eグリッド付近、旧河道への落ち際斜面地に位置する。Ⅲ層～地山層（IV層）上面で焼土の広がりを検出した。

〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径1.24×0.96m、隅丸長方形である。長軸はN-62°-W、北西-南東方向に持つ。

〈壁・底面〉 底面は凹凸を持ち、径1.13×0.99m、壁は外傾して立ち上がる。壁北西半が被熱する。検出面からの深さは25cm程度である。

〈埋土〉 遺構内で火が焚かれ、5層上面から壁にかけて被熱する。焼土上位には炭化物・焼土ブロックが広がり、さらに自然堆積と思われる、黒色土層（1層）に覆われる。焼成面より下（5層以下）は地山ブロックを含む黒色土で、炭化物・焼土ブロックの混入量は少ない。穴を掘り始めた土を住居掘り方のように均して、焼成が行われたものと考えられる。

〈遺物〉 上部器14g（坏4g、甕10g）出土しているが、小片のため図化していない。

〈時期〉 出土遺物より古代もしくはそれ以降と判断される。

RF013焼土遺構（第84図、写真図版66）

〈位置・検出状況〉 A区南部、14Q1dグリッド付近、旧河道への落ち際斜面地に位置する。II層中で焼土の広がりを検出した。

〈重複〉 なし。

〈規模・形状〉 開口部径0.74×0.61m、不整円形である。長軸はN-51°-W、北西-南東方向に持つ。

〈壁・底面〉 底面はやや丸みを帯び、径0.49×0.41m。壁は外傾して立ち上がる。II層を掘り込んでおり、検出面からの深さは10cm程度である。

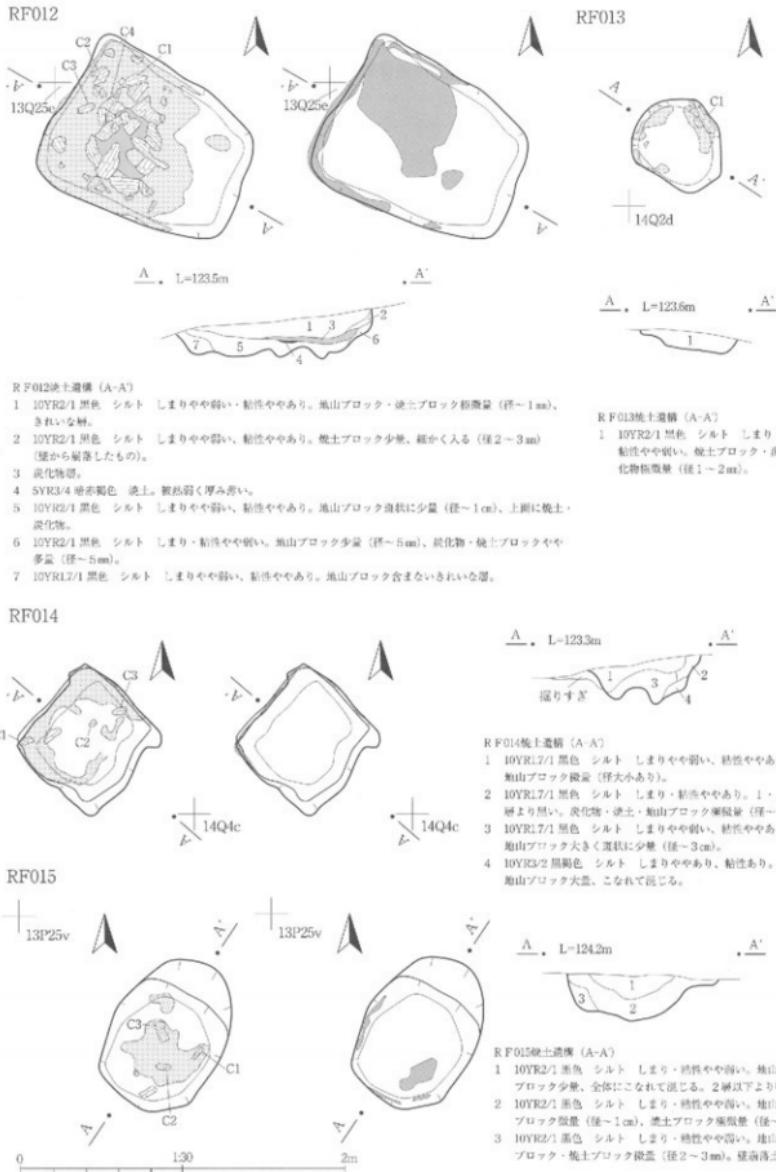
〈埋土〉 II層起源の黒色土を主体とするが、II層よりしまり弱く、黒味強い。壁際検出面から埋土中層にやや大きい焼土ブロックが落ち込み、本来は単層ではなく上下2層に分層できる可能性が高いが、遺構中心部まで焼土ブロックが統いておらず、はっきりと分層できなかった。黒色土中に作られた遺構のため焼土の形成が不良、かつ地山より土質が柔らかく崩れやすいことから、壁の焼成が崩れ、焼土ブロック層が堆積した可能性が高い。焼成面は確認できなかつたが、周辺の類似する遺構の存在もあわせて考えると、遺構で焼成が行われていたのものと推定される。

〈遺物〉 出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、同形状・性格の遺構から判断すると、古代もしくはそれ遺構と判断される。

RF014焼土遺構（第84図、写真図版67）

〈位置・検出状況〉 A区南部、14Q3bグリッド付近、旧河道への落ち際斜面地に位置する。Ⅲ層～地山層（IV層）上面で焼土の広がりを検出した。



第84図 RF012~015地土遺構

〈重複〉なし。

〈規模・形状〉開口部径0.74×0.68m、隅丸方形である。長軸はN-45°-E、北東-南西方向に持つ。〈壁・底面〉底面は凹凸を持ち、径0.57×0.46m、壁は外傾して立ち上がる。南東壁以外の壁には被熱範囲が認められる。検出面からの深さは25cm程度である。

〈埋土〉3層上面で炭化物・焼土ブロックが馬蹄形状広がる。これより下位では地山ブロックを多く混入する。壁以外で焼成面は確認できなかったが、RF013焼土遺構同様、木造構を掘り窪めこれを均し焼成が行われた可能性が高い。その後焼成物を搔きだした結果中心部の焼土・炭化物が尖われ、自然崩落も伴いながら壁周辺にだけ炭化物・焼土ブロックが残存したものと考えられる。

〈遺物〉出土していない。

〈時期〉出土遺物はないが、同形状・性格の遺構から判断すると、古代もしくはそれ以降と判断される。

RF015焼土遺構（第84回、写真図版67）

〈位置・検出状況〉A区南部、13P10uグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で黒色土の広がりを検出した。

〈重複〉なし。

〈規模・形状〉開口部径0.96×0.71m、梢円形である。長軸はN-34°-E、北東-南西方向に持つ。

〈壁・底面〉底面は丸みを帯び、径0.63×0.56m。壁は外傾して立ち上がり、北東側上部は角度が緩くなる。検出面からの深さは30cm程度である。底面～壁にかけて被熱範囲が認められ、底面には炭化物・焼土ブロックも広がる。底面の被熱は弱く、壁のほうがよく焼けている。

〈埋土〉壁際から埋土下部に焼土ブロックを含み、上部は地山ブロックを混入する。これらの層はレンズ状に堆積し、自然に埋没したものと推定される。

〈遺物〉出土していない。

〈時期〉出土遺物はないが、同形状・性格の遺構から判断すると、古代もしくはそれ以降と判断される。

（6）溝 跡

RG015溝跡（第85・86・91回、写真図版68）

〈位置・検出状況〉A区中央部、12Q20t～14P9rグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で検出した。

〈重複〉RA081・083・088・095堅穴住居跡、RD154・158陥し穴状遺構と重複し、これらすべてより本遺構が新しい。

〈走向・規模〉南東-北西方向、直線状に延びる。旧河道の流路とほぼ並行する。北側はRA081堅穴住居跡北側で一端途切れるが、調査区外まで続き、南側は、RA095堅穴住居跡南で新期の攪乱によって途切れる。本次調査で検出した全長は約96m、上端0.27～1.00m、下端0.06～0.41mである。過年度の調査と合わせると総延長は200m近い。また南西端部の延長上あるRG023溝跡とも同一遺構の可能性がある。

〈壁・底面〉断面形状は逆台形、検出面からの深さは、深いところで50cm程度。底面標高は北から南へ向かって低くなり、その差は85cm程度である。

〈埋土〉黒色～黒褐色土を主体とする。地山ブロックを底面～壁際多く含み、地点によって若干違うものの、その混入量をかえて徐々に埋没する。その過程で、埋土中部に焼土ブロック層が堆積する（3・4層）。焼土ブロックの広がりは、RA083堅穴住居跡の南側に一か所、RA088堅穴住居跡とRA095堅穴住居跡の間には断続的にみられる。すべて西壁際から遺構中心部（最深部）まで堆積し、ほとん

ど東壁には及ばない。人為的な投棄であれば、溝の幅はわずか1m弱のため、溝幅内まんべんなく焼土ブロックが広がるものと考えられる。本造構東側には旧河道が存在し、現在では水平に削平されているものの当時は若干の傾斜があり西から東へに向かって低くなっていたとすれば、降雨などにより西側から溝内に焼土ブロックが流入したものと推定される。

〈出土遺物〉 土師器590g（壺24g、壺566g）出土し、壺1点を掲載した（257、第113図、写真図版87）。

〈時期〉 出土遺物より平安時代もしくはそれ以降と判断される。

R G022溝跡（第87・88・91図、写真図版69）

〈位置・検出状況〉 A区南西部、14P16e～14P14pグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で検出した。

〈重複〉 なし。19次調査区内ではRG023溝跡と重複し、本造構のほうが古い。

〈走向・規模〉 南西～北東方向、直線状に延びる。北東側は新期の擾乱によって消失し、南西側は19次調査区へと続く。途中も擾乱によって消失するが、検出した全長は約24m、上端0.29～0.41m、下端0.19～0.25mである。過年度調査範囲からの総延長は120mを超える。

〈壁・底面〉 断面形は逆台形状で、検出面からの深さは10cm程度である。

〈埋土〉 黒色～黒褐色土を主体とし、下部に地山ブロックを含む。自然堆積である。

〈出土遺物〉 出土していない。

〈時期〉 過年度の調査での出土遺物により古代以降と判断されている。

R G023溝跡（第87・91図、写真図版69）

〈位置・検出状況〉 A区南西部、14P17e～14P13mグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で検出した。

〈重複〉 なし。19次調査区内ではRG022溝跡と重複し、本造構のほうが新しい。

〈走向・規模〉 南西～北東方向、直線状に延びる。北東側は新期の擾乱によって消失し、南西側は19次調査区へと続く。途中も擾乱によって消失するが、検出した全長は約19m、上端0.18～0.60m、下端0.09～0.43m。過年度調査範囲も合わせた総延長は32mほどである。

〈壁・底面〉 断面形は丁字～逆台形状、検出面からの深さは20cm程度。底面標高は北から南へ低くなり、その差は25cm程度である。

〈埋土〉 黒色土を主体とし下部に地山ブロックを多く含む。自然堆積である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 過年度の調査での重複関係から古代以降と判断されている。

R G024溝跡（第87・88・91図、写真図版70）

〈位置・検出状況〉 A区南西部、14P12e～14P11vグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で検出した。

〈重複〉 RG025溝跡と重複し、本造構のほうが新しい。

〈走向・規模〉 東西方向、直線状に延びる。西側は30次調査区内へと続く。東側はA-A'ベルト以東でRG025溝跡と重なってしまい、両造構を同時に掘り下げたため本造構の平面形を追えず、B-B'ベルトでも、本造構を断面で確認できていないが、14P12n付近から東へと延びる溝と同一造構と思われ

る。両者を合わせた全長は約33m、残存する上端0.40~0.77m、下端0.11~0.64m。過年度調査範囲からの総延長は90mほどである。

〈壁・底面〉 断面形はU字状で検出面からの深さは20cm程度。底面標高は西から東へ向かって低くなり、その差は50cmほどである。

〈埋土〉 黒色~黒褐色土を主体とし、下部に地山ブロックを多く混入する。自然堆積である。

〈出土遺物〉 出土していない。

〈時期〉 重複関係から古代以降と推定される。

R G025溝跡（第87・88・91図、写真図版70）

〈位置・検出状況〉 A区南西部、14P12e~14P11vグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で検出した。

〈重複〉 RG024溝跡と重複し、本道構のほうが古い。

〈走向・規模〉 東西方向、直線状に延びる。両端は調査区外へと続く、西側は30次調査区で検出されている。本次調査区内の全長は約35m、上端0.66~1.55m、下端0.20~0.65m。過年度調査区を含めた総延長は90mほどである。

〈壁・底面〉 断面形はU字状で、西側はV字に近い。検出面からの深さは60cm程度。底面標高は西から東に向かって低くなり、その差は30cmほどである。

〈埋土〉 黒色土を主体とし、堅際・底面付近に地山ブロックを多く混入する。自然堆積と推定される。

〈出土遺物〉 上部器73g（环10g・甕63g）出土しているが、小片のため固化していない。

〈時期〉 出土遺物より古代、もしくはそれ以降と判断される。

R G028溝跡（第89・91図、写真図版70）

〈位置・検出状況〉 B区南東部、12P2t~12P2vグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で検出した。

〈重複〉 なし。24次調査区内ではRG029溝跡と重複しこれよりも古い。

〈走向・規模〉 東西方向、直線状に延びる。西側は24次調査区、東側は21次調査区へと続く。検出された全長は2.8m、上端0.49~0.78m、下端0.29~0.53m。過年度調査区を含めた総延長は35mほどである。

〈壁・底面〉 断面形はU字状で、検出面からの深さは20cm程度である。

〈埋土〉 黒色土を主体とし、堅際から下部に地山ブロックを少量混入する。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 不明である。

R G029溝跡（第89・91図、写真図版71）

〈位置・検出状況〉 B区西部、11P15p~12P2oグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で検出した。

〈重複〉 RD151土坑より新しく、RE004竪穴状造構より古い。また、24次調査区ではRG028溝跡と重複し、これよりも新しい。

〈走向・規模〉 南北方向、直線状に延びる。北側は深さを減じ消失し、南側は24次調査区へと続く。検出された全長は23m、上端0.49~0.78m、下端0.29~0.53m。過去の調査区を含めた総延長は25m程度である。

〈壁・底面〉 断面形は逆台形状で、底面に凹凸をもつ。検出面からの深さは25cm程度である。

〈埋土〉 黒色土を主体とし、下部に地山ブロックを多く含む。南側より北側の黒味が強い。自然堆積と

推定される。

〈出土遺物〉 土師器甕が3g出土し、小片のため図化しない。

〈時期〉 出土遺物より古代、もしくはそれ以降と判断される。

R G030溝跡（第90・91図、写真図版71）

〈位置・検出状況〉 A区北西部、13P1f～12P22kグリッド付近に位置する。地山層（IV層）で検出した。

〈重複〉 なし。

〈走向・規模〉 南西-北東方向、直線状に延びる。両端は深さを減じ途切れる。検出された全長は13m、上端0.19～0.48m、下端0.10～0.30m。

〈壁・底面〉 底面は凹凸を持ち、断面形は逆台形状となる。検出面からの深さは10cm程度である。

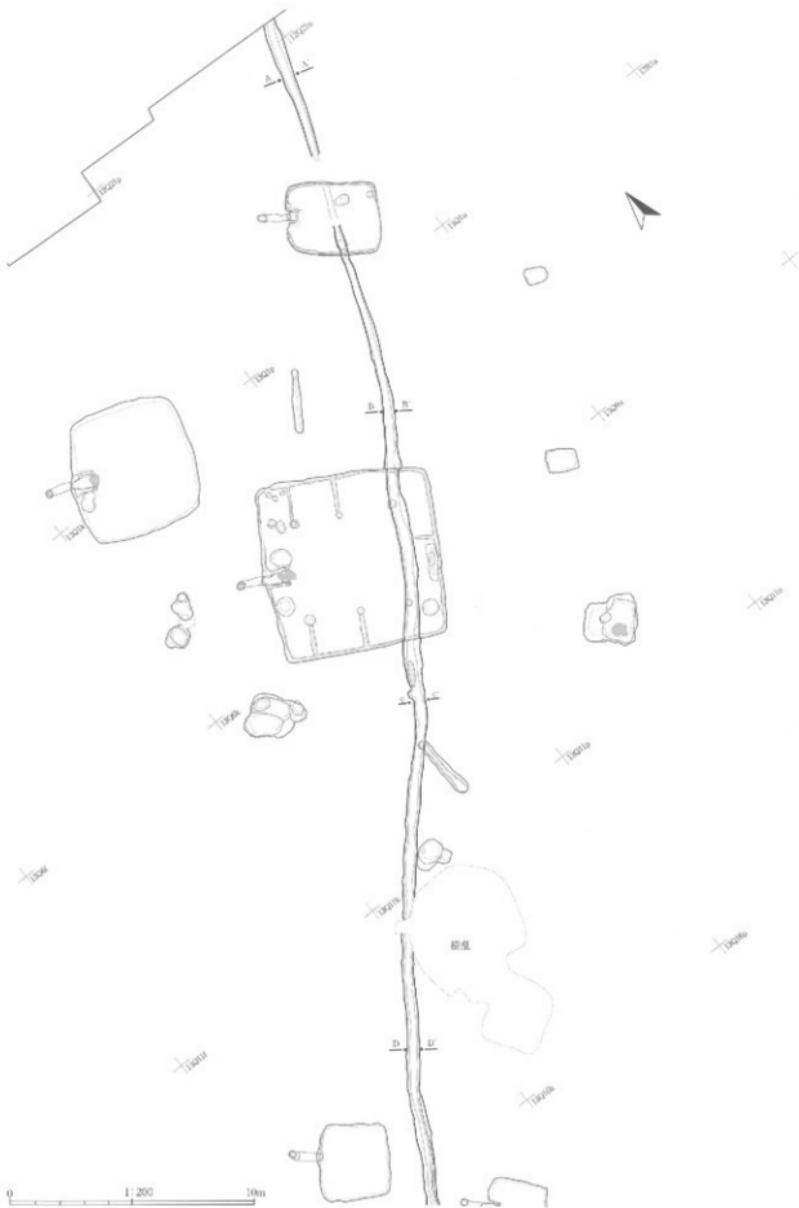
〈埋土〉 下部は黒褐色土、上部は黑色土が主体となり、自然に堆積したものと推定される。

〈出土遺物〉 出土していない。

〈時期〉 不明である。

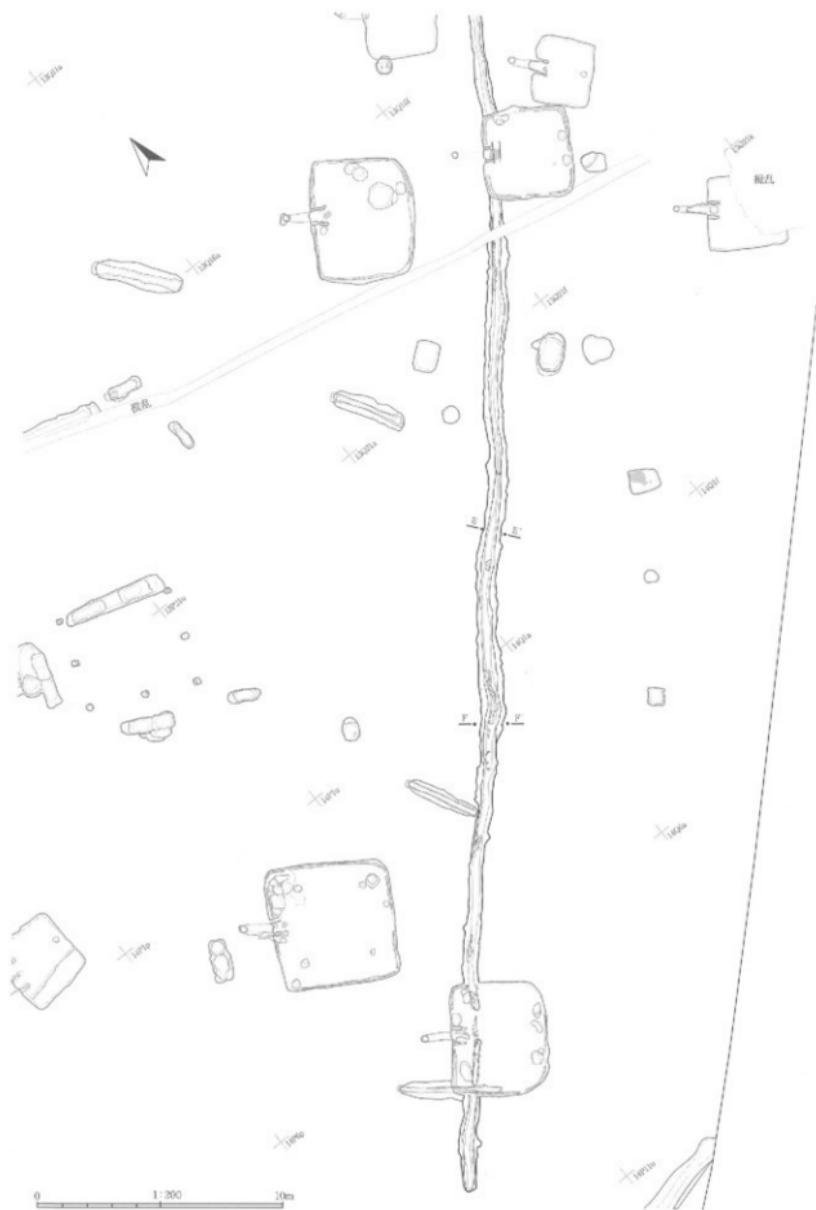
（7） 遺構外出土遺物

旧河道内II層中より縄文土器・土師器、調査区内擾乱及び表土より近世～近現代の陶磁器が出土している。土器は小片であること、陶磁器は該期遺構が本次調査区内に検出されなかつことと整理期間の理由から、図化は行わなかった。



第85図 R G015溝跡 (1)

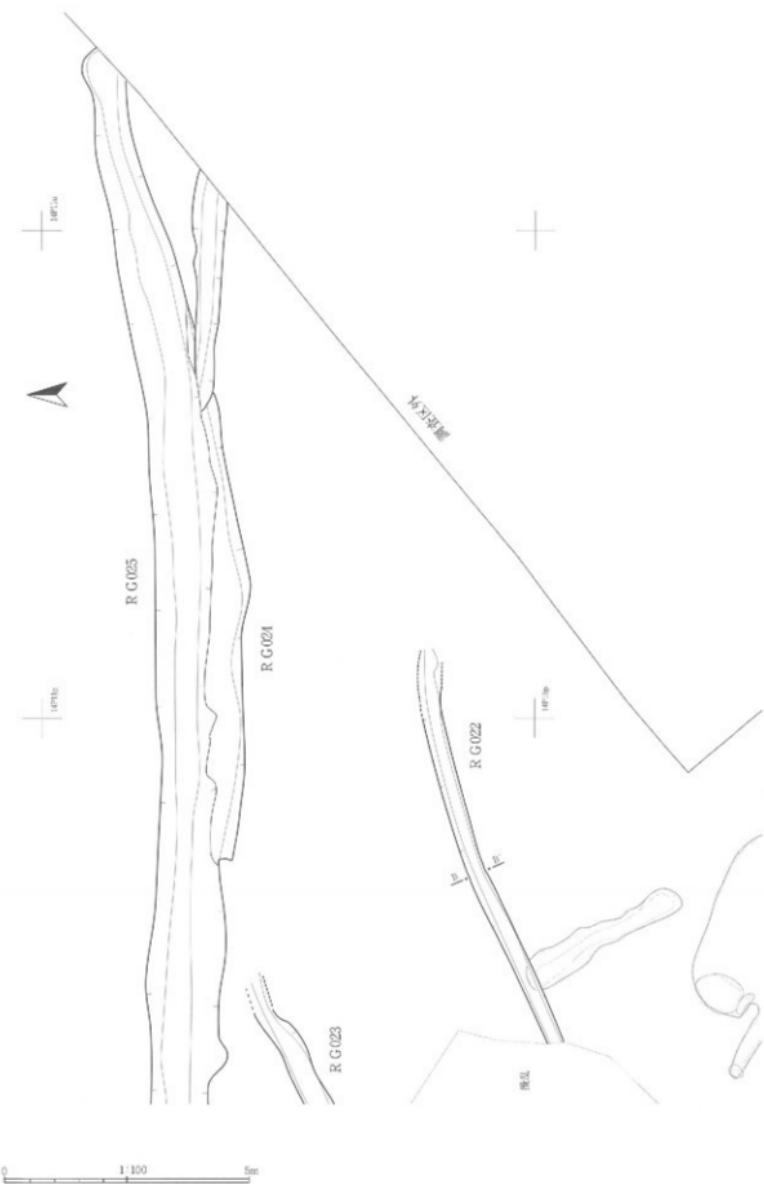
3 検出された遺物と遺物



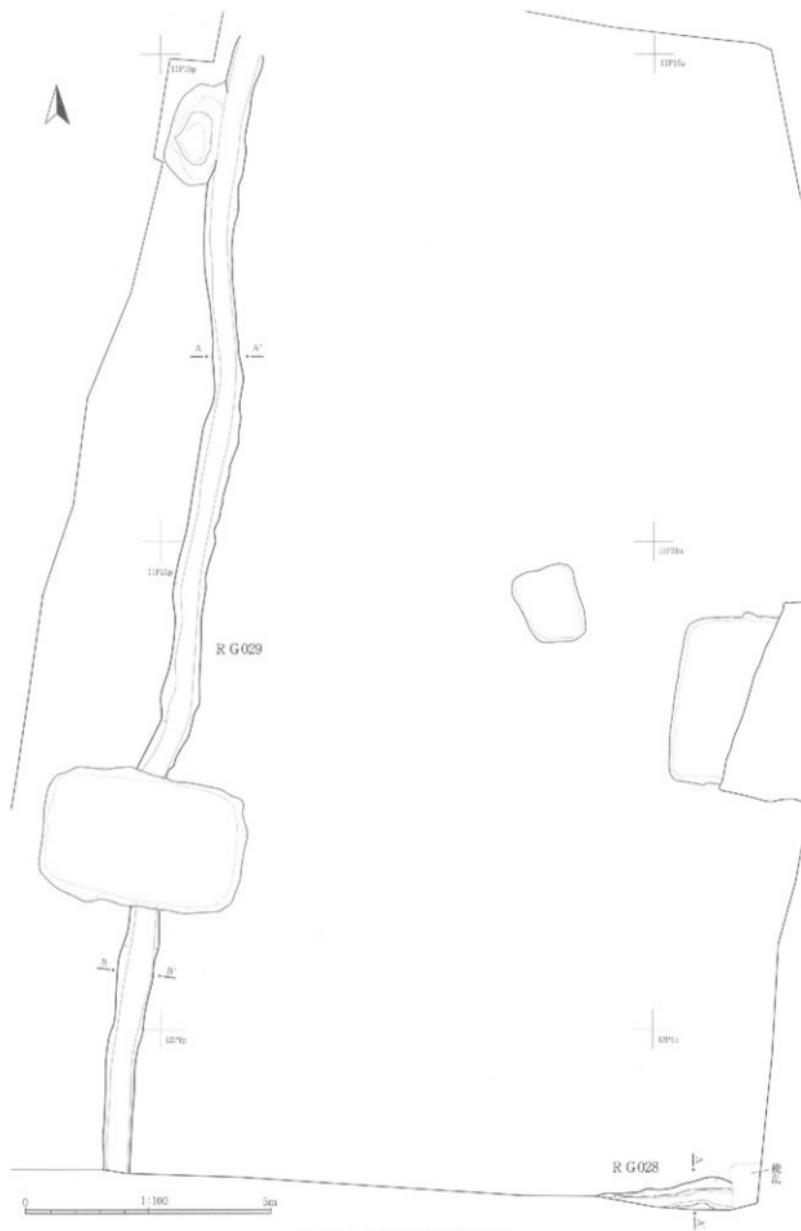
第86図 R G015溝跡 (2)



第87図 R G022~025溝跡 (1)

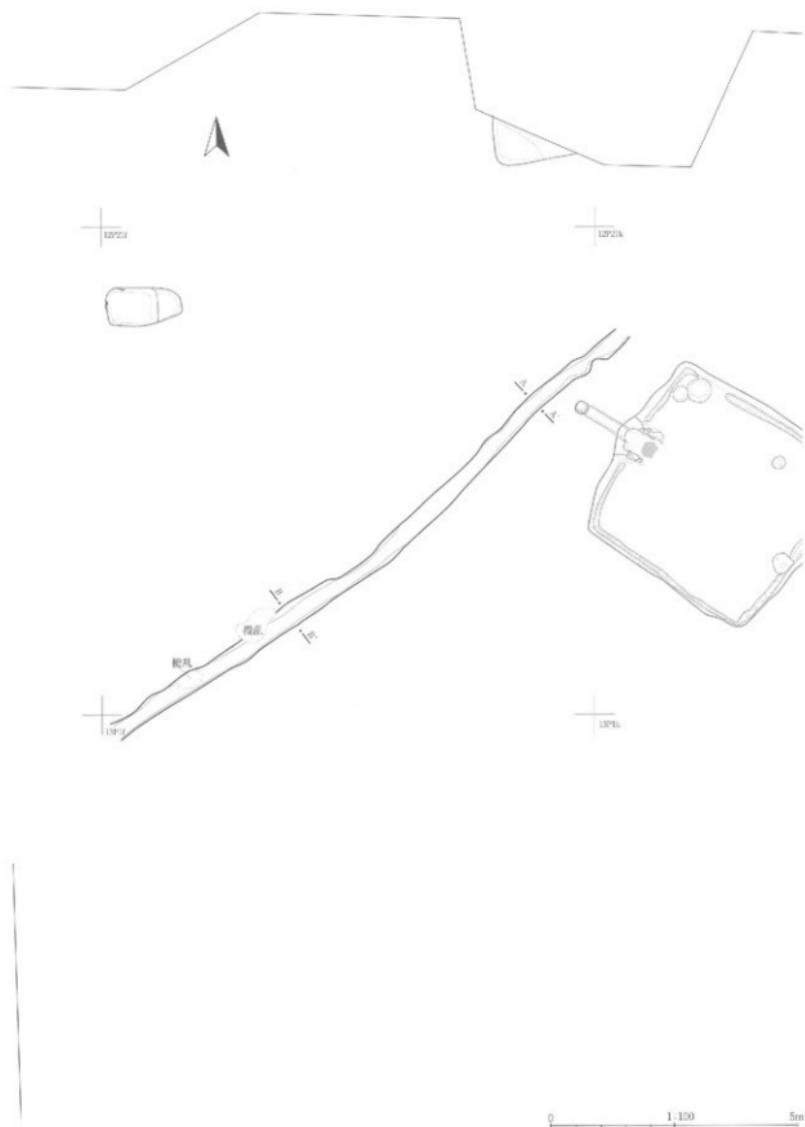


第88図 R G 022~025溝跡 (2)

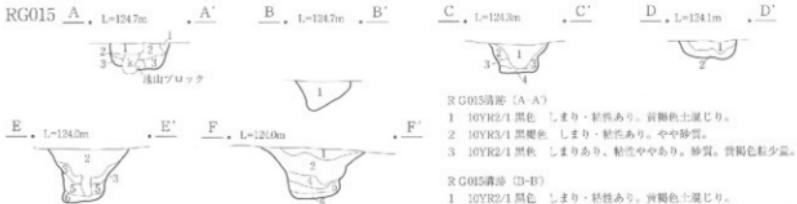


第89図 R G 028・029溝跡

3 検出された遺構と遺物



第90図 R G030溝跡



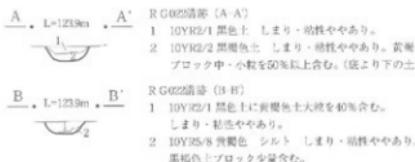
RG015跡跡 (C-C')

- 1 10YR2/1 黒色 しまりあり、粘性やあります。やや砂質。
- 2 10YR2/1 黒色 しまりあり、粘性やあります。やや砂質。黄褐色土混量。
- 3 10YR2/2 黄褐色 しまりあり、粘性なし。砂質。黄褐色少々混。
- 4 10YR3/1 黑褐色 しまり・粘性あります。やや砂質。

RG015跡跡 (D-D')

- 1 10YR2/1 黒色 しまりやあります。粘性あります。
- 2 10YR3/1 黑褐色 しまりやあります。粘性あります。黄褐色土少々混。

RG022



RG024・025



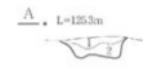
RG028



RG028跡跡 (A-A')

- 1 10YR2/2 黑褐色土 しまり・粘性やあります。黄褐色土ブロック小粒を10%含む。
- 2 10YR2/1 黑褐色土 しまり・粘性やあります。黄褐色土ブロック大・中粒を50%含む。
- 3 10YR2/1 黑褐色土 しまり・粘性やあります。黄褐色土ブロック大陸を30-40%含む。
- 4 10YR2/1 黑褐色土 しまり・粘性やあります。
- 5 10YR2/1 黑褐色土 しまり・粘性やあります。黄褐色土ブロック小粒を30%含む。

RG029



RG029跡跡 (A-A')

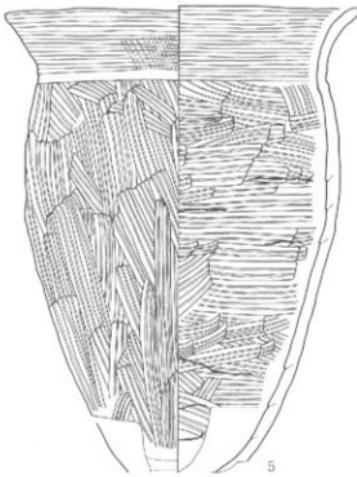
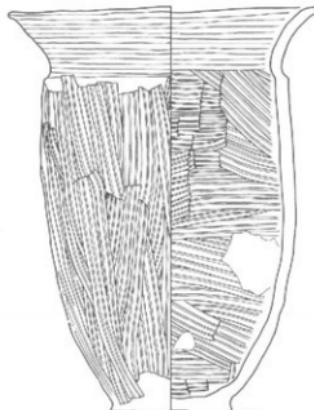
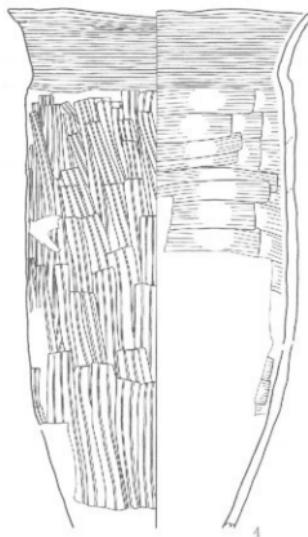
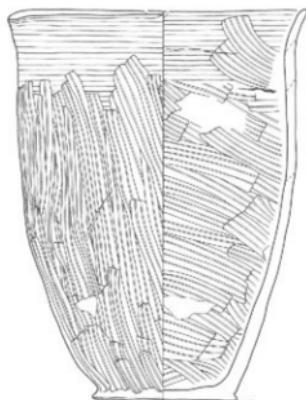
- 1 10YR1/1 黒色 シルト しまりやや弱い。粘性やあります。地山ブロック塊混量。(径1~2m)。
- 2 10YR1/1 黑色 シルト しまりやや弱い。粘性やあります。地山ブロック少々、細かく入る(径1~3m)。
- 1 10YR2/1 黑色 土 しまりあり、粘性やあります。黄褐色土ブロック小粒を10%含む。
- 2 10YR2/1 黑色 土 しまりあり、粘性やあります。黄褐色土ブロック大陸を50%以上含む。

RG030

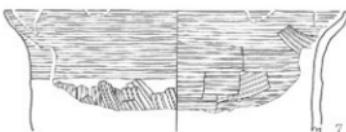


第91図 R G溝跡断面

RA080①

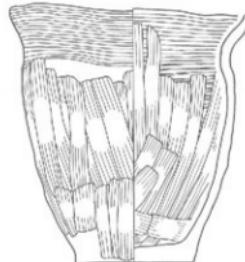
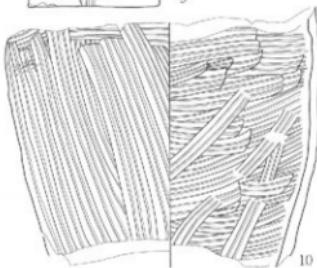
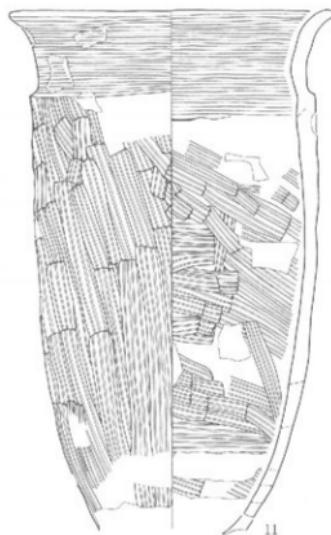
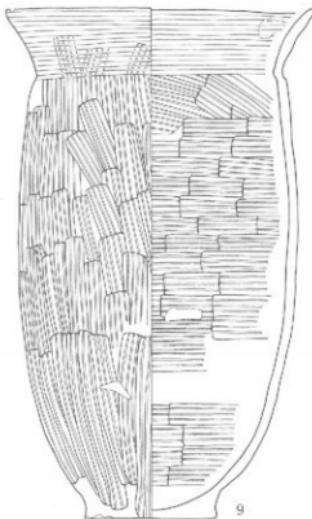
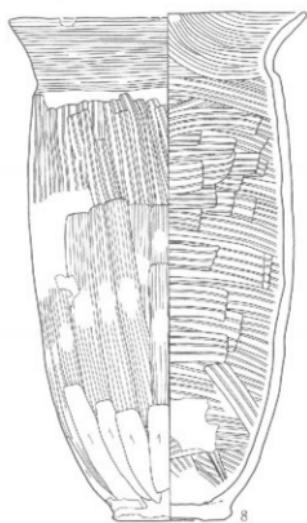


0 1:3 10cm



第92図 出土遺物 (1)

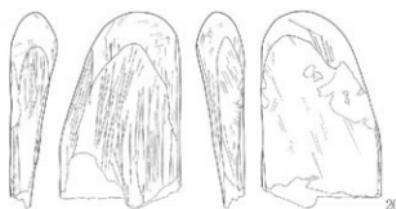
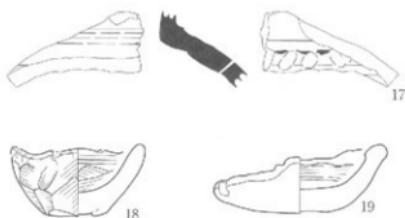
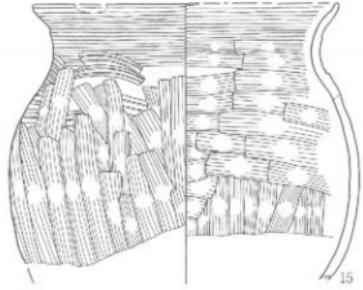
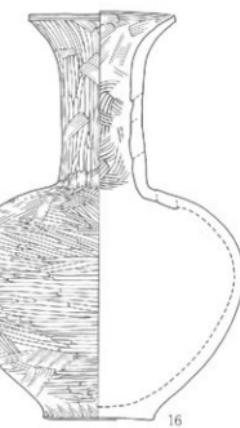
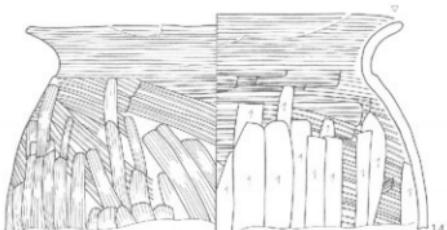
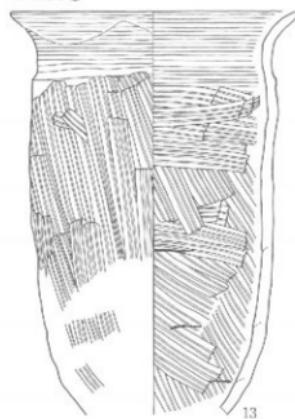
RA080②



0 1 : 3 10cm

第93図 出土遺物 (2)

RA080③



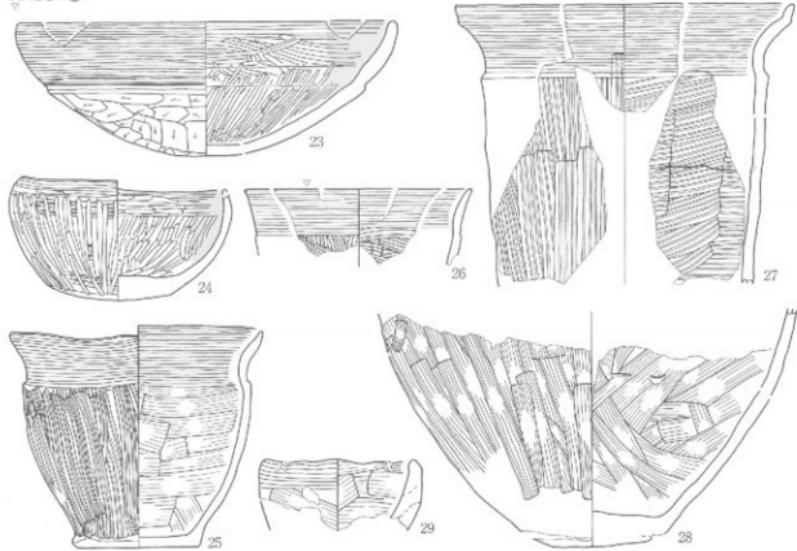
RA081①



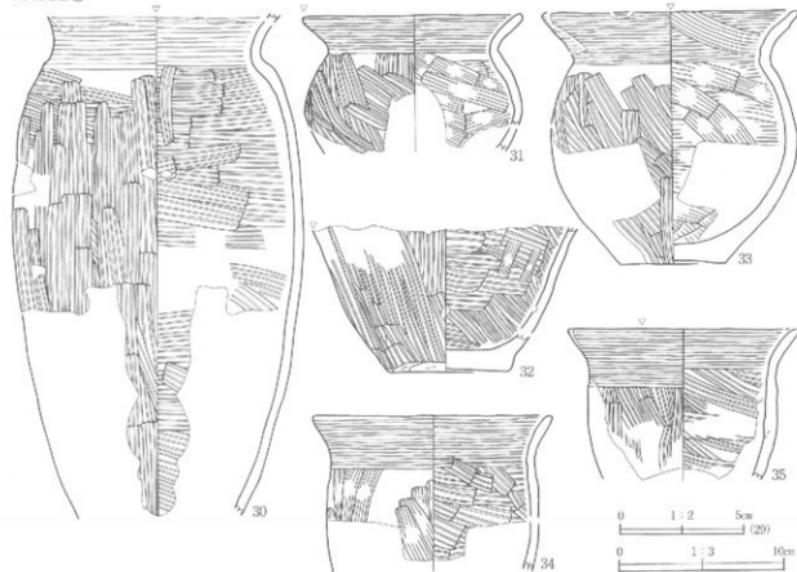
0 1:2 5cm (18・19) 0 1:3 10cm

第94図 出土遺物 (3)

RA081②



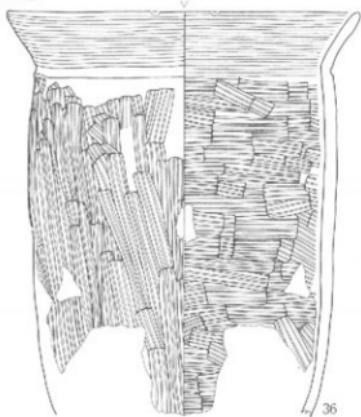
RA082①



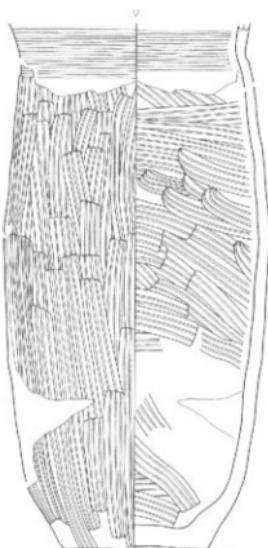
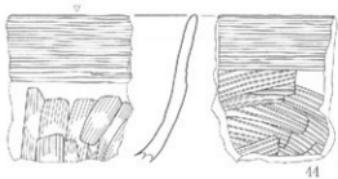
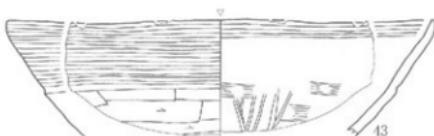
0 1 : 2 5cm
0 1 : 3 10cm

第95図 出土遺物 (4)

RA082②

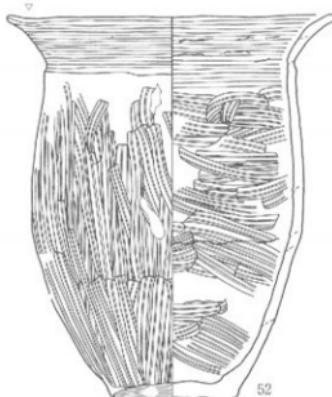
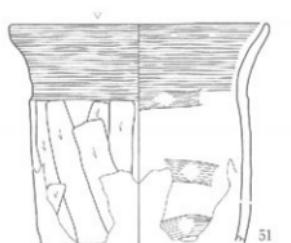
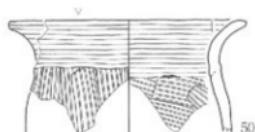
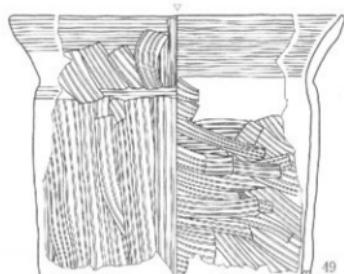
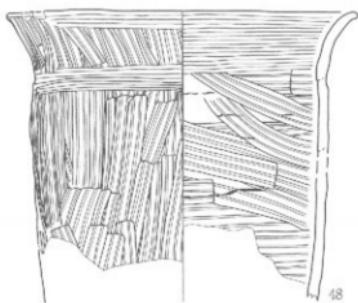
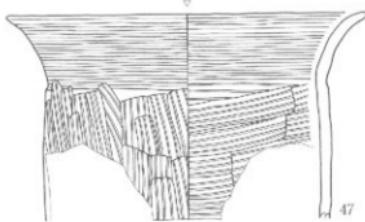
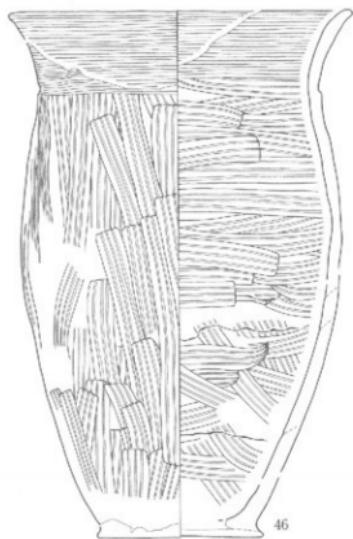


RA083①



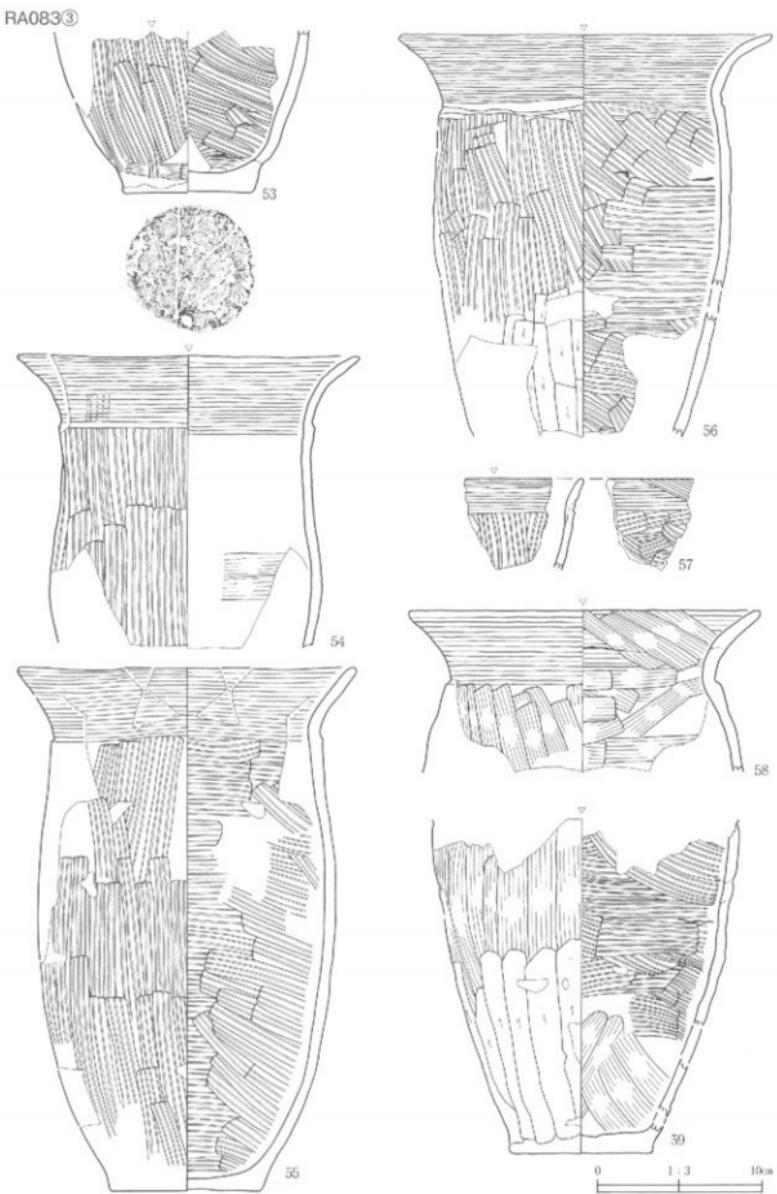
第96図 出土遺物 (5)

RA083②



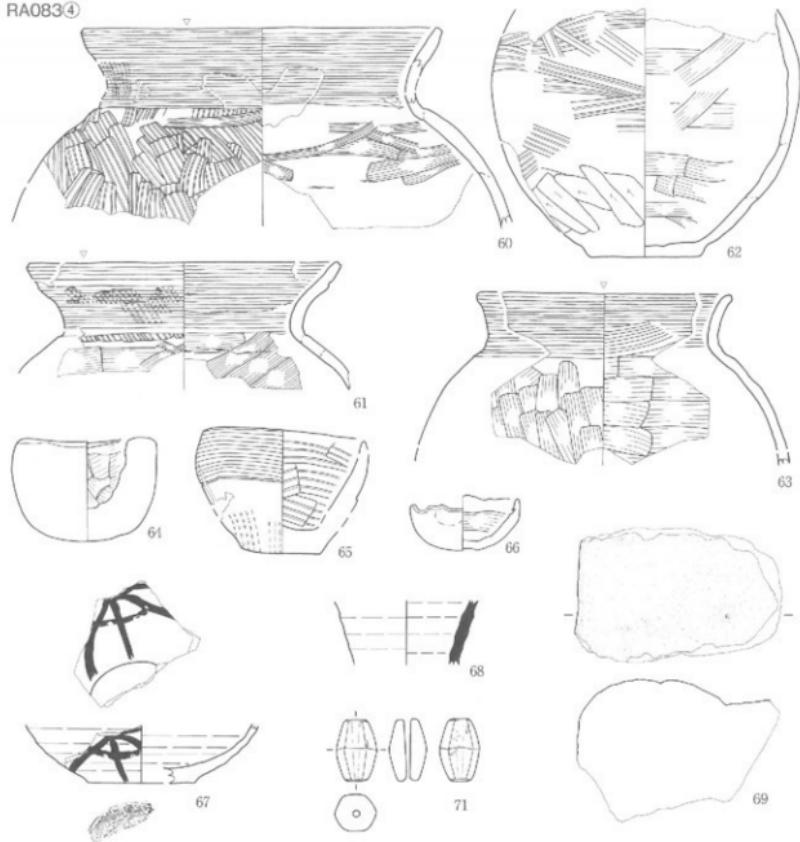
0 1 : 3 10cm

第97図 出土遺物 (6)

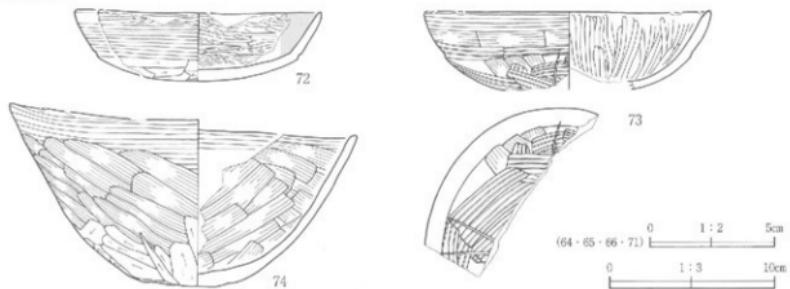


第98図 出土遺物 (7)

RA083④

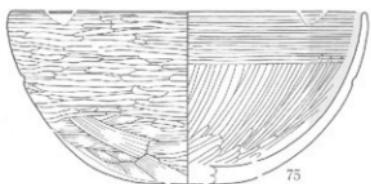


RA084①

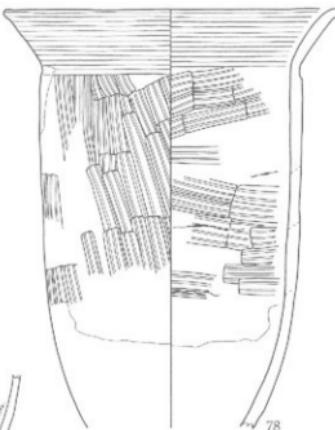


第99図 出土遺物 (8)

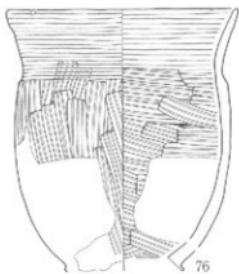
RA084②



75



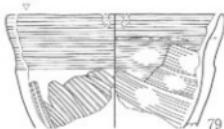
78



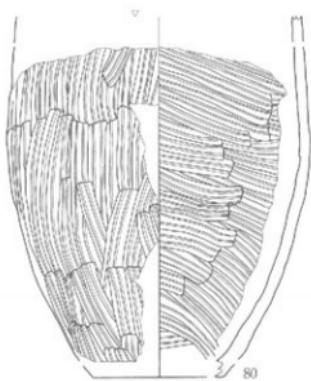
76



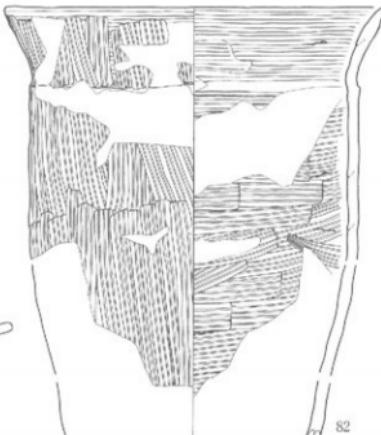
77



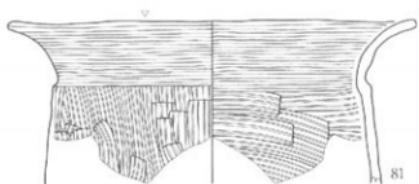
79



80



82

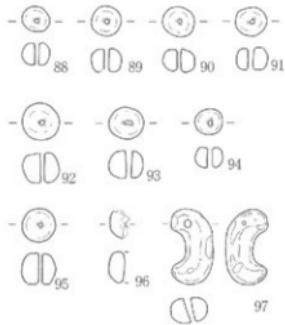
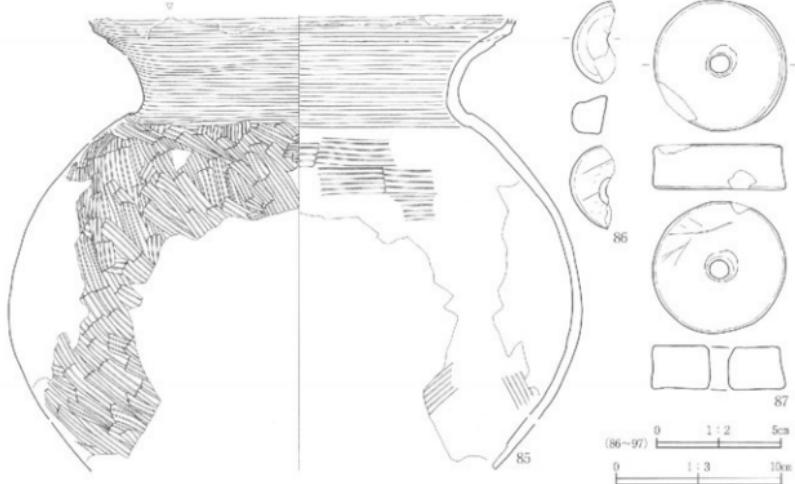
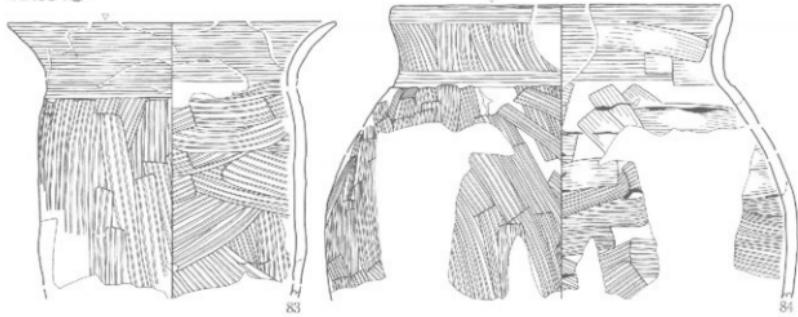


81

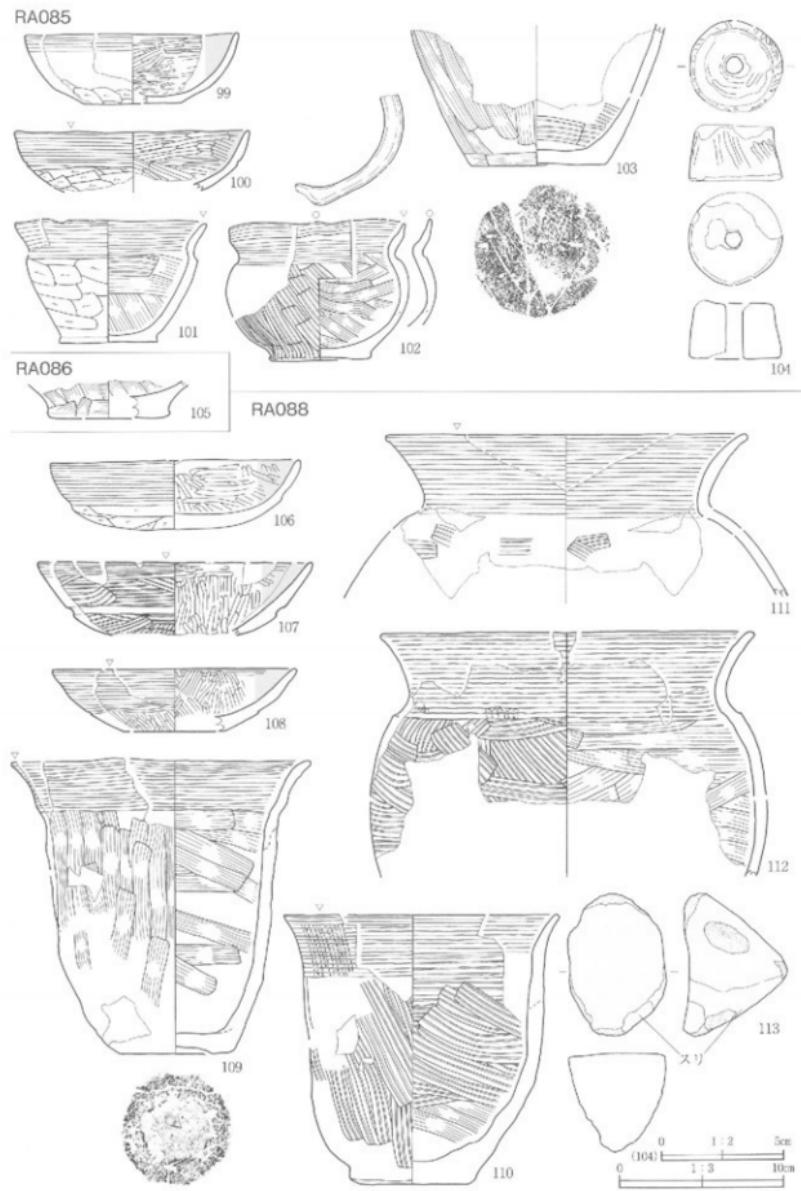
0 1 : 3 10cm

第100図 出土遺物 (9)

RA084③



第101図 出土遺物 (10)



第102図 出土遺物 (11)

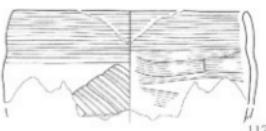
RA090



114



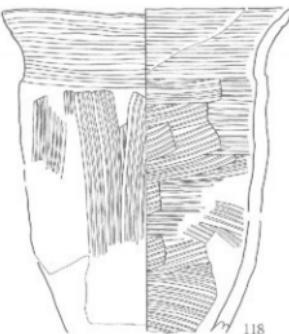
116



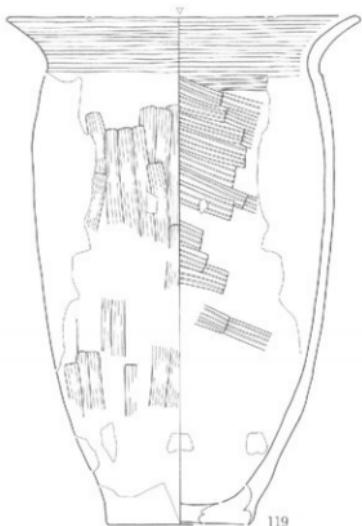
117



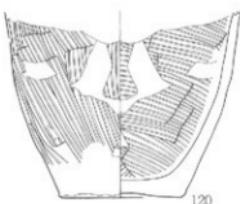
115



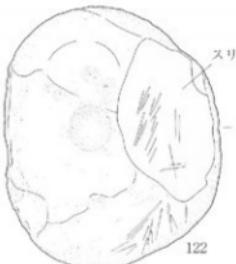
118



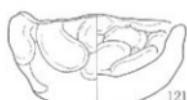
119



120



122



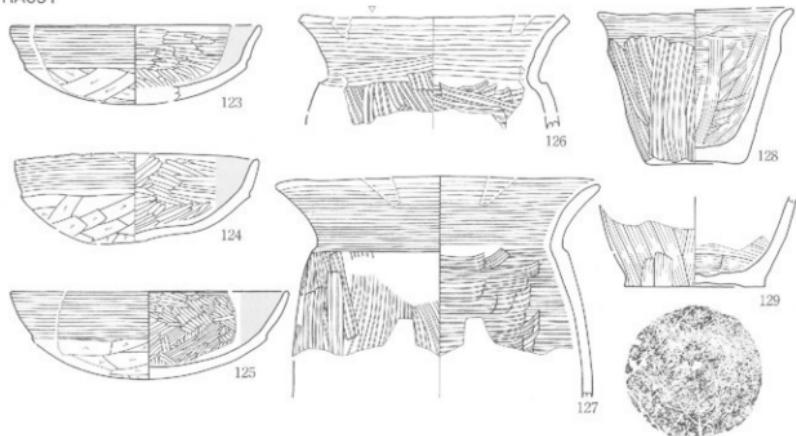
121



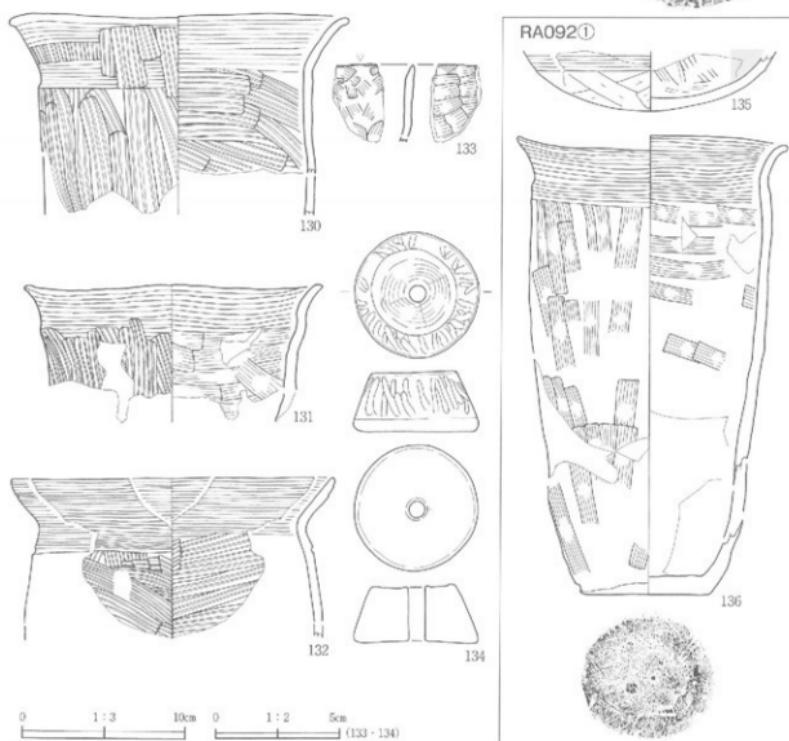
0 1:3 10cm 0 1:2 5cm (121)

第103図 出土遺物 (12)

RA091



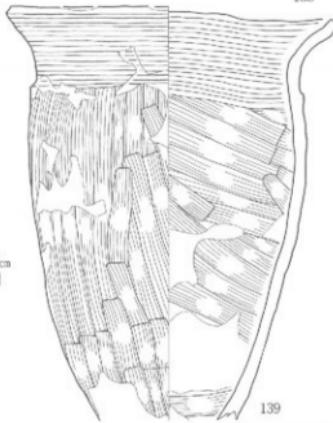
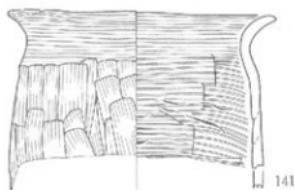
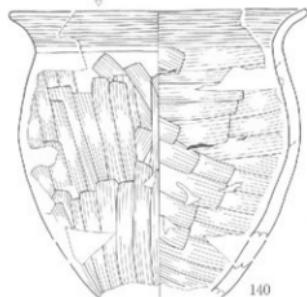
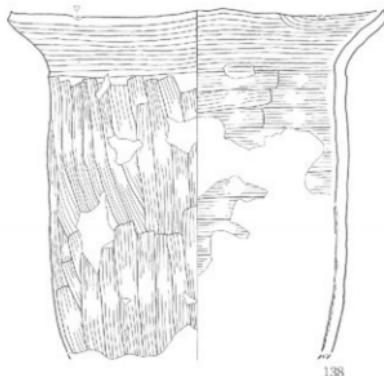
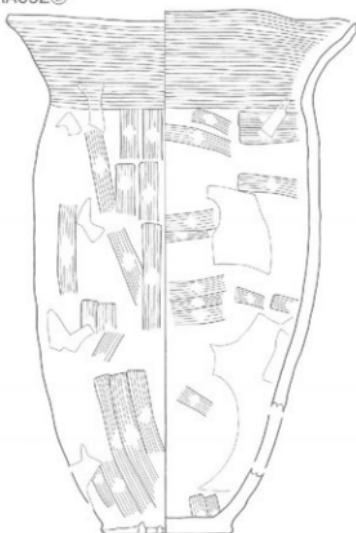
RA092①



0 1 : 3 10cm 0 1 : 2 5cm (133 - 134)

第104図 出土遺物 (13)

RA092②



RA093



第105図 出土遺物 (14)

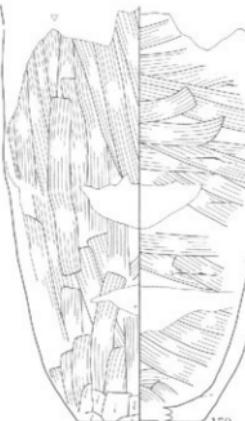
RA094①



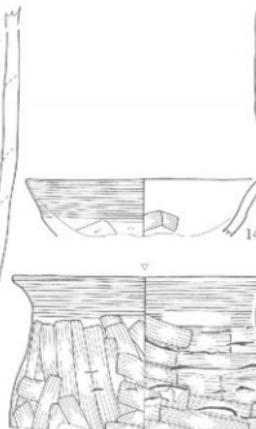
147



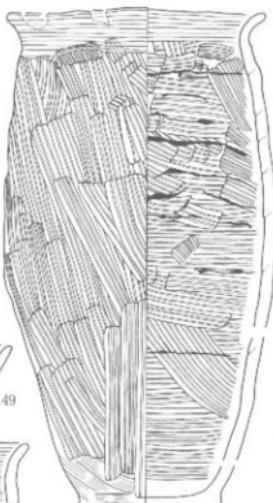
148



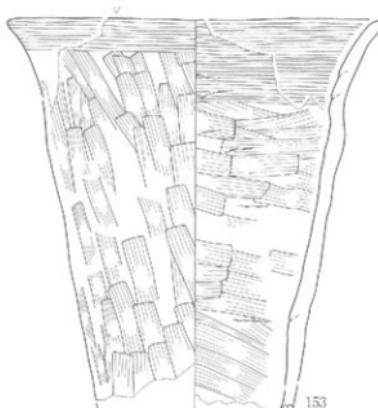
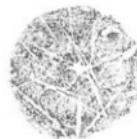
149



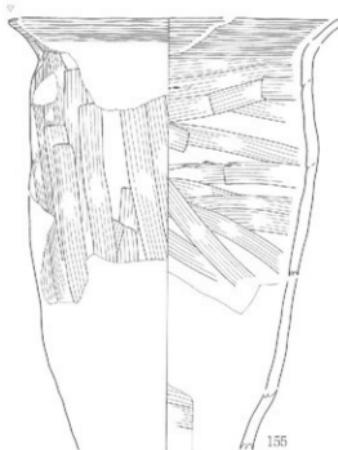
149



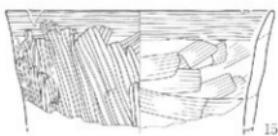
151



153



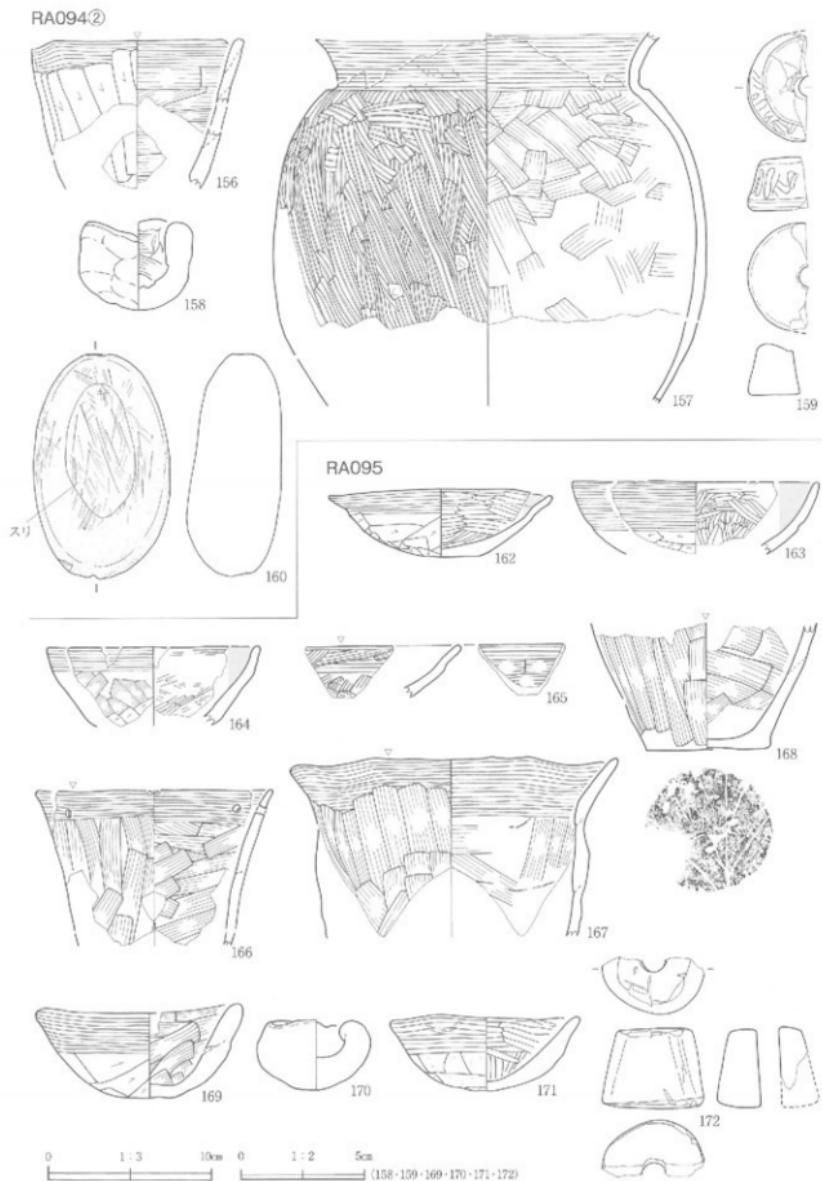
155



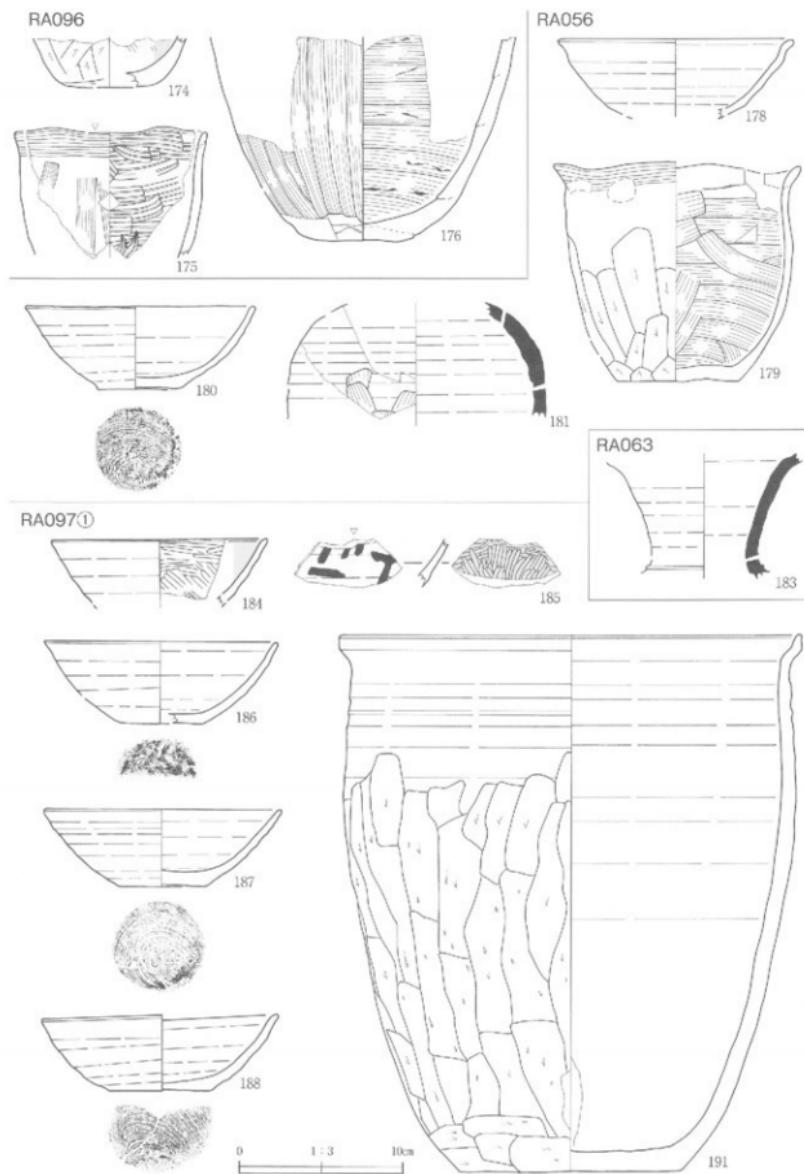
154

0 1 : 3 10cm

第106図 出土遺物（15）

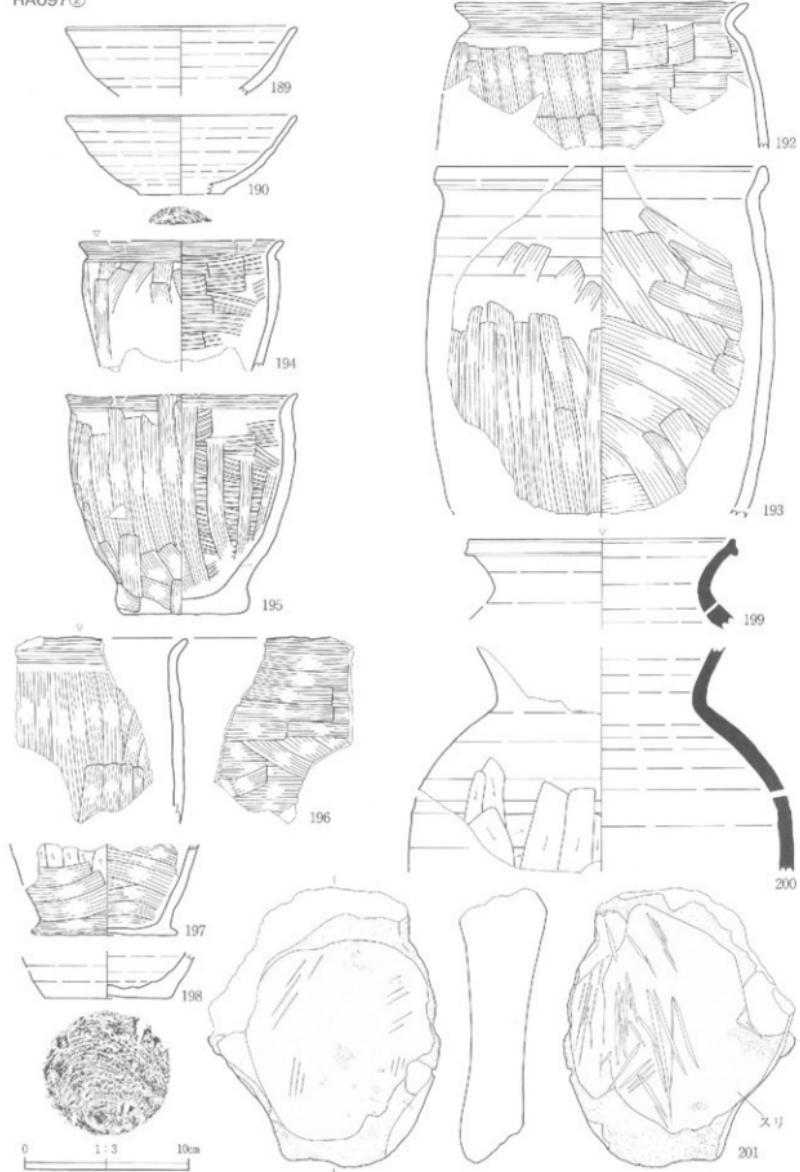


第107図 出土遺物 (16)

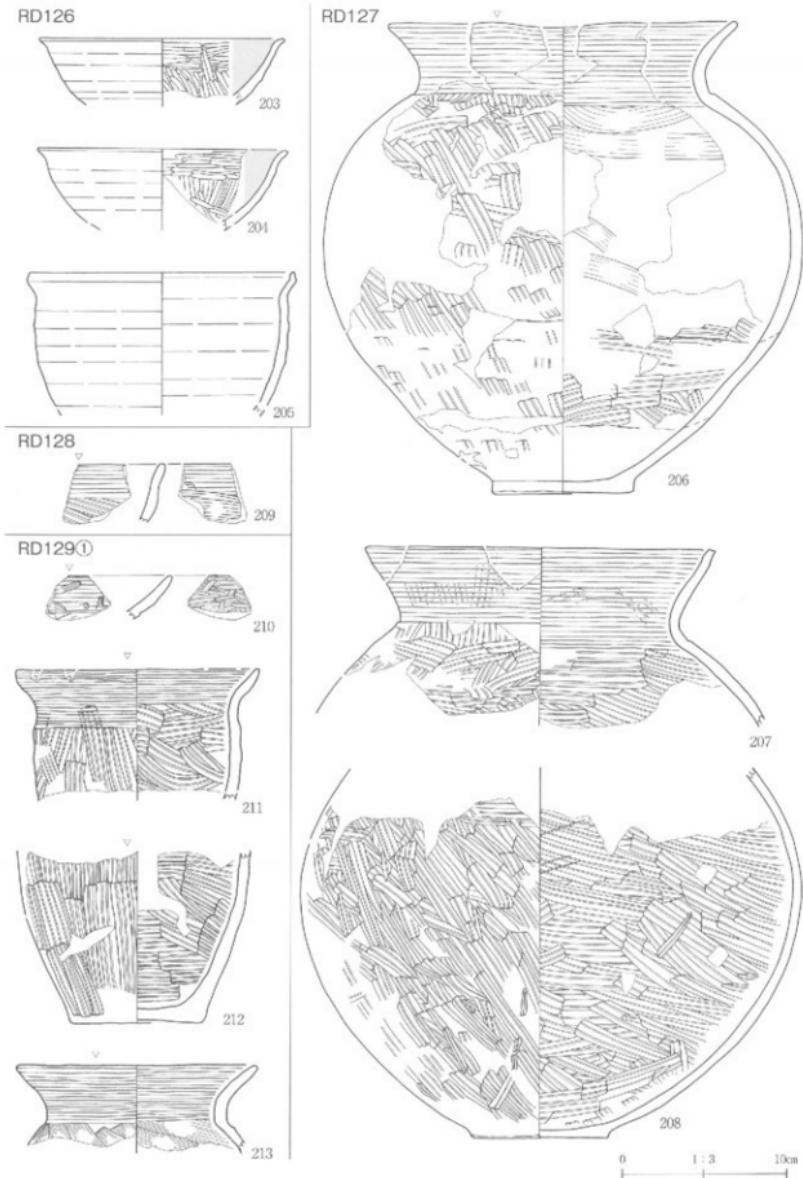


第108図 出土遺物 (17)

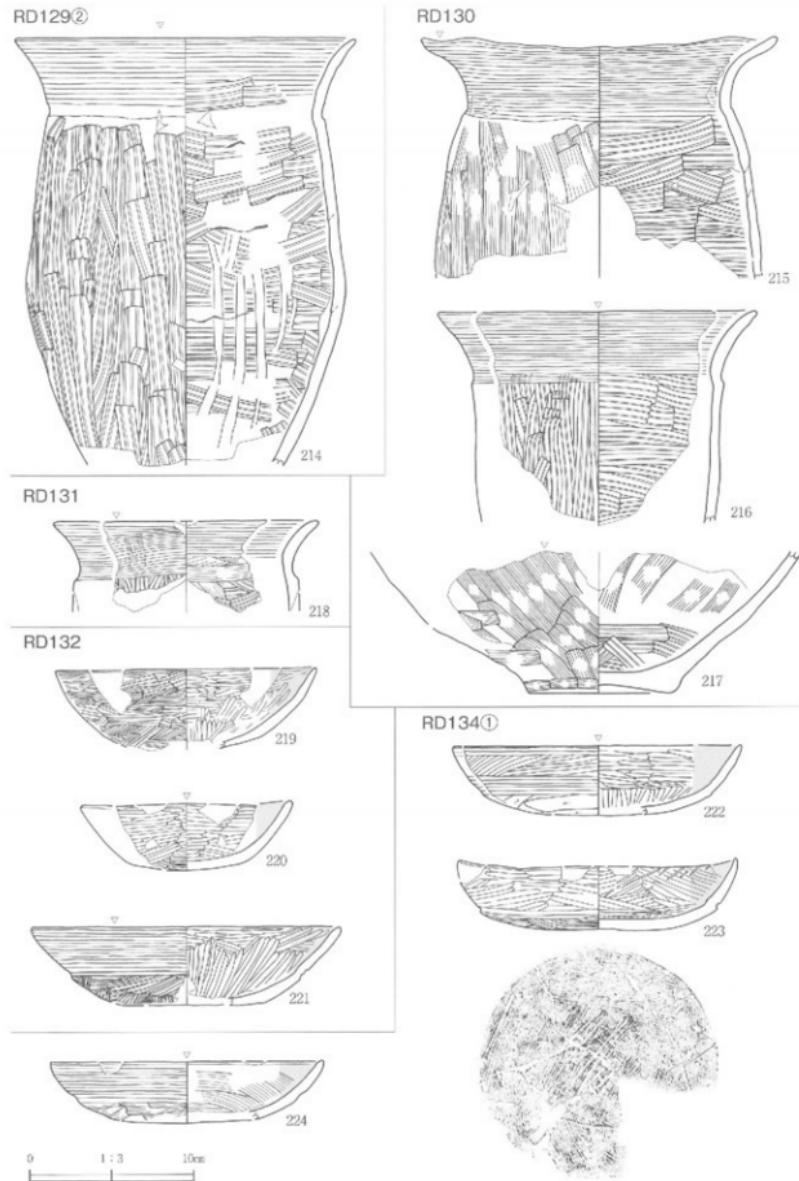
RA097②



第109図 出土遺物 (18)



第110図 出土遺物 (19)

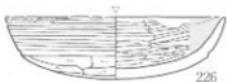


第111図 出土遺物 (20)

RD134②



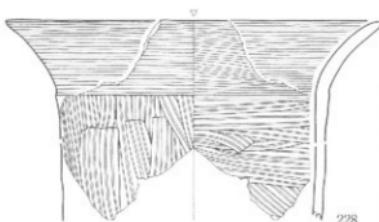
225



226



227



228

RD135



230



229

RD138

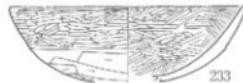


231



232

RD139



233



234



235



236

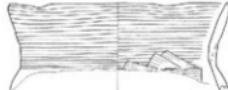


237

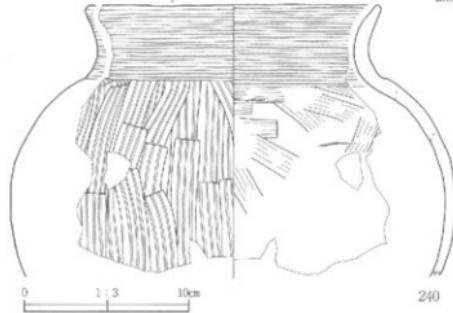
RD141



238



239

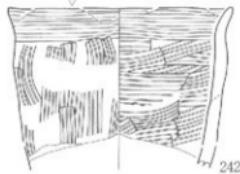


240

RD142



241



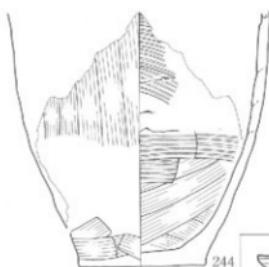
242



243

第112図 出土遺物 (21)

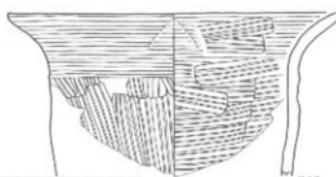
RD145



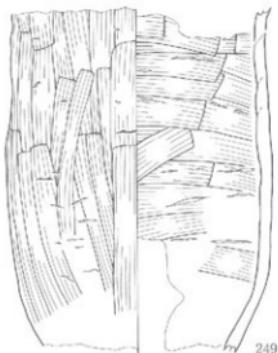
RD146



RD147



RD148



RE004



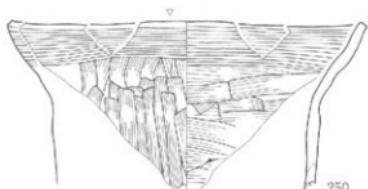
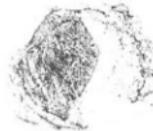
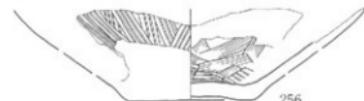
RF006



RF008



RF010



0 1:3 10cm

0 1:2 5cm (247-252-253)

RG015



第113図 出土遺物 (22)

第7表 出土遺物一覧(1)

<上巻>

番号	遺物名	高さ(単位) 幅(単位)	通期	年代	口径 (cm)	断面 (cm)	底径 (cm)	色調	調査(外観)		参考	出所	
									内(外)	外(内)			
1	R-0080 2号	直筒	土器	16(内径)	口縁~底端(内径)	1.18(1.18)	3.19(3.19)	丸底	2.23(2.16)に高い褐色	ヘラクレア・ダゲのしひび	ミガタ	-	92 72
2	R-0080 下部・2肩・1腰	土器	直筒付付(内径)	口縁~底端(内径)	1.18(1.18)	3.19(3.19)	丸底	2.27(2.06)に高い褐色	ヘラクレア・ココナツ	バケド→ヨココナツ	-	92 72	
3	R-0080 カマド焼豆付	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
4	R-0080 カマド焼豆付 2	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
5	R-0080 ワカモル花付	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
6	R-0080 ワカモル花付	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
7	R-0080 カマド焼豆付	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
8	R-0080 保満 1・3層	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
9	R-0080 保満 1・3層	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
10	R-0080 保満	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
11	R-0080 美濃 2号	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
12	R-0080 保満 2・3層	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
13	R-0080 保満 2・3層	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
14	R-0080 保満	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
15	R-0080 保満	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
16	R-0080 保満	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
17	R-0080 保満	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
18	R-0080 保満	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
19	R-0080 保満	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
20	R-0081 保満 1号	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
21	R-0081 保満 1号・3層	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
22	R-0081 保満 1号	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
23	R-0081 下部 1層	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
24	R-0081 保満 1号	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
25	R-0081 和子下部	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
26	R-0081 桶出付	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
27	R-0081 保満	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
28	R-0081 保満	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
29	R-0081 1号	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
30	R-0082 KU-1カラマド焼付	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
31	R-0082 合子	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
32	R-0082 上部	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	
33	R-0082 1号・上部	土器	直筒	1.48	1.40	2.40	8.5	STY7.8 色	ヨココナツ	ヨココナツ	-	90 72	

※1 人字は出土地点 圖中にあり

第7表 出土遺物一覧(2)

番号	遺物名	材(地)	部位	形状	寸法	剖面	範囲(外観)	測量(内面)	備考	出土地	
34	RAB65 1號・柄等・上部・舟底	木	舟底	口縁～船底	(146) 9.5	—	73365.4に古い鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底)	
35	RAB65 1號・舟底・上部	木	舟底	口縁～船底	(146) 9.2	—	57366.4に古い鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底)	
36	RAB65 1號・舟底	木	舟底	口縁～船底	(21.2) 24.7	—	73365.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底)	
37	RAB65 1號	木	舟底	口縁～船底	(15.6) 6.9	—	73365.4に古い鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底)	
38	RAB65 1號	木	舟底	口縁～船底	(8.7) 6.0	—	73365.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底)	
39	RAB65 1號	木	舟底	口縁～船底	(3.7) 3.0	—	103365.4に古い鉛色	ハラタケ	木系質 船底(内面) 船底はつきり	外周(舟底)	
40	RAB65 1號付近・舟側	木	舟底	口縁～舟側	—	(2.6) 2.6	73365.8鉛色	ハラタケ・ヘリナガ	—	外周(舟底)	
41	RAB65 1號	木	舟底	口縁～舟底	(5.4) 5.4	丸穴	73365.8鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
42	RAB65 1號・1號	木	舟底	口縁～舟底	(146) 5.31	—	73365.8鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
43	RAB65 1號	木	舟底	口縁～舟底	(25.2) 7.1	—	103786.8鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
44	RAB65 1號	木	舟底	口縁～舟底	(9.0) 6.6	—	103665.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
45	RAB65 1號・舟側・舟底	木	舟底	口縁～舟底	(22.2) 6.6	—	73365.4に古い鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
46	RAB65 1號	木	舟底	口縁～舟底	(30.6) 22.3	—	103786.8鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
47	RAB65 2号ド根元 K1	木	舟底	口縁～舟底	(21.2) 21.2	—	103786.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
48	RAB65 2號	木	舟底	口縁～舟底	(20.2) 16.6	—	73365.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
49	RAB65 2號	木	舟底	口縁～舟底	(20.2) 16.6	—	57366.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
50	RAB65 2號	木	舟底	口縁～舟底	(14.1) 7.0	—	57366.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
51	RAB65 2號	木	舟底	口縁～舟底	(13.6) 7.0	—	73365.4に古い鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
52	RAB65 2號・舟側	木	舟底	口縁～舟底	(20.0) 23.5	—	103786.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
53	RAB65 2號・舟底	木	舟底	口縁～舟底	(9.0) 8.0	—	57366.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
54	RAB65 3號付近	木	舟底	口縁～舟底	(17.9) 12.0	—	73365.4に古い鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
55	RAB65 3號付近・舟底	木	舟底	口縁～舟底	(26.5) 23.0	—	57366.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
56	RAB65 3號付近・舟底	木	舟底	口縁～舟底	(24.6) 22.7	—	73365.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
57	RAB65 4號	木	舟底	口縁～舟底	(5.6) —	—	73365.4に古い鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
58	RAB65 7號・舟底	木	舟底	口縁～舟底	(31.2) 9.0	—	103786.6に古い鉛色	ハラタケ・ヘリナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
59	RAB65 7號	木	舟底	口縁～舟底	(20.4) 8.6	—	103786.4に古い鉛色	ハラタケ・ヘリナガ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
60	RAB65 7號・下端	木	舟底	口縁～舟底	(11.1) 6.6	—	73365.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
61	RAB65 8號	木	舟底	口縁～舟底	(18.6) 6.6	—	103786.3鉛色	ハラタケ・ヨコナガ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
62	RAB65 8號付近・舟底	木	舟底	口縁～舟底	(15.2) 6.6	—	103786.3鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
63	RAB65 8號	木	舟底	口縁～舟底	(14.0) 6.6	—	103786.3鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有	
64	RAB65 9號	木	舟底	口縁～舟底	5.7	1.3	—	73366.6鉛色	ハラタケ・ヨコナガ	—	外周(舟底) 丸穴有
65	RAB65 12	木	舟底	口縁～舟底	6.0	5.2	—	73365.4に古い鉛色	ハラタケ	—	外周(舟底) 丸穴有

第7表 出土遺物一覧（3）

番号	高さ 幅	出土場所・層位	鉢形	柄形	器名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	表面	色調	測量 (外側)	測量 (内側)	備考	図版	
66 RA083 地面附近	上部縦	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.11	2.3	丸底	10.97±0.15	青白	ロクロ	ひがし側せんざつ 輪郭	90	77		
67 RA083 地面附近	上部縦	手 (手)	1.18~1.20	丸底	0.77	6.0	10.98±0.15	青白	ロクロ	輪郭	手 (手)	99	77		
68 RA083 地面附近	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	—	—	10.95±0.15	青白	ロクロ	輪郭	手 (手)	—	—		
72 RA084 地面附近	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.50	4.3	丸底	15.93±0.8	青白	ミガキ	外側 深い窪む	99	78		
73 RA084 地面附近	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.52	4.5	丸底	15.97±0.8	青白	ミガキ	青白か黒褐色を含む「とんび」 模様	90	78		
74 RA084 所属	上部縦	手 (手)	1.18~1.20	丸底	2.11	1.12	丸底	5.76±0.6	青白	ロクロ	手 (手)	—	—		
75 RA084 所属	上部縦	手 (手)	1.18~1.20	丸底	2.24	1.00	丸底	7.25±0.5	青白	ロクロ	手 (手)	—	—		
76 RA084 土壌物	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.60	—	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	100	78	
77 RA084 地面附近	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.50	—	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	100	78	
78 RA084 地面附近	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.50	—	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	100	78	
79 RA084 K1	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.32	0.70	—	10.97±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	100	78
80 RA084 K6	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.32	0.70	—	10.97±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	100	78
81 RA085 地面附近	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	100	78	
82 RA086 地面附近	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	100	78	
83 RA084 L1	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.50	—	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	100	79	
84 RA084 L1	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.50	—	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	100	79	
85 RA084 L2	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.50	—	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	100	79	
90 RA085 T7	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
100 RA085 T7	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
101 RA085 T7	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
102 RA085 T7	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
103 RA085 T7	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
105 RA086 T8	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
106 RA088 1号	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
107 RA088 1号	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
108 RA088 1号	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
109 RA088 1号・深底	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
110 RA088 T7	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
111 RA088 T7	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
112 RA088 T7	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
113 RA088 1号	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	102	79	
114 RA090 T8	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	103	80	
115 RA090 KC-K1	土壌物	手 (手)	1.18~1.20	丸底	1.48	0.75	10.95±0.15	青白	ロクロ	手 (手)	手 (手)	手 (手)	103	80	

第7表 出土遺物一覧(4)

(1)

分母	通鑑名	出土場所・部位	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	色調	國號(外側)	調物(内側)	測量 (外側)	番号	回版 写真
116	RA091 下部	土壠跡	白色灰(0.9m)	骨壺	-	(4.3)	(6.8)	73Y76.4に近い褐色	ハゲヌコナド	ハゲヌコナド、ヨコナド	-	100	80
117	RA090 下部	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	18cm	(14.1)	(6.6)	73Y76.7に近い褐色	ハゲヌコ、ヨコナド	ハゲヌコ、ヨコナド	-	103	80
118	RA090 下部	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	18cm	(18.1)	(9.8)	73Y76.7に近い褐色	ハゲヌコ、ヨコナド	ハゲヌコ、ヨコナド	-	103	80
119	RA090 下部	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	18cm	(21.4)	(11.0)	73Y76.7に近い褐色	ハゲヌコ、ヨコナド	ハゲヌコ、ヨコナド	-	103	80
120	RA090 K3・1層	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	18cm	(11.4)	(7.2)	73Y76.7に近い褐色	ハゲヌコ、ヨコナド	ハゲヌコ、ヨコナド	-	103	80
121	RA090 K3・下部	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	18cm	(3.8)	(3.8)	57Y76.6に近い褐色	ナガ(「倒伏した感じ」)	ナガ(「倒伏した感じ」)	-	103	80
122	RA091 烟	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	18cm	(15.0)	(4.7)	57Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
124	RA091 下部	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	14cm	(3.5)	(3.5)	73Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
125	RA091 下部	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(3.4)	(3.4)	57Y76.7に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
126	RA091 下部	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(6.0)	(6.0)	57Y76.7に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
127	RA091 K3・1層	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(3.5)	(3.5)	57Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
128	RA091 土壠附近	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(1.0)	(0.5)	57Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
129	RA091 K2	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(4.6)	(8.5)	57Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
130	RA091 土壠跡	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(20.6)	(12.3)	57Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
131	RA091 下部	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(3.0)	(3.0)	73Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
132	RA091 法	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(9.8)	(9.8)	73Y76.6に近い褐色	ナガ(「倒伏した感じ」)	ナガ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
133	RA091 土壠跡	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(1.8)	(1.8)	73Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
135	RA092 土壠跡	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(3.7)	(3.7)	73Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
136	RA092 土壠跡(表面付近)	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(1.0)	(0.5)	57Y76.8に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	104	80
137	RA092 土壠跡(表面付近)	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(21.1)	(21.1)	73Y76.7に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)に近い	ハラタマ(「倒伏した感じ」)に近い	-	104	80
138	RA092 土壠跡(表面付近)	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(21.1)	(21.1)	75Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	105	81
139	RA092 土壠跡(表面付近)	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(22.3)	(22.3)	57Y76.8に近い褐色	ナガ(「倒伏した感じ」)	ナガ(「倒伏した感じ」)	-	105	82
140	RA092 土壠跡(表面付近)	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(1.8)	(1.8)	73Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	105	82
141	RA093 土壠跡	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(3.0)	(16.2)	73Y76.4に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	105	82
142	RA093 土壠跡	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(3.4)	(3.4)	73Y76.7に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	105	82
143	RA093 3~3層	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(3.0)	(3.0)	73Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	105	82
144	RA093 2層	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(1.8)	(1.8)	57Y76.8に近い褐色	ナガ(「倒伏した感じ」)	ナガ(「倒伏した感じ」)	-	105	82
145	RA093 2層	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(4.5)	(4.5)	57Y76.8に近い褐色	ナガ(「倒伏した感じ」)	ナガ(「倒伏した感じ」)	-	105	82
146	RA093 1層	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(0.9)	(0.9)	57Y76.6に近い褐色	ナガ(「倒伏した感じ」)	ナガ(「倒伏した感じ」)	-	105	82
147	RA094 K2	1角瓶	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(0.6)	(0.6)	73Y76.3に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	106	82
148	RA094 K2	1角瓶	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(5.1)	(5.1)	73Y76.3に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	106	82
149	RA094 K3	1角瓶	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(3.5)	(3.5)	57Y76.4に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	106	82
150	RA094 2層	1角瓶	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(3.5)	(3.5)	73Y76.4に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	106	82
151	RA094 土壠跡(下部)	土壠跡	黒(1.0m)	瓶(?)	16cm	(3.0)	(3.0)	73Y76.6に近い褐色	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	ハラタマ(「倒伏した感じ」)	-	106	82

第7表 出土遺物一覧（5）

<5器>

番号	遺物名	出 所	材質	形状	寸法 (cm)	口径 (cm)	蓋高 (cm)	底径 (cm)	色調	表面 (有無)	断面 (有無)	質地	形状	用途	参考 文献	
152	R.A064 7.アド海付下	1.海苔 2.漆	漆	口縁～脚部	(18.0)	(10.1)	-	7.3767.8 瓶身	黒	マコチロコナデ	-	-	-	-	106 52	
153	R.A064 土偶・瓶	1.土偶 2.土偶下部	土偶	口縁～脚部	(22.7)	(34.0)	-	5.7864.にぶい褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	-	106 82	
154	R.A064 K2	土偶	土偶	口縁～脚部	(15.0)	(7.6)	-	3.7865.8 色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	-	106 82	
155	R.A064 チアド海 K3	1.土偶 2.土偶下部	土偶	口縁～脚部	(29.5)	(28.5)	-	10765.10 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	-	106 83	
156	R.A064 7.アド海付下	1.海苔 2.漆	漆	口縁～脚部	(12.8)	(9.1)	-	10765.10 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	-	107 53	
157	R.A064 7.アド海付下	1.海苔 2.漆	漆	口縁～脚部	-	(22.6)	-	10765.4 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	-	107 83	
158	R.A064 7.アド海付下	1.海苔 2.漆	漆	口縁～脚部	(17.6)	(8.4)	3.8	丸底	7.3767.8 瓶身	黒	マコチロコナデ	-	-	-	-	107 83
162	R.A065 7.漆・絹画	1.漆	漆	口縁～脚部	-	3.7865.25	13.5	4.1	ヘラタリ	マコチロコナデ	-	ミダキ	-	内腹・茎	107 83	
163	R.A065 7.漆	漆	漆	口縁～脚部	(15.0)	(4.4)	-	7.3785.6 色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	外腹・根	107 83	
164	R.A065 7.漆・下部	漆	漆	口縁～脚部	(13.0)	(4.6)	-	10765.10 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	ミダキ	-	内腹・根	107 83	
165	R.A065 7.漆	漆	漆	口縁～脚部	-	(22.2)	-	2.5785.6 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	外腹・根	107 83	
166	R.A065 K1漆油	漆	漆	口縁～脚部	(14.4)	(8.4)	-	3.7865.4 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	漆油・内腹・外腹	107 83	
167	R.A065 7.漆	漆	漆	口縁～脚部	(19.6)	(11.6)	-	7.3785.6 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内腹・外腹・中腹	107 83	
168	R.A065 7.漆	漆	漆	口縁～脚部	(17.8)	(8.5)	2.7	7.3785.6 色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	本底板	107 83	
169	R.A065 7.漆	漆	漆	口縁～脚部	(17.8)	(8.5)	3.9	丸底	7.3785.6 色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	本底板	107 83
170	R.A065 7.漆	漆	漆	口縁～脚部	(17.8)	(8.5)	3.9	丸底	10765.10 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	ひび割れ目立つ	107 83
171	R.A065 7.漆	漆	漆	口縁～脚部	(17.8)	(7.8)	3.1	丸底	10765.10 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	107 83	
174	R.A066 7.漆	漆	漆	口縁～脚部	(11.6)	(11.6)	3.1	丸底	7.3785.6 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	108 83	
175	R.A066 7.漆内	漆	漆	口縁～脚部	-	(12.5)	-	7.3785.6 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内漆油・漆油で開閉はつきり	108 83	
176	R.A066 K2	漆	漆	口縁～脚部	(14.4)	(4.6)	-	10765.10 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内漆油	108 83	
178	R.A066 7.漆	漆	漆	口縁～脚部	(14.4)	(4.6)	-	7.3785.6 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	外漆油	108 84	
179	R.A066 7.漆	漆	漆	口縁～脚部	(15.1)	(3.5)	7.5	10765.6 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	外漆油	108 84	
180	R.A066 7.漆	漆	漆	口縁～脚部	(13.8)	(3.1)	5.0	7.3787.6 青色	黒	マコチロコナデ	-	ヘタタリ	内腹・外腹	108 84		
181	R.A066 7.漆	漆	漆	脚部	-	(7.1)	-	7.3783.2 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内腹・外腹	108 84	
183	R.A067 7.漆	漆	漆	脚部	-	(4.7)	-	10765.6 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内腹・外腹	108 84	
184	R.A067 7.漆	漆	漆	脚部	(12.6)	(4.1)	-	7.3787.6 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内腹・外腹	108 84	
185	R.A067 7.漆	漆	漆	脚部	(12.6)	(4.0)	-	10765.6 にぶい青褐色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内腹・外腹	108 84	
186	R.A067 7.漆	漆	漆	脚部	(14.0)	(3.0)	5.8	5.787.8 青色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内腹・外腹	108 84	
187	R.A067 7.漆	漆	漆	脚部	(14.3)	(4.8)	3.4	2.5785.6 青色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内腹・外腹	108 84	
188	R.A067 7.漆	漆	漆	脚部	(14.3)	(4.7)	4.2	5.7865.8 青色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内腹・外腹	108 84	
189	R.A067 7.漆	漆	漆	脚部	(14.0)	(4.2)	-	7.3787.6 青色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内腹・外腹	108 84	
190	R.A067 7.漆	漆	漆	脚部	(13.4)	(4.8)	5.1	5.7865.8 青色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内腹・外腹	108 84	
191	R.A067 7.漆	漆	漆	脚部	(17.5)	(2.6)	13.0	3.7865.6 青色	黒	マコチロコナデ	-	-	-	内腹・外腹	108 84	

第7表 出土遺物一覧(6)

番号	式様名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	断面 (cm)	測定 (cm)	測定 (cm)	測定 (cm)	測定 (cm)	測定 (cm)	測定 (cm)	測定 (cm)
102	RA007	下腹・1脚	上腹 直筒	直筒	17.8	75.9/65.6 鮎色	ハケヌココナド	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	外底	外底	-	109.84
103	RA007	上腹・1脚	上腹 直筒	直筒	21.0	75.9/65.6 鮎色	ハケヌココナド	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	外底	外底	-	109.84
104	RA007	下腹・2脚	下腹 直筒	直筒	22.2	75.9/65.6 鮎色	ハケヌココナド	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	外底	外底	-	109.84
105	RA007	上腹・1脚	上腹 直筒	直筒	14.0	10.9/4.5 鮎色	ヨコナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	109.84
106	RAD007	下腹	下腹 直筒	直筒	14.0	10.9/4.5 鮎色	ヨコナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	109.84
107	RA007	上腹	上腹 直筒	直筒	-	10.9/6.5 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	109.84
108	RA007	上腹・1脚	上腹 直筒	直筒	16.0	75.9/65.6 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	109.84
109	RA007	下腹・2脚	下腹 直筒	直筒	16.0	75.9/65.6 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	109.84
200	RD128	アマド腰なし下腹	腹	口部-胸部	10.0	10.9/6.5 鮎色	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	外底	外底	-	109.85
201	RD128	腰	小(内腹)	口部-胸部	11.0	10.9/6.5 鮎色	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	外底	外底	-	109.85
202	RD128	腰	中(内腹)	口部-胸部	11.0	10.9/6.5 鮎色	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	外底	外底	-	109.85
203	RD128	腰	大(内腹)	口部-胸部	11.0	10.9/6.5 鮎色	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	外底	外底	-	109.85
204	RD128	腰	小(外腹)	口部-胸部	11.0	10.9/6.5 鮎色	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	外底	外底	-	109.85
205	RD128	腰	中(外腹)	口部-胸部	11.0	10.9/6.5 鮎色	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	外底	外底	-	109.85
206	RD128	腰	大(外腹)	口部-胸部	11.0	10.9/6.5 鮎色	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	ロクロヘビコナド?	外底	外底	-	109.85
207	RD127	腰	腰	1.腰身	28.0	10.9/8.5 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	110.85
208	RD127	腰	腰	2.腰身	21.2	10.9/8.5 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	110.85
209	RD128	腰	腰	1.腰身	22.7	10.9/8.5 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	110.85
210	RD129	腰	腰	2.腰身	21.0	10.9/8.5 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	110.85
211	RD129	腰	腰	3.腰身	22.7	10.9/8.5 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	110.85
212	RD129	腰	腰	4.腰身	21.0	10.9/8.5 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	110.85
213	RD129	腰	腰	5.腰身	21.0	10.9/8.5 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	110.85
214	RD128	腰	腰	6.腰身	21.0	10.9/8.5 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	110.85
215	RD129	腰	腰	7.腰身	21.0	10.9/8.5 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	110.85
216	RD129	腰	腰	8.腰身	21.0	10.9/8.5 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	110.85
217	RD129	腰	腰	9.腰身	21.0	10.9/8.5 鮎色	ハサナド	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	110.85
218	RD131	腰	腰	1.腰身	16.0	5.5	75.9/65.6 鮎色	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	111.86
219	RD132	腰	腰	2.腰身	15.6	5.5	75.9/65.6 鮎色	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	111.86
220	RD132	腰	腰	3.腰身	12.8	4.1	5.9/5.6 鮎色	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	111.86
221	RD132	腰	腰	4.腰身	12.8	4.1	5.9/5.6 鮎色	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	111.86
222	RD134	腰	腰	5.腰身	12.8	4.1	5.9/5.6 鮎色	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	111.86
223	RD134	腰	腰	6.腰身	12.8	4.1	5.9/5.6 鮎色	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	111.86
224	RD134	腰	腰	7.腰身	12.8	4.1	5.9/5.6 鮎色	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	111.86
225	RD134	腰	腰	8.腰身	12.8	4.1	5.9/5.6 鮎色	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	111.86
226	RD134	腰	腰	9.腰身	12.8	4.1	5.9/5.6 鮎色	ハサナド	ハサナド	外底	外底	-	111.86

第7表 出土遺物一覧(7)

(1-2回)

番号	通称名	出土地點・時代	測定	断面	部位	大きさ (cm)	底形	色調	表面 (外見)	測定 (内見)	断面 (内見)	側面 (外見)	側面 (内見)
227	RD134-1-16	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	1.96 (2.2)	丸底	2.73×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	-	-	外腹(段) 及びより下部(内) 外腹(口付部)	112 86
228	RD134-1-22	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	2.27 (2.2)	丸底	2.73×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	-	-	外腹(段) 及びより下部(内) 外腹(口付部)	112 86
229	RD134-1-23	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.32	丸底	1.00×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
230	RD135-1-26	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.66	丸底	1.07×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
231	RD138-1-26	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	1.09	丸底	1.20×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
232	RD138-1-27	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.54	丸底	0.78×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
233	RD139-1-25	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	1.40	丸底	0.53×0.8cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
234	RD139-1-26	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	1.65	丸底	0.73×0.8cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
235	RD139-1-27	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	1.50	丸底	0.73×0.8cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
236	RD139-1-28	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	1.12	丸底	0.73×0.8cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
237	RD139-1-29	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	1.52	丸底	0.73×0.8cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
238	RD141-1-25	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.56	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
239	RD141-1-26	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.52	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
240	RD141-1-27	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.67	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
241	RD142-1-25	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.53	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
242	RD142-1-26	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.57	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
243	RD142-1-27	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.59	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
244	RD145-1-26	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.56	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
245	RD15-1-25	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.58	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
246	RD16-1-25	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.60	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
247	RD16-1-26	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.61	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
248	RD17-1-26	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.62	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
249	RD18-1-25	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.63	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
250	RD18-1-26	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.66	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
251	RD18-1-27	土器	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.64	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
252	RD204-1-25	罐	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.40	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	112 87	
253	RF7001-1-25	罐	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.45	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	113 87	
254	RF7006-1-25	罐	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.57	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	113 87	
255	RF708-1-25	罐	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.60	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	113 87	
256	RF710-1-25	罐	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.56	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	113 87	
257	RG005-1-25	罐	口縁-底部 环(内壁)	口縁	0.58	丸底	0.51×0.76cm	ヨリカナ ハタケヌイヨコナダ	ミガキ	ナラ	外腹(段) 一部削減 底片	113 87	

第7表 出土遺物一覧(8)

(上製品)

番号	遺物名	地点・層位Ⅰ	種類	色調	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	表面 状態	回版	写真 番号
86	RA084	米田	筋鉋車	7.5YR6/8 棕色	<3.5	(1.8)	1.6	6.47	104	79
87	RA084	上部	筋鉋車	10YR5/4 に 4.5Y 灰褐色	5.4	5.4	1.8	6.396	104	79
88	RA084	米田	土玉	5YR6/4 に 5Y 灰褐色	1.00	1.10	0.90	1.14	104	79
89	RA084	米田	土玉	7.5YR6/3 に 4.5Y 灰褐色	1.20	1.20	0.95	1.14	104	79
90	RA084	米田	土玉	7.5YR6/4 に 4.5Y 灰褐色	1.20	1.30	0.95	1.51	104	79
91	RA084	米田	土玉	5YR6/4 に 5Y 灰褐色	1.20	1.25	0.90	1.36	104	79
92	RA084	米田	土玉	7.5YR6/4 に 4.5Y 灰褐色	1.50	1.50	1.20	2.98	104	79
93	RA084	米田	土玉	5YR6/4 に 5Y 灰褐色	1.20	1.40	1.10	2.21	104	79
94	RA084	米田	土玉	7.5YR6/4 に 4.5Y 灰褐色	1.10	1.15	0.85	0.97	104	79
95	RA084	筋	土玉	7.5YR6/4 に 4.5Y 灰褐色	1.40	1.40	1.30	2.32	104	79
96	RA084	上部	土玉	7.5YR6/4 に 4.5Y 灰褐色	<1.05	(0.75)	(1.25)	0.84	104	79
104	RA085	米田	筋鉋車	7.5YR6/4 に 4.5Y 灰褐色	3.8	3.8	2.4	36.91	102	79
134	RA094	下部	筋鉋車	7.5YR6/6 棕色	5.2	5.1	2.5	61.11	104	81
159	RA094	F25	筋鉋車	7.5YR6/4 に 4.5Y 灰褐色	(1.6)	(2.5)	(2.2)	22.57	107	83
247	KU146	4層	筋鉋車	7.5YR7/6 棕色	5.2	5.3	2.8	81.94	113	87

(石器)

番号	遺物名	地点・層位Ⅱ	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	回版	写真 番号
20	RA080	底面	砾石	(12.0)	(7.0)	(2.8)	247.77	デイサウト 磨利山脈 新生代新第三紀	94	74
69	RA083	下部	石片?	(12.5)	(8.0)	(0.8)	681.41	安山岩 岩手山台地 新生代第四紀	99	77
70	RA083	下部	砾石?	(8.4)	(7.5)	(5.0)	283.53	安山岩 岩手山台地 新生代第四紀	78	
98	RA084	底面	砾石	19.3	6.8	6.7	921.20	デイサウト 磨利山脈 新生代新第三紀	101	79
113	RA088	下部	砾石?	8.7	6.0	6.4	170.39	安山岩 岩手山台地 新生代第四紀	102	80
122	RA090	下部	砾石?	16.0	13.2	6.1	1130.66	安山岩 岩手山台地 新生代第四紀	103	80
160	RA094	上部	砾石	13.8	8.5	5.7	682.22	板状岩 鳥羽山脈 新生代新第三紀	107	83
177	RA096	織方	砾石?	10.9	8.4	5.0	388.68	安山岩 岩手山台地 新生代第四紀	81	
201	RA097	上部	石片?	(17.1)	(14.1)	(6.5)	815.61	安山岩 岩手山台地 新生代新第四紀	109	85

(石製品)

番号	遺物名	地点	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	回版	写真 番号
71	RA083	東底馬下部	切り石玉	2.6	1.6	1.5	8.4	石墨 北上山脈 中生代墨北山脈 新生代新第三紀	99	78
97	RA084	寒風3層	斜正	3.1	1.7	1.1	7.28	玉ずし 斜利山脈 新生代新第三紀	101	79
172	RA095	3層	斜側面	(2.0)	(4.1)	3.3	34.43	板状岩 鳥羽山脈 新生代新第三紀	107	83

(鉄製品)

番号	遺物名	地点・層位	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	回版	写真 番号
161	RA094	上部	棒状	(4.6 - 3.6 - 4.1)	(1.6 - 2.2 - 2.0)	(1.1 - 2.0 - 0.35)	16.58	-	83	
173	RA095	-	斜仄	(2.3 - 2.9 - 2.4)	(1.9 - 1.6 - 1.7)	(0.4 - 0.6 - 0.4)	6.90	-	83	
182	RA096	-	斜仄	(5.0)	(3.3)	(2.0)	35.60	-	84	
202	RA097	K3	棒状?	-	-	-	17.0	-	-	

(炭化材)

番号	遺物名	地点No.	種類	番号	遺物名	地点No.	明細	番号	遺物名	地点No.	奥標
1	RA085	C1	クリ	17	RA094	C3	クリ	33	RF010	C1	ヤマクワ
2	RA085	C2	クリ	18	RA094	C4	クリ	34	RF011	C1	ケヤキ
3	RA085	C3	ナラ	19	RA091	C5	クリ	35	RF011	C2	クリ
4	RA085	C4	ナラ	20	RA091	C6	クリ	36	RF011	C3	クリ
5	RA085	C5	ナラ	21	RA094	C7	エンジ	37	RF012	C1	ヤマナシ
6	RA092	C1	クリ	22	RA094	C8	ケヤキ	38	RF012	C2	クリ
7	RA092	C2	クリ	23	RA090	床面	クリ	39	RF012	C3	ナラ
8	RA092	C3	ナラ	24	RA096	C1	クリ	40	RF012	C4	クリ
9	RA092	C4	クリ	25	RA096	C2	クリ	41	RF013	C1	クリ
10	RA092	C5	ナラ	26	RA096	C3	クリ	42	RF014	C1	ケヤキ
11	RA092	C6	ケヤキ	27	RA097	C1	クリ	43	RF014	C2	クリ
12	RA092	C7	クリ	28	RA097	C2	クリ	44	RF014	C3	ナラ
13	RA093	C1	ナラ	29	RA097	C3	ケヤキ	45	RF015	C1	ウルシ
14	RA093	C2	タモ	30	RF001	-	ケヤキ	46	RF015	C2	クリ
15	RA094	C1	ナラ	31	RF007	C1	クリ	47	RF015	C3	ケヤキ
16	RA094	C2	クリ	32	RF007	C2	クリ	48	RF015	セ	ヤマカシ

※ 1 太字は出土地点 図中にあり

第8表 土器重量一覧 (1)

試験 番号	土壤名 試験名	耕深(cm)	持水率(%)	土壤粒度(%)	持水率(%)	持水率(%)	持水率(%)	持水率(%)	持水率(%)	持水率(%)	持水率(%)
RAD071	21857	9.6	4.4	2045.1	95.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
RA0080	218812	60554	2.3	2075.60	97.4	63.08	0.3	15594.4	71.25	246.27	2.03
RA0081	813837	301	3010.44	659	0.0	0.0	30020	62.22	1288.06	47.58	59.09
RA0082	559495	1269.80	544.25	541.25	97.3	60.0	0.0	296.13	31.91	0.00	0.00
RA0083	265396	908.71	3.7	23250.62	—	96.2	25.08	0.00	0.00	200.28	10.00
RA0084	165382	1173.26	9.4	1155.66	—	90.6	0.00	0.00	0.00	957.90	94.96
RA0085	100321	125.19	12.4	593.65	87.6	0.00	0.00	0.00	0.00	265.69	10.00
RA0086	146960	0.0	0.0	140.69	1060	0.00	0.00	0.01	0.00	100.00	10.00
RA0087	159.70	4.2	178.23	93.8	0.06	0.06	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RA0088	823.07	358.81	9.4	388.36	90.6	0.00	0.00	0.00	0.00	138.5	10.00
RA0089	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RA0090	3057.96	334.78	10.3	310.13	89.7	0.00	0.00	0.00	0.00	80.00	10.00
RA0091	458896	561.34	11.0	3085.52	850	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RA0092	748864	69.22	0.8	7126.42	99.2	0.06	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RA0093	849.12	86.22	97	80.89	90.3	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RA0094	1645410	16659	1.5	1024.11	98.5	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RA0095	1270.25	16.89	71	1166.63	92.9	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RA0096	83.00	212.83	1.1	1259.26	96.9	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RA0097	52.00	57.50	29.32	—	154.83	65.1	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00
RA0098	118.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RA0099	828.95	62.73	8.9	655.40	95.8	49.80	5.3	906.11	67.12	411.18	12.25
RA0100	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0126	210.00	94.93	—	296	145.07	69.4	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0127	4371.20	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0128	181.20	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0129	2845.15	29.32	102	256.83	89.8	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0130	11.80	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0131	300.18	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0132	4390.0	76.65	89	412.5	—	10.1	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0133	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0134	2227.40	862.73	—	35.8	1260.63	61.2	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0135	45224	427.4	—	91.5	250	5.5	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0136	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0137	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0138	5728.5	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0139	99.03	30.11	—	308	553.12	61.2	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0140	1562	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0141	566.71	20.92	21	948.49	97.9	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0142	251.47	2097	202	280.93	79.8	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
RD0143	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

4 まとめ

(1) 検出遺構

今回の調査区で検出した遺構は、堅穴住居跡21棟、掘立柱建物跡1棟、土坑26基、陥し穴状遺構9基、竪穴状遺構2棟、焼土遺構11基、溝跡8条である。以下、本次調査における遺構ごとの特徴を述べていく。また過年度までの調査成果はそれぞれの調査報告書にて検討されており、特に第23・24・29次調査報告書（以下第501集）でそれ以前までの成果をまとめている。本書はこれらを踏まえ、これまでの成果との比較・特筆すべき点も交え述べていきたい。

①堅穴住居跡

奈良時代の住居跡（非ロクロ成形の土器が伴う）が18棟、平安時代の住居跡（ロクロ成形の土器が伴う）が3棟、計21棟検出した。RA084竪穴住居跡は拡張しており、これを別遺構とすると22棟となる。このうち3棟（RA056・063・071）は、過年度調査区から続く遺構である。

RA071・080～096堅穴住居跡が奈良時代に属すると判断される。カマドはすべて北西壁に設置され、主軸方向はN-50°～65°-Wに収まる住居跡が大半を占める。住居の規模は、…辺の長さが2.7～7.3m、床面積では5.5m²から46.1m²と大小様々である。床面積でみていくと①5.5～11.4m²、②13.5～18.0m²、③21.3m²～23.0m²、④32.9m²、⑤46.1m²にまとまりがあり、それぞれ8棟（RA071・081・084B・086～089・093）、5棟（RA085・090・092・095・096）、4棟（RA080・082・084A・094）、1棟（RA091）、1棟（RA083）となる。これを第501集の基準にあわせてみると①が小形、②③が中形、④が大形、⑤が超大形に分類される。

埋土に炭化物や焼土ブロックを含み焼失した可能性があるものは、RA081・085・092・093・094・095竪穴住居跡の6棟である。いずれも、壁際に埋土がたまつた状態で焼土ブロックが堆積しており、廃絶後ある程度時間が経った後に、焼失したものと考えられる。

壁の高さは10～50cm程度で、これは、微高地に立地し後世の削平を受け浅くなってしまったもの（RA081・096等）や、本来の検出面（II層上面）で確認できず調査時に掘り下げてしまったもの（RA080・089）などがあり、相対的に全体を比較することは難しいが、近接する住居跡同士（検出標高がほぼ同じで削平の度合いも同じと考えられる住居跡）でも深さが異なることから、当時から深さの異なる住居跡が存在していたものと推測される。床面は、壁際を深く中心部を浅く掘り窪めてから、地山（IV層）と暗褐色～黒褐色上のブロックが混じる土で水平に均している。

上屋を支える主柱穴がはっきり確認できた住居跡は5棟（RA080・083・084・091・094）、いずれも床面積④以上である。また壁際に周溝が巡る住居跡も比較的規模が大きい（RA080・081・083・085・090・091・094・095）。壁際以外にも床面に溝が掘られている例もある（RA080・083・092）。RA083・080堅穴住居跡の溝は壁から主柱穴へ向かって走り、RA092堅穴住居跡のものは、南北壁に平行するよう長くのびる。これらの溝には根太を置き住居壁際に板材等を敷いたものと考えられるが、床面精査時にこれらを敷いたと想定される範囲（壁周辺）と、住居中央部の硬化の違いなどは確認できなかつた。過年度に調査された住居跡でも、同様の壁際以外の溝跡が検出されており（RA042・047・048・067・068）、やはり住居跡の規模は比較的大きい。溝ではないが、RA093堅穴住居跡は段差を設けて壁際を一段高くしている。その他の床面施設として上坑・小穴が多数検出された。これらはカマド脇とカマド対面壁際に集中する。カマド脇のもの（RA082-K1、083-K1、085-P5、091-K2、094-2・3、



第114図 野古A遺跡全体図

095-K2・6、096-K1・2)は、その位置から貯蔵穴の可能性がある。カマド対面壁際のものは、カマド主軸線の延長線上付近に小穴を1~2個設けるタイプ (RA071・080・081・085・087・088・091・092?・093・094)、壁面方向に長い不整構円形の掘り込みとその他小穴を持つタイプ (RA083・084・095・096) がある。住居中心軸からやや北側に偏る例が多く、その位置から出入り口施設ではないかと思われる。一方でこれらの土坑・小穴類の埋土からその機能を考えていくと(各住居断面図、表6参照)、床面を均した掘り方土と類似するもの(IV層を多く含む)は、住居跡廃絶時には開口しておらず、住居構築時に埋められた可能性が高い (RA081-K2、RA083-K4、RA084-BK02、RA083-P2、RA092-P1・2、RA095-K5など)。柱などを埋め込む、または住居構築以前の穴で床面を均す過程で埋めたなどが考えられる。その他、黒色土を主体とし地山ブロックを混入する埋土 (RA081-K1、RA084-K2~5、RA085-P1~3など) と焼土ブロック・炭化物を多く含む埋土 (RA082-K1・RA083-K1~3) に分かれる。前者は、主柱穴と住居全体の埋土の主体と類似しているため、廃絶時の開閉どちらの可能性もあるが、RA084堅穴住居跡のように穴の上に床面と同じ高さで遺物が出土している場合などは埋められていたものと考えられる。後者は、炭化物・焼土ブロックを含んでおり、単層の場合は少なく、黒色土層を間に挟んでいたり、焼土ブロックの混入量が異なっていたりと人為堆積の様相が強い。焼失住居以外の住居跡(埋没土に焼土ブロックを含まない住居跡)でもこの堆積が観察でき、床面掘り方土にも炭化物・焼土ブロック含まないことから、住居使用中~廃絶前に埋められた可能性が高い。上述の貯蔵穴とした穴にこのような堆積状況が多く、なにかを貯蔵するという役割とは違う使用方法を考えなければならないかもしれない。カマド対面の壁際の土坑・小穴はこれら3種類の埋土すべてが観察でき、複数基あるものは作り替えなどが想定される。また、RA080・091・092堅穴住居跡のように、堀の上半を埋め込み置き台にしたような施設も確認された。

カマドは上述の通り北西壁に設置される。抜張したRA084堅穴住居跡以外作り替えはなく、基本1棟に1つのカマドとなる。袖は壁際の地山上(IV層)を掘り残し、焚口側に上器などの芯材を入れ、地山上を張り付けている例が多い (RA080・082~085・091・092・094・095)。床の掘方範囲(貼床範囲)がカマド周辺に及ばないこと、カマド袖の一部を掘り残していることから、住居構築前にカマドの位置を決めておいて、掘り下げていったものと考えられる。煙道部は、くり抜かれる。

遺物は、器形を復元できる個体の大半が、床面~埋土下部より出土している。その位置はカマド付近が目立ち、袖の芯材を置き台として転用されていたものも多い。その他、住居全体に広がる例は少なく、住居の中心部 (RA080・081・088他) または壁際(外周) (RA083~085他)と、出土範囲に比較的まとまりが見られる。また、特徴的な出土状況をしているものとして、小形の壺があげられる。6住居から11点出土しているが(第118回参照)、うち7点がカマド付近(カマドの設置されている壁の際)より出土している。残りの4点も、1点はカマドから離れた柱穴からであるが、これ以外の3点は埋土一括で出土位置を把握していないため、カマド付近に位置していた可能性がある。過年度までの調査事例もみていくと、第12次調査では4住居跡(RA014・021・026・036)5点中3点がカマド付近、15次調査では1住居(RA045)1点が、カマドと煙道の間より出土している。カマドに近い場所に供える特殊な器であった可能性も考えられる。

平安時代の住居跡はRA056・063・097堅穴住居跡の3棟である。このうち、RA056堅穴住居跡とRA063堅穴住居跡はそれぞれ第21次調査区、第24次調査区から続く遺構で、未報告または、カマド周辺を大きく攪乱されており、得られている情報は少ない。これら3棟の規模は、壁一辺の長さが3.5~4.0m程度、カマドは東壁に設置される。奈良時代の住居跡ではカマドは設置壁のほぼ中央に位置するのに対し、平安時代のカマドは、南北どちらかに寄っている。

奈良・平安時代の住居跡は微高地上に立地するものが多く（16棟）、旧河道内にも住居跡（5棟）が検出されているが、急激に落ち込む西斜面を避けて作られている。これら住居跡の立地を見ると、第32図の地形はⅣ層面で計測したもので古代においてはさらにⅡ～Ⅲ層が堆積していたものと想定されるが、当時も多少の起伏があり高いところもしくは平坦な場所を選び住居を建てたものと考えられる。

これらの住居跡は、数棟ごとまとまって建てられているが、住居同士の重複はない。ただしRA084堅穴住居跡（奈良）とRA097堅穴住居跡（平安）、RA087堅穴住居跡とRA088堅穴住居跡（両者とも奈良）が、同時存在の難しい距離で近接する。奈良時代に属するRA083堅穴住居跡の埋土中に十和田a降下火山灰が含まれていることも併せて考えると、住居跡が完全に埋まらない状態で、その住居跡を避けて新たに建てられてものと考えられる。奈良時代においては、すべて同時ではないが比較的短時間で、ある程度決まった範囲に数棟がまとめて存在する集落であったと推測される。

各時代の住居数は過去の調査区も併せてみると、時期がはっきりしているものは奈良時代住居跡42棟、平安時代の住居跡が35棟と大差がない（第501集を参照、本次調査住居跡数を加算）。しかし今次調査区内には奈良時代の住居跡が多く平安時代のものが少ない。その分布域が奈良時代においては野古A遺跡南東部全体に広がっているのに対し、平安時代の住居跡は本次調査区より北側に密集しているようである。つまり、奈良時代の住居跡のほうが、より南側の標高の低い範囲へと居住域が広がっていることが分かる。

②掘立柱建物跡

調査区ほぼ中央に1棟検出された。2間（15尺）×2間（13尺）の建物で、15次調査区のRB003掘立柱建物跡と規模・柱間が類似する。RB003掘立柱建物跡は古代としているが、本次調査区のものは、遺物・火山灰など時期を特定するものが出土していない。

③土坑

26基検出し、規模・形状から4種類に分けられる。①正方形に近い（短軸の幅が広め）隅丸長方形の土坑（RD126・127・136・150の4基）。長軸が1.3～2.0m、短軸は0.8m～1.0m程度、掘り込みが浅くしか残存していないが壁は直立し底面は比較的平坦である。②隅丸長方形～楕円形の穴が入れ子状または複数基連なる土坑（RD129・132・138の3基）。長軸1.5～2.4mと比較的大きく、地山ブロックや焼土ブロックを多く混入する層が何層も薄く重なり、人為堆積の様相を示す。③円～楕円形で、径1.0m前後の土坑（RD128・130・131・133～135・137・149？の8基）。④短軸の幅が狭い隅丸長方形の土坑（RD139～148の10基）。長軸は1.3mから5mを超えるものまで様々だが、短軸は50～80cm程度に収まる。②③同様入れ子状の土坑・小穴を伴う例が多い。これらは長軸方向が東西と南北を向くものがあり、それぞれの軸方向が揃い、お互いがほぼ直交する。RD139～143・145～147土坑は方形に区画するように配置されており、一連の施設とも考えられる。土坑底面に小穴や段差があることから、布掘りなど柱穴を埋めた可能性も考えられるが、多くの土坑で長軸の断面観察を行っておらず、観察したものでも（RD144・146・148）柱痕などの痕跡は確認できなかった。

本次調査で検出された土坑は、堆積状況から1遺構と判断したが、土坑や小穴が複数基重なったような形状を持つもの非常に多い。埋土に焼土ブロックや地山ブロックの混入、土器の廃棄など、人為堆積の様相を示すものが多いことも特徴に挙げられる。また、これらの土坑類は住居跡の周辺に数基がまとまっており、住居との重複がみられない。そのため、出土遺物がなく時期がはっきりしな



第115図 野古A遺跡竪穴住居跡分布図

かった土坑も、住居跡と同時期、おそらく奈良または平安時代に属すると推定される。

④陥し穴状遺構

9基検出された。長軸2.6~3.7mの溝状の陥し穴で、多くが微高地上につくられている。等高線にはほぼ直交しており、平行するのはRD153陥し穴状遺構のみである。本次調査区の南西19・20・29次調査区でも、同様に等高線に直交する形で陥し穴状遺構が並んでおり、野古A遺跡南端部は绳文時代には狩猟場として利用されていたようである。

⑤堅穴状遺構

2基検出された。RE004堅穴状遺構は、埋土中に近世の遺物を含むためそれ以前の年代が想定される。RE003堅穴状遺構からは遺物の出土はないが、規模・形状から堅穴住居跡の掘りかけの可能性が考えられる。

⑥焼土遺構

11基検出された。円形または隅丸（長）方形の土坑で長軸が60~150cm程度、浅皿状に窪む断面形を持つ。上坑内が被熱しており遺構内で焼成が行われたものと考えられる。被熱範囲は、底面または壁面、もしくはその両面であるが、底面が被熱する例が少ない。埋土中には炭化物・焼土ブロックが多く含まれていることから、焼成後、中のものを搔きだす行為が行われたものと考えられる。RF010焼土遺構内からは、器面のきれいな（磨滅していない）薄く剥落したような土器片がまとまって出土したことから土器焼成坑、または炭化材も多く含まれることから炭窯とも用途は考えられるが、詳細は不明である。

これらの焼土遺構は、旧河道への落ち際、等高線に沿って並んでいる。過年度までの調査で検出された同類の遺構は、第12次調査RD037・040・041土坑、第15次調査RD070・072・073土坑、RF001焼土遺構、第20次調査RF002~004焼土遺構の10基である。これらは各報告書で遺構内の焼成が行われたと判断されたものと、焼土がブロック状に混入しているものとにわかれれるが、本次調査RF013焼土遺構のように、壁の被熱崩落土が堆積している例も考え、遺構の形状および埋土の堆積状況から同種類の遺構と判断した。野古A遺跡で検出した焼土遺構の分布を図に示してみると（第116図）、旧河道の落ち際に多く作られていることがわかる。遺跡内全体で斜面地を利用して土坑を掘り、その中でなんらかのものを焼成していたものと考えられる。

遺構の時期は、本次調査では重複関係からRA086堅穴住居跡（奈良時代）よりRF009焼土遺構のほうが新しく、遺物では土師器非ロクロの甕口縁部（RF080）・球胴壺底部（RF010）が出土しており奈良時代以降と判断される。過年度までの調査では、時期の特定される遺構との重複関係はないが、12次調査RD040・041土坑、20次調査RF002焼土遺構でもやはり非ロクロの土師器甕が出土している。これら以外では遺物が含まれる例がなく坏類の出土がないため断定はできないが、これら焼土遺構は奈良時代に属する可能性が高いと考えられる。

⑦溝跡

8条検出された。RG030溝跡をのぞき、過年度の調査区から延びるものである。RG029溝跡以外は等高線に沿うように走っている。いずれも時期ははっきりしないが、埋土中には土師器を含むことから古代以降と考えられる。また、RG015は十和田a隣下火山灰が埋土中に混入する住居跡を切ってい



第116図 野古A遺跡焼土遺構分布図

るため、10世紀中葉以降と判断される。

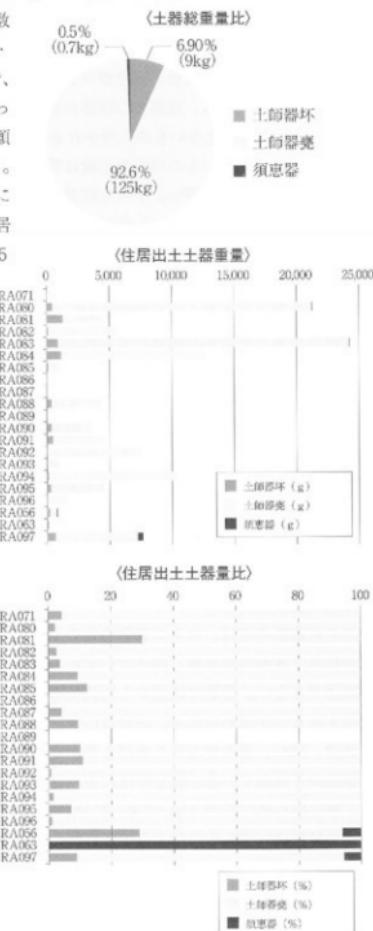
(2) 出土遺物

今回の調査では、土器・陶磁器・土製品・石器・石製品・金属製品が出土した。これらのなかで大半を占めるのが土器で、以下これについて詳細を述べたい。(第8表・第117図)

土器はコネテナ(20×30×40cm)で20箱程度、縄文土器・土師器・須恵器が出土した。このうち純文土器はRF006焼土遺構内より出土した254を含み数点で、主に旧河道内II層より出土している。土師器・須恵器は、重量計測を行ったところ総重量約135kgで、このうち須恵器は約700g、残りはすべて土師器であった。土師器はさらに壺類と甕類に分類し、内訳は壺類9kg、甕類125kgと、全体の93%を土師器甕が占める。各遺構の出土量は3筋に記してあるが、住居跡ごとにみていくと、20kgを超えるものがRA080・083堅穴住居跡、10kg程度がRA084・094堅穴住居跡、これ以外は5kg前後、中にはRA086・087・093堅穴住居跡のようにその遺構全体を調査したにも関わらず1kgに満たない、ごく少量の遺物しか出土しない住居跡もある。この遺物量の差は住居跡の規模に比例している傾向がみられた。壺類と甕類の量比は、全体の出土量の少ないRA080堅穴住居跡と平安時代の住居跡であるRA056堅穴住居跡は壺の量比が多くなるが、それ以外は、おおむね総量と同じ比率を示している。これに対して土坑は、遺物出土量が少ない影響もあると思われるが、壺類の占める割合が住居跡に比べ高い。

これら出土した土師器・須恵器は、総出土重量の約50%を図化し掲載した。土師器壺類と須恵器(甕類)は小片でも図化しやすく、遺構ごとの器種組成を把握するために積極的に掲載したため、出土重量比に対して壺類の掲載重量比は若干高くなっている。当然、壺類と甕類では一個体の重さが異なるため、掲載点数で比較してみると、壺類が80点、甕類が137点と6割以上を甕類が占める。また、接合しなかった資料(不掲載の破片)も甕類のはうが圧倒的に多い。

壺類と甕類の量比の原因としては、単純に、もともと使用時から甕類を多く使っていたという可能性がある。しかし、壺類は供膳器、甕類は煮沸・



第117図 土器重量

貯蔵具という役割から考えると、前者の個体数が多い方が自然である。これを踏まえ原因を考えてみると、①壺類に比べ、壺類は煮沸するなどの過程で破損率が高い、②別の住居跡へ移り住む際に、軽い壺類のみを持っていった、③壺類は器としてではなく、カマド袖の芯材や住居跡床に埋め込み台にするなど転用される例が多くみられ、住居廃絶時にそのまま遺棄された、といった理由が推定される。

① 上部器

a 土師器壺類（第118図）

土師器壺類は80点掲載した。一般的な壺に対して口径が広く器高が高いものを鉢、口径は壺よりやや狭い程度であるが器高が高いものを碗として扱い、内訳は壺69点（うち小形11点）、鉢2点、碗6点、高台付壺3点である。

壺は、13点がロクロ成形、56点がロクロを使用せずに成形（非ロクロ成形）されている。

非ロクロ成形の壺は、底部と口縁部の境に①内外面に段をもつもの、②外面に段（または沈線）を持つもの、③段を持たないものに分かれる。②が19点と多く、次いで①が14点、③は9点と少ない。①は、内外面に段を持つものの内面の段は明瞭ではなく、ぼん程度である。底部から丸味を帯び口縁部に向かって開く器形を持つ。平らな底部をもつものは221のものである。口縁部は内湾するものが5点、外傾（外反も若干あり）するものが9点と後者が多い。口径は23cm（23）、25cm（43）と大形な個体が含まれ、その他は16~18cm程度に集中し、器高は42~5.9cmである。②も平底は108の1点のみで、底部～体部にかけて丸みを帯びる。口縁部は内湾が15点、外傾が3点と、前者が多くなる。口径は14~17cm程度と①より小さくなり器高は3.2~5.9cmである。③は九底5点、平底3点、九底でも底部と胴部の変換点があり平底風の個体が見られる。内湾5点、外傾（外反）5点、外反するものが多く、黒色処理がない、または内外面黒色処理される特異な個体がこの器形を持つ。口径は11.4~15.6cmと①②よりも小さい個体が多く、器高も3.8~4.1cmと低くなる。以上器形・法量には①~③で異なる点が見られたが調整は大差なく、外面底部から胴部にかけてハケメまたはヘラケズリ、口縁部はヨコナデもしくはきれいにヘラミガキしている。内面もヘラで磨かれ、大半がその後黒色処理される。

これら以外に口径3~8cm程度の小形の壺も11点出土している。壺として分類してしまったが、器形としては、壺と碗の中間のような形状を持つ。これらは、通常の法量を持つ壺のように、口縁部を意識しヨコナデを施し、底部～胴部をヘラケズリやヘラナデされたもの（29・65・169・171）と、指で押さえ、ナデたりする程度のもの（18・19・64・66・121・158・170）とに分かれる。両者ともに黒色処理は施されていない。

ロクロ成形の壺は、ロクロ成形のみのもの（8点）と内面が磨かれ黒色処理されているもの（5点）に分かれる。底部の切り離し技法はいずれも糸切り離しで、底部や外面下半のヘラケズリなどの再調整は確認できない。器形は底部から内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部まで聞くものと、口縁端部で外反するものが認められる。法量は口径が12.6~15.0cm、器高が5cm前後、底径が5~6cm程度である。

鉢は、74が、歪みが大きく底部も不安定であるに対し、75は壺と器形・調整とも類似し、とても丁寧につくられている。碗も同様に歪みがあり粗雑なもの（133・147・148・174）と、器形・調整とも丁寧に作られたもの（24・236）に分かれる。

高台付壺はいずれも台部のみで、壺部の形状は不明である。

b 壺類（第119・120図）

土師器壺類は137点掲載した。このうち4点のみがロクロ成形、これ以外はロクロを使用せず（非ロクロ成形）つくられている。

非ロクロ成形の壺で口縁部から底部まで残存している個体は23点である。これらの器形・法量をみ

坏

内外曲段



外弧段



段なし



坏 (小形)



鉢



碗



高台付坏



ロクロ口坏 (内黒)



ロクロ口坏



縮尺 坏 (小形) 1/6 それ以外1/9

第118図 野古A遺跡30次調査出土土器 (1)

ると、胸部最大径より口径が広いまたは同じくらいの甕（いわゆる長胴甕）と、口径より胸部最大径が大きい甕（いわゆる球胴甕）にわかれる。長胴甕はさらに器高を観察すると、23.5cm以上のものと、18.2cm以下のものとに分けられ、以下、前者を長胴甕、後者を甕と呼びたい（長胴甕は、さらに23.5～24.8cmと28.1cm以上の間の個体もなく大中小に分かれる可能性もある）。口径は、長胴甕が15.8～21.1cm、甕が10.6～18.0cmと器高に準じているが、底径はこれらほど明確な差はみられなかった。全形がわかる個体以外もこれらの器形・法量をもとに分類していくと、長胴甕が54点（口径または残存する器高が19cm以上）、甕が30点（口径15cm以下）、長胴甕もしくは甕24点、球胴甕21点となる。

長胴甕の器形をみていくと、口縁部は頸部からくの字状に屈曲し大きく聞く器形が目立ち、大半が頸部に段を持つ（6・8・9・46・55・119など）。この他、頸部から緩やかに外反する個体（3・153など）、大きく聞くが口縁端部が内湾気味に立ち上がるるもの（27・139など）もある。これらの口縁端部は丸く、平坦な個体（137・139）は少ない。胴部は、頸部付近から底部へならかに委む器形（3・6・8・137など）が大半を占め、頸部から一度膨らみ胴部上半に最大径を持つもの（9・46・52・55・151など）がこれに次ぎ、底部まで径の変化が乏しい器形（45・136）も存在する。底部は短く直立（55・119・151など）または外側に張り出す（3・6・46など）。底部内面は、9が丸味を持つがそれ以外は平坦である。胴部調整は内外面ともハケメが多く、ヘラナデが次ぎ、口縁部はヨコナデされる。その調整順序として胴部から口縁が人半を占めるものの、口縁から胴部または、口縁と胴部の調整が接しない、おそらく口縁部の調整が先で頭部の変換点をさけて調整した個体も確認できる。これら調整順序の違いと、器形・法量に関連性があるか検討したが、今回の資料でそれは見いだせなかった。

甕も、長胴甕と同様の器形・調整方法である。しかし、口縁部の形態が短く聞くものや、端部で内湾気味になる個体が、長胴甕に比べ多い。また、胴部が丸くふくらみ、球胴甕の器形に近い個体（31・33・102・140）も存在する。

球胴甕も長胴甕と同様の調整方法、口縁・底部形態が確認でき、長胴・球胴などの器形や、器高・口径が異なっても、細部（口縁・底部）の形態や調整方法などは同じ技術が用いられたものと考えられる。胴部の最大径は、中央付近からやや上方に位置している。

ロクロ成形の甕は、大形のもの（191・193）は外面全体下半をヘラケズリ調整され、小形のもの（198・205）はロクロ成形のみで底部は糸切り離されている。

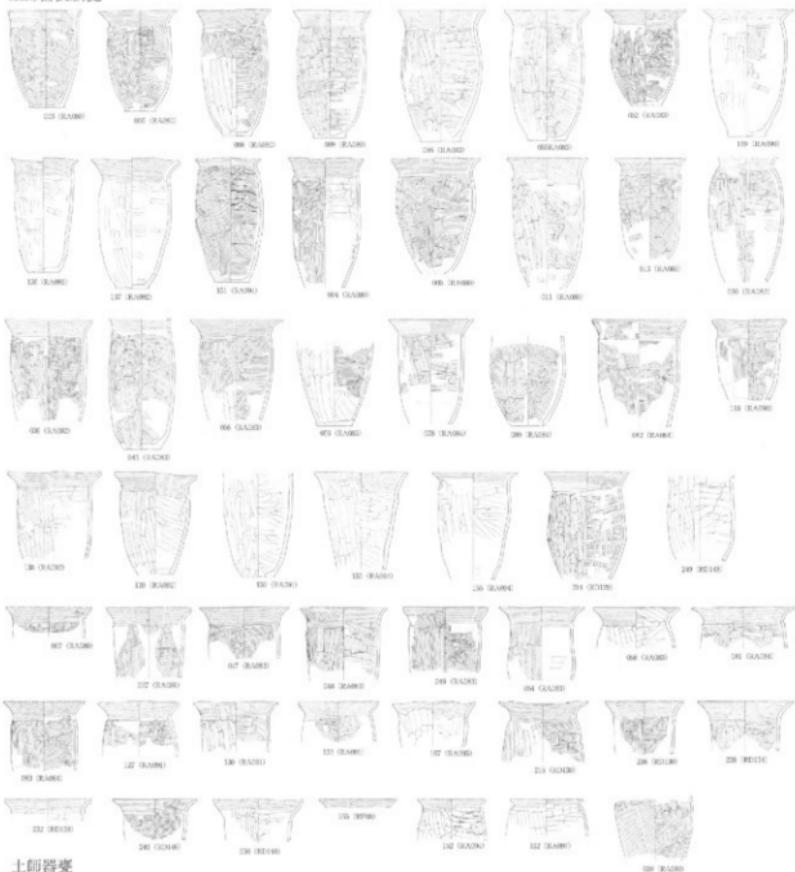
また、甕類と一括したが、一点だけ長頸瓶が出土している（16）。いわゆる須恵器長頸瓶と器形は類似するが、内面に輪積み痕が残っているためロクロを使用していないようである。調整も須恵器瓶の場合、胴部下半ヘラケズリ、上半を回転ケズリなどが一般的であるが、16は外面全体をヘラミガキ、内面頭部をハケメ・ヘラナデ調整しており、とても丁寧に仕上げている。

②須恵器（第120図）

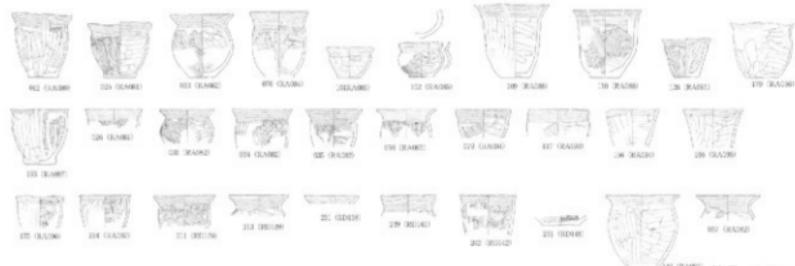
6点すべてが瓶類で、長頸瓶（17・68・181・183）と広口瓶（199・200）に分かれる。口縁～頸部・体部上半のみ残存している。

以上、土器一個体ごとの形態分類はできず全体の傾向を述べたが、これらの特徴と年代観を当てはめてみたい。非ロクロ成形の土師器（RA056・097より出土したものは除く）は、壺類の①丸底主体で平底が少ない、②外面のみの段、もしくは内面がわずかに窪む内外面の段を持つ個体が多い、③20cmを超える大形の器形が少ない、甕類の①頸部に段を持ち大きく聞く口縁部が主体、②底部内面は平坦、などの特徴からおおむね8世紀代（一部7世紀の終わりも含むか？）前葉から中葉を主体とすると思われる。個々の遺構ごとに細かい時期変遷までは検討できなかったが、大形の壺や内外面に段を持つ壺を伴うRA081・083竪穴住居跡はやや古く、平底の壺や、頸部の緩く聞く甕（調整もヘラナデ）が伴

土器器長胴甕



土器甕



縮尺 1/12

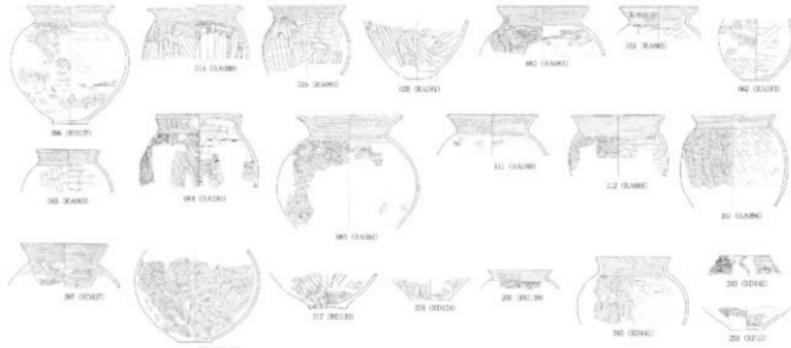
第119図 野古A遺跡30次調査出土土器 (2)

うRA094・095堅穴住居跡などは、やや新しい様相を示している。ロクロ成形の土師器は、底部再調整が見られないこと、器形・法量などから9世紀後半～10世紀初めころまでの年代が想定される。

〈参考・引用文献〉

- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1998）『野古A遺跡第10次調査』『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』282集
盛岡市教育委員会（1998）『盛岡市埋蔵文化財調査年報 平成5・6年度』
伊藤博幸（1998）「北上盆地南部」『東北地方の古代集落』 第24回古代城柵官道跡検討会シンポジウム資料
八木光則他（1998）「馬鹿沼流域」『東北地方の古代集落』 第24回古代城柵官道跡検討会シンポジウム資料
○岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2003）『太郎遺跡第26次発掘調査報告書』416集
○岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2003）『太郎遺跡第35次発掘調査報告書』417集
○岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2003）『野古A遺跡第12次発掘調査報告書』420集
○岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2003）『野古A遺跡第15次発掘調査報告書』421集
○岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2004）『野古A遺跡第19次調査』『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』455集
○岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2004）『野古A遺跡第20次調査』『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』455集
○岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2007）『野古A遺跡第23・24・29次発掘調査報告書』501集
高橋千晶（2007）『岩手県南部』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
八木光則（2007）『岩手県中部』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
盛岡市教育委員会（2009）『盛南地区遺跡群調査報告II』

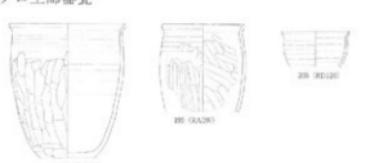
土師器球刷壺



土師器瓶



ロクロ土師器壺



ロクロ須恵器壺



縮尺 1/12

第120図 野古A遺跡30次調査出土土器（3）

VI 自然科学的分析

1 矢盛遺跡出土火山灰について

弘前大学大学院理工学研究科

柴 正敏・長 沢 知 周

矢盛遺跡より採集された、火山灰サンプル1試料について、以下の観察・分析を行った。

この試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて構成鉱物の種類、火山ガラスの形態を記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成及び共存鉱物などにより給源火山を推定することができる (Machida, 1999; 町田・新井, 2003; 町田・新井, 2006)。本報告では、電子プローブマイクロアナライザー(以下EPMA)を用いて、火山灰サンプル1試料に含まれる火山ガラスの化学組成を明らかにした。その結果は表2に示した。EPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA-8230を使用した。使用条件は、加速電圧15kV、試料電流6×10⁻⁹A、ビーム径10μmである。

ガラスの形態と構成鉱物(表1)及びEPMA分析値(表2)より、十和田アテフラ起源の火山ガラスからなる。この試料は、軽石型の火山ガラスを主とし、褐色ガラス(オブシディアン)を含む。また、径が0.5~2mm程度の軽石片を含む。構成鉱物は、斜長石、石英、斜方輝石、单斜輝石及び鉄鉱である。

(引用文献)

青木があり・町田 洋(2006) 日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成, K2O-TiO2間によるテフラの識別. 地質調査研究報告, 第57卷, 第7/8号, 239~258.

Machida, H. (1999) Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan: Recent progress. 第四紀研究, 第38卷, 194~201.

町田 洋・新井房夫(2003) 新編火山灰アトラス, 日本国鳥とその周辺 東京大学出版会, 336p.

柴 正敏・重松直樹・佐々木 実(2000) 青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成(1). 弘前大学理工学部研究報告, 第1卷, 第1号, II-19.

柴 正敏・中道有郎・佐々木 実(2001) 十和田火山, 降下軽石の化学組成変化 - 宇摩部の一部 観測を例として. 弘前大学理工学部研究報告, 第1卷, 第1号, II-17.

表1 矢盛遺跡出土の火山灰試料

試料No.	ガラス及び鉱物								軽石径	火山灰の層
RG040	ガラス (pm>bw)、褐色ガラス、斜方輝石、單斜輝石、斜長石、石英、鉄鉱。								0.5~2mm	To-a

pm: 軽石型、bw: バブルウォール型、>: より多い、To-a: 十和田アテフラ

表2 矢盛遺跡、火山ガラスのEPMA分析値

矢盛遺跡採取火山灰試料											Total	EPMA
	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	n		
試料RG040	被小	75.47	0.31	12.39	1.84	0.04	0.29	1.92	2.06	1.40		
	最大	78.35	0.47	13.29	2.16	0.18	0.47	2.34	4.60	1.58		
	平均	76.38	0.38	12.95	2.01	0.10	0.39	2.10	4.17	1.49	20	96.15
	標準偏差	0.55	0.01	0.16	0.09	0.01	0.05	0.11	0.54	0.06		
十和田アテフラ												
青木・町田(2006)	To-a	77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.9	1.37	19	98.41
	SD 35											
	To-a	76.17	0.42	13.41	1.89	0.09	0.38	1.99	4.08	1.56	18	92.89
	SD 27											

FeO*: 全鉄をFeOとして計算した。n: 分析枚数の数。WDS: 扇束分光型EPMAを意味。

RG040 火山灰分析値

SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO ⁺	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total	
71.83	0.319	12.252	1.914	0.063	0.319	1.880	3.966	1.479	93.373	
72.03	0.380	12.294	1.943	0.151	0.417	2.080	4.662	1.539	95.079	
72.28	0.264	12.422	1.751	0.082	0.332	1.949	4.273	1.179	95.036	
74.19	0.250	12.511	1.908	0.117	0.422	2.039	4.214	1.391	97.311	
75.23	0.383	12.492	1.850	0.076	0.383	2.091	4.302	1.432	96.156	
75.91	0.409	12.486	1.996	0.145	0.588	1.959	4.230	1.488	98.123	
73.13	0.448	12.302	2.059	0.099	0.382	1.964	3.995	1.433	95.795	
73.12	0.200	12.391	2.056	0.096	0.447	1.986	4.208	1.389	96.088	
73.94	0.339	12.373	2.011	0.039	0.383	1.890	4.191	1.459	94.373	
73.82	0.364	12.228	1.982	0.128	0.339	1.918	3.888	1.467	95.166	
73.84	0.446	12.451	1.861	0.085	0.377	2.218	3.716	1.415	96.183	
71.081	0.347	12.286	2.018	0.101	0.442	2.183	3.621	1.350	93.432	
75.522	0.362	12.668	2.067	0.132	0.388	2.173	3.805	1.403	98.610	
73.809	0.301	12.849	2.095	0.125	0.357	1.971	4.358	1.417	97.273	
73.323	0.412	12.804	2.088	0.173	0.366	2.330	4.239	1.388	97.030	
74.785	0.322	12.268	1.954	0.082	0.323	1.871	4.445	1.470	97.420	
73.374	0.225	12.275	1.983	0.092	0.387	1.978	4.177	1.409	96.130	
74.396	0.363	12.468	2.029	0.039	0.278	1.976	4.099	1.553	96.811	
73.59	0.369	12.428	1.883	0.141	0.349	2.007	4.251	1.373	96.497	
74.348	0.355	12.593	1.921	0.099	0.347	2.025	4.177	1.305	97.212	
最小値	71.084	0.300	12.228	1.751	0.039	0.278	1.871	1.845	1.039	93.375
最大値	75.522	0.448	12.849	2.095	0.173	0.447	2.330	4.375	1.488	98.610
平均	73.444	0.362	12.448	1.963	0.098	0.372	2.019	4.016	1.429	96.153
標準偏差	1.131	0.012	0.172	0.093	0.037	0.042	0.119	0.031	0.050	1.428

100%規格化

SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO ⁺	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total	
75.233	0.342	13.121	2.050	0.067	0.342	2.013	4.247	1.581	100.00	
76.171	0.400	12.930	2.044	0.159	0.429	2.188	4.362	1.498	100.000	
76.057	0.583	13.071	1.842	0.086	0.349	2.064	4.601	1.556	100.000	
76.249	0.360	12.888	1.961	0.120	0.434	2.093	4.461	1.429	100.000	
76.165	0.288	12.991	1.924	0.079	0.398	2.081	4.474	1.469	100.000	
76.266	0.417	12.725	2.034	0.148	0.395	1.996	4.403	1.516	100.000	
76.322	0.168	12.842	2.149	0.103	0.399	2.069	4.170	1.496	100.000	
76.133	0.312	12.899	2.150	0.100	0.463	2.067	4.279	1.446	100.000	
78.350	0.350	13.115	2.131	0.041	0.406	2.003	2.061	1.546	100.000	
76.569	0.372	12.857	2.063	0.135	0.356	2.017	4.988	1.542	100.000	
76.546	0.464	12.945	1.924	0.088	0.392	2.306	3.863	1.471	100.000	
76.084	0.371	13.150	2.160	0.108	0.473	2.236	3.876	1.445	100.000	
76.387	0.267	12.836	2.096	0.131	0.393	2.294	3.960	1.423	100.000	
75.678	0.309	13.200	2.154	0.129	0.367	2.028	4.480	1.457	100.000	
75.473	0.425	13.196	2.149	0.180	0.377	2.298	4.389	1.534	100.000	
76.766	0.331	12.593	2.006	0.084	0.332	1.921	4.460	1.309	100.000	
76.312	0.338	12.871	2.062	0.085	0.402	2.057	4.344	1.528	100.000	
76.690	0.375	12.879	2.096	0.040	0.287	2.011	4.234	1.398	100.000	
76.336	0.382	12.890	1.929	0.077	0.372	2.163	4.437	1.423	100.000	
76.777	0.265	12.954	1.976	0.061	0.357	2.083	4.297	1.330	100.000	
最小値	75.473	0.309	12.593	1.812	0.040	0.287	1.921	2.061	1.398	100.000
最大値	78.350	0.468	13.200	2.160	0.180	0.473	2.236	4.584	1.584	100.000
平均	76.384	0.376	12.947	2.044	0.101	0.387	2.100	4.174	1.486	100.000
標準偏差	0.545	0.043	0.157	0.094	0.038	0.045	0.113	0.038	0.055	-

TeO₂：今後はFeOとして計算した。

2 野古A遺跡出土火山灰について

弘前大学大学院理工学研究科

柴 正敏・長 沢 知 周

野古A遺跡より採集された、火山灰サンプル2試料について、以下の観察・分析を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて構成鉱物の種類、火山ガラスの形態を記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成及び共存鉱物などにより給源火山を推定することができる (Machida,1999; 町田・新井2003; 町田・新井2006)。本報告では、電子プローブマイクロアナライザ (以下EPMA) を用いて、火山灰サンプル2試料に含まれる火山ガラスの化学組成を明らかにした。その結果は表2に示した。EPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA-8230を使用した。使用条件は、加速電圧15kV、試料電流6×10⁻⁹A、ビーム径10μmである。

ガラスの形態と構成鉱物 (表1) 及びEPMA分析値 (表2) より、試料RA083は十和田aテフラ起

表1 野古A遺跡、火山灰試料

試料No.	ガラス及び鉱物								軽石の径	火山灰の帰属
RA080	ガラス (pm, bw), 斜長石, 石英, 斜方輝石, 単斜輝石, 角閃石, 鉄鉱, プラントオパール,								不明	
RA083	ガラス (pm>bw), 褐色ガラス, 斜長石, 石英, 斜方輝石, 単斜輝石, 鉄鉱,								0.5~15mm	To-a

pm: 粒石型, bw: バブルウォール型, >: より多い, To-a: 十和田aテフラ

表2 野古A遺跡、火山ガラスのEPMA分析値

野古A遺跡採取火山灰試料											Total	EPMA
	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	n	Total	EPMA
試料RA080	最小	77.85	0.10	12.34	0.38	0.16	0.04	0.70	3.86	3.97		
	最大	78.02	0.11	12.69	0.73	0.11	0.08	0.76	3.95	4.03		
	平均	77.94	0.10	12.51	0.65	0.11	0.06	0.73	3.91	4.00	2	95.1
	標準偏差	0.133	0.003	0.247	0.110	0.012	0.023	0.011	0.000	0.039		
試料RA083	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	n	Total	EPMA
	最小	75.47	0.31	12.59	1.84	0.04	0.29	1.92	2.06	1.40		
	最大	78.85	0.47	13.20	2.16	0.18	0.47	2.34	4.60	1.38		
	平均	75.38	0.38	12.93	2.01	0.10	0.29	2.10	4.17	1.49	39	96.15
	標準偏差	0.35	0.04	0.16	0.09	0.04	0.03	0.14	0.54	0.06		
十和田aテフラ	To-a	77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.90	1.37	19	98.41
	SDT 35											
	To-a	76.17	0.42	13.41	1.89	0.09	0.38	1.99	4.08	1.56	18	92.89
	SDT 37											

FeO*: 全鐵をFeOとして計算した。n: 分析試料の数を表す。WDS: 直接分光型EPMAを表す。

RA080 火山灰分析値

	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
73.983	0.100		11.689	0.692	0.107	0.073	0.663	3.70	3.764	94.761
74.293	0.097		12.103	0.519	0.092	0.042	0.722	3.687	3.813	95.430
最小値	73.933	0.097	11.689	0.549	0.092	0.042	0.662	3.687	3.764	94.761
最大値	74.293	0.100	12.105	0.602	0.107	0.073	0.722	3.741	3.843	95.430
平均	74.113	0.099	11.897	0.626	0.100	0.067	0.696	3.714	3.803	95.006
標準偏差	0.255	0.002	0.291	0.101	0.011	0.022	0.042	0.038	0.056	0.473

源の火山ガラスからなる。この試料は、軽石型の火山ガラスを主とし、褐色ガラス（オブシディアン）を含む。また、径が0.5~15mm程度の軽石片を含む。構成鉱物は、斜長石、石英、斜方輝石、單斜輝石及び鉄鉱である。一方、試料RA080は火山ガラスの含有量が非常に少なく、ほとんどが鉱物であった。EPMA分析値（表2）より、十和田起源以外の火山ガラスが認められたが、給源を決定することはできなかった。構成鉱物は、斜長石、石英、斜方輝石、單斜輝石、角閃石及び鉄鉱である。

（引用文献）

- 青木かおり・町田 洋（2006）日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成 K2O-TiO2図によるテフラの識別 地質調査研究報告、第57巻、第7/8号、239~258.
- Machida, H. (1999) Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan : Recent progress. 第四紀研究、第38巻、194~201.
- 町田 洋・新井房太（2003）新発火山灰アトラス、日本列島とその周辺 東京大学出版会、336p.
- 柴 正敏・重松直樹・佐々木 実（2000）青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成 (1) 弘前大学理学部研究報告、第1巻、第1号、11~19.
- 柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実（2001）十和田火山、降下軽石の化学組成変化 - 宇海部の一露頭を例として-、弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11~17.

100%規格化

	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
77.020	0.06	12.335	0.790	0.113	0.077	0.699	3.948	3.972	100.000	
77.831	0.102	12.683	0.575	0.096	0.044	0.757	3.864	4.027	100.000	
77.851	0.102	12.335	0.575	0.096	0.044	0.699	3.864	3.972	100.000	
78.020	0.106	12.685	0.790	0.113	0.077	0.757	3.948	4.027	100.000	
平均	77.936	0.104	12.510	0.653	0.105	0.061	0.728	3.906	4.000	100.000
標準偏差	0.120	0.003	0.247	0.110	0.012	0.023	0.041	0.060	0.039	0.000

RA083 火山灰分析値

	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
72.123	0.30	12.542	1.753	0.103	0.397	1.996	4.325	1.424	97.676	
72.217	0.372	11.861	1.765	0.066	0.293	1.854	4.309	1.448	93.188	
73.811	0.347	12.253	2.027	0.084	0.307	1.926	4.336	1.345	94.466	
74.663	0.349	12.350	2.008	0.099	0.420	1.999	4.425	1.473	97.176	
74.838	0.213	12.433	1.698	0.113	0.359	1.994	3.807	1.338	96.413	
75.196	0.241	12.636	1.588	0.102	0.371	1.993	4.231	1.436	98.008	
74.312	0.299	12.149	1.832	0.113	0.410	1.962	4.522	1.396	97.295	
72.244	0.484	13.379	2.277	0.040	0.400	2.482	4.303	1.215	97.074	
73.334	0.287	12.255	1.747	0.102	0.365	1.676	3.945	1.503	95.414	
74.222	0.432	12.533	1.797	0.106	0.350	1.894	4.679	1.382	96.766	
73.889	0.390	12.662	1.783	0.175	0.395	1.951	4.192	1.403	96.743	
75.382	0.379	12.307	2.131	0.105	0.335	1.836	4.150	1.405	98.210	
75.229	0.369	12.624	2.071	0.060	0.352	2.118	4.223	1.531	99.120	
昌小旗	72.217	0.214	11.864	1.698	0.000	0.293	1.816	3.807	1.215	93.188
飛大旗	75.229	0.684	13.379	2.277	0.173	0.420	2.482	4.205	1.534	99.120
平均	74.095	0.347	12.484	1.906	0.093	0.366	1.956	4.281	1.406	96.883
標準偏差	1.230	0.064	0.345	0.179	0.041	0.039	0.179	0.226	0.082	1.449

100%規格化

	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
76.903	0.308	12.849	1.795	0.105	0.406	1.961	4.633	1.456	100.000	
76.423	0.399	12.721	1.894	0.071	0.314	1.990	4.624	1.354	100.000	
76.531	0.360	12.705	2.102	0.087	0.318	2.007	4.496	1.395	100.000	
76.205	0.359	12.709	2.066	0.102	0.432	2.057	4.554	1.516	100.000	
77.093	0.256	12.696	1.761	0.117	0.372	2.068	3.949	1.388	100.000	
76.724	0.219	12.693	1.927	0.101	0.379	1.942	4.317	1.465	100.000	
76.378	0.307	12.795	1.883	0.116	0.421	2.037	4.648	1.435	100.000	
74.460	0.499	13.789	2.347	0.041	0.412	2.598	4.641	1.232	100.000	
76.839	0.201	12.844	1.531	0.107	0.383	1.966	4.135	1.575	100.000	
76.703	0.448	12.953	1.857	0.110	0.326	1.957	4.215	1.397	100.000	
76.367	0.211	13.098	1.853	0.181	0.409	2.017	4.333	1.450	100.000	
76.654	0.386	12.531	2.170	0.107	0.311	1.849	4.531	1.431	100.000	
76.591	0.272	12.796	2.089	0.090	0.355	2.137	4.361	1.548	100.000	
昌小旗	74.990	0.219	12.531	1.761	0.000	0.314	1.849	3.949	1.252	100.000
飛大旗	77.093	0.499	13.789	2.347	0.181	0.432	2.558	4.648	1.575	100.000
平均	76.408	0.358	12.885	1.967	0.096	0.377	2.039	4.418	1.451	100.000
標準偏差	0.631	0.056	0.304	0.173	0.042	0.038	0.171	0.222	0.087	

写 真 図 版



A区終了全景（南から）



B区終了全景（東から）



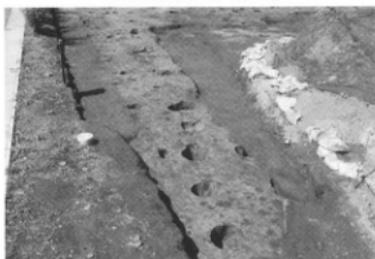
C区北部終了全景（南から）



C区中央部終了全景（南から）



C区南部終了全景（北から）



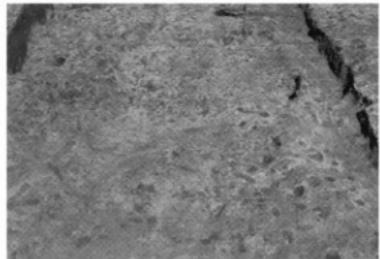
RB047完掘（東から）



RB063完掘（西から）



RB064完掘（南から）



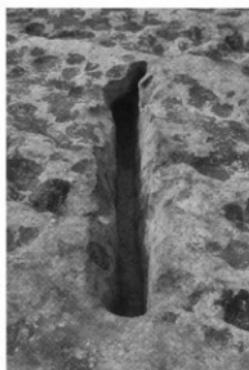
R E 022完掘（南から）



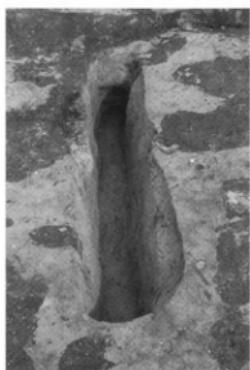
R E 023・024完掘（南から）



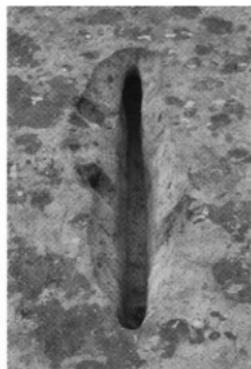
R D 245完掘（南東から）



R D 246完掘（東から）



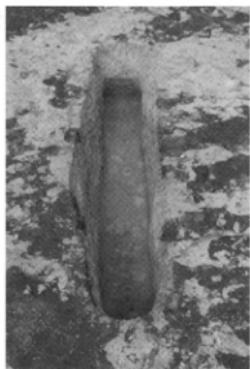
R D 247完掘（南から）



R D 248完掘（北東から）



R D 249完掘（東から）



R D 250完掘（南東から）

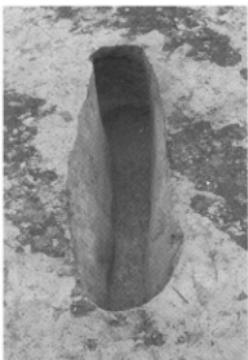
写真図版2 R E 022～024竪穴状遺構・R D 245～250土坑



R D251完掘（北から）



R D252完掘（西から）



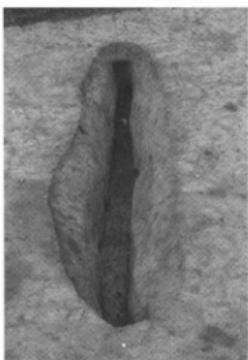
R D253完掘（南西から）



R D254完掘（北西から）



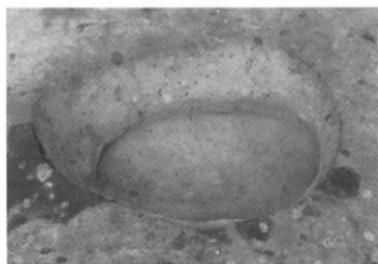
R D255完掘（西から）



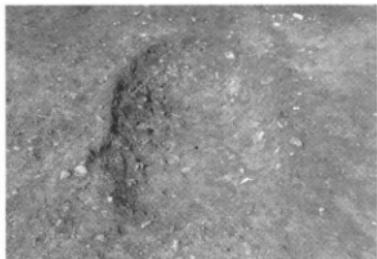
R D257完掘（南東から）



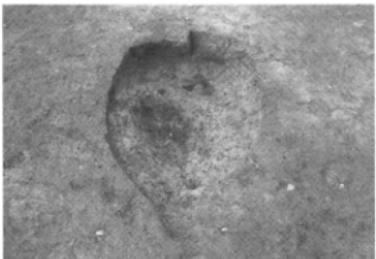
R D256完掘（南東から）



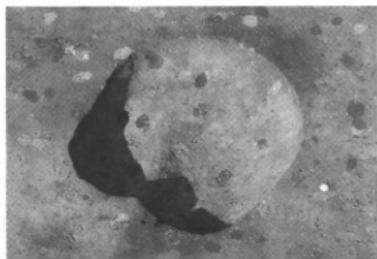
R D261完掘（南西から）



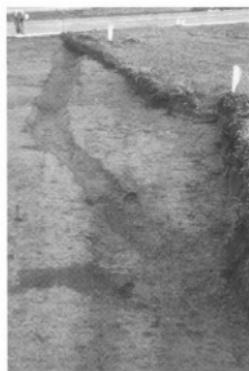
R D258完掘（南から）



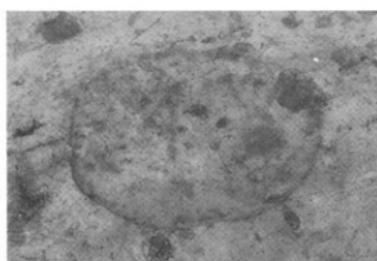
R D259完掘（南から）



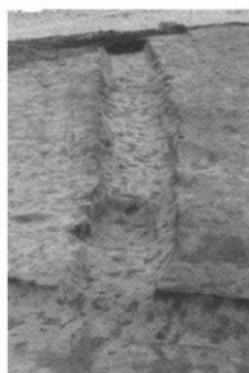
R D260完掘（南から）



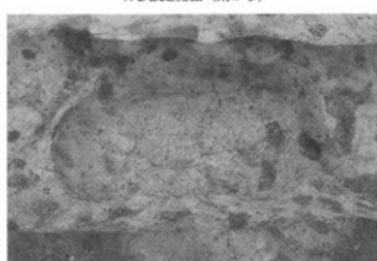
R G012完掘（西から）



R D262完掘（南から）



R G014完掘（北西から）



R G014内土坑完掘（南から）

写真図版4 R D258～260・262土坑、R G012・014溝跡



R G013・021北側完掘（南から）



R G021北側完掘（北西から）



R G013・021南側完掘（北東から）



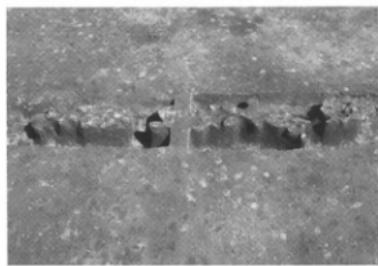
R G013・021南側完掘（南西から）



R G040完掘（南から）



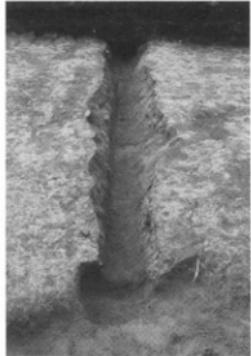
R G046完掘（北東から）



R G040火山灰出土状況（西から）



R G064完掘（東から）



R G065完掘（東から）



R G075完掘（北から）



R G076完掘（南から）



R G077完掘（東から）



R G078~080完掘（南西から）



R G081完掘（西から）

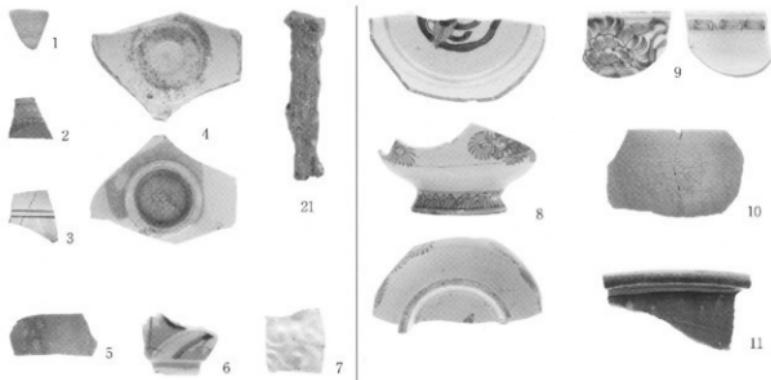


R G082完掘（北西から）

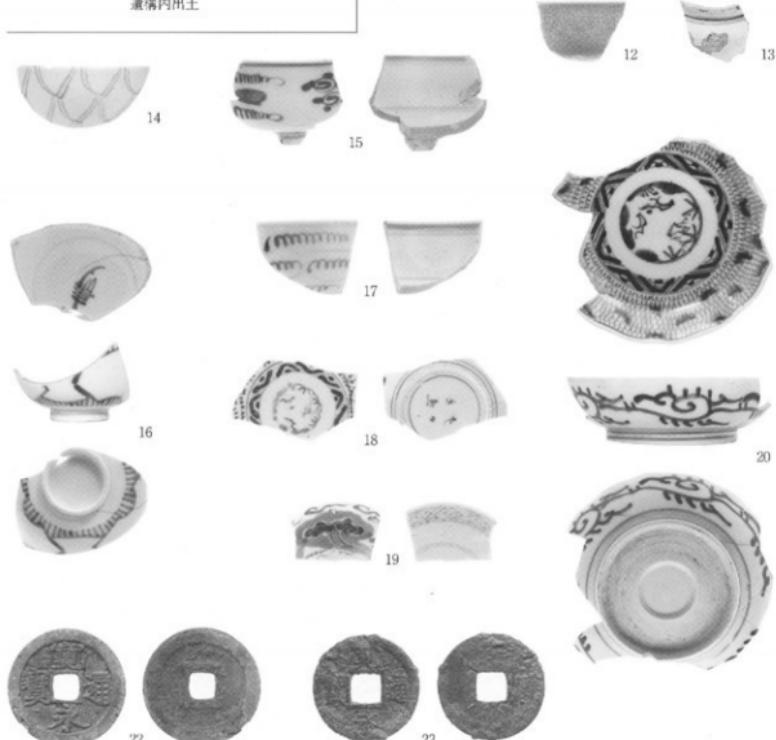


R G083完掘（西から）

写真図版6 R G064・065・075~083溝跡



遺構内出土



遺構外出土遺物

写真図版7 出土遺物



調査区遠景（南から）



調査区遠景（上が北）

写真図版8 調査区（1）



調査区全景（上が北）



調査区全景（北から）

写真図版9 調査区（2）



A区全景（南東から）



B区全景（南東から）

写真図版10 調査区（3）



A区南西部全景（北から）



A区東部全景（北から）



調査前（南西から）



試掘（南から）



重機による粗掘（北から）



検出（南から）



基本層序（南から）



現地説明会（北東から）

写真図版11 調査区全景（4）、調査経過、普及活動

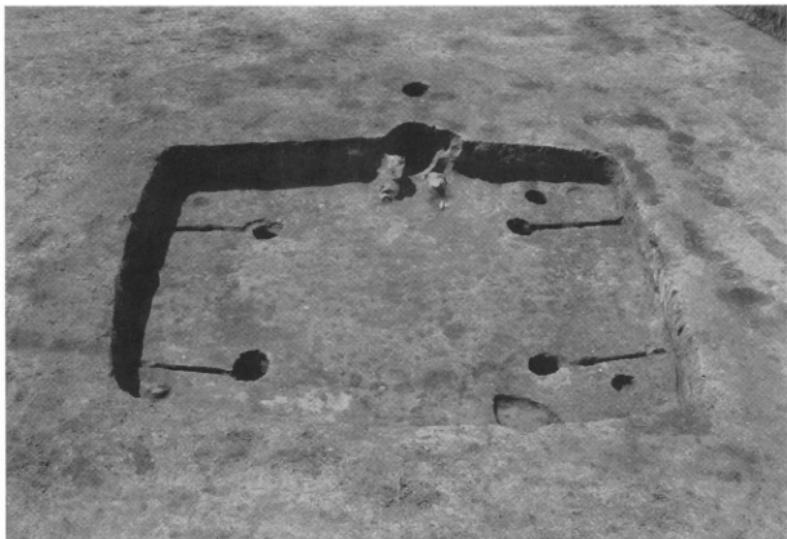


全景（南から）

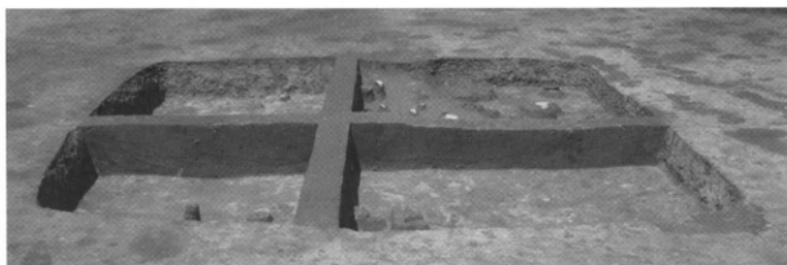


断面（東から）

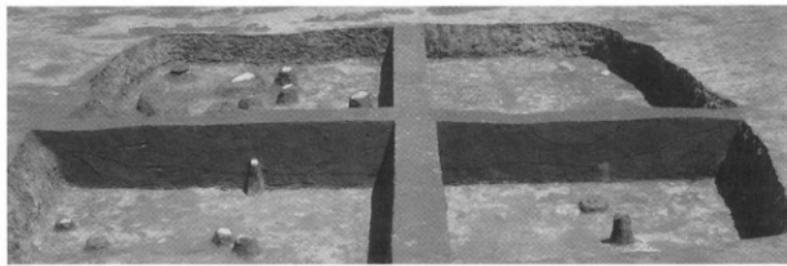
写真図版12 RA071竪穴住居跡



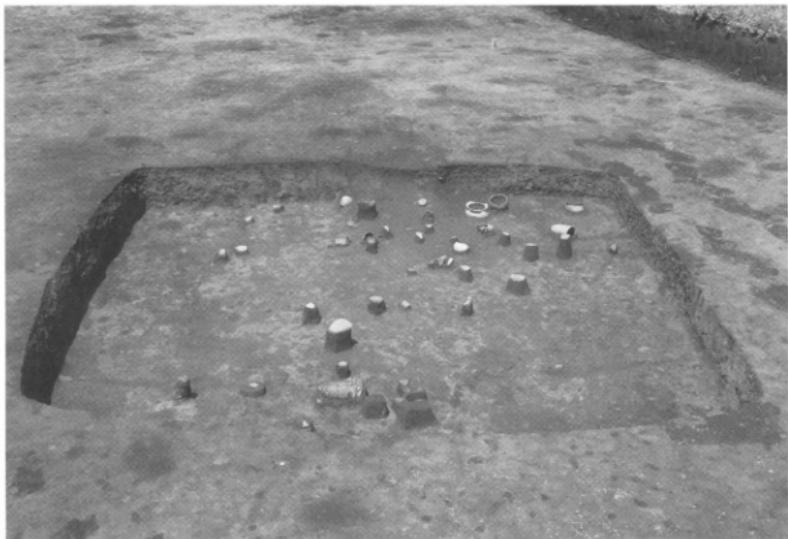
全景（東から）



断面（東から）



断面（南から）



遺物出土状況（東から）



北西隅遺物出土状況（南東から）



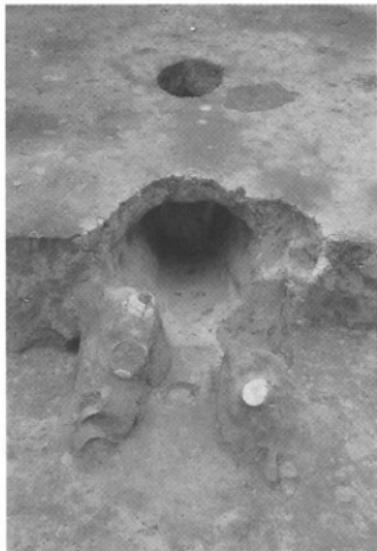
土器（11）出土状況（東から）



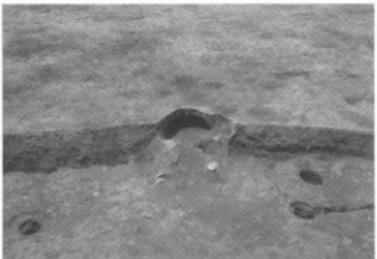
土器（12）出土状況（北東から）



土器（16）出土状況（南東から）



カマド全景（東から）



カマド検出状況（東から）



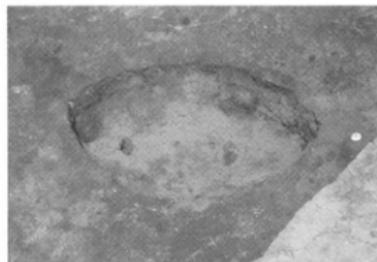
カマド袖土器出土状況（東から）



カマド断面（東から）



カマド断面（北から）



K 1 全景（南から）

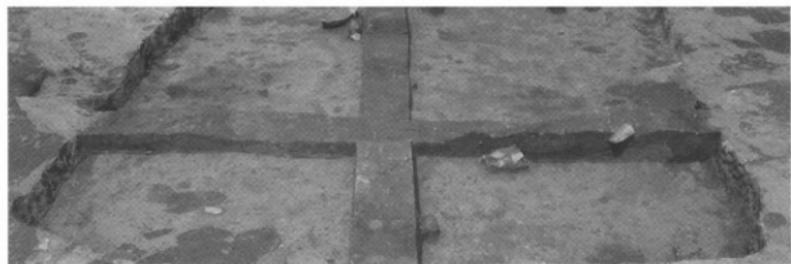


P 3 検出状況（北から）

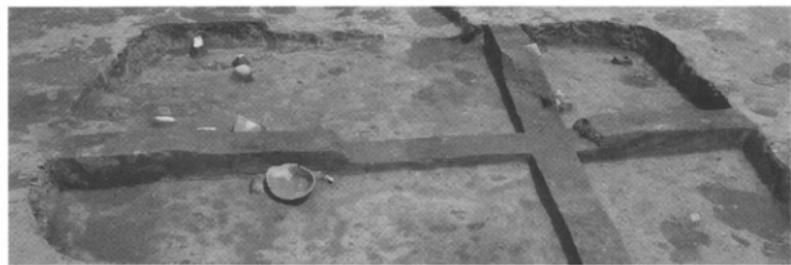
写真図版15 R A080竪穴住居跡（3）



全景（東から）



断面（東から）

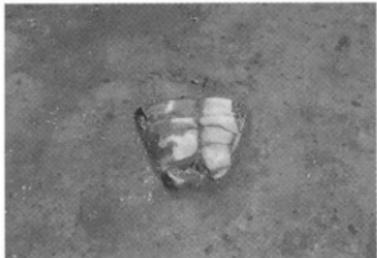


断面（南から）

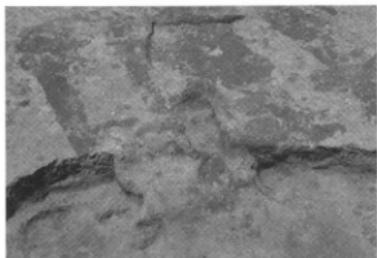
写真図版16 R A081竪穴住居跡（1）



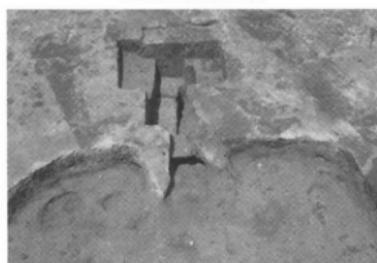
遺物出土状況（南から）



土器(25)出土状況（南西から）



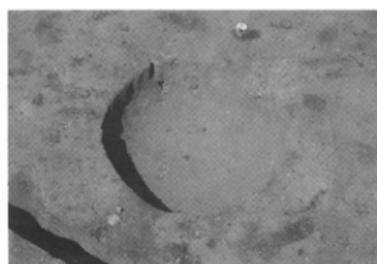
カマド検出状況（東から）



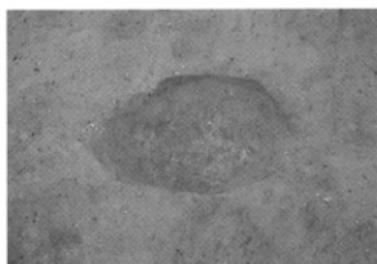
カマド全景（東から）



カマド断面（南から）



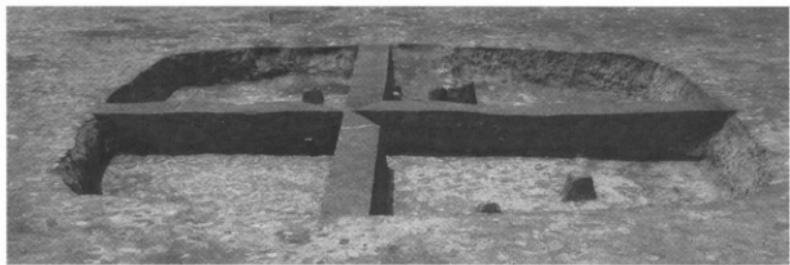
K 1 全景（南から）



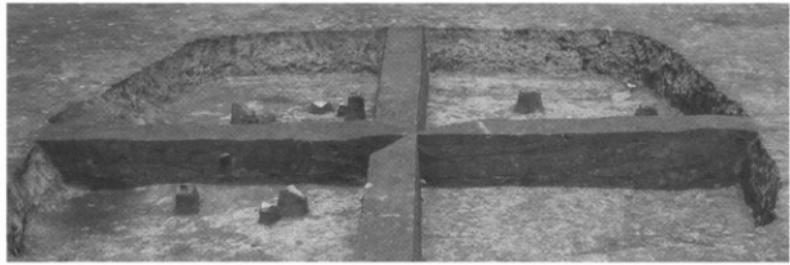
K 2 全景（南から）



全景（東から）



断面（東から）



断面（南から）

写真図版18 R A 082竪穴住居跡（1）



検査・遺物出土状況（北から）



カマド付近遺物出土状況（東から）



カマド検出状況（東から）



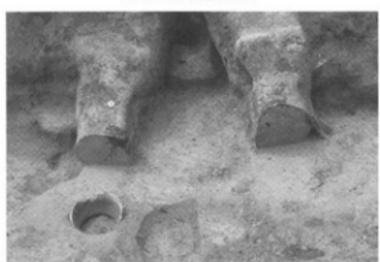
カマド全景（東から）



カマド断面（南から）



カマド全景（東から）



カマド付近遺物出土状況（東から）

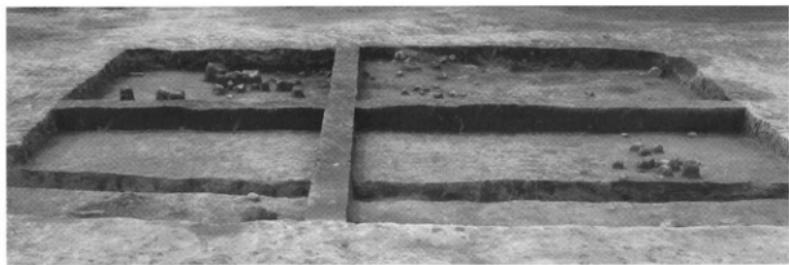


K 1 全景（東から）

写真図版19 R A 082竪穴住居跡（2）



全景（東から）



断面（東から）

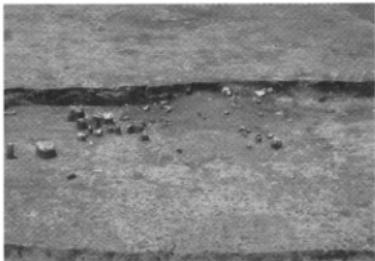


断面（南から）

写真図版20 R A 083豊穴住居跡（1）



精査・遺物出土状況（北から）



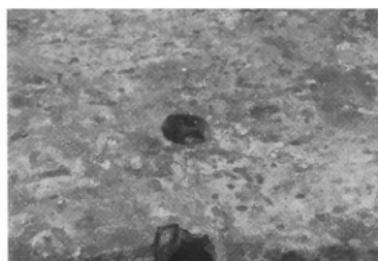
カマド付近遺物出土状況（東から）



遺物出土状況（東から）



土器（59）出土状況（東から）



カマド検出状況（東から）



カマド全景（東から）



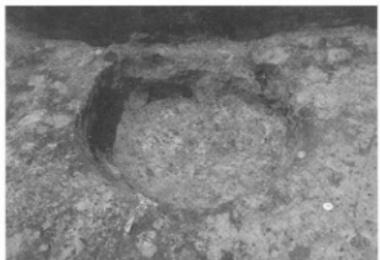
カマド袖土器出土状況（東から）



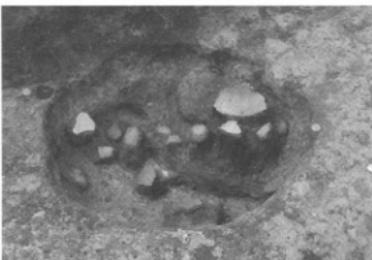
カマド断面（東から）



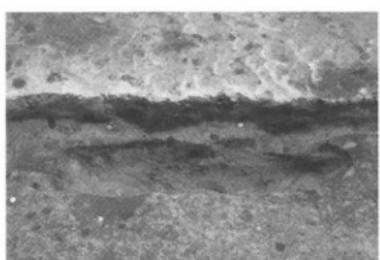
カマド断面（南東から）



K 1 全景（西から）



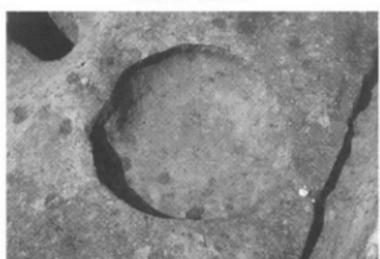
同左遺物出土状況（西から）



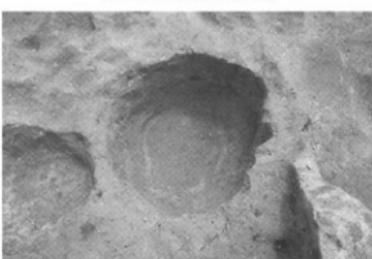
K 3 全景（西から）



同左遺物出土状況（西から）



K 2 全景（南から）



K 4 全景（西から）



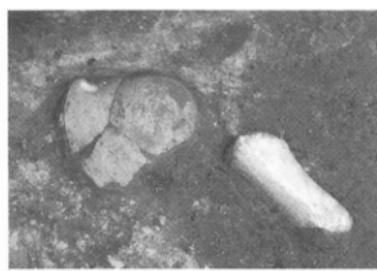
全景（東から）



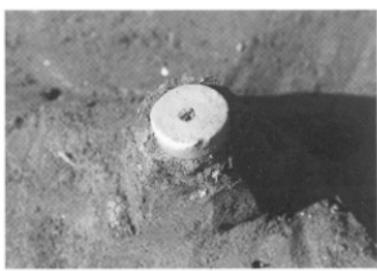
断面（東から）



断面（南から）



遺物（74・98）出土状況（北から）

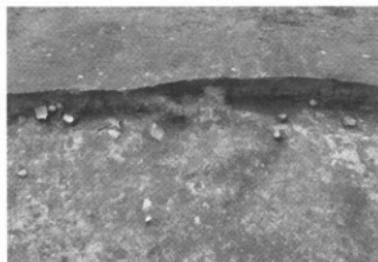


土製品（87）出土状況（南から）

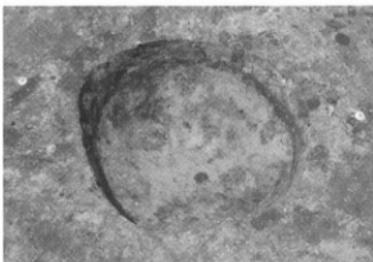
写真図版23 R A084竪穴住居跡（1）



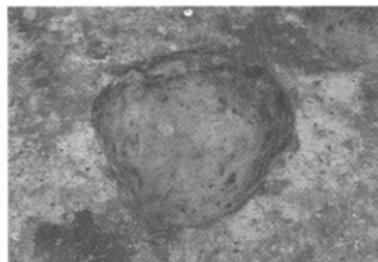
カマドAB全景（東から）



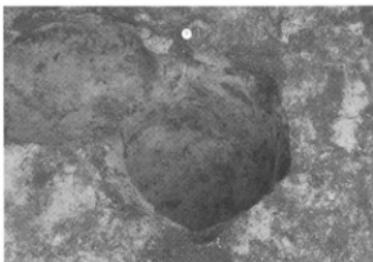
カマド検出状況（東から）



K 1 全景（東から）

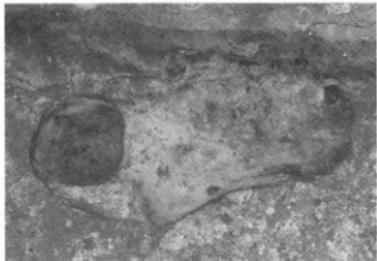


K 2 全景（西から）

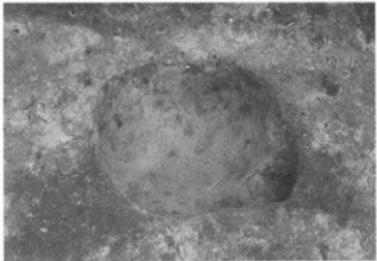


K 3 全景（西から）

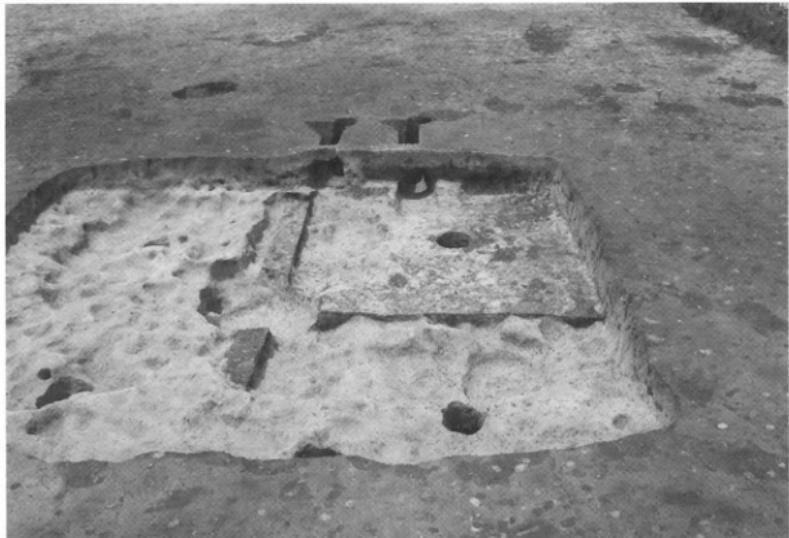
写真図版24 R A084竪穴住居跡（2）



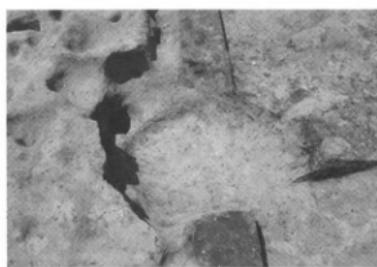
K 5 全景（西から）



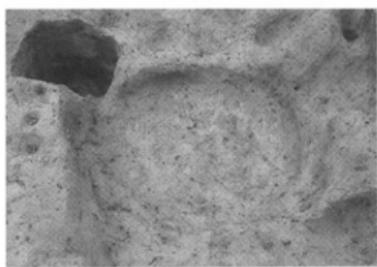
K 6 全景（西から）



B 全景（東から）



B K 1 全景（東から）



B K 2 全景（東から）

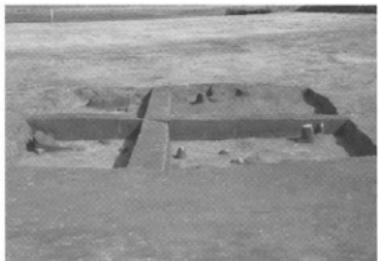


全景（東から）



焼土・炭化材出土状況（東から）

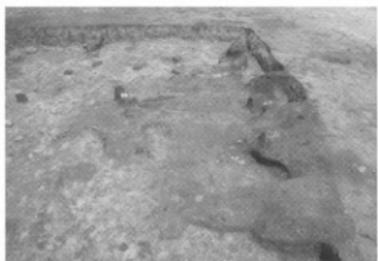
写真図版26 R A 085竪穴住居跡（1）



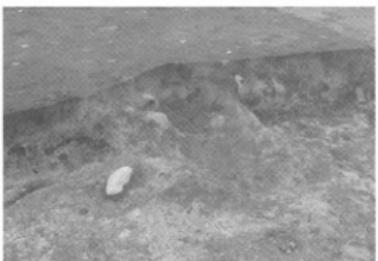
断面（西から）



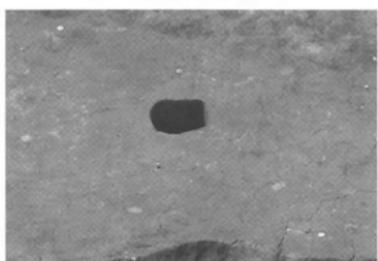
断面（北から）



焼土・炭化物出土状況（南から）



カマド検出状況（東から）



カマド煙道断面（南から）



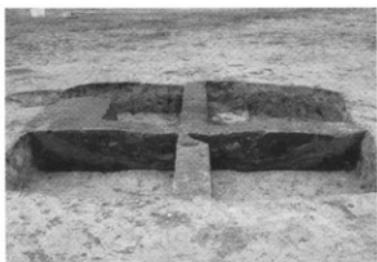
カマド全景（東から）



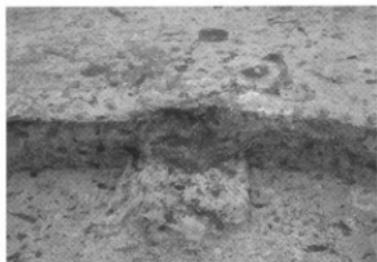
P 5 全景（南西から）



全景（東から）



断面（東から）



カマド検出状況（東から）



カマド全景（東から）

写真図版27 RA086竪穴住居跡



全景（東から）



断面（東から）



カマド検出状況（東から）



カマド全景（東から）



全景（東から）



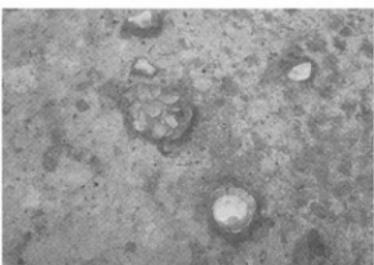
断面（東から）



断面（南から）

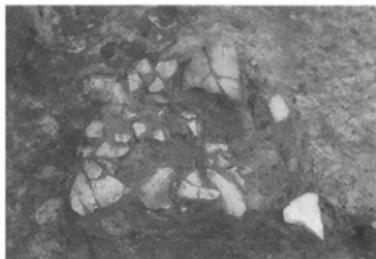


遺物出土状況（東から）



土器（106・109・111）出土状況（東から）

写真図版30 R A 088堅穴住居跡（1）



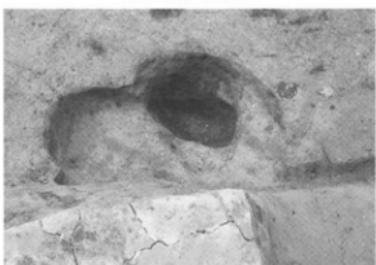
土器(112)遺物出土状況（南から）



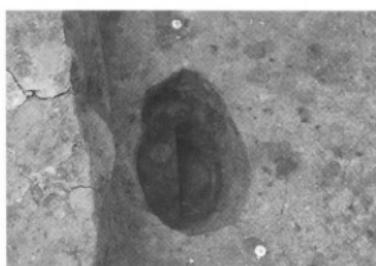
カマド全景（東から）



カマド断面（北から）



K 1 全景（東から）



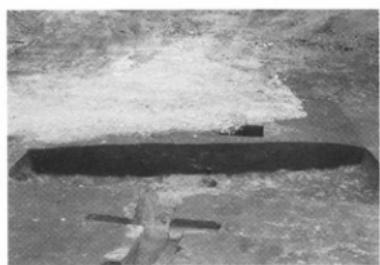
K 2 全景（北東から）



K 3 全景（北東から）



全景（東から）



断面（北西から）

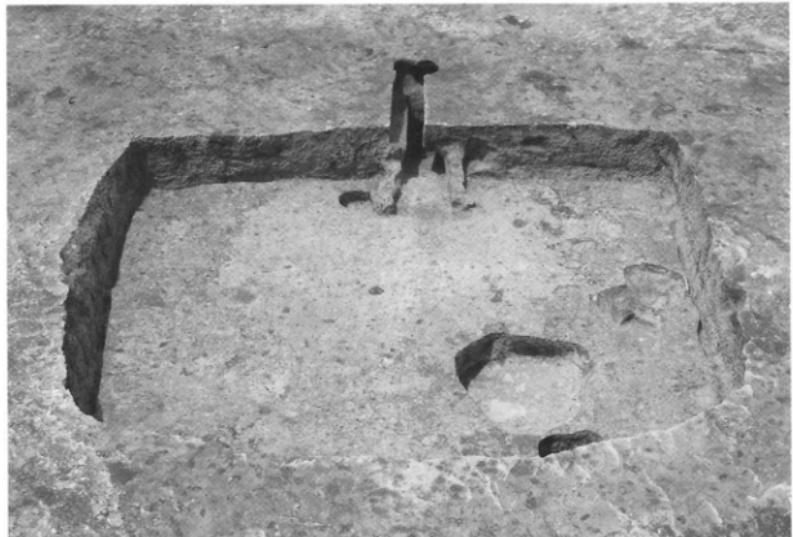


カマド煙道部検出状況（東から）

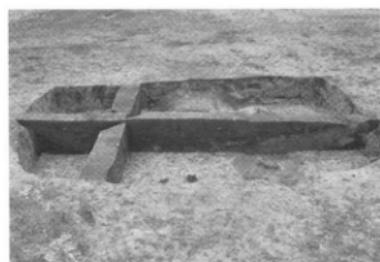


カマド全景（東から）

写真図版32 R A 089竪穴住居跡



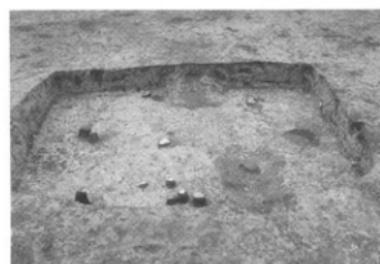
全景（東から）



断面（東から）



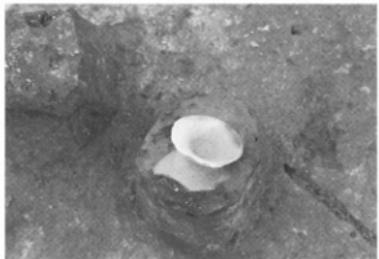
断面（北から）



遺物出土状況（東から）



土器（118）出土状況（東から）



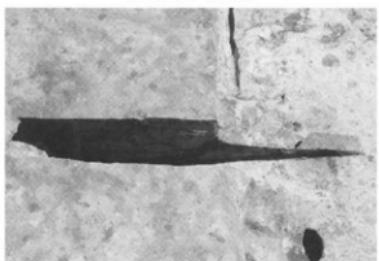
土器（116）出土状況（東から）



カマド断面（東から）



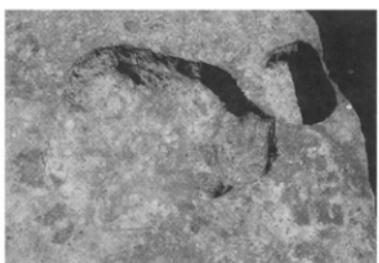
カマド全景（東から）



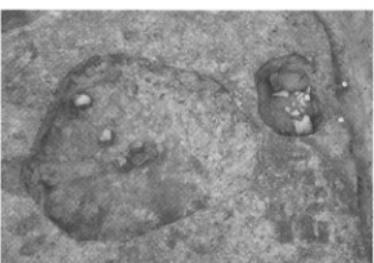
カマド断面（南から）



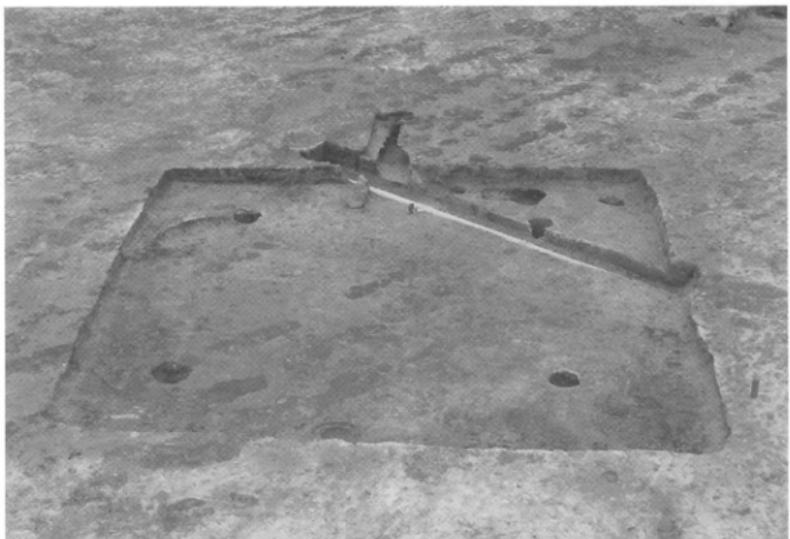
K1・K4全景（東から）



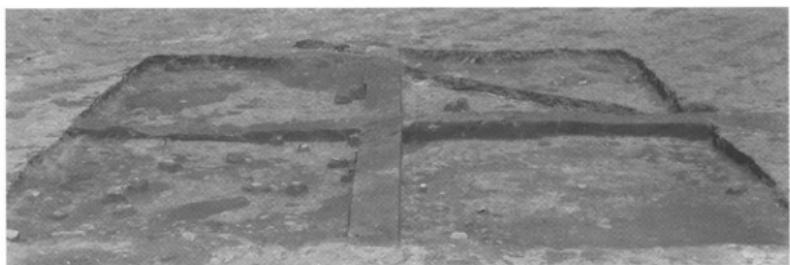
K2・K3全景（西から）



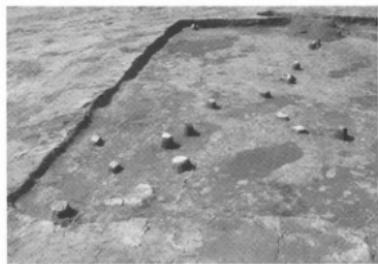
同左遺物出土状況（西から）



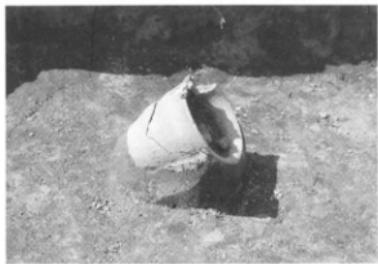
全景（南から）



断面（南から）



遺物出土状況（南から）



土器（128）出土状況（南から）

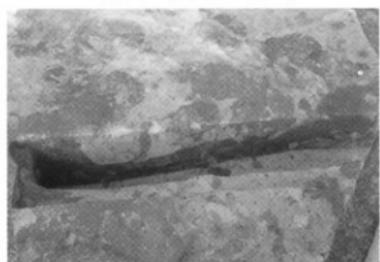
写真図版35 R A 091堅穴住居跡（1）



土器（130）出土状況（南から）



カマド全景（南から）



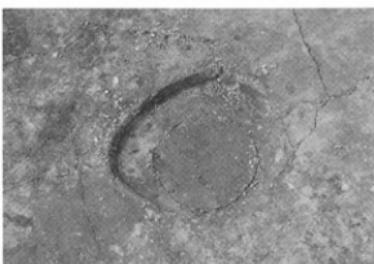
カマド縦道部断面（西から）



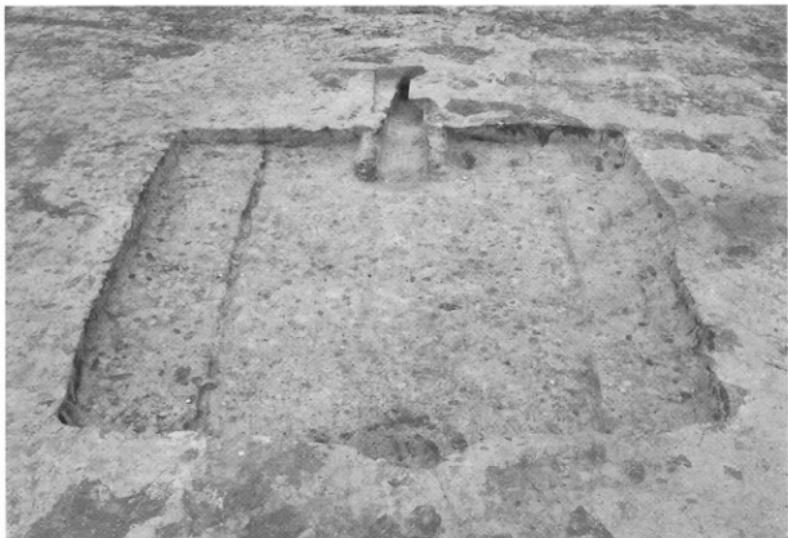
K 2 遺物出土状況（南から）



K 3 全景（南から）



P 2 検出状況（南から）



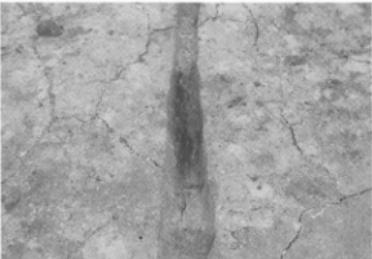
全景（東から）



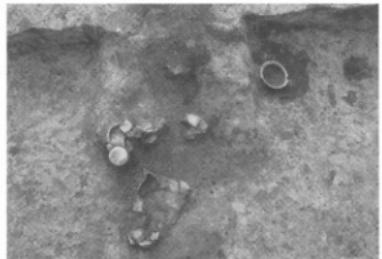
断面・焼土出土状況（東から）



断面・焼土出土状況（南から）



溝内炭化材（C5）出土状況（西から）



カマド核出・遺物出土状況（東から）



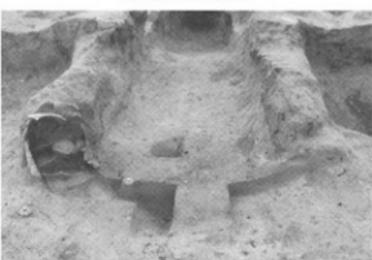
土器（141）出土状況（東から）



カマド全景（東から）



カマド断面（南から）



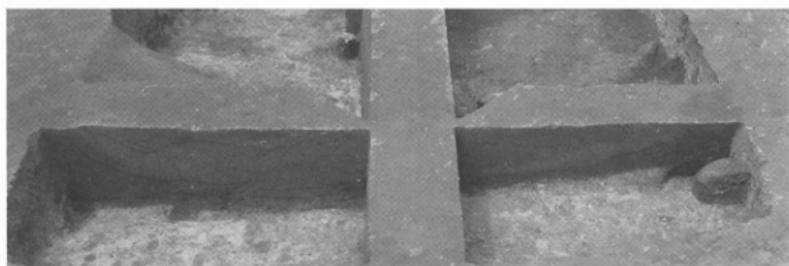
カマド補土器出土状況（東から）



全景（東から）



断面（西から）



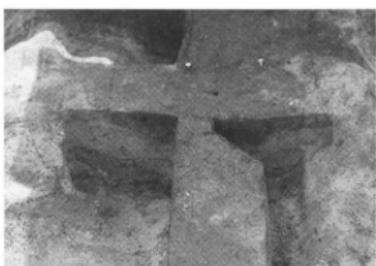
断面（南から）



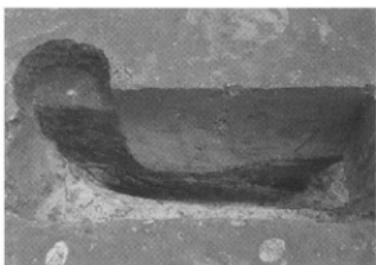
焼土・炭化物、カマド検出状況（東から）



カマド全景（東から）



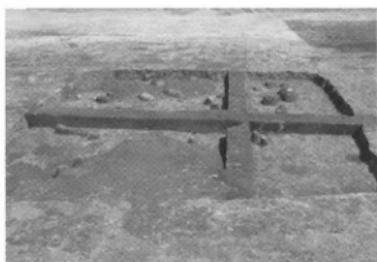
カマド断面（東から）



カマド断面（南から）



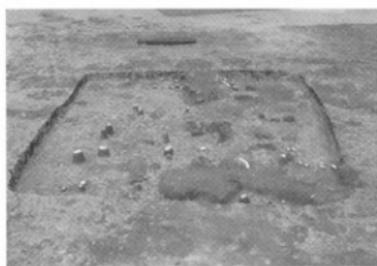
全景（東から）



断面（西から）



断面（南から）

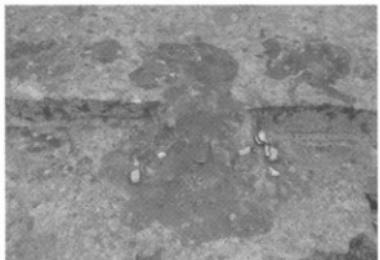


焼土・遺物出土状況（東から）



土器（151・157）出土状況（北から）

写真図版41 R A094竪穴住居跡（1）



カマド検出状況（東から）



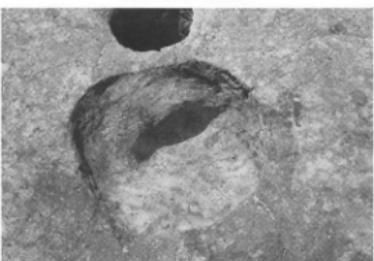
カマド遺物出土状況（東から）



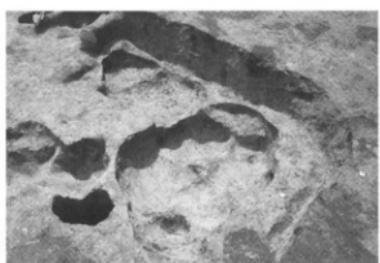
カマド全景（東から）



カマド断面（南から）



K 1 全景（南東から）



K 2・3 全景（南東から）



K 3 遺物出土状況（南から）



全景（東から）



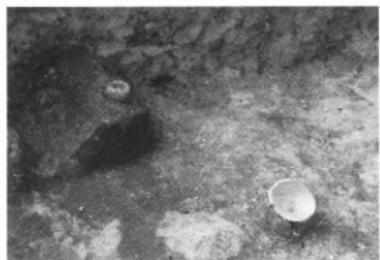
焼土・遺物出土状況（東から）



断面（東から）



断面（南から）



土器（169・170）出土状況（東から）



カマド検出・礎出土状況（南東から）



カマド全景（東から）



カマド断面（東から）



カマド断面（南から）

写真図版44 R A 095竪穴住居跡（2）



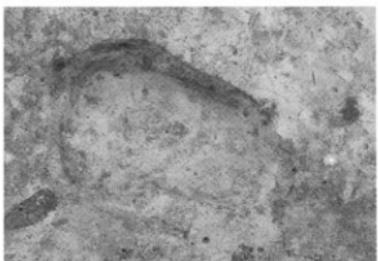
K 1 全景 (東から)



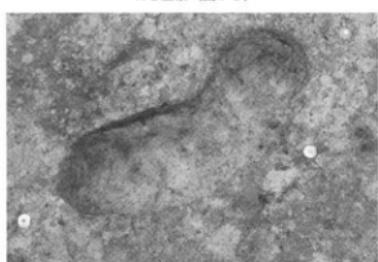
同左遺物出土状況 (東から)



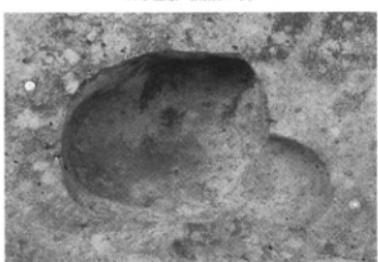
K 2 全景 (西から)



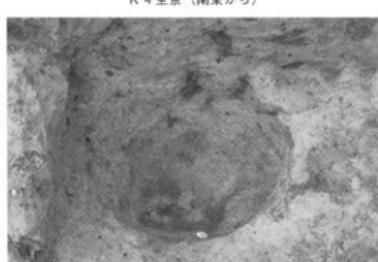
K 3 全景 (南東から)



K 4 全景 (南東から)



K 5 全景 (南から)

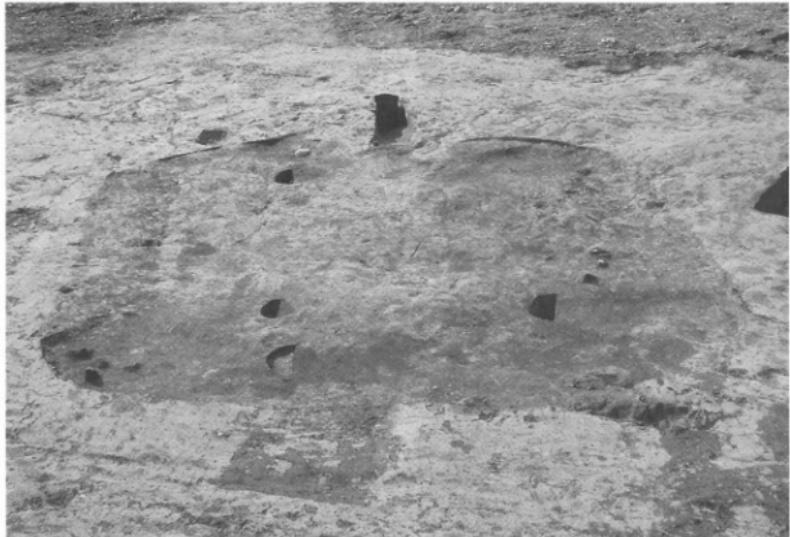


K 6 全景 (東から)

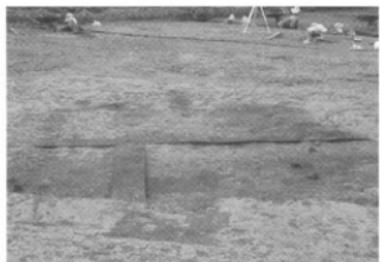


作業風景 (北から)

写真図版45 R A095竪穴住居跡 (3)



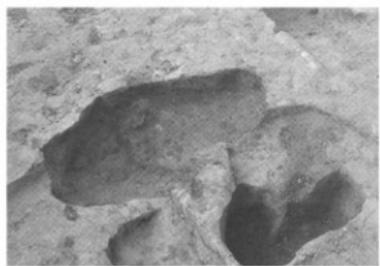
全景（東から）



断面（東から）



カマド全景（東から）



K 2 全景（南西から）



K 1 全景（南東から）

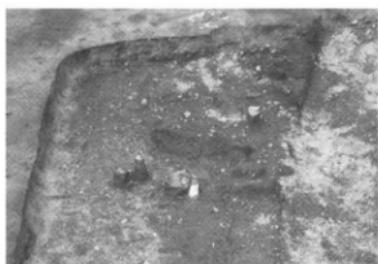
写真図版46 RA096竪穴住居跡



R A 056全景（南から）



R A 056断面（東から）



R A 056遺物出土状況（南から）



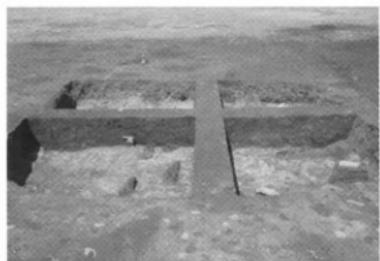
R A 056土器（179・180）出土状況（南から）



R A 063全景（東から）



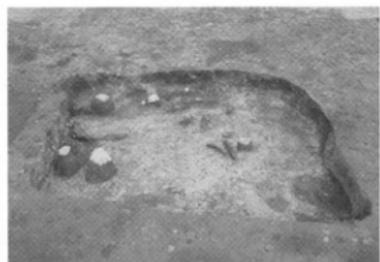
全景（西から）



断面（東から）



断面（南から）



炭化物・遺物出土状況（西から）



炭化物（C2・C3）・遺物（198）出土状況（西から）



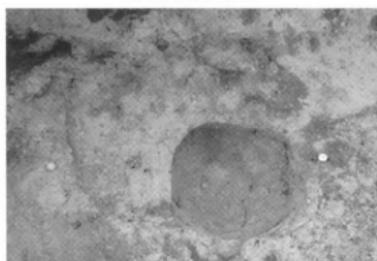
K 3 全景（南から）



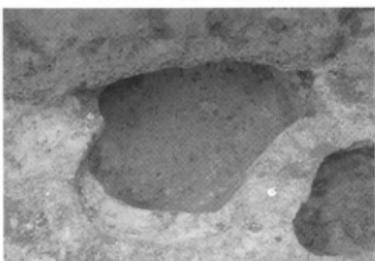
カマド検出状況（西から）



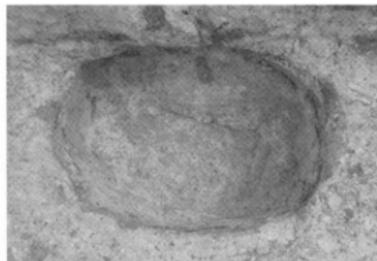
煙出し土器（191・200）出土状況（東から）



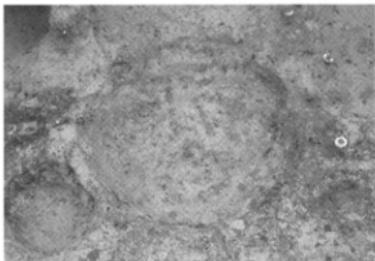
K 1 全景（西から）



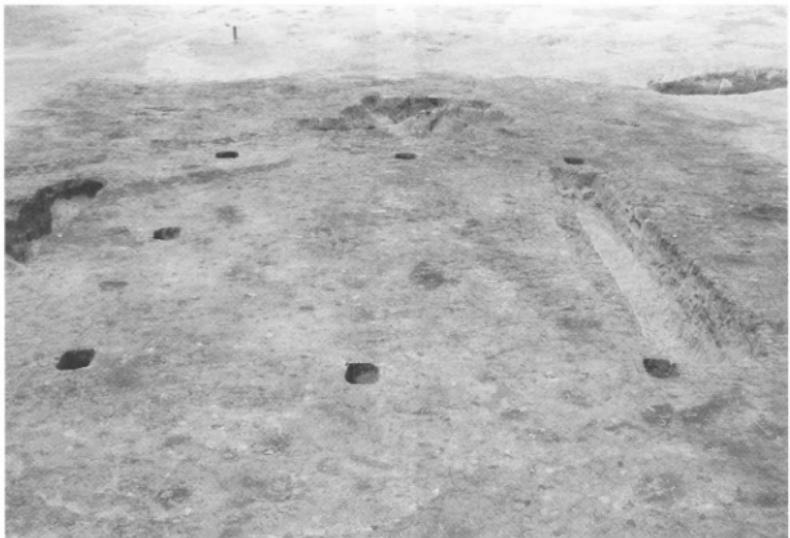
K 2 全景（北から）



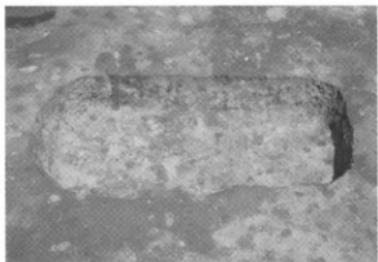
K 3 全景（南から）



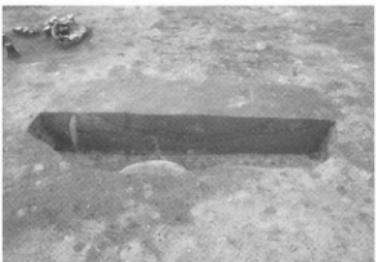
K 4 全景（西から）



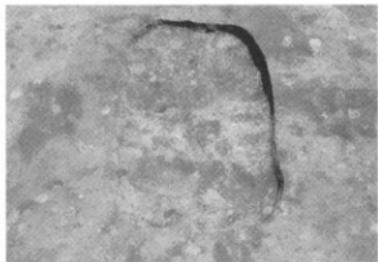
R B 005全景（東から）



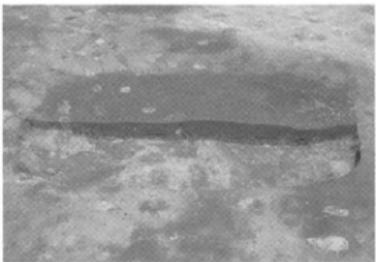
R D 126全景（東から）



同左断面（東から）



R D 127全景（南から）

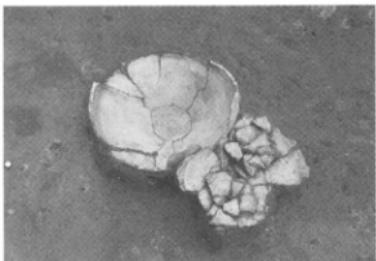


同左断面（東から）

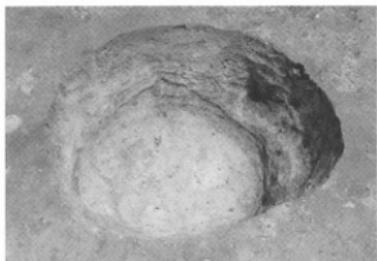
写真図版50 R B 005掘立柱建物跡、R D 126・127土坑



RD 127遺物出土状況（西から）



同左（北から）



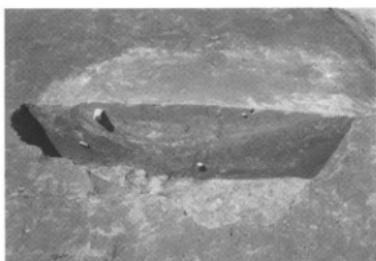
RD 128全景（西から）



同左断面（西から）



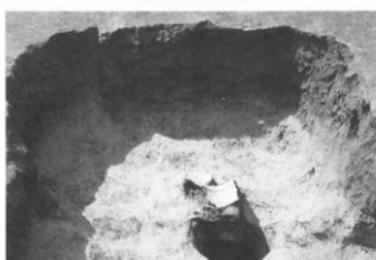
RD 129全景（東から）



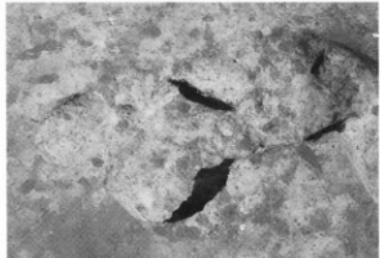
同左断面（南から）



同上焼土棲出状況（南から）



同左遺物出土状況（東から）



RD 130全景 (西から)



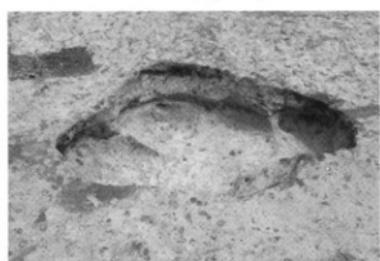
同左断面・遺物出土状況 (北から)



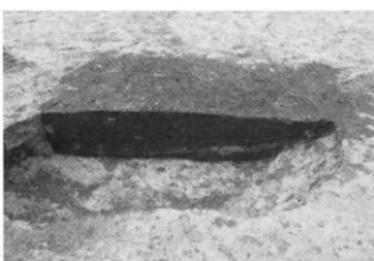
RD 131全景 (西から)



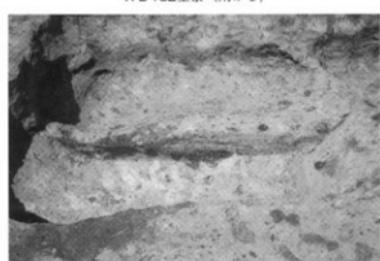
同左断面 (南から)



RD 132全景 (南から)



同左断面 (南から)



同上断面 (南から)

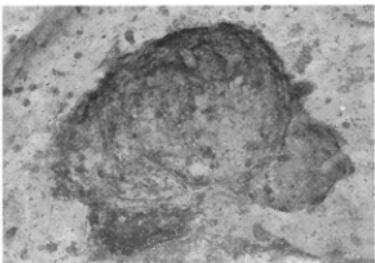


RD 133全景 (西から)

写真図版52 RD 130~133土坑



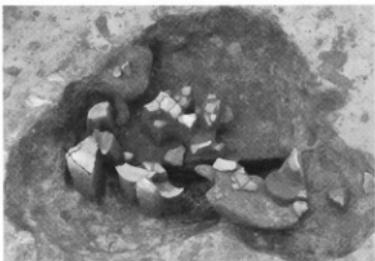
RD 133断面（西から）



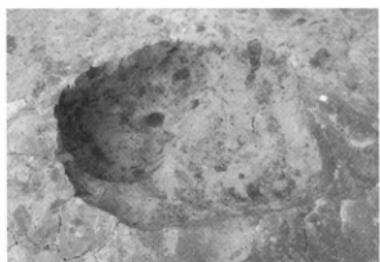
RD 134全景（南から）



RD 134断面（南から）



同左遺物出土状況（南から）



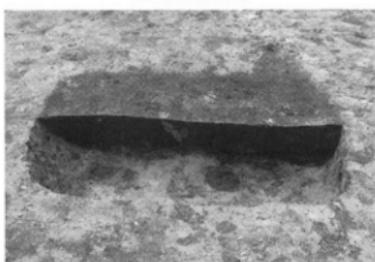
RD 135全景（南から）



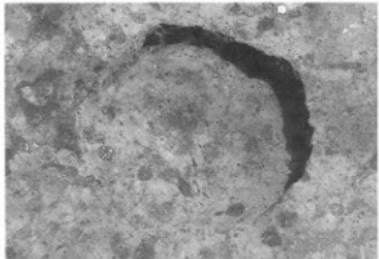
同左断面（南から）



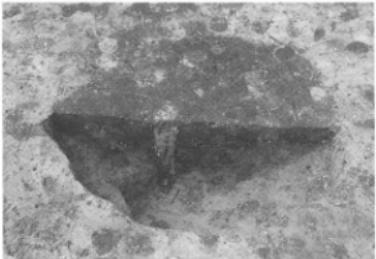
RD 136全景（東から）



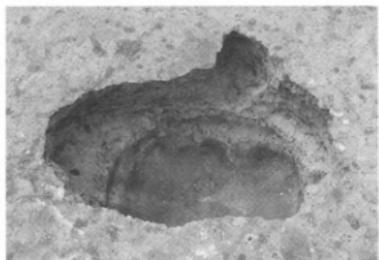
同左断面（東から）



RD 137全景（南から）



同左断面（南から）



RD 138全景（南東から）

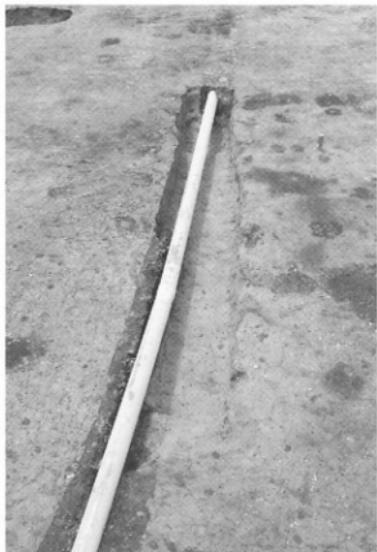


同左断面（南東から）



RD 139～147全景（東から）

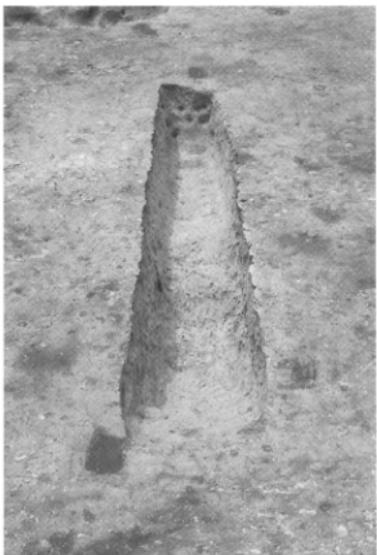
写真図版54 RD 137～147土坑



RD 139全景（東から）



同左断面（東から）



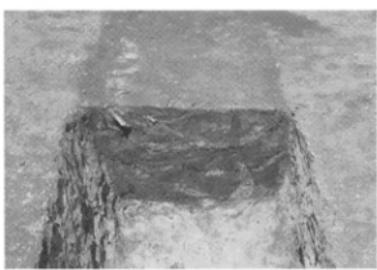
RD 141全景（東から）



RD 140全景（南から）



同上断面（南から）



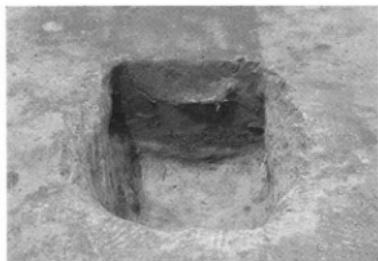
同上断面（東から）



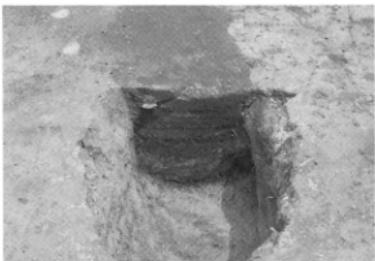
RD142全景（東から）



RD143全景（南から）



同上断面（東から）



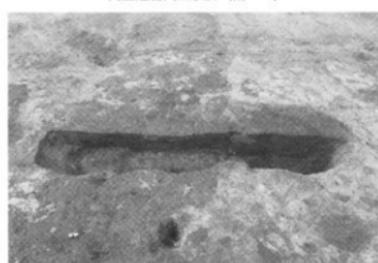
同上断面（南から）



同上遺物出土状況（南から）



RD144全景（東から）



RD144断面（南から）



RD145全景（南から）

写真図版56 RD142～145土坑



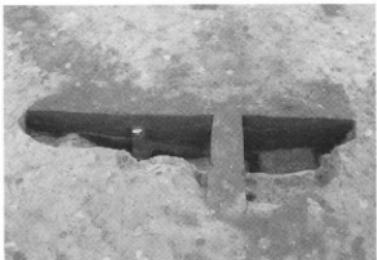
RD145断面（南から）



同左遺物出土状況（南から）



RD146全景（東から）



同左断面（南から）



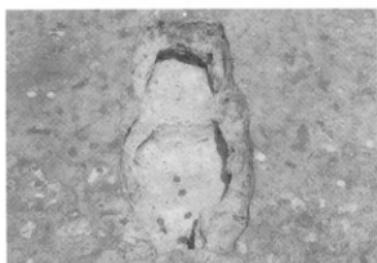
同上焼土ブロック・土製品（247）出土状況（東から）



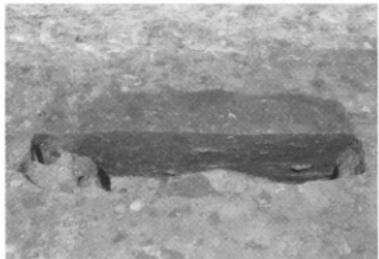
RD147全景（東から）



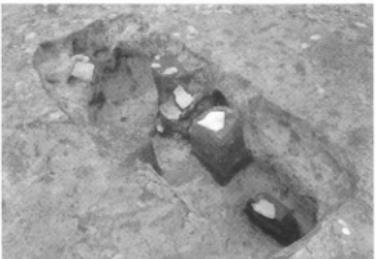
RD147断面（東から）



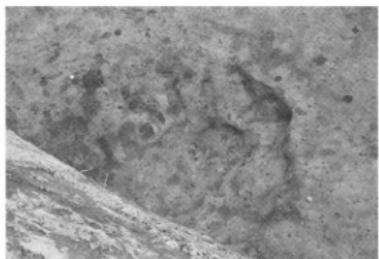
RD148全景（南から）



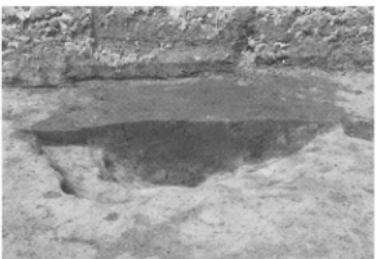
RD 148断面（東から）



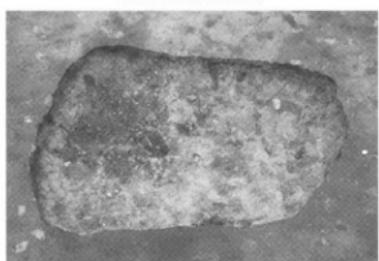
同左遺物出土状況（北東から）



RD 149全景（西から）



同左断面（東から）



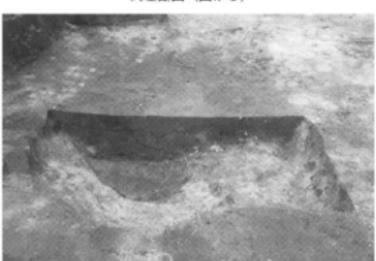
RD 150全景（西から）



同左断面（西から）

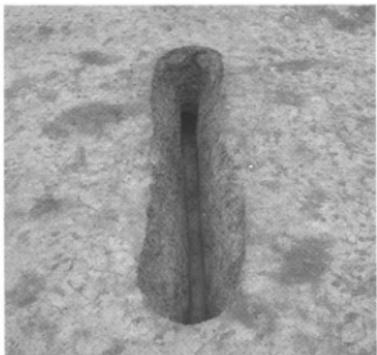


RD 151全景（南から）



同左断面（南から）

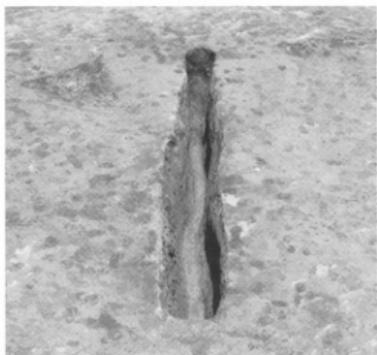
写真図版58 RD 148～151土坑



R D 152全景 (南東から)



同左断面 (南東から)



R D 153全景 (南西から)



同左断面 (南西から)



R D 154全景 (南から)



同左断面 (南から)



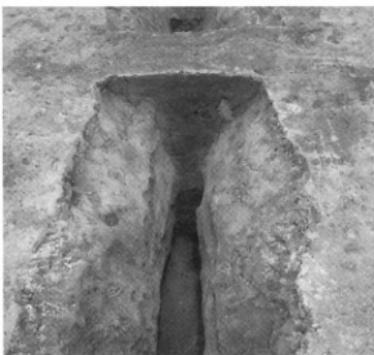
R D155全景 (南東から)



同左断面 (南東から)



R D156全景 (南東から)



同左断面 (南東から)



R D157全景 (南東から)



同左断面 (南東から)

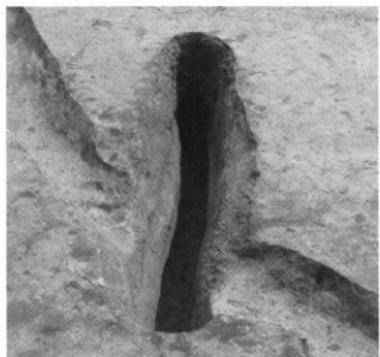
写真図版60 R D155～157土坑



RD 158全景（東から）



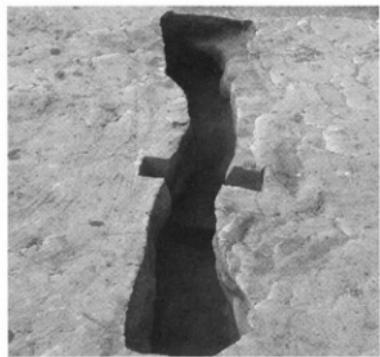
同左断面（西から）



RD 159全景（西から）



同左断面（東から）



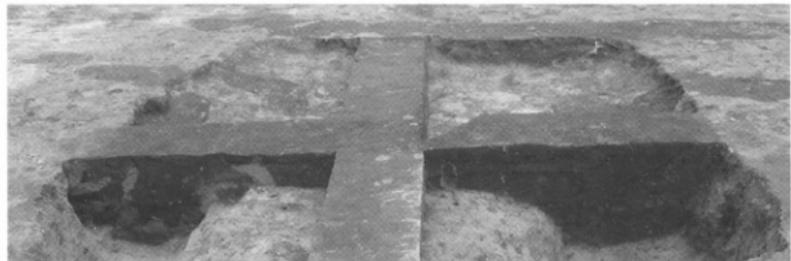
RD 160全景（南東から）



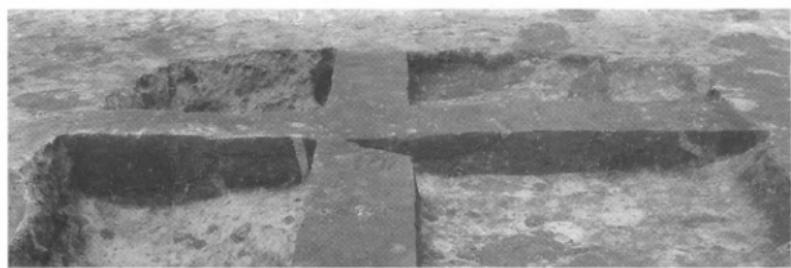
同左断面（南東から）



全景（南から）

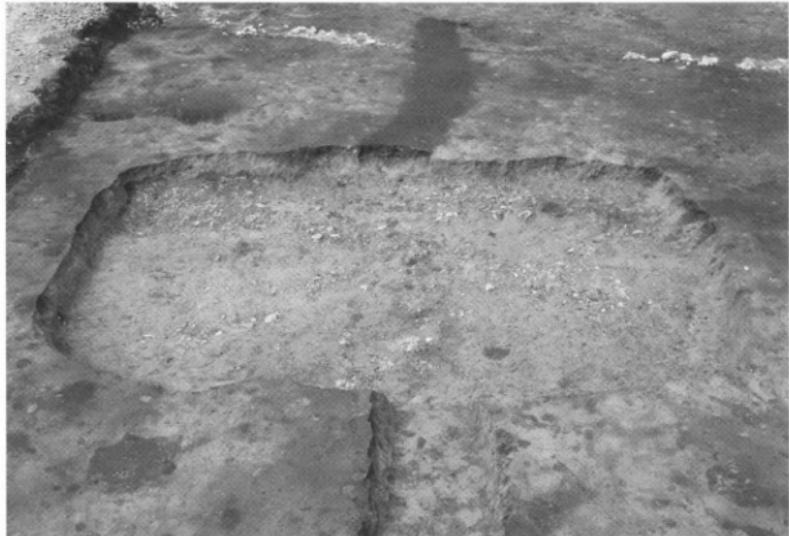


断面（西から）

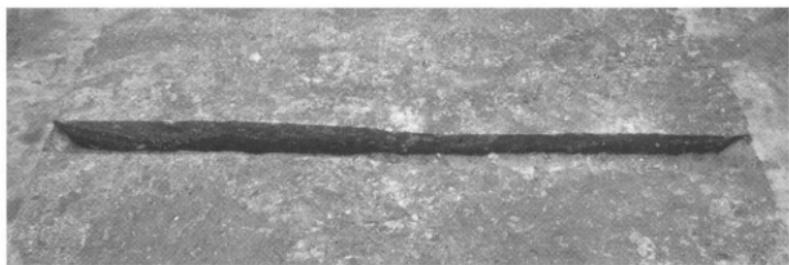


断面（南から）

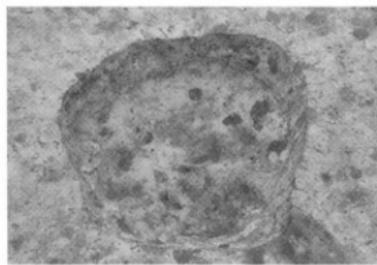
写真図版62 R E003竪穴状遺構



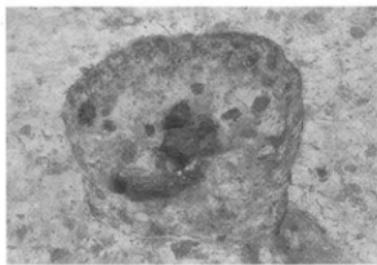
R E004全景（南から）



R E004断面（南から）

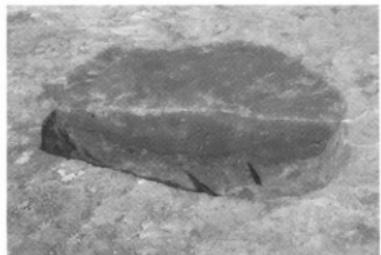


R F005全景（北から）



同左焼土・炭化物出土状況（北から）

写真図版63 R E004竪穴状遺構、R F005焼土遺構



R F 005断面（南西から）



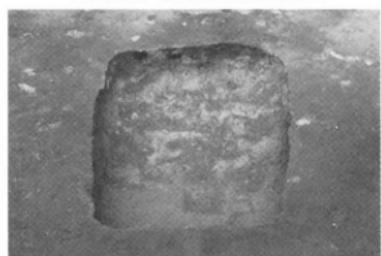
R F 006全景（東から）



R F 006焼土・炭化物出土状況（東から）



同左断面（南から）



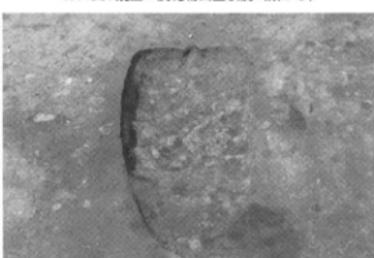
R F 007全景（東から）



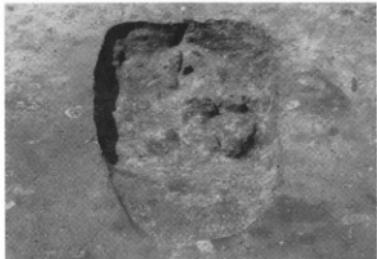
R F 007焼土・炭化物出土状況（東から）



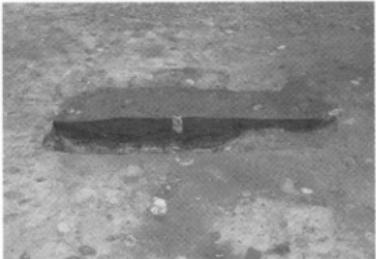
同上断面（南から）



R F 008全景（東から）



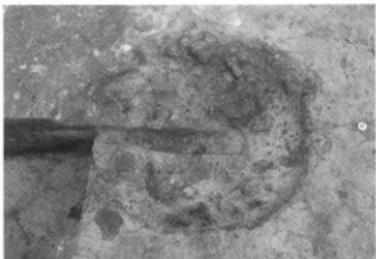
R F008焼土・炭化物出土状況（東から）



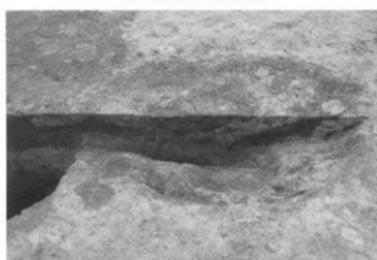
同左断面（南から）



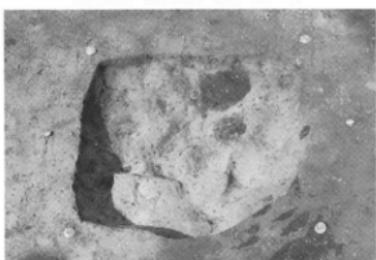
R F009全景（西から）



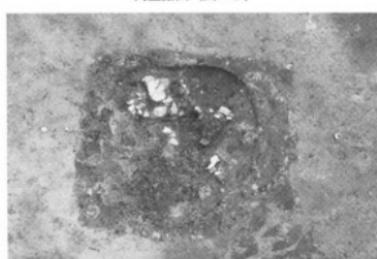
同左焼土・炭化物出土状況（西から）



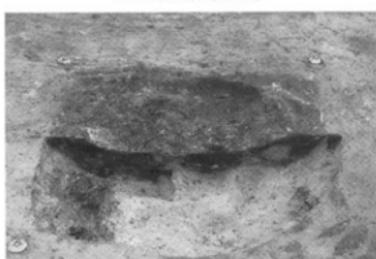
同上断面（西から）



R F010全景（南から）



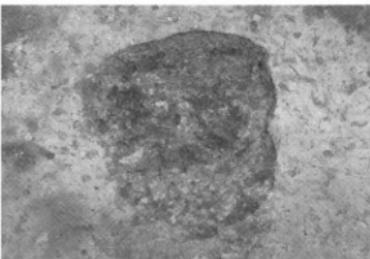
R F010焼土・炭化物出土状況（南から）



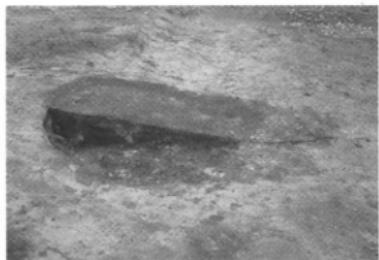
同左断面（南から）



R F011全景 (南東から)



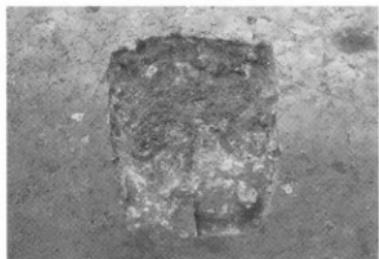
同左焼土・炭化物出土状況 (南東から)



同上断面 (南西から)



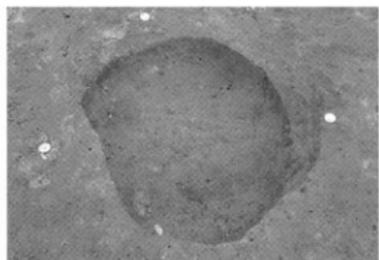
R F012全景 (南東から)



R F012焼土・炭化物出土状況 (南東から)



同左断面 (北東から)

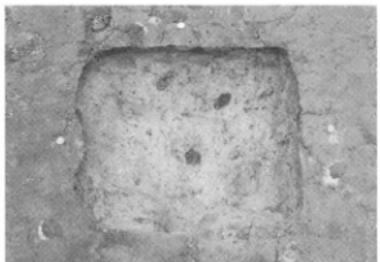


R F013全景 (南東から)



同左焼土出土状況 (南東から)

写真図版66 R F011~013焼土遺構



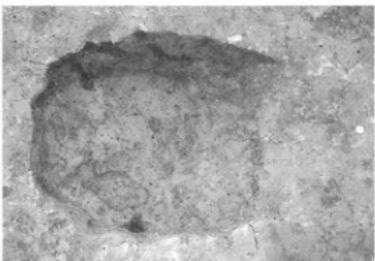
RF014全景 (南東から)



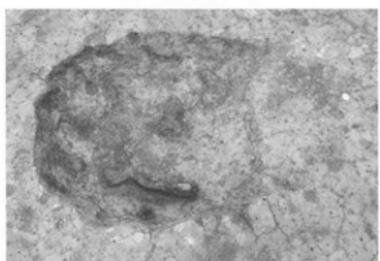
同左焼土・炭化物出土状況 (南東から)



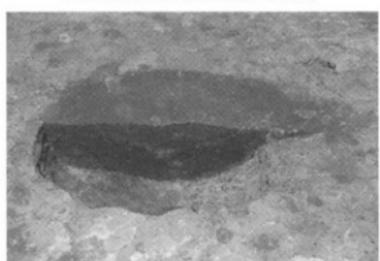
同上断面 (南東から)



RF015全景 (南東から)



RF015焼土・炭化物出土状況 (南から)



同上断面 (南東から)



RF011～014全景 (北東から)



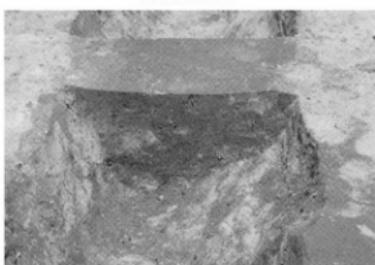
全景（南西から）



全景（北東から）



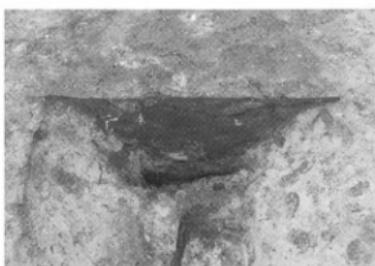
焼土出土状況（F-F' 付近）（南西から）



断面B-B'（南西から）



断面D-D'（北東から）



断面F-F'（南西から）

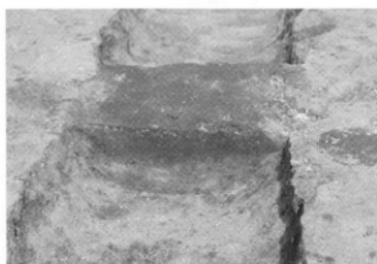
写真図版68 R G015溝跡



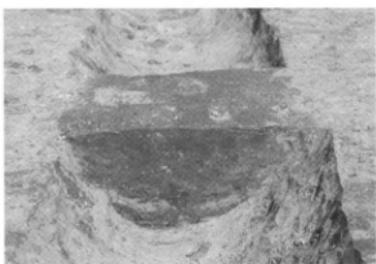
R G022全景 (西から)



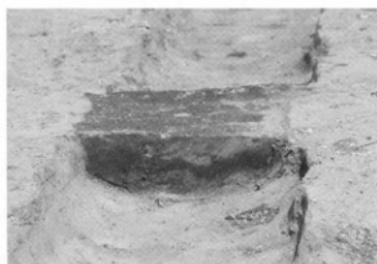
R G023全景 (西から)



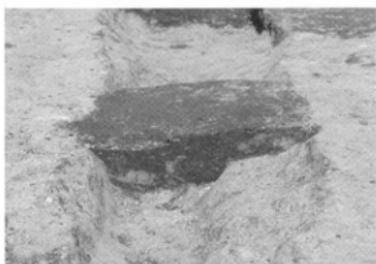
R G022断面A-A' (東から)



R G023断面A-A' (西から)



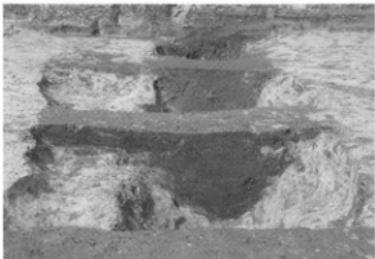
R G022断面B-B' (西から)



R G023断面B-B' (西から)



R G024・025全景（西から）



同左断面A-A'（東から）



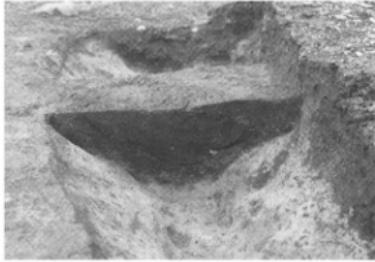
同左断面B-B'（東から）



R G028全景（東から）



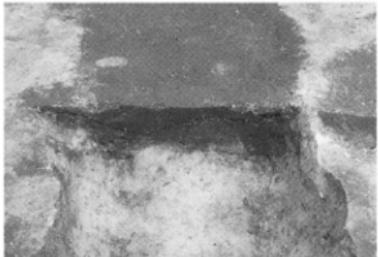
RG024・025作業風景



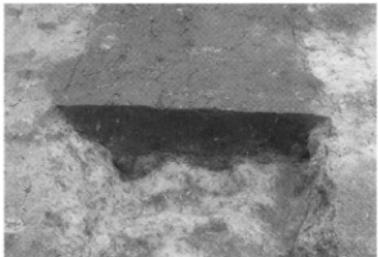
同左断面（西から）



R G029全景（南から）



同左断面A-A'（南から）



同左断面B-B'（南から）



R G030全景（北東から）



同左断面A-A'（南西から）



同左断面B-B'（南西から）



1



2



3



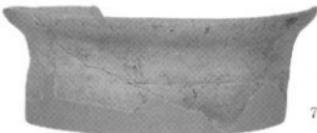
4



5



6



7

写真図版72 出土遺物 (1)



8



9



11

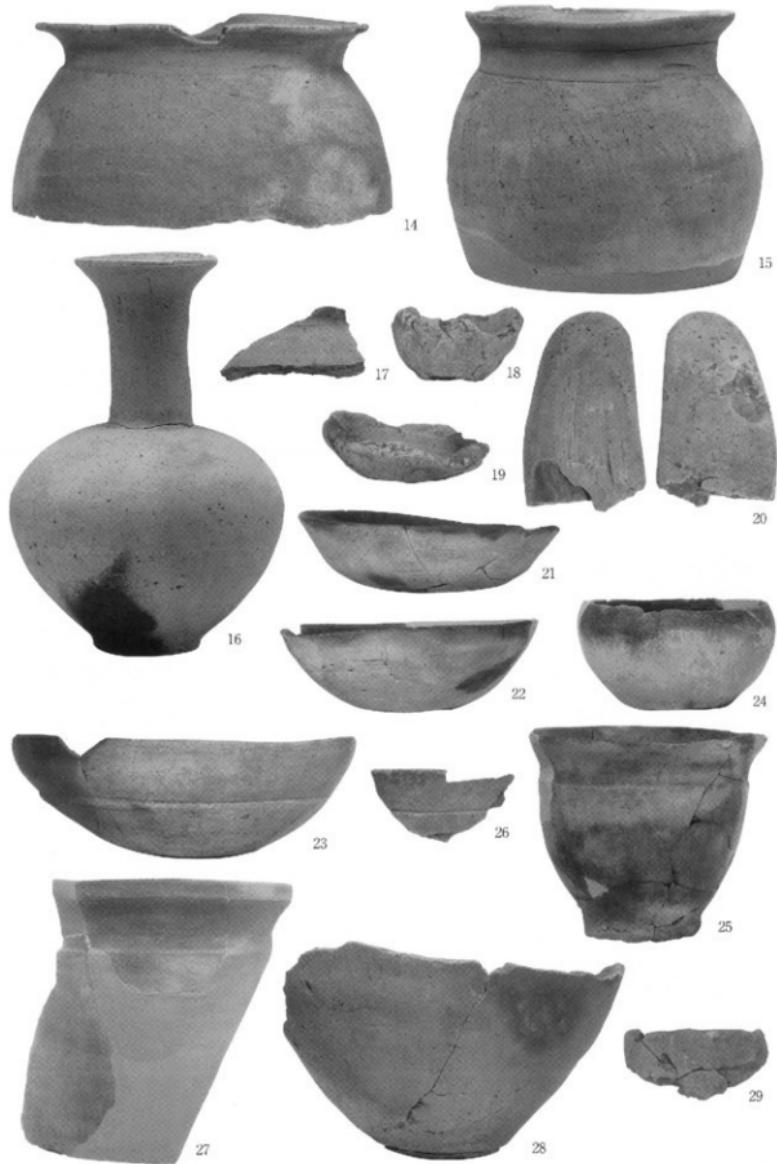


12



13

写真図版73 出土遺物 (2)



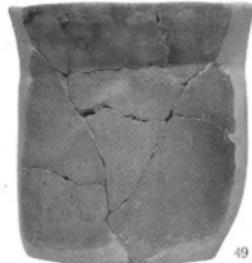
写真図版74 出土遺物（3）



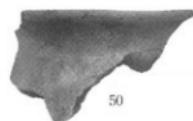
写真図版75 出土遺物 (4)



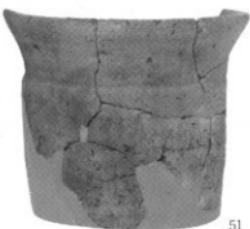
46



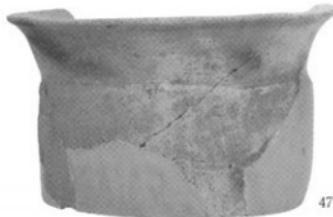
49



50



51



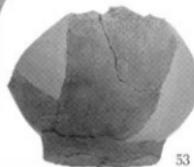
47



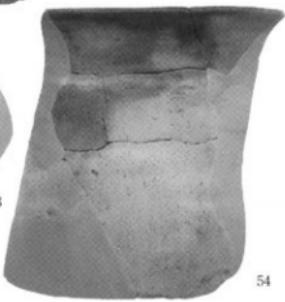
52



48

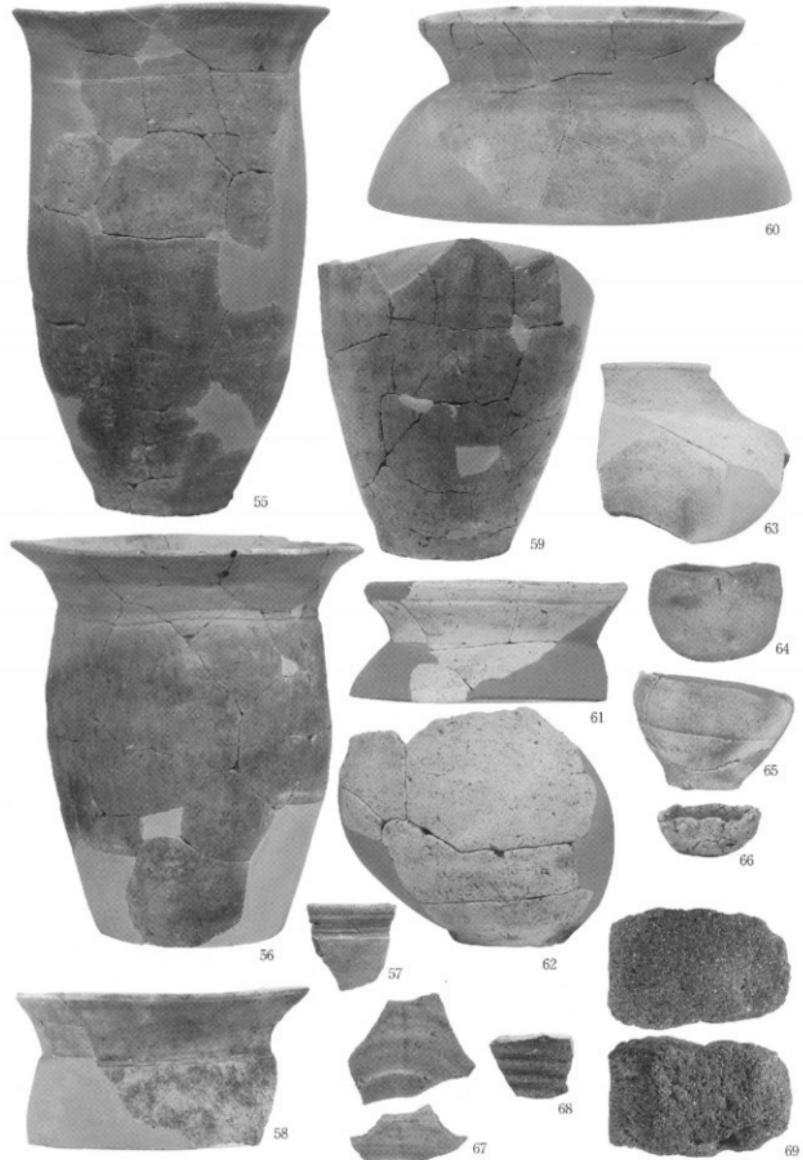


53

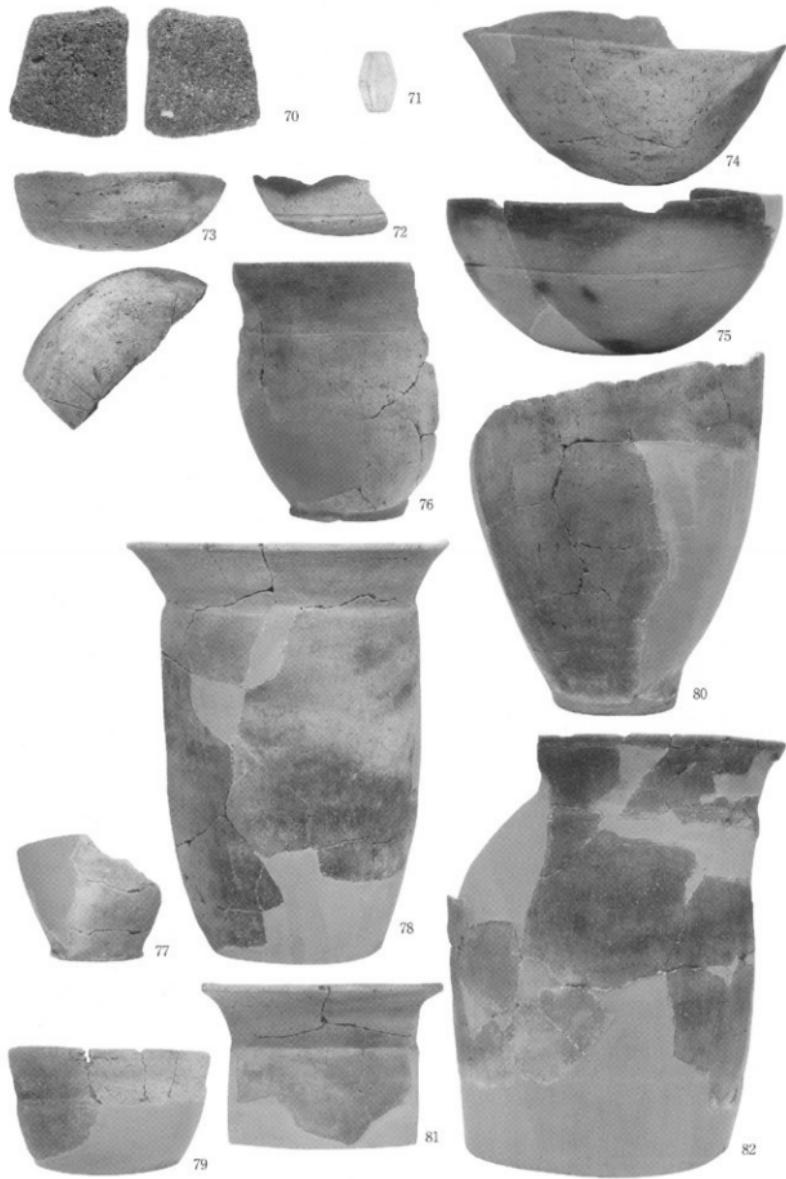


54

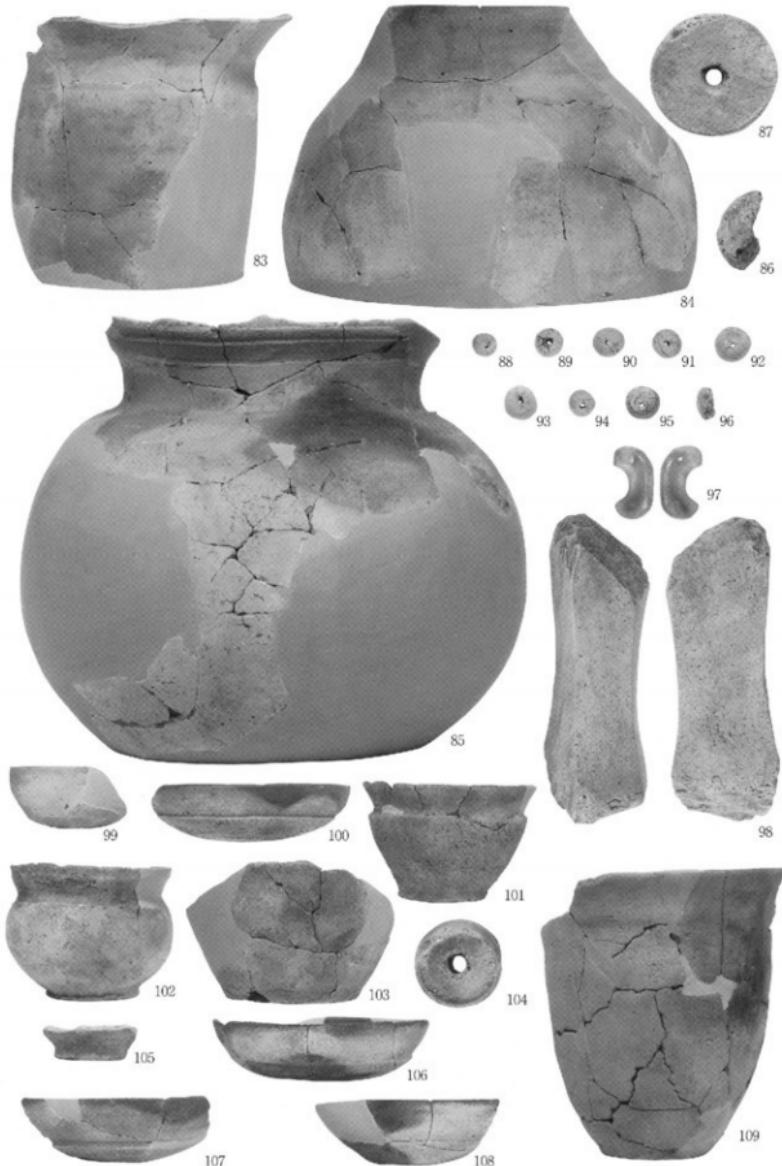
写真図版76 出土遺物（5）



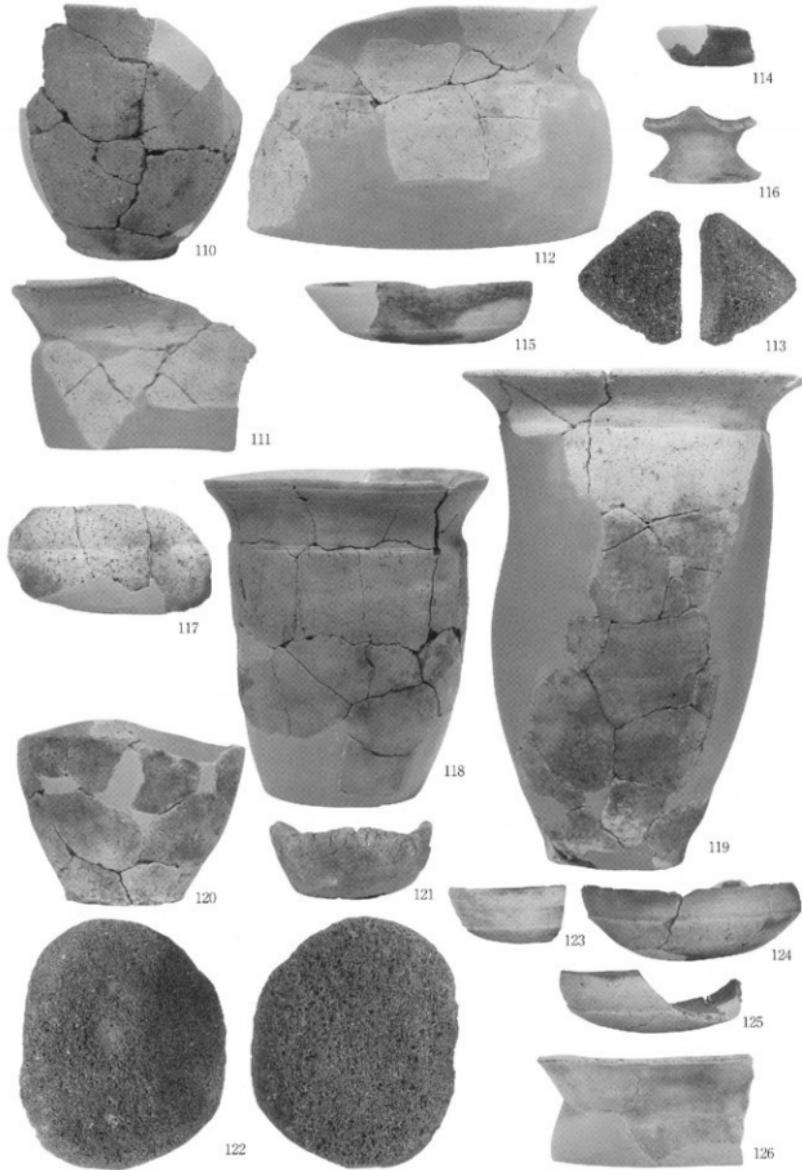
写真図版77 出土遺物 (6)



写真図版78 出土遺物 (7)



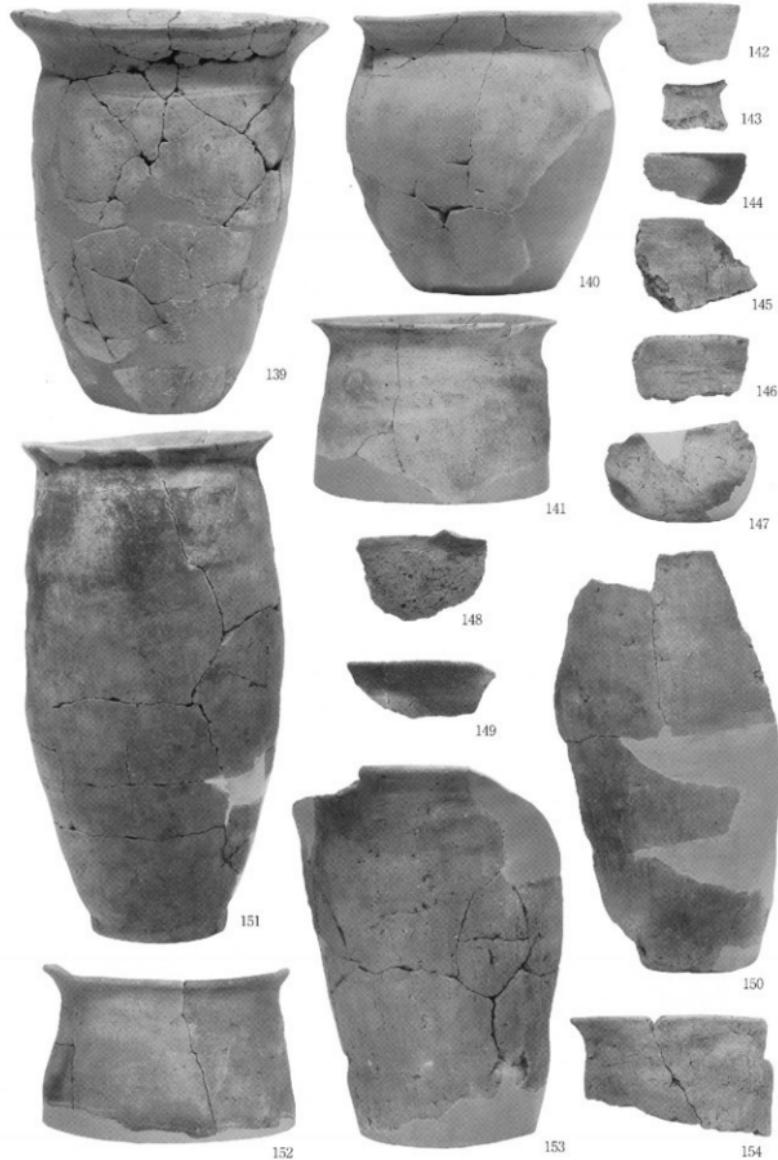
写真図版79 出土遺物 (8)



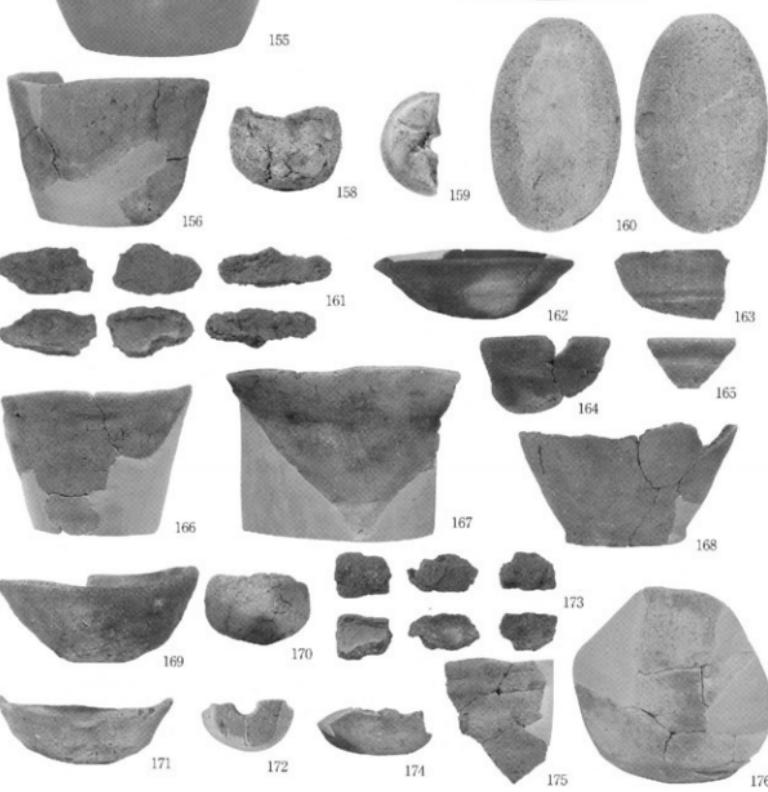
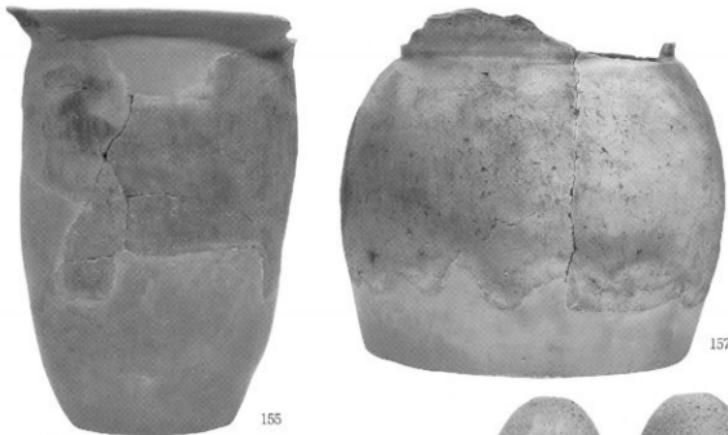
写真図版80 出土遺物 (9)



写真図版81 出土遺物 (10)



写真図版82 出土遺物 (11)



写真図版83 出土遺物 (12)



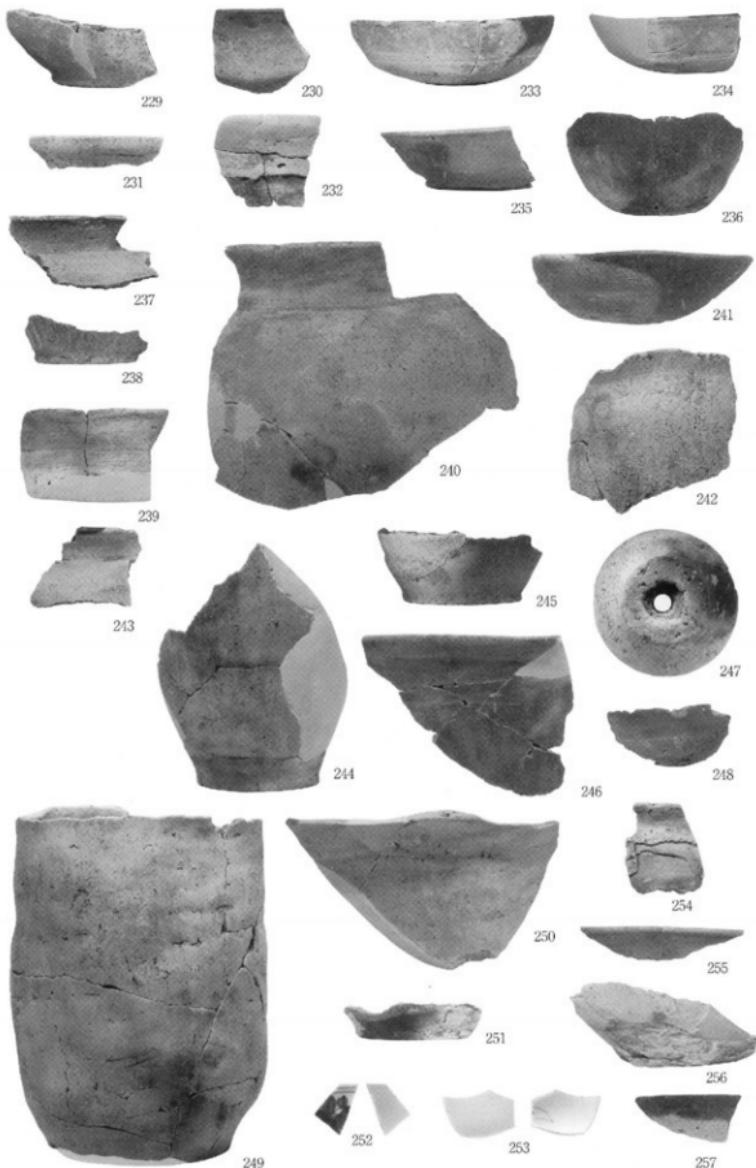
写真図版84 出土遺物 (13)



写真図版85 出土遺物 (14)



写真図版86 出土遺物 (15)



写真図版87 出土遺物 (16)

報告書抄録

ふりがな	やもりいせきだいにじゅうななしのっこえーいせきだいさんじゅうじはくつちょうさほうこくしょ								
書名	矢盛遺跡第27次・野古A遺跡第30次発掘調査報告書								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第594集								
編著者名	小山内透・金子佐知子・中村絵美								
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001								
発行年月日	2012年3月23日								
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因		
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° °					
矢盛遺跡 (第27次)	岩手県盛岡市 飯岡新田2地割 19-2	03201	LE26-0139	39度 40分 26秒	141度 08分 01秒	2010.08.10 ~ 2010.11.10	9,845m ²	盛岡市新都市土地区画整理事業	
野古A遺跡 (第30次)	岩手県盛岡市 下鹿妻子北36 -1	03201	LE16-2155	39度 40分 54秒	141度 07分 50秒	2010.04.08 ~ 2010.08.09	9,005m ²		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項			
矢盛遺跡 (第27次)	狩獵場 集落跡	縄文時代 平安時代 中・近世 時期不明	陥し穴13基 溝跡1条 掘立柱建物跡3棟 溝跡3条 竪穴状遺構3棟 溝跡13条		土師器片10点 近世陶磁器約30点 寛永通寶2点				
野古A遺跡 (第30次)	狩獵場 集落跡	縄文時代 奈良時代 平安時代 古代以降	陥し穴状遺構9基 竪穴住居跡18棟 竪穴住居跡3棟 掘立柱建物跡1棟 土坑26基 竪穴状遺構2棟 焼土遺構11基 溝跡8条		土師器 須恵器 土製品(紡錘車・玉) 石製品(紡錘車・玉)				
矢盛遺跡要約									
遺跡は東西方向に延びる旧河道と沖積段丘が北から南に交互に存在する地形で、今回の調査は南端の旧河道と段丘の東部について行い、段丘上は縄文時代の狩獵場、旧河道部分では西側の中世環濠居館に隣接する区画溝が確認された。									
野古A遺跡要約									
北上川西岸の段丘上に立地する奈良・平安時代の集落跡。第30次調査では遺跡の南東部を調査し、奈良時代の竪穴住居跡が多く分布している。また、調査区内には旧河道が数条確認されており、これに沿って縄文時代の陥し穴状遺構、古代以降の焼土遺構も検出されている。									

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第594集
矢盛遺跡第27次・野古 A 遺跡第30次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成24年3月14日

発 行 平成24年3月23日

編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発 行 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
〒020-8531 岩手県盛岡市津志田14地割37番地2号
電話 (019) 651-4111

(公財) 岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235

印 刷 あべ印刷株式会社
〒023-0003 岩手県奥州市水沢区佐倉河字東広町60
電話 (0197) 24-8303

